慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本国見在宋元版本志経部
Sub Title	
Author	阿部, 隆一(Abe, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1981
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.18 (1981.) ,p.1- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	麻生太賀吉大人追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000018-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本国見在宋元版本志経部

阿部隆一

例言

一、現在我が国に伝存する宋・金・元版本の全てを力の及ぶ限り網羅著録することに力めた。

一、従来諸家目に宋・元版と著録され来ったが、筆者が今明以降の刊刻と審定した典籍の中で、説明の便宜上附記したものもある。

一、解題中、首題と殆ど同じ尾題は記載を省略した。

一、匡郭の寸法は原則として、本文巻首の匡郭の内法によった。

一、各本の蔵書印はなるべく多く記したが、旧蔵者印に止め、現蔵者の印及び静嘉堂文庫の陸氏蔵印は省略した。

一、著録本中、拙著「中国訪書志」（昭和五十一年東京・汲古書院刊）に同一版本について既に詳述せる場合は、該本特有の事項のみを記して、詳細考証は拙著参照（本稿に於ては同書は全て拙著と略称）として解説の重複を避けた。

一、四庫全書総目著録本については、特別の必要のない限りその内容・撰者に関する解説を省き、未著録本は未著録と明記し、内容について簡単な解説を附した。

一、著録・引用・参照の多い書目類の書名は左の略称を用いた。

天目（天禄琳琅書目）　天目続（天禄琳琅書目後編）　四庫（欽定四庫全書総目提要）　阮外集（揅経室外集）　毛目（汲古閣珍蔵秘本書目）　徐目（伝是楼宋元本書目）　季目（季滄葦蔵書目）　黄書録（百宋一廛書録）　黄識（蕘圃蔵書題識）　張志（愛日精廬蔵書志）　汪目（藝芸書舎宋元本書目）　莫録（宋元旧本書経眼録）　楊志（日本訪書志）　楊譜（留真譜）　瞿目（鉄琴銅剣楼蔵書目録）　瞿影（鉄琴銅剣楼書影）　丁志（善本書室蔵書志）　盎影（盎山書影）　潘記（滂喜斎蔵書記）　陸志（皕宋楼蔵書志）　陸跋（儀顧堂題跋）

陸続跋（儀顧堂続跋）　楊録（楹書偶録）　繆記（藝風堂蔵書記）　鄧目（群碧楼善本書録）　鄧存目（寒瘦山房鬻存善本書目）　傅目（雙鑑楼善本書目）　傅記（蔵園群書題記）　傅続記（雙鑑楼蔵書続記）　劉影（嘉業堂善本書影）　潘録（宝礼堂宋本書録）　適志（適園蔵書志）　蔣志（伝書堂蔵善本書志）　王記（文禄堂訪書記）　莫跋（五十万巻楼羣書跋文）　羅録（善本書所見録）　潘跋（著硯楼書跋）　涵録（涵芬楼燼餘書録）　故宮書影（故宮善本書影）　内閣残影（重整内閣大庫残本書影）　故宮選萃（故宮図書文献選萃）　中版録（中国版刻図録、所収書影番号も附記）　森志（経籍訪古志）　島考（古文旧書考）　旧京（旧京書影、嘗て橋川時雄・倉石武四郎両氏が少数の同好者に頒った七一六葉キャビネ焼付写真、北平図書館蔵宋元版が殆どを占め、その解説「旧京書影提要」は雑誌「文字同盟」第二四・二五号合刊の特輯号として刊行、本稿所掲本の該当書影番号を「旧京35」の如く記した）　静盦（長沢規矩也著静盦漢籍解題長編）

一、宮内庁書陵部の「図書寮漢籍善本書目」「図書陵典籍解題漢籍篇」、「図書寮宋本書影」、天理図書館の「天理図書館稀書目録」「宋版」（善本写真集19）等の如き、その所蔵宋金元版を殆ど網羅せる所蔵者編刊の解題書目が普及している場合は、本稿は該書に負う所頗る多いが、一々その明記を省略した。

一、奥書・識語・引用文その他の原文の字は支障のない限り、現通行活字を以てし、原文の改行は／を以て表記した。

一、本調査に際し秘蔵貴重典籍の閲覧或は複写を許可された各所蔵者及び関係者各位に対し深く感謝の意を表する。

一、本稿は朝日新聞社の昭和五二年度朝日学術奨励金及び財団法人トヨタ財団の昭和五三―五五年度研究助成金による研究調査の一部である。謹んで謝詞を捧げる。

易　類

周易注疏　一三巻　魏王弼・晋韓康伯注　唐孔穎達等疏

〔宋紹興乾道間〕刊（〔両浙東路茶塩司〕）

（足利学校遺蹟図書館蔵）一三冊。国宝。森志著録。後補淡香色地表紙（二七×一九糎）、書題簽「周易　幾」。改装、天地が少しく裁断され、裏打修補が加えらる。不幸序等の首葉を欠くが、本文は完好。毎巻首「周易注疏巻第幾／（低二格）国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達奉／勅撰」と題す。左右双辺（二一・六×一五・六糎）有界八行、毎行十九字、注文は経文下に「注云」と標し、疏文は「疏」の字を墨囲白文の単行大字を以て標し、共に小字双行。版心白口単黒魚尾「易注疏幾（丁付）」、下象鼻に刻工名が刻されているが、版心は破損が多い。巻中玄鉉敬驚警弘殷匡筐境竟恒貞樹譲頊桓完構媾の末画を欠き（間々欠かざるもあり）、慎の字等の孝宗以下の諱は欠筆していない。刻工名は孫中、陳錫、陳明、梁文、梁済、李碩、李棠、李秀、李、張祥、許明、朱明、丁璋、徐茂、徐亮、毛昌、高旼、顧忠、洪先、王珎、王。各冊末に南宋の詩人陸放翁の第六男の陸子遹の端平元年（一二三四）十二月から翌年正月にかけての左

の識語が記さる。

（第一冊）其月二十一日陸子遹三山東窓伝標
（二）端平改元冬十二月廿三日陸子遹三山写易東牕標閲
（三）廿四日子遹標閲于三山写易東牕
（四）甲午歳未尽五日子遹東窓標閲
（五）甲午十二月癸巳子遹三山東窓閲標
（六）端平甲午歳除日三山東牕子遹標閲
（七）乙未天基節三山東窓子遹標閲
（八）乙未開歳五日子遹三山東牕標閲
（九）端平乙未正月六日陸子遹閲且標于三山之東牕
（十）乙未人日子遹標於三山東窓
（十一）乙未正月八日子遹三山東窓標閲
（十二）乙未立春日子遹三山東窓標
（十三）端平二年正月十日鏡陽嗣隠陸子遹遵／先君手標以朱点伝之時大雪始晴謹記

右の三山東窓とは森志に「攷陸子遹乃放翁第六子、先君指放翁也、近藤守重云、三山在山陰県鏡湖中、放翁中年卜居地、東牕翁詩中数見所謂東偏得山多者是也」と。また各冊末に足利学校の創立者上杉憲実の子の憲忠の「上杉右京亮藤原憲忠寄進」（第一冊・十三冊は署名下に花押あり）なる寄進の署名が附され、毎冊首には「足利学校公用」と横書されている。

所々の朱筆句点批点や雌黄の塗抹は、巻一第四葉表・巻十一第廿三葉表の書入二条と共に陸子遹の識語にある如く、父放翁の手標に遵った子遹の書入である。その外に室町時代の邦人の朱句点勾点や校合書入が少しく見られる。

本版は刊記序跋がないが、その版式字様刻工名等から察するに、両浙東路茶塩司が上梓せる、所謂越刊八行本の一つである。此は宋が南渡早々知識層の間に図書欠乏の声が挙ったので、財政難の中央政府は詔を発して地方公署に経史の基本図書の刊刻を促したのに応じて両浙東路茶塩司が紹興に於て出版した注疏合刻本で、紹興後期から寧宗朝に至る間に易・書・周礼・礼記・論・孟が続刊され、その刊刻の事情は後掲の礼記正義の紹熙三年黄唐の刊書跋によって明かである。本版はその欠筆が高宗に止って孝宗以降を避諱せぬこと、又その刻工名を検するに次のことが判明する。

刻工の殆どがほぼ同時頃の刊刻と思われる越刊八行本の尚書正義（孫中、陳錫、朱明、丁璋、徐茂、陳明、毛昌、王珎、徐亮、洪先）と周礼疏（孫中、陳錫、梁文、許明、朱明、丁璋、徐茂、毛昌、王珎、徐亮、梁済、浩先）の彫板に従事している。その他本版の刻工名は、紹興九年紹興府刊単疏本毛詩正義（徐茂、陳錫）、紹興十年臨安府刊西漢文類（陳錫）、紹興十九年跋明州軍公庫刊徐公文集（浩先）、南宋初刊景徳伝燈録（李碩）、同通典（朱明）、同新唐書（朱明）、同劉賓客文集（李棠）、同元氏長慶集（陳明、毛昌）、同思溪版蔵経（陳明、王珎、洪先）、同明州刊文選（除亮、浩先、毛昌〈修〉）、同白氏六帖事類集（王珎、梁済）、同外台秘要方（朱明、李碩）、孝宗朝刊両江東転運司刊史記（朱明、李秀）、同漢書（梁文、李碩、丁璋、徐茂、王珎、浩先）、同後漢書（李碩、朱明、李棠、李秀）、孝

宗朝刊北山小集（朱明）、同論衡（毛昌、王珎、洪新、徐亮、陳明）、同国語（李棠）、同周官講義（陳明、毛昌）、同広韻（陳錫、王珎、徐茂、顧忠、許明、梁済）、同単疏本周易正義（王珎）、同単疏本尚書正義（浩先）、同鄂州刊資治通鑑（陳明）、乾道二年江陰淑江郡刊宣和奉使高麗図経（徐亮）、同年泉南郡庠刊孔氏六帖（李秀）、淳熙二年厳州郡庠刊通鑑紀事本末（朱明）、南宋初刊史記集解（中央研究院蔵）の南宋前期修に張祥、除茂、顧忠、王珎、同資治通鑑目録の南宋前期修に王珎、所謂眉山七史宋書の修に陳錫、孝宗朝刊豫章黄先生文集の寧宗朝修に孫中・除亮、寧宗朝浙刊晦庵先生文集に陳明の名が見える。以上は皆南宋初から寧宗朝前期に亘る杭州地区の刻工である。従って本版は欠画と刻工名から又その字様が紹興頃の浙刊本の典型たるのと相まって、紹興後期から遅くも孝宗前期を降らぬ刊刻たることは疑いない。淳熙刊の説もあるが、その字様の重厚なる点からも紹興乾道間と看做すのが妥当であろう。

注疏は元来各々単行されていたが、読者の便を計って、注疏蒐輯したのはこの両浙東路茶塩司刊本が最初と云われ、以後その簡便さが受け、合刻本のみが続刊され、単疏本はその伝を殆ど絶つ如き様相を呈し、正義はその旧形を大に失うに至った。しかし本版は序共十四巻の単疏本の巻次に遵い、注は起至を標する等、未だ旧形の体式を多く残し、割裂删改や脱誤が少く、後の十行本の如き通行本に比して、佳処優所が頗る多いことは、七経孟子考文・盧氏羣書拾補・阮氏校勘記・瞿目等の校異に徴しても明かである。本茶塩司刊注疏本の板木は後に国子監に移され、南宋中期から漸次修補が加えられ、元になって西湖書院に移管されてさらに修補が施され、明に入ってその一部は南監に転移されて遞修印行された。

本版の他に伝存するのは、清の汪士鐘・陳鱣・瞿氏鉄琴銅剣楼等遞蔵の北京図書館現蔵本（汪目・瞿目・瞿影・王記・中版録68著録）のみが知られるにすぎない。ただ同本は宋・元の遞修が加えられ、表序巻一の首巻は陳鱣が銭保伝鈔宋本によって補写し、巻中の略例釈文は明翻八行本を以て補完してある。ちなみに瞿影・中版録所載の巻二巻首の書影は原刻に非ずして、その忠実な覆刻の宋修である。

現存越刊八行本の殆どが宋元乃至明遞修後印本であるのに比し、掲出のこの足利学校本は表序等の首部を欠くが、本文は首尾完好にして修刻がなく、初印とは云い得ぬにせよ、渾厚厳端の字画は触目整正ならしむる早印に属し、端平の宋人の書入識語を有する等、珍中の珍宝と称すべきである。この本には昭和四八年東京・汲古書院刊の影印本がある。

周易兼義　九巻附略例一巻音義一巻　魏王弼・晉韓康伯注　唐孔穎達疏　陸徳明音義　〔元〕刊

世に宋版十行本、或は伝本の殆どに明正徳年間の南監の修補がある所から正徳十行本と称される十三経注疏の一つ。従来宋刊とされて来たが、長沢規矩也博士によって、その刻工名等から元の刊刻たることが実証された（「正徳十行本注疏非宋本考」〈「書誌学論考」所収〉）。詳細は拙著参照。

（静嘉堂文庫蔵）〔明前期〕修　一〇冊。新補淡緑色地銀砂子散し表紙（二六・五×一六・八糎）、襯紙を挾める改装本。首目の首半丁及び巻五末丁欠。修補は明前期に止って、正徳に降らず、原刻の葉が多い。陸氏旧蔵であるが、陸志に著録されず、その後の収蔵か。

（静嘉堂文庫蔵）至明正徳遞修　八冊。陸志著録。新補淡茶色水玉表紙（二九×一七糎）。金鑲玉装。元料紙縦二六・五糎。白棉紙。巻五第三十三葉補写。版心の正徳の修年の所を削除して別紙で補っている。原刻の葉は漫漶甚しいが、正徳修印の中では、比較的原刻の葉が多い方である。

同版本には他に台湾国立中央図書館（拙著著録）・北京図書館・北京大学蔵本、瞿目瞿影・劉影・傅目・蔣志著録本等があり、皆明修本である。

周易新講義　一〇巻　宋龔原撰〔宋紹興〕刊

（内閣文庫蔵）三冊。重文。森志著録。後補淡香色表紙（二三・七×一三・五糎）、外題「周易新講義幾」、右下端に「共三／宋板」と墨書。裏打修補が施さる。巻首「進周易新講義／（低六格）龔原深甫／（低三格）序」と題する自序を冠し、毎巻首「周易新講義巻第幾」と題す。左右双辺（一六×一〇・五糎）有界十一行、行廿二字内外、注小字双行、行廿六字、序は十行十七字。版心白口単黒魚尾「易幾（丁付）」。下象鼻に華、連、陳の刻工名が見えるが、序以外の葉には極めて稀れ。玄弦鉉敬驚警弘殷筐恒貞に欠筆を見るが、厳格ではなく貞の字の如きは欠かざる方が多く、英宗以下については欠画をしない。巻一前半に朱筆の句点朱引圏点の書入があるが、その後は所々に存するにすぎない。第一冊首と巻六首に「興学／亭印」（森志に「巻首有興学亭篆字朱印、狩谷望之云宋時物」、上杉氏所蔵宋槧本史記亦有此印記）、表紙並に末に「昌平坂／学問所」の墨印及び「文化乙丑」の朱印、「浅草文庫」「大学校／図書／之印」「書籍／館印」「日本／政府／図書」等の朱蔵印あり。

本書は有名な佚存書にして、林述斎の佚存叢書に所収翻印されて内外に知られるに至った孤本である。刊記がなく、森志は欠画から「北宋槧中尤佳者也」と鑑定した。しかし北宋刊本に非ざること明かであるが、その字様が建安の体に類し、字画清勁墨色妍好ではあるが、些少朴拙と間々不斉の所を免れず、その紙質は和紙に類せる白色堅厚の楮系で、一見我が五山版の観を呈している。字様版式から見て紹興年間、遅くも孝宗前期を下らざる閩刻であろう。この本往々虫損による欠壊の字があるが、佚存叢書によって判明する所もある。

四庫未著録。阮元が逆輸入の佚存叢書本によって進呈した。著者は字は深甫、一に深之、遂昌の人、少くして陸佃と共に王安石に師事して終生易らなかった。嘉祐八年進士、元豊中国子直講となり官は宝文閣待制に至った。事蹟は宋史本伝に詳かである。宋史藝文志に「龔原続解易義十七巻、又易伝十巻」とあり、晁氏読書志巻一上に「王介甫易義二十巻龔原注易二十巻耿南仲注易二十巻」と録して「右皇朝王安石介甫撰、介甫三経義皆頒学官、独易解自謂少作未善、不専以取士、故紹聖後復有龔

原耿南仲注易三書、偕行于場屋」と。また陳氏書録巻一に「易講義十巻　給事中遂昌龔原深之撰、嘉祐八年進士、初以経学為王安石引用、元符後、入党籍」と記されている。「経義考」引載の鄒浩序に「自熙寧以来、凡学易者、靡不以先生為宗師」と云う如く、本書は一時大に崇尚せられて盛行したが、南宋に至って安石の没落と程朱学の盛行により、反対の程朱学派の楊時から「龔深父説易、元無所見、一生用功都無是処」と酷評された如く一落千丈、久しく伝を失うに至ったものである。

程朱二先生周易伝義　一〇巻易図一巻　宋程頤伝　朱熹本義　元延祐元年（一三一四）刊（翠巖精舎）

（宮内庁書陵部蔵）　五冊。森志著録。後補丹色古表紙（二四・五×一五・七糎）。「周易伝義幾」と外題、表紙右下端に「共五／易二号」と墨書。裏打修補が加えらる。毎冊見返に所収卦名を墨書。首に扉あり、上に「翠巖精舎」と横書、その下中央に「新刊」（横書白文）、下に「程朱先生／周易伝義」の大書、その左に「伊川先生程子有周易六十四卦伝　晦庵先生朱／子有周易経伝本義二書発明理義象数極為明備」、右に「盛行□矣今合而一之庶学者一目而両□且免／重複検閲之労実為便益敬鋟諸梓嘉与同志共之」の小書が印刷さる。首に有宋元符二年己卯正月庚申河南程頤正叔序の程序、次に朱子集録と題する「易図」を置き、その後（尾題「易図終」の前）に、「延祐甲寅孟冬／翠巖精舎新刊」の木記を有する。本文巻首「程朱二先生周易上経伝義巻之一／（低七格）伊川先生程頤伝／（低七格）晦庵先生朱熹本義」と題す。四周双辺（一九・八×一二・五糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行、行廿五字。注文の「伝」「本義」の標字は墨囲白文の大字。版心細黒口双黒魚尾「周易伝義幾フ（或は周易幾フ、周易伝幾、易伝幾フ）（丁付）」。毎裏葉左上欄外に耳格（枠なし）あり、卦名を印するが、殆ど磨滅す。第一冊本文首に「厳／璠」（白文）の古印、尾に朱古印あれど印文未詳。毎冊尾に「昌平坂／学問所」（印墨）「文化乙亥」の朱印、首に「浅草文庫」「書籍／館印」「日本／政府／図書」「帝室／図書／之章」の諸印記あり。

経文にのみ、室町期の朱句点朱ヲコト点（明経点、少しく墨筆を混ゆ）、各別筆の朱墨両様の返点送仮名や書入（一部押紙書入）が少しくあり、その書入は多く旧注の抄録からなる。本版は典型的な建安麻沙本で、この本は印面かなり漫漶なる後印である。莫跋著録本及び北京大学蔵（李氏旧蔵）存首八巻四冊は延祐元年翠巖精舎刊と録されている。

同　〔元〕刊　覆元延祐元年翠巖精舎刊本

（天理図書館蔵）　六冊。新補紺色絹表紙（二五・八×一六・三糎）。襯紙を挾み改装、元料紙縦二三・四糎。首に程序、「周易総目」（以上補写）並に「易図」（首二丁半及び末半丁補写）あり。巻首題の体式前掲本に同じ。四周双辺（一九・九×一二・四糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行、行廿五字。版心細黒口双黒魚尾「易伝（或は周易伝義、周易伝、周易）幾フ（丁付）」。裏葉左欄外上に卦名を印せる耳格（枠なし）あり。巻中ほゞ廿丁の補写あり、巻十巻末欠丁。首冊副紙に「光緒丙午歳

夏自金陵書肆／購得宝宋閣善本之一永鋏王大炘記」の識語あり。「結弋／盧蔵／書印」「鼎函／珍賞」「鋏陵王氏／宝宋閣／所蔵之印」「王定／安印」「翰墨／奇縁」「宝宋閣」等の諸印記。清の王定安（字は鼎臣）、咸豊の頃蔵書の富を以て知られた仁和の朱学勤（字は修伯）・澂（字は子清）父子等旧蔵。結一廬書目著録。

前掲の延祐元年翠巌精舎刊本を覆刻せる印面美麗なる元末刊麻沙本で、此は正体字が略体字に改変されている所が多い。台湾の国立中央図書館蔵巻六の零本は此と同版、故宮博物院楊氏観海堂蔵巻三・四の零本は本版に基づくさらに後の明前期の覆刻である。北京図書館蔵元刻四冊本は前掲の延祐元年刊本と覆刻の関係にあり、或はそれより先出本か。羅録著録存下経四五六三巻は此と同版か否か。同館蔵瞿目瞿影著録本は本版と字様が相似せる麻沙版であるが、十三行注文行廿七字の別版で、元刊に非ずして、明初刊刻と見るべきである。

晦庵先生校正周易繫辞精義　二巻　旧題宋呂祖謙編

〔元至正九年（一三四九）〕刊

（尊経閣文庫蔵）〔明初〕印　二冊。後補艶出茶褐色地空押行成表紙（二四・五×一五・五糎）。裏打補修や襯紙が挾まる。巻首「晦庵先生校正周易繫辞精義巻上／（低五格）東萊呂祖謙編／（低三格）上繫」と題し、尾題に「晦庵先生校正周易繫辞下終」と。左右双辺（一九・三×一二・三糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行、行廿六字。注文の「程子曰」「又曰」等は白文を以て標記。版心線黒口双黒魚尾、「易（或は易系、或は系）上（下）（丁付）」。所々左上欄外に「繫辞上（下）」と印された耳格あり。

本書は程伝が繫辞に及ばなかったので、諸家の説を集めて、程伝の欠を補ったもので、陳氏書録は「館閣書目、以為託祖謙之名」と云っている。本版には刊記はないが、版式等から見ても古逸叢書に本書と共に覆刻された「易程伝」六巻と共に出版された附録と思われ、同書には「至正己丑孟春／積徳書堂新刊」の木記を有する。本版は宋槧の覆刻乃至は翻刻と見え、玄鉉弘恒貞慎敦の字は末画を欠くが、雖法には寧ろ明初の特色が出始めている。この本の刷りは明初に降ると見るべきであろう。古逸叢書はその底本の所在を示さず、本版は他に現存本が知られていない。また北京図書館蔵周易伝存首四巻本（涵録著録）は至正九年積徳書堂刊とされているが、実は古逸叢書本の胡蝶装特刷本である。

易学啓蒙〔通釈〕　二巻啓蒙通釈附図一巻　宋胡方平撰

元至元二九年（一二九二）跋刊（〔建陽〕劉涇）

（尊経閣文庫蔵）二冊。後補淡香色表紙（二四×一四・五糎）、裏打改装本。首に至元壬辰季夏朔雲荘後人劉涇楫之謹跋及び壬辰仲夏望日後学武夷熊禾跋の両跋、「啓蒙所引姓氏」、「通釈所引姓氏」、淳熙丙午莫春既望雲台真逸手記の朱子「易学啓蒙序」、次に「啓蒙通釈附図」（題下五格を隔て「新安胡方平学」と題署）を列す。本文巻首「易学啓蒙巻上／（低八格）新安後学胡方平通釈／（低三格）本図書第一」と題す。左右双辺（一九・八×一二・二糎）有界十行、行廿一字、注低一格中字単行、行廿字、小注低二格

小字双行、行十九字。版心細黒口双黒魚尾「巻上（下）（丁付）」。貞の字に欠筆が見られる。室町期の朱点朱引朱勾点、所々に墨筆訓点が附され、行間にほゞ二手からなる朱墨の書入がなされている。

巻首の両跋によれば本書は朱子の門人文簡・雲荘兄弟の後人たる建陽の劉涇が元の前至元廿九年初めて梓に附したものである。その刊刻の経緯については涇の跋に

嘗記児時従家庭授易聞之　先君子云昔　晦庵先生之講学于雲谷也我先　文簡雲荘兄弟与西山蔡先生父子遊従最久講論四書之餘必及於易（中略）旧蔵雲荘所抄諸経師説数鉅帙兵燹之餘其存者蓋千百之什一耳一日約无咎詹君退斎熊君訪雲谷遺跡適値新安胡君庭芳来訪出易啓蒙通釈一編見示謂其父玉斎平生精力尽在此書（中略）時熊君以易学授児輩謂是誠読易者不可闕之書因言庭芳再入閩惟汲汲焉父書無伝是懼且欲以見属仰惟一時師友游従之盛重念先世問学淵源之旧輒為刊寘書室

と。本版は典型的な元槧建安本で、恐らく至元廿九年の劉涇家刻版に該当するものであろう。他に同版本の所在を知らない。

同　元致和元年（一三二八）跋刊（環谿書院）　覆元至元二九年劉涇刊本

（東京都立中央図書館蔵）　二冊。新補藍色絹表紙（二六・七×一六糎）、金鑲玉装、元料紙縦二二・七糎、裏打補修が施さる。首目巻首題式等前掲本に同じ。左右双辺（一九・八×一二・二糎）有界十行、行廿一字。注低一格中字単行廿字、小注低二格小字双行十九字。版心細黒口双黒魚尾「巻上（下、或は上、上フ、フ上、易下、易フ下、易下、下等）（丁付）」。「礪山宋／氏世家」「有不／為斎」等の印記。伊藤介夫旧蔵本。

前掲本の精善な覆刻で、たゞ首の劉涇跋文の末の題署の「至元壬辰季夏朔雲荘後人劉涇揖之謹跋」に至る十七字を「致和戊辰季夏朔環谿書院重刊謹跋」と改竄し、次の裏丁の印章を変えている。本版も他に所蔵のあることを聞かない。

周易程朱先生伝義附録　二〇巻程子上下篇義・朱子易図説・周易五賛・筮儀各一巻首目一冊　宋董楷撰　元至正二年（一三四二）刊（桃溪、居敬書堂）

（静嘉堂文庫蔵）　八冊。陸志・陸続跋著録。首に咸淳丙寅後学天台董楷謹序の自序、続けて低三格を以て是歳良月謹識の自識、次に「周易程氏説凡例」があり、その末葉の刊記があった箇所が破かれ別紙で補われている。次に「朱子易図説　後学天台董楷纂集」、「易伝序」、「程子易綱領」、「朱子易綱領」があって末に「易図終」の陰刻尾題を附して首目一冊をなす。本文巻首「周易上経程朱先生伝義附録巻之一／（低九格）後学天台董楷纂集」（次行撰者題巻二以下なし）、繫辞等は「周易繫辞程朱氏説巻之上」、「周易繫辞程朱二先生伝義附録巻之下」、「周易説卦程朱先生伝義附録」「周易序卦程朱二先生伝義附録」「周易雑卦」と題し、巻末に「程子上下篇義」「朱子周易五賛」「朱子筮儀」を附する。四周双辺（単辺、左右双辺も混交、一九・八×一二・五糎）有界十二行、行廿二字、注小字双行。注文の「伝」「本義」の標識

は大字墨囲白文、「程氏附録」「朱子附録」は大字墨囲。版心細黒口双黒魚尾、「易上（下）経（或は易、易係、易説卦等）幾（丁付）」。巻三首葉欠。第一冊に朱句点が附さる。「明徳／堂印」「松靄／蔵書」「周／啻」（白文）「芼／兮」「呉騫／読過」（白文）等の諸印記あり。清の周春（字は芼兮、号は松靄、乾隆の進士）・陸心源旧蔵。

首の凡例末にあるべき刊記の箇所が破かれているが、次掲の岩瀬文庫蔵本の首目と同版であるから、元至正二年桃溪居敬書堂刊たることが判明する。本版には巻末朱子筮儀の末にも凡例末と同じ木記がある筈であるが、この本は破かれている。この本は刷りがかなり磨滅せる後印にかかる。宋末の咸淳二年の自序を有する本書は宋代に刊刻を見たか否か明かならず、宋版は現存しないようで、元槧に延祐二年円沙書院刊本（北京図書館蔵、涵録著録）、この至正二年居敬書堂刊本、至正九年廬陵竹坪書堂刊本が知られる。三部はほぼ覆刻の関係にあり、版式行款を等うする。この至正二年刊本には次掲本以外には北京図書館蔵二部（一は蔣志・涵録著録）、王記、丁志、羅録各著録本がある。

（西尾市立図書館岩瀬文庫蔵）九冊。補配元至正九年竹坪書堂刊本。永和二年—康暦元年釈心華元棣加点書入本。後補茶覆表紙（二五×一五・五糎、第二冊以下は二五・五×一五・五糎）。第二冊以下には本文共紙元表紙あり、目録外題及び「瓢庵」の墨書が存する。裏打修補が施さる。首冊と第二冊以下とは少しく版を異にし、首目は前掲の至正二年刊本であるが、巻二以下はそれと次掲の至正九年竹坪書堂刊本とが混じて配補されている。首目巻末附録巻首題体式版式等前掲及び後掲版本に同じ。前掲本に欠けている凡例後の木記は「至正壬午桃溪／居敬書堂刊行」と。巻一の十六葉裏、巻二末裏葉系辞下首裏丁等少しく欠丁あり。諸巻末に次の朱墨の釈心華元棣の識語を有す。

（巻三末朱）点染権輿諸永和丙辰十二月今玆丁巳正月十七日也自乾坤以至履凡／十卦六十六紙畢矣蓋九仞之一簣者也矣東濃釈元棣誌焉

（巻四末朱）永和丁未二月初吉第四巻点染畢矣元棣誌焉

（巻七末）右且点且講永和丁巳三月十七日第七巻畢矣元棣誌（印）（印文「元／棣」）（印）（印文「定／慧」）

（巻十一末）永和三年冬十月二日且点且講畢矣／（印）（印）

（巻十二末）丁巳冬十一月十八日点勘畢矣／（印）（印）

（巻十三末）永和丁巳冬十二月二十又一日且点且講畢矣／（印）（印）

（巻十五末）永和四年戊午春二月九日上下両経且点且講畢元棣誌（印）（印）

（繫辞上末）康暦改元秋八月二十又七日上繫点畢譬之堀井可謂九仞／幾乎泉者乎　鶩陰定慧精舎之僧元棣誌焉（印）（印）

（繫辞下末）康暦初元菊節前一日下繫点畢矣率如病夫或養痾或応接／或講習或禅誦苟其餘暇則必及焉可謂勤矣定慧主僧元棣誌（印）（印）

（説卦末）康暦初元秋九月二十又三日説卦点畢矣定慧元棣誌之（印）（印）

（周易説卦程朱二先生伝義附録末）康暦初元九月二十又三日
説卦点畢矣　定慧元棣誌之(印)(印)
（雑卦末）康暦改元九月二十又三日序雑両卦点畢矣／鶯陰定
慧精舎主者元棣誌焉(印)(印)
（最巻末）右程朱氏周易伝義附録并邵堯夫先天後天図等其学
幽遂宏闊人難得而彷彿之王／孔註疏望於此書乃毫芒之於秦山
螢照之太明未足以擬。中国点訓焉講授焉者未之有也病／夫勉
為□法印重公且点且講今玆畢矣竊謂本朝之権輪／末流之濫觴
也夫或有所脱誤当待再講以改正之不到於期慎勿布露／為人所
誚逞々闕疑以俟来賢□□　康暦初元九月廿□(四日)□定慧元棣誌(印)
(印)

心華は、名は元棣、字は心華、美濃の人、建仁寺頑石の門に入り、その歿後は義堂周信に従学した。美作の興雲寺、備中の松山寺等に住し、後入京して建仁寺の定慧院に住し、諸山に出世せず、位西堂に止った。しかし儒に精しく、文辞豊麗、独歩の才の盛名を慕ってその門に遊ぶ者が多く、応永年中寂し、著書に杜詩の抄たる「心華臆断」、遺稿に「業鏡台」がある。この本の書入は心華が三年間に亙って講義と共に加点抄録したもので、経注文共に朱筆の句点訓点が詳細に附され、且つ欄外行間に経書・正史・老子・韻会の諸書から、啓蒙翼伝、朱子附録、張氏正蒙、楊氏易藁その他の宋学者の諸説を抄録し、間々私云と私説を附し、また一本との校合注も記入されること詳細なるものがある。心華が識語に本書の加点を本朝の権輿と自負する如く、古注から新注へと後の桃源等が五山易学を転換せる先駆で、この書入は洵によく勤めたりと称すべく、我が国の易学史上極めて注目すべきである。毎冊首か尾に「善慧軒」の卵形墨印が鈐され、毎表紙に「瓢庵」の署名があり、即ちこの本は後に東福寺の鼓叔守仙（瓢庵と号し、東福寺内善慧軒に退休し弘治元年寂）の蔵となったことが知られる。

同　元至正九年（一三四九）刊（廬陵・竹坪書堂）　覆元至正二年刊本

首目・巻首題体式版式等前掲本に同じ。凡例後に「至正己丑廬陵／竹坪書堂新刊」の双辺木記がある。四周双辺（二〇×一二・六糎）有界十二行、行廿二字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾「易上（下）経幾（幾フ、或は易幾）（丁付）」。

同版本は海外には国立中央図書館（欠巻四―一五）故宮博物院（存図説一巻、以上拙著著録）北京図書館（涵録著録）に蔵さる。伝義合刻は董氏の本書がその俑をなし、両書の旧形を乱し、後世の非難を受けたことは、四庫全書が「惟程子伝用王弼本、而朱子本義則呂祖謙所定古本、楷以程子在前、遂割裂朱子之書、散附程伝之後、沿及明永楽中、胡広等纂周易大全、亦仍其誤、至成矩専刻本義、亦用程伝之次序、郷塾之士、遂不復知有古経、則楷肇其端也」と評する通りである。しかし楷の凡例首条によれば、敢て程伝を離析せず、尽く朱子の意を失ったわけでない。楷は節斎蔡氏の例に倣って、原定の款式は、十翼の文は各経文より一格下げて正経と紊乱せしめず、程伝及び朱子本義は又一格を低し、程子朱子附録はさらに一格を下げる等計

って、識別を明かにするに意を留めたことが察せられる。しかし此等元坊刻本の版式は専ら簡便を図って、経伝一例に平書して一律聯貫して董氏の本意を失うに至っている。延祐二年より三伝して至正九年の本版に至りその間款式に小異が生じていよいよ原形に外れたことを涵録は次の如く指摘している。

此為元至正己丑廬陵竹坪書堂刊本。後於円沙書院者三十四年。居敬書堂者七年。分巻行款悉同。惟序卦雑卦二篇。程子上下篇義。朱子周易五賛。朱子筮儀三篇。各不分葉。円沙刊本。凡例首条不敢尽失朱夫子之意下。於是倣節斎蔡氏例以彖伝大小象文言各下経文一字使不与正経紊乱而程伝及朱子本義又下一字程子朱子附録又下一字則其序秩然矣五十七字。是本均已芟落。僅留空行。此必覆刻者知刊本款式。已尽改易。不欲存之。以自形其矛盾也。先後三十餘年間。是書坊刻。流伝至於今日者。尚有三版。亦可想見程朱学説之盛行於当時矣。

（尊経閣文庫蔵）　一〇冊。後補青緑色表紙（二四・五×一六糎）。第一冊外題「周易程朱氏説或問周易伝義附録」、毎冊目録外題が記され、首冊にはその左傍に「計十冊董楷纂修」と。此等外題は前田松雲筆。裏打改装本。首の「易伝序」は欠か。易図第十丁と巻五第十四丁は補写。首三巻、巻八―一五、末の周易五賛、筮儀には室町期の朱点朱引や朱筆の訓点が書入されている。

（内閣文庫蔵）　存上下経一五巻首目一巻　七冊。後補香色表紙（二三・五×一五・五糎）、裏打改装本。首の「易伝序」欠か。巻一の始め並に巻五―九に室町期の朱筆の句点訓点が附され、所々墨筆の書入がある。

周易本義附録集註　一一巻附周易五賛一巻　元張清子編

元大徳七年（一三〇三）序刊（建安・張氏）

（書陵部蔵）　七冊。後補淡香色表紙（二四・五×一四・五糎）。書外題「張氏周易本義附録集注幾」、右下端に「易三共七号」と墨書。首に大徳癸卯冬至建安後学中溪張清子謹誌の自序及び「周易本義附録集註姓氏」あり。巻末に「周易五賛」が附さる。本文巻首「周易上経巻第一／（低四格）晦庵朱熹伝／（低六格）建安後学中溪張清子編」と題す。左右双辺（二〇・五×一二糎）有界十一行、行廿五字。注文低二格小字双行、行廿六字、但し巻十一以下は行廿四―廿七字、注は行廿八字。注文の「本義」「附録」「集註」等の標識は大字墨囲白文、晦庵曰、張清子曰等の人名は小字白文。版心小黒口双黒魚尾「易幾（丁付）」。巻一・八の巻末に「張氏月洲書院新刊」、巻三・九末に「張氏可軒書院新刊」、巻七末に「張山長宅中溪書院新刊」の刊記、巻一―三末に「建安後学張公埜点校」、巻四末に「建安張公霖点校」、巻五末「建安後学張公霖点校」、巻七・八末「建安後学張公楚点校」、巻九末「建安後学張公麓点校」、巻十一末「建安後学張熙孫点校」と、校者名が刻されている。毎冊末に所蔵者釈宝英の文明丙申八年と同壬寅十四年の次の朱筆加点識語が記されている。

（第一・二冊）文明壬寅之夏　朱句畢功焉

（三）文十四寅相月　日　朱句畢功

（四）文十四寅之秋句読畢功

(五)文明壬寅之秋　句逗畢功

(六)○文明倉龍在摂提槍月維秋九幾望也此書已前共／六冊句読一筆而畢功焉予年逾知命／髪已雪而眼也眵昏矣雖前途卜休咎其／幾乎然慎其終始是書之所深誡也遁日／為朋輩読焉以終篇因玆識旃／㋐斎(印)

(七)予嘗寓于京之慧峯以儕類所誘者而就菩／提乾翁之徒其名曰春者適斆於此于時年／財二十又二而已夫孔聖尚晩学之矧於今之世乎／或言其太早也予今也踰於四旬者五昉眎／張氏是書其間多難理会応話柄然視／旧学所荒莫者亦鮮弗能以無一二所授／之益焉耳吁　文申八月竭五　宝英

「宝／英」、「昌平坂／学問所」、「文化乙丑」、「浅草文庫」、「大学／蔵書」、「書籍／館印」、「日本／政府／図書」等の諸印記あり。

本書は四庫未著録、諸家目録にも収められず、経義考も未見となし、たゞ僅に後掲の元の董真卿の「周易会通」、俞炎の「読易挙要」に解説の記事が見られる。それによれば、著者清子は字は希献、号は中溪、建安の人、周易本義附録集註十一巻を著すと。本書の大徳七年序に自ら本書の趣旨を

予晩年頗知喜易、而未造其閫奥、近嘗思之、僭以　朱子本義所伝卦爻彖象文言之説、師友問答講明之旨、合而鋟之于梓、且参攷古今諸儒議論、而以已説附其後、庶学者易於観覧、此則未嘗悖朱子之意、適所以広朱子之説、

と述べる如く、朱子本義を主として、朱子が師友との問答説、易学啓蒙、並に黄幹以下朱子門下六十二人の説を「附録」とし、子商・王弼・韓康伯・孔頴達等以下六十二家の説を「集註」となし、末に自説を「張清子曰」と標記して本義の羽翼として疏通を計ったものである。本版は次の修補後印本の外に伝存本なく、漢土には佚亡同然となり、ただ清の周松靄旧蔵の影写元刊本（自序欠、陸跋・陸志著録）が陸氏皕宋楼に伝ったのみで、それも今我が静嘉堂文庫の有となっている。附録・集註所掲の諸説には現在亡佚の書が多く、集註の中では建安の朱子派の徐幾（進斎）・邱富国（行可）の説を引くことが多い。この本は罕覩の珍のみならず、彫鏤精善の早印にして建安元刊本の上なるもの。毎冊尾の釈宝英（伝明かならず）の手識の如く、全巻経文に朱筆ヲコト点返点送仮名、注文に朱句点朱引が附され、また王弼注との校字等の朱書入が存する。朱書入には別筆の一手も見られる。

（お茶の水図書館蔵）　後修　四冊。徳富氏成簀堂文庫旧蔵。香色表紙（二三・三×一五糎）、書外題「易経附録　元（―貞）」。前掲本には巻末にあった「周易五賛」が巻初の集註姓氏の次に附さる。本文巻首題の第二行の「晦庵朱熹伝」が「朱子本義附録」（但し巻五・六は旧の通り）に、第三行の撰者題の「編」が「纂集」（但し巻三・五・六は旧の通り）に修改され、前掲本にある各巻末の刊記・点校者名が巻七・十一を除き全て剜削されている。また巻中僅かながら修刻が施され、少しく印面に漫漶の部分が存する。「宝勝院」「養安院蔵書」「得／翁」「蘇峰／審定」等の印あり。宝勝院は東福寺の塔頭。後に曲直瀬家養安院の架蔵となったものである。帙に「是書海内有一無二／珍

籍也後人須宝／惜云尓／大正四年七月初二猪」と徳富蘇峰の墨書、巻末に「宣統丁巳正月上浣羅振玉観(印)(印)」の識語がある。また蘇峰が大正四年下谷の吉田書店よりこの本を購得せる顚末を記せる七月二日附巻紙と共に同書店の蘇峰宛の金弐拾円也の領収証が添附されている。

周易本義啓蒙翼伝　三巻外篇一巻　元胡一桂撰　〔元〕刊（〔建安〕）

（内閣文庫蔵）　八冊。森志著録。後補香色表紙（二三・七×一五糎）。裏打修補が加えらる。首に「皇慶癸丑歳一陽来復之日新安後学／胡一桂庭芳父序」の自序、「周易本義啓蒙翼伝目録／新安前郷貢進士胡一桂庭芳父」あり。本文巻首「周易本義啓蒙翼伝上篇／(低七格)新安前郷貢進士胡一桂学」と題す。巻末外篇尾題の前に「男思紹校正」。四周双辺（一九×一二・二糎）有界十一行、行廿一字、伝文低一格、大字単行、「按」の注文は小字双行。版心細黒口双黒魚尾「翼伝（或は翼、伝）上篇（或は上、中、下、外）（丁付）」。「宝勝院」（東福寺の塔頭）「昌平坂／学問所」、「文政戊寅」、「浅草文庫」「大学／蔵書」「書籍／館印」等の諸印記あり。巻初眉上に「此書八冊安／永丙申春／買得之河／内茂八毎巻／有宝勝院／之印者乃前／人之蔵書記」の朱筆識語あり。所々朱筆の句点圏点朱引、眉上に朱墨両様の二手の書入が存し、往々「寞斎按」と録さる。或は市川寞斎の書入か。

（内閣文庫蔵）　存外篇　一冊。後補香色表紙（二三・五×一四・六糎）、裏打修補あり。首四丁を欠く。刷りはこの方が前掲本より良い。所々朱点朱引の書入あり。

他に同版本の現所在を聞かぬが、「増訂四庫簡明目録標注」に、「朱修伯曰、通志刊従汲古元本出、曾見元本、葉十六行、行十六字」とあるは、本版とは別版らしく、「続録」に「李木斎蔵元刊本、十一行二十一字、字体方整、類宋刻、伝低一格、単辺白口、外編末有男思紹校正一行」とあるは、本版と行格を等うするが、単辺と双辺、細黒口と白口との差違あり、同版か異版か。木斎蔵本を一括収蔵せる北京大学図書館目録にはその本は著録されていない。

周易集説　不分巻附易図纂要・俞石澗易外別伝各一巻　元俞琰撰　元至正八―一六年（一三四八―一三五六）刊（俞氏読易楼）

（静嘉堂文庫蔵）　八冊。汪目・陸志・陸続跋著録。後補茶色表紙（二二・五×一五・八糎）、襯紙を挾む。序目・上経及び下経（首二葉）補写の外に巻中抄補の箇所が多い。首に泰定元年十月甲子金華黄溍序の「周易集説題辞」、元貞丙申五月六日林屋山人俞琰玉吾叟序の「周易集説序」、「周易上下経説／(低九格)林屋山人俞琰玉吾叟」（以上補写）をおく。各巻の序跋・内題等次の如し。巻首内題「周易上(下)経／(低十格)林屋山人俞琰集説」（補写）、尾題「俞石澗周易集説上経巻終」、次に「嗣男仲温校正命児楨繕写謹鋟梓／于家之読易楼至正八年歳在戊子／十二月廿五日謹誌」（以上補写）の刊語跋、「俞石澗周易集説下

経巻終」の次に「嗣男仲温点校孫貞木繕写鋟梓于家／之読易楼至正九年歳在己丑十一月／朔旦誌」の刊語跋あり。彖伝は首に「周易彖伝説／(低七格)林屋山人俞琰玉吾叟」をおき、「周易彖伝上／(低八格)林屋山人俞琰集説」と題し、「周易俞氏集説彖伝下巻終」の尾題の次に「嗣男仲温校正命児楨植繕写謹鋟／梓于家之読易楼至正十年歳在庚／寅八月旦謹誌」の刊語跋あり。以下爻伝・象辞・文言・繫辞二巻・説卦・序卦・雑卦は各首に説をおき、首題の次に「林屋山人俞琰玉吾叟」、或は「林屋山人俞琰集説」等と題署す。雑卦の末に皇慶癸丑四月十四日石澗俞琰玉吾叟誌の「俞石澗周易集説後序」を附す。次に「易図纂要」「易石澗易外別伝」各一巻を附録とし、尾に至正丙申春正月男仲温百拝謹誌の跋、林屋洞天石澗真逸俞琰玉吾叟書の自跋、並に「至正八年歳在戊子七月望日男仲温百拝謹書于篇末」の三跋が附さる。左右双辺（一八・三×一三糎）有界十二行、行廿一字、注文低一格単行大字、引用人名の標識は陰刻。版心線黒口単黒魚尾「上経（或は下経、彖伝上、説卦等）（丁付）」。下象鼻に間々「存存斎刻」と刻された葉あり。「汪士鐘／曾読書」「帰安阮／□□所／見金石／書画記」(白文)等の諸印。清の汪士鐘・陸心源等旧蔵。

本書を四庫は四十巻に作るが、此は元貞二年の最初の自序に「歴考諸家易説、撫其英華為一書、名曰大易会要、凡一百三十巻、不揣固陋遂自至元甲申集諸説之善、而為之説、凡四十巻、因名之曰周易集説」によったものであろう。通志堂経解本は十三巻に分つ。しかしこの原刊本によるに不分巻とすべきようである。附録については、皇慶二年の後序に「如易経考証、如易伝考証、如読易須知、如易図纂要、如六十四卦図、如古占法、如卦爻象占分類、如易図合璧連珠、如易外別伝、乃予旧所編者将毀之、而児輩皆以為可惜、又略加改竄、而存于後」とあれば、附録九種は皆刊刻された筈であるが、今二種存するのみで、他は佚失したようである。上の男仲温の刊語跋に云う如く、本版は仲温が児の楨植、孫の貞木に命じて版下を書かしめ、至正八年から十六年に至る間に順次校刊したものである。同版本に中央図書館蔵本（存彖伝巻上、拙著著録）・北平図書館原蔵存十巻（下経・爻伝上下・彖伝上・象辞上下・文言・説卦・序卦・雑卦、台湾に移管されず、旧京8—10著録）・劉影著録本（存易外別伝）・莫目著録本がある。

この本は首目の部分が抄補にかかり、自序の外は黄溍序を冠するにすぎぬが、「経義考」には、至大庚戌（三年）冬の孟淳序、至大庚戌冬至の王都中序、至治壬戌（二年）春の李克寛序、皇慶元年の白珽序、皇慶二年七月の張瑛序、至治二年春の顔堯煥序、至治壬戌冬の楊載序、至正六年七月の干文伝序が引載されている。此等の序は元来この至正刊本にあって、この本が欠くのか。右の至大三年冬至の王都中序に「書成、不可不伝、敬請鋟諸梓、以与同志者共之」とあり、邵注の続録に「元至大庚戌王都本、佳」と録されている。本版の前に至大の刊刻があったのであろうか。後考を俟つ。

冊附録二巻　元董真卿撰　元後至元二年（一三三六）刊（翠巖精舎）

（東洋文庫蔵）　一六冊。後補淡茶褐色表紙（二六×一六・三糎）、裏打修補が施さる。首に「周易会通総目／後学鄱陽董真卿編集」あり、その末に「至元二年丙子／翠巖精舎新刊」の双辺木記が刻さる。次に「天暦初元蒼龍戊辰天開之月陽復後十日庚辰後学鄱陽董真卿季真父自序于審安書室」と署せる「周易経伝集程朱解附録纂註序」、次に低三格を以て元統二年歳在甲戌九月朔旦男僎百拜専記と署せる男僎の刊書跋、次に「周易会通凡例」、「周易会通引用諸書羣賢姓氏」、「周易経伝歴代因革／後学鄱陽董真卿編集」、「易程子伝序」（附注）、「易程子序」（附注）、「古易朱子後序」（附注）、「易学啓蒙序」（尾題「易朱子序」附注）、「程子説易綱領／後学鄱陽董真卿編集」（以上第一冊）、次に「朱子易図附録纂註／後学鄱陽董真卿編集」、「雙湖胡先生易図」（以上第二冊、以上各項とも尾題を有す）があって首目二冊を成す。本文巻首「周易経伝集程朱解附録纂註巻第一／（低六格）後学鄱陽董真卿編集／周易上経」と題さる。巻末に「朱子啓蒙五賛附録纂註／後学鄱陽董真卿編集」及び「朱子筮儀附録纂註」（次行題署前に同じ）を附す。四周双辺（二〇×一二・五糎）有界十一行、行十九字、注小字双行、行廿二字。注文の経・集・解・附録・纂註・集解等の標識は大字墨囲。版心細黒口双黒魚尾「易会通幾（丁付）」。左上欄外に耳格（枠なし）あり、卦名等が印さる。巻十は第四十二丁以下欠丁。所々僅かながら朱点朱引が附されている。

本版は字様清雅、建安元槧本中の上品である。本版には次掲の「洪武戊辰年建安務本堂重刊」の刊記を有する覆刻版があり、その刊記を逸失せる本を天目続等は刊書跋から元統二年刊と推定している。しかし至元二年は元統二年から僅か三年目であるから、本版が著者の男僎が閩で刻したという第一次刻本に該当するものと看做すべく、刊記に「新刊」と記された所以であろう。汲古閣旧蔵北京図書館現蔵本は本版と同版の冊としからざる覆刻の冊とが混り、首目は本版と覆刻の関係にあるが、次掲本とも別種である。

同　〔明洪武二一年（一三八八）〕刊　覆元後至元二年翠巖精舎刊本

（国立国会図書館蔵）　一六冊。新補卍繋ぎ唐草文様刷出丹表紙（二三・五×一六糎）。裏打改装。首目及び巻末附録、本文巻首題式、版式共に前掲本に同じ。但し首目は「程子説易綱領」までを第一冊、「朱子説易綱領」以下を第二冊とする。四周双辺（二〇・三×一二・五糎）有界十一行、行十九字、注小字双行、行廿二字。「解」「集」「附録」「纂註」「集解」等の標識は墨囲大字単行。版心細黒口双黒魚尾「易会通（易、或は易会等）幾（或は幾フ）（丁付）」。下象鼻に僅かながら文、達、伍七、范双、寿山、余寿□、求□等の刻工名が見え、巻五以下には裏葉左上欄外に間々耳格あり、卦名篇名が記さる。首目二冊は補写の葉が多く、また巻五首葉補写。ほぼ全巻に朱筆句点、所々朱引・黄傍線が附さる。

この本の首目の「周易会通総目」の末葉の空欄五行分が別紙で補粘されているが、同版の北平図書館原蔵本（拙著著録）にはその箇所に「洪武戊辰年建／安務本堂重刊」なる双辺木記が刻されている。従って本版は前掲の後至元二年翠巌精舎刊本の覆刻重刊なることが判明する。かなり忠実精巧なる覆刻であるから一見元槧本と見えるが、後半に行くにつれて往々明初風の字様が混って来る。この本は印面麗わしい早印本である。故宮博物院蔵本（天目続八・故宮選萃・拙著著録）は刊記のある首目の多くを欠くが同版。北京図書館蔵本（瞿目瞿影著録）も刊記がなく、本版と一致する冊が多いが、首目は至元版とも本版とも異る覆刻で、また巻末附録その他冊により、或は同一冊の中でも本版と至元刊後印の葉とが混淆している所もある。元刊と記さる王記著録本、元統刊と録さる涵録・莫編著録本は皆無刊記十一行十九字本であるが、どの版であろうか。本書の版種と刊印修の決定については、さらに現存各本を全葉に亘って精密に比較再検討する必要があるが、後考に譲る。

直音傍訓周易句解　一〇巻　元朱祖義撰　元泰定三年（一三二六）刊（敏徳書堂）

（内閣文庫蔵）　一冊。森志・楊続譜著録。後補淡縹色表紙（二三×一三・五糎）、裏打修補がなされ、原料紙縦約二一・五糎。恐は序目欠か。本文巻首「直音傍訓周易句解巻之一／（低八格）廬陵　朱祖義子由」と題署。巻二以下次行題署なし。尾題は巻二のみ「直音周易句解」と題さる。左右双辺（一六・五×一〇糎）有界十二行、行廿三字、注小字双行、注文末の音注の標字は白文。版心線黒口双黒魚尾、「易幾フ　（丁付）」。巻末尾題後一行を隔てて、「敏徳書／堂新刊／泰定丙寅菊月印行（この年紀一行は小書）」なる木記が刻さる。所々貞桓等の字に闕筆が見られる。「玄／昌」「昌平坂／学問所」「文化己巳」「浅草文庫」等の諸印記あり。

四庫未著録。四庫存目には同著者の「尚書句解十三巻」を著録し、「祖義字子由、廬陵人、於諸経皆有句解、今多散佚、惟此書僅存」と。その「直音傍訓尚書句解」十三巻も同じく敏徳書堂刊で、幕末の考古家小林辰の旧蔵で、楊守敬が滞日中入手して楊譜に著録し、後涵芬楼の有となり（涵録著録）、今北京図書館に転じている。本書は文義を平易に解釈し即読理解し易くせる初学童蒙用の書である。この本は首の副紙に易の九六の義に関する「山堂考索」よりの抄録、後の副紙には「論年上起月例」の抄録が書入され、また巻一には全巻に、その他の巻には稀に朱句点、或は所々墨の書入が存する。刊記の泰定云々の年紀の左旁に「至于日本文禄三年甲午二百六十九年也」の小書の墨書があり、加点書入もこの文禄三年頃であろう。本版は他に伝存本のあることを聞かない。

書　類

纂図互註尚書　一三巻　旧題漢孔安国伝　唐陸徳明音義（宋紹熙）刊（〔建安〕宗氏）

（京都市蔵）　四冊。重文。新補雲形宝尽し文様梨地色絹表紙

（二八・二×一六・二糎）。金襴玉装、原料紙縦二三・六糎。首に「尚書序」（附陸徳明音義、尾題「纂図互註尚書序」）、唐虞夏殷系譜以下諸儒伝授に至る廿一種の図からなる「尚書挙要図」（尾題墨囲白文の「尚書図終」）、次に「尚書篇名」を冠す。本文巻首「纂図互註尚書巻第一／堯典第一（隔二格）」虞書（下に双行の陸徳明音義）／（低七格）孔氏伝（下に双行注）」と題す。巻二以下は篇名・撰者題が第二行に、或は篇名の小題が第三行にあるもあり。首の尚書序の尾題の次に「宗氏／家蔵」の篆文方形木記、「新／又／新」（横書）の廬形木記、「桂／室」（横書）の爵形木記が印刻さる。左右双辺（一八×一一・七糎）有界十一行、行廿字、注小字双行、行廿五字。注末の音義標字は墨囲、重意・重文・互註の標字は墨囲白文。版心線黒口三黒魚尾「書幾（丁付）」。上象鼻に字数が刻され、左欄外上に「篇名幾巻（巳）幾（丁付）」と印された耳格がある。玄匡恒貞徴樹譲勗桓慎惇敦の字は往々欠筆、郭以下の字は欠画をしない。所々朱墨両様の校字、欄外に墨筆の訓点振仮名の書入がある。「晋門院」「岡本蔵書」「岡本蔵書記」「閲魔庵／図書部」「鉄／斎」の印記あり。

本版の刊記の「宗氏」「桂室」の履歴を詳になし得ないが、南宋前期閩刻字様の上なるもので、字画馴雅撫印清麗にして、欠画が光宗の惇敦に止って、寧宗の郭の字に及ばざる点と併せ考えるに、恐らく光宗紹熙年間の建安地方の刊刻にかかり、遅くも寧宗前期を降るものではない。「晋門院」の印記から察せられる如く、円爾聖一国師（仁治二年帰朝）が宋より将来して東福寺普門院に納めた本で、伝来の古きこと洵に尚ぶべく、後年普門院の書庫より流出し、岡本氏から富岡鉄斎の有に転じ、歿後富岡家より京都市に寄附されたものである。巻一の後表紙の見返に、東福寺・普門院・円邇等の印を捺せる印影の末に「東福寺什物捺之方丈□製皆木印古朴可愛鉄斎記」と鉄斎が誌せる一紙が貼附してある。

尚書孔伝の宋槧には、釈音を附さない李木斎旧蔵北京大学現蔵本、中央図書館蔵南宋中期建安王朋甫刊本（附陸氏釈音、拙著著録）、劉影著録の「鑑本纂図重言重意互註点校尚書」（四部叢刊に影印、日本伝来本、繆続記著録）、瞿目瞿影著録「婺本点校重言重意互註尚書」が挙げられるが、本版はそれとは別版の纂図互注本に属し、北京図書館蔵存巻七―一三の「纂図互註尚書」（天目続巻二著録）は本版とその先後を定め難い覆刻の関係にある。他に此と同版本の存在を聞かない。

尚書正義　二〇巻　唐孔穎達等奉勅撰〔宋孝宗朝〕刊

（宮内庁書陵部蔵）　一七冊。森志・楊志・島考著録。後補香色覆表紙（二八×一九糎）、書題簽「宋板尚書正義幾」。裏打補修が加えらる。首に端拱元年三月日孔維の上表（末に秦奭以下軒轅節・胡令問・解貞吉・胡迪・解損・李覚・袁逢吉・孔維に至る九名の勘官の列銜が署さる）、次に永徽四年二月二十四日太尉楊州都督上柱国趙国公臣無忌等上表の「上五経正義表」、次に「尚書正義序」（次行低四格、「国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達奉／勅撰」と題署）を連接して冠し、巻子本の古式をとどめている。本文巻首「尚書正義巻第一／（低四格）国史祭酒上護

軍曲阜県開国子臣孔穎達等奉／勅撰／尚書序」（巻二以下「等」の字なし）と題し、巻二以下初三行之と同じく、巻二は第四行「古文尚書堯典第二」、巻三は第四行「舜典第二（隔二格）虞書」、巻四以下は第四行低二格を以て小題を題し、第五行以下低三格を以て篇名第幾と目次を列する。毎巻尾題の下或は前後に「計幾字」と字数が記さる。左右双辺（二三・二×一六・七糎）有界十五行、行廿四字、他の宋版単疏本が経注文の起止を標してその下に疏文をおくのに対し、本版は起止の標示後に疏文は行を改める差異がある。版心白口単黒魚尾、「書幾（丁付）」。下象鼻に刻工名が記されているが、破損多く、識読し得る氏名は、王寔、王伸、王正、王政、汪盛、汪政、葛珎、呉珪、黄暉、洪茂、洪先、蔡至道、施章、朱因、張元、陳忠、方成。玄眩炫弦絃玆敬驚儆警弘殷匡竟境鏡胤炯恒貞楨徵懲樹讓襄頊桓完瑗構購慎の字に欠筆が見られる。

毎奇数巻の首と毎偶数巻の尾に「金沢文庫」の墨印、第一冊・第十五冊の副葉紙に「帰源」の墨印が鈐され、よって金沢文庫の旧儲にして、後に流出して鎌倉の円覚寺の塔頭帰源庵にあったことが知られる。巻七―一〇と巻一三以下を除いては、率ね朱筆ヲコト点が附され、間々音義の書入があり、称名寺の入宋僧円種の加点識語が次の如く記されている。

（巻三末）嘉元二年暮春廿五朝鉤句読了　円種（朱書）

（巻四末）嘉元〻年歳次癸卯十月廿一日加朱点了　円種（朱書）

（巻六末）嘉元二年甲辰卯月廿二日拭老眼粗加麁点了／仏子円種流年六旬

（巻一二末）嘉元二年甲辰暮春十七日□□加点了　円種

この朱ヲコト点は釈円種の加点と見られるが、この外に僅かながら後の室町期の筆で、欄外に音切注やイとの校合注の書入が二手存し、首冊の表紙見返と巻首の上表・正義序の欄外行間には、室町時代禅僧の典型的な筆蹟にかかる新注の引録や語句の解注の書入が録され、また朱筆の返点送仮名堅点等が加えられている。巻二の第廿六葉、巻六の第廿七葉の二丁は円種の補写らしく、巻廿にはやや破損の箇所があり、欠損の字を眉上に補写してある。

十三経注疏の注と疏とは元来それぞれ別行されていたが、南宋前期に両書を合刻せる注疏蓍本――両浙東路茶塩司刊本がその権輿と目される――が刊刻されるや、その便宜が歓迎されて盛行したので、爾後単疏本は殆ど泯棄の状に至った。今宋槧単疏本の伝存するものは本版のほかには、僅に周易一四巻（傅氏旧蔵北京図書館現蔵）、毛詩残本三三巻（金沢文庫・内藤湖南旧蔵武田科学振興財団杏雨書屋現蔵）、礼記零本八巻（金沢文庫旧蔵身延山久遠寺現蔵）、公羊零本七巻（潘氏宝礼堂旧蔵北京図書館現蔵）、爾雅一〇巻（静嘉堂文庫及び北京図書館蔵）に止る。外に宋刻原本の所在は明かでないが、儀礼残本四四巻は清道光十年汪氏藝芸書舎刊覆宋本が普及し、春秋正義三六巻には金沢文庫蔵宋版を重写せる正宗寺旧蔵宮内庁書陵部現蔵旧鈔本が存する。また宋刊本を書写せる金沢文庫旧蔵の鎌倉鈔本周易正義残本五巻が彰考館に伝わる。以上を以て察するに金沢文庫は単疏本五経正義を当時完備し、洵に盛なりと言うべきである。

九経注は既に五代の時に初めて開板され、北宋初国子監に於てそれに基づいて再校刊されたが、五経正義が始めて入梓されたのは北宋太宗の勅命による端拱淳化年間の国子監に於ける校刊であって、その始末について「玉海」に曰く。

端拱元年三月、司業孔維等奉勅校勘孔穎達五経正義百八十巻、詔国子監鏤板行之、易則維等四人校勘、李説等六人詳勘、又再校、十月板成以献、書亦如之、二年十月以献、春秋則維等二人校勘、王炳等三人詳校、邵世隆再校、淳化元年十月板成、詩則李覚等五人再校、畢道昇等五人詳勘、孔維等五人校勘、淳化三年壬辰四月以献、礼記則胡迪等五人校勘、紀自成等七人再校、李至等詳定、淳化五年五月以献、

と。しかしこの国子監本には文字の訛謬がなお多かったので、さらに刊定を加える議が生じ、「玉海」によれば、

是年（淳化五年）判監李至言、義疏釈文尚有訛舛、宜更加刊定、杜鎬孫奭崔頤正、苦学強記、請命之覆校、至道二年、至請命礼部侍郎李沆校理杜鎬呉淑直講崔偓佺孫奭崔頤正校定、咸平元年正月丁丑劉可名上言、諸経板本多誤、上令頤正詳校、可名奏詩書正義差誤事、二月庚戌奭等改正九十四字、沆預政、二年命祭酒邢昺代領其事、舒雅李維李慕清王渙劉士元預焉、五経正義始畢

と。しかしこの北宋国子監本は現在一も伝存するものがない。北宋が金の侵略によって倒れた靖康の難に、国子監の板木は金に奪掠北送されたと言われる。南渡せる南宋の中央政府は国初艱難にして図書欠乏を訴える読書人の要望に応える財政の餘裕がなかったので、紹興九年州郡に詔して国子監本を索めて校対鏤板せしめ、経書正史の基本図書の出版を奨励した。正義出版については「紹興十五年閏十一月博士王之望請羣経義疏未有板者令臨安府雕造」（玉海）「先是王瞻叔（即之望字）為学官嘗請摹印諸経義疏及経典釈文許郡学以贍学或係省銭各市一本置之於学上許之令士大夫仕於朝者率費紙墨銭千餘緡而得書於監云」（建炎以来朝野雑記）と伝える。この単疏本尚書正義の版本も紹興の詔による州郡刊刻の一つと推定される。首の孔維上表の列銜が玉海の記事と合致していること、本版の字様は欧陽詢顔真卿の間に在って北宋版の遺風を留めていることから見て、本版が北宋監本の覆刻乃至は仿摸たることは明かである。

本版の刊年は何時、刊地は何処であろうか。内藤湖南（「景宋槧単本尚書正義解題」）・長沢規矩也（「現存宋刊単疏本刊行年代考」〈「書誌学論考」所収〉）両博士は、本版の欠筆が孝宗の慎字に止って、光宗以降に及ばぬことから、卒哭乃諱、生不諱、即ち今上皇帝の名は諱まぬを欠筆の原則として、本版を以て光宗の紹熙年間の刻本と定めた。しかし宋版の欠画の実態に即して広く考察すれば今上皇帝の名を諱むと見るべきが妥当である。本版の刻年を刻工名の上から再検討してみよう。本版の刻工名が他の版本に見えるもののうち、その刻工が当該本の修の場合は、氏名の肩に×、原・修共に従事している場合は△を附することにする。刻工を多く共通するのは、紹興年間明州刊紹興二八年至孝宗朝修文選（王伸、△王寔、葛珎、呉珪、蔡至道、黄暉、△洪茂、洪先、△施章、△朱因、陳忠、方成）、紹興一九

年明州刊徐公文集（王寔、王伸、洪茂、洪先、施章、陳忠）、紹興年間浙刊白氏六帖事類集（洪茂、洪先、朱因、陳忠、方成）で、ついで紹興初刊南宋前期修史記集解（陳忠、黄暉）、同資治通鑑目録（呉珪、黄暉）、紹興刊通典（王政、洪茂）、孝宗朝両淮江東転運司刊三史（王政、洪茂、洪先）、越刊八行本周礼疏（王政、洪先）、同尚書正義（王政、洪先）、同周易注疏（洪先）等があげられ、陳忠は紹興初刊五代史記・紹興二一年序刊臨川先生文集・紹興年間刊類篇にも見える。王政はその他単疏本周易正義の修・同爾雅・儀礼の外多数の版に、また王正も多くの諸版に従事しているが、この両名には宋中期後の同名異人がいるらしいので、ここには混乱を避けて省略する。以上を見れば此等刻工の雕せる本は皆高宗の紹興年間から孝宗朝の前期にかけての刊本である。陳忠等の如きは早くは紹興初の史記集解・資治通鑑目録の刊刻に従事しているから、この両版の刊年を推定よりやや降して紹興十年（一一四〇）と仮定しても、光宗の紹熙元年（一一九〇）との間には五十年の距りがある。同一人が五十年間雕板に活躍することは老眼鏡もなかった当時としてはやゝ不可能に近いと考えるべきであろう。刻工と欠筆を勘案すれば、本版は孝宗朝の前期たる隆興乾道年間と推定するのが妥当と思われる。此等刻工は皆杭州地区の人で、本版が紹興十五年の令の如く臨安府の雕造にかかるか否かは断定し難いが、杭州地区の浙刊本たることは問違いない。

本版は天壌間の孤本として夙に宇内に喧伝され、諸家の論考があるから、その学術的価値についてはここに贅言の要はあるまい。尚書経注本に対する我が加点本は平安以来伝わるもの多いが、この本の殆ど全巻に亙って称名寺の入宋僧円種が嘉元元年（一三〇三）二年に加えたヲコト点は、疏文に対する加点で、尚書正義への古訓点本は他に存せず、日本漢学資料として頗る貴重である。

本帙はその旧蔵印に明かな如く、もと金沢文庫にあり、後に何時しか鎌倉円覚寺の塔頭帰源庵に転出し、一部民間に流出していたが、それが幕府の官庫楓山文庫に収った来歴について、大田南畝は「吉田橋をわたり、伊勢屋源七といふ者を訪ふ。問屋のむかいに住めり。年比和書多く貯へたると聞くに違はず。去々年金沢文庫の印のある尚書正義一巻公に奉りて、金五両を賜はれる由など語る」（「改元紀行」）と録し、経籍訪古志には「寛政丙辰歳櫟窻先生得此書宋槧零本献之、官併捜索餘巻所在以聞、遂成全帙、即此本也」と記されている。要するに寛政八年幕府の医官多紀元簡（櫟窻）がその零巻を得て幕府に献じ、幕府はその餘巻を捜索して、戸塚の賈人伊勢屋源七蔵の一巻を寛政十一年献上せしめ、享和三年大学頭林述斎の建言によって、帰源庵の蔵本を楓山文庫に収めて全帙完具たらしめたものである。維新後内閣文庫に引き継がれ、後宮内省図書寮に転移されて現在に至った。昭和四年大阪毎日新聞社は「秘籍大観第二集」として内藤湖南の解題一冊を附して玻璃版を以て影印し、次いでそれによって縮小影印して四部叢刊三編に収められた。

尚書正義　二〇巻　旧題漢孔安国伝　唐孔穎達等疏

〔宋紹興乾道間〕刊（〔両浙東路茶塩司〕）

（足利学校遺蹟図書館蔵）〔宋・元〕逓修　八冊。国宝。森志著録。後補茶褐色表紙（二八・三×一八・四糎）。裏打修補が施され、少しく天地が裁断されている。首に端拱元年三月日の孔維等九名の上表、永徽四年二月二十四日の長孫無忌等の「上五経正義表」、孔穎達の「尚書正義序」あり。本文巻首「尚書正義巻第幾／（格低二）国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達等奉／勅撰」と題し、毎巻次に目録を掲げて本文に入る。尾題「尚書巻第幾」。左右双辺（二一・四×一五・七糎）有界八行、行十九字内外不等、注疏小字双行廿字内外不等。「疏」の標字は単行大字墨囲陰刻。版心白口単黒魚尾「尚幾　（丁付）」。下象鼻に刻工名あり。宋・元に亘る逓修が見られ、補刻の上象鼻の多くに字数が刻さる。原刻は玄敬驚儆弘殷匡筐境恒貞楨徵懲議頊勗桓構遘の字の末画を欠き、宋修には上記の外にさらに慎の字に間々欠筆を見る。元修にも敬殷恒貞購を往々欠画している。刻工名は（原刻）王珎、王林、許中、洪先、洪乗、浩朱?、朱静、静、朱明、朱、徐亮、徐茂、徐顔、顔、孫中、陳仁、陳錫、陳俊、俊、陳保、陳安、丁章、丁璋、丁、包端、毛昌、毛期、余永、李憲、憲、李寔、李詢、梁文、昱□、（宋修）永昌、王政、王良佐、王定、王信、王玩、王明、王恭、王寿、王圭、王宝、王進、金震、金祖、金滋、金嵩、厳賀、顧達、顧祐、呉益、呉祐、呉生、呉中、高□、高文、才堅?、蔡邠、朱益、朱渙、朱梓、周明、章東、蔣栄、蔣宋、邵夫、邵亨、徐珙、徐拱、徐珣、徐義、徐儀、儀、徐仁、徐浚、徐中、徐杞、秦頭、銭宗、宋通、宋琚、曹鼎、孫琦、大中、張明、張斌、張亨、張昇、張堅、張富、張謙、陳浩、陳良?、陳伸?、沈茂、沈昌、沈忠、沈昱、沈文、沈珍、丁之才、鄭春、童遇、馬松、馬、方至、方信、方堅、方、毛端、毛祖、余敏、楊潤、李忠、李仲、李倍、李其、陸選、劉仁、劉昭、（元修）汪恵、夏久、何屋、何益、何建、何宗一七、何宗十四、何慶、何、葛辛、金世栄、金友、恭、虞、胡昶、呉祥、洪福、高涼、山朱、三山鄭、史、時忠、朱曾、周鼎、寿、蔣蚤、徐、徐囡、辛文、政、占讓、銭裕、銭、詹徳潤、蘇、曹徳新、孫日新、張亨、陳仁、陳、沈祥、沈、鎮、鄭埜、陶春、滕杲、任昌、任、范華、范堅、繆珎、文玉、文昌、方中呉、茅化、毛文、楊春、李茂、李尚、李公正、柳、葉禾。

首冊初に「此書不許／出学校閫外憲実（花押）」、毎冊首に「上杉安房守藤原憲実寄進」、末に「上杉安房守藤原憲実寄進（花押）」の上杉憲実手筆の施入識語、各巻首に「足利学校公用」と横書され、また「松竹清人」の古印が捺さる。巻十一の首葉を欠き、巻一の第七丁、巻十の第一八・一九、二二、二四・二五、二七―三二丁は室町末近世初間の補写、第三六丁裏は破損している。

本版は版式刻工名から見て、足利学校所蔵の前掲の周易注疏、後掲の礼記正義等と共に両浙東茶塩司の刊刻になる所謂越刊八行注疏合刻本の一つである。重厚雅潔の原刻の葉と宋から元に至る数次の修補の葉とが混り、補刻の字様は巧拙一なら

ず、元修には頗る劣なるものもある。最も多いのは宋修の葉で元修は少い。原刻にも部分的修の加っている葉がある。刻工の年代を検討すれば次の通りとなる。刻工が当該本の修補の場合は、名に×を冠する。原刻の刻工の名の見える諸版本は、同じ越刊八行本では初出と思われる周礼疏（王珎、洪先、洪乗、朱明、徐亮、徐茂、徐顔、陳錫、陳俊、陳保、陳安、丁璋、孫中、包端、余永、毛昌、毛期、李憲、李寔、梁文）には殆ど全員が関与し、周易注疏（王珎、洪先、朱明、徐亮、徐茂、陳錫、丁璋、孫中、毛昌、梁文）が此に次ぎ、刊年の降る礼記正義には、包端・李憲の両名のみであるが、本版の宋代の第一次修の刻工の多くがその原刻に従事している。その他紹興九年紹興府刊単疏本毛詩正義（徐茂、陳錫、余永）、紹興十年臨安府刊西漢文類（陳錫）、紹興十九年刊徐公文集（浩先）、紹興間明州刊自紹興二八年遞修文選（許中、洪乗、徐亮、毛昌）、紹興間刊白氏六帖事類集（王珎、洪先、徐顔）、同外台秘要方（朱明、徐顔）、乾道三年江陰瀲江郡斎刊宣和奉使高麗図経（徐亮）、乾道九年高郵軍学刊淮海集（李憲）、孝宗朝刊単疏本周易正義（王珎、朱静、包端）、同尚書正義（浩先）、孝宗朝両淮江東転運司刊三史（王珎、浩先、朱静、朱明、徐茂、徐顔、丁璋、李憲、李詢、梁文）、孝宗朝刊論衡（王珎、王林、許中、徐亮、徐顔、陳俊、毛昌、毛期、李憲）、同周官講義（許中、陳仁、陳俊、毛昌、李憲）、同元氏長慶集（許中、毛昌、李憲）、同類篇（王林）、同北山小集（朱明）、同広韻（徐顔、陳錫、余永、王珎、徐茂）、同豫州黄先生文集（徐亮、孫中）、淳熙二年厳州郡庠刊通鑑紀事本末（朱明）、紹興初刊孝宗寧宗間遞修史記集解（王珎、徐茂）、同資治通鑑目録（王珎）、同通典（朱明、包端、李憲、李詢）、同新唐書（朱明）、所謂眉山七史（陳仁、陳錫、包端、李憲、李詢）、嘉定三年刊中興館閣録（包端）が挙げられる。以上の刻工が従事せる年紀の明かな諸版中最も早いのは紹興九年、降るのは嘉定三年で、最も多いのは紹興乾道間の刊本である。本版の欠画が原刻は高宗、修補が孝宗の慎に止る所から考えると、同司刊「周易注疏」と同じ頃、高宗末から孝宗前期にかけての、即ち紹興乾道年間の開版と考えられる。

次にその修補の刻工名から修刻の年代を検討しよう。同じ両浙東路茶塩司の刊になる注疏合刻八行本には、周礼疏（永昌、王政、王玩、王恭、王宝、金滋、顧達、呉祐、呉中、蔡邠、朱渙、朱益、章東、邵夫、徐杞、秦顕、宋通、宋琚、孫琦、張昇、張謙、張亨、陳浩、丁之才、鄭春、童遇、范堅、方至、方堅、李忠、李仲、陸選、劉仁、劉昭）、紹熙三年刊礼記正義（王恭、王寿、高文、朱渙、章東、蔣栄、邵亨、徐仁、徐珣、徐珙、張昇、范堅、張謙、張亨、沈珎、馬松、方堅、毛端、毛祖、李忠、劉昭、楊潤）、寧宗朝刊論語注疏解経（顧祐、徐仁、張亨、丁之才、沈珎）、同孟子注疏解経（顧祐、邵夫、徐仁、張亨、丁之才）の如く、修補の刻工の大部分が原刻或は修補に従事している。修補の刻工の多く参加したのは、寧宗朝刊と見られる増修互註礼部韻略（王政、王良佐、王恭、金震、金祖、金嵩、顧達、呉祐、高文、朱梓、邵亨、徐義、徐仁、徐珣、徐珙、宋琚、張明、張昇、沈茂、沈珍、沈旻、陳浩、丁之才、馬

松、方至、方信、毛祖、余敏、李仲、楊潤)、古史(王定、王明、王恭、王寿、王進、金嵩、金震、金祖、顧達、呉祐、呉中、蔡邠、蔣栄、徐義、徐拱、銭宗、宋通、宋琚、曹鼎、張昇、張亨、陳浩、沈茂、沈忠、沈珍、丁之才、鄭春、童遇、馬松、方至、方信、毛端、毛祖、李仲、劉昭、楊潤)、玉篇(王玩、王恭、王宝、金滋、呉益、宋琚、張謙、方至、方堅、余敏、李倍、陸選、劉昭)、広韻(王玩、王恭、玉宝、金滋、呉益、秦顕、宋琚、方至、方堅、余敏、李倍、陸選)、愧郯録(王宝、金滋、高文、沈昌、劉昭)、歴代故事(王玩、宋琚、方至、陸選、劉昭)、晦庵先生文集(王政、王良佐、王定、王明、王恭、王寿、王進、金祖、呉祐、銭宗、宗通、宋琚、曹鼎、張昇、張富、丁之才、毛祖、余敏、李信、陸選、劉昭、楊潤)、並に武経七書(王恭、王政、金嵩、陸選、劉昭)である。またこの越刊八行本注疏を始め南宋前期刊の公使庫本の板木は中央の国子監に移管され、修刻を加えて印行された。その修補の刻工は、次の如く共通する者が多い。単疏本周易正義(王政)、爾雅疏(王恭、呉祐、張堅、張斌、鄭春、李仲、陳浩)、説文解字(顧達、呉祐、呉中、周明、蔣栄、沈茂、劉昭)、両淮江東転運司刊史記(金祖、呉中、曹鼎)、同漢書(王政、王玩、王恭、王寿、金震、顧達、呉祐、周明、章東、蔣栄、徐仁、徐珣、徐浚、宋通、孫琦、張明、張昇、張富、張亨、沈珎、沈昌、陳浩、鄭春、余敏、李仲、劉昭、楊潤)、同後漢書(王寿、金震、朱梓、徐仁、徐珙、宋琚、沈昌、丁之才、陳浩、鄭春、童遇、馬松、毛端、李倍)、所謂眉山七史(王政、王定、王信、王玩、王明、王恭、王寿、王進、金嵩、金震、金祖、金滋、顧達、呉祐、呉中、高文、蔡邠、朱梓、周明、章東、蔣栄、邵亨、邵夫、徐義、徐仁、徐珣、徐珙、徐拱、徐中、徐杞、徐浚、秦顕、銭宗、宋通、宋琚、曹鼎、孫琦、大中、張明、張亨、張斌、張堅、張富、沈茂、沈昌、沈忠、沈旻、沈文、沈珍、丁之才、鄭春、童遇、馬松、方至、方信、方堅、毛端、余敏、李忠、李仲、李倍、劉仁、劉昭、楊潤)、資治通鑑目録(徐義、宋琚、孫琦、張明、張昇、丁之才、范堅)、国語・国語補音(王進、蔡邠、蔣栄、徐義、張明、張昇、馬松、陳浩)、通典(王信、王明、呉益、朱益、周明、徐儀、徐仁、徐珣、宋通、張明、張堅、丁之才、方至、方信、余敏、劉仁)、贛州刊文選(△王政、王信、王定、王明、王恭、金嵩、△金祖、呉祐、△呉中、蔡邠、周明、章東、蔣栄、徐珙、徐杞、宋通、曹鼎、△大中、張明、張堅、張富、×張昇、×張斌、△沈昌、△沈珍、鄭春、童遇、馬松、毛祖、李忠、李仲、劉昭、楊潤、△はその本の原刻)。

その他此等修補の刻工の見える宋版本を拾えば次の通りである。ただ以上の王政・王信・王明・呉中・劉仁・陳浩・李忠等には同名異人があるので、それ等の刻工名を含む孝宗朝以前の刊本は徐くこととする。淳熙間刊聖宋文選合集(方至、方堅、李忠)、紹熙元年刊坡門酬唱(劉仁)、慶元元年刊漢隷字源(徐中)、慶元刊楽書(劉仁)、嘉泰四年新安郡斎刊皇朝文鑑(王信、金滋、徐仁、張明、童遇、方至、李忠)、同東萊呂太史文集(宋琚)、淳熙慶元間厳州刊南軒先生文集(大中、鄭春)、孝宗寧宗

前期間鄂州刊資治通鑑（徐儀、徐義）、光宗寧宗朝間蜀広都裴氏刊六家文選（王定）、嘉定六年淮東倉司刊註東坡先生詩（金震、章東、徐珙、沈昌）、嘉定九年刊晦庵先生朱文公語録（呉祐、劉昭）、嘉定一二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目（王定、金祖、呉中、周明、徐中）、嘉定一三年臨安府太廟前尹家書舗刊歴代名医蒙求（余敏）、寧宗朝刊重校添註音弁唐柳先生文集（金滋、朱梓、劉昭）、同棍史（劉昭）、同中興館閣続録（王定）、南宋初刊前期修劉賓客文集（張明）、同史記集解（陳浩）、孝宗朝刊寧宗朝修豫章黄先生文集（王明、周明、徐中）、淳熙二年厳州郡斎刊端平二年淳祐六年等遞修通鑑紀事本末（呉中、徐仁、方堅）、淳熙間撫州公使庫刊宋遞修春秋経伝集解（呉生、陳浩）、紹定二年平江府刊呉郡志（金震、朱梓、蔣栄、徐珙、馬松）、淳祐十年福州路刊国朝諸臣奏議（呉生、陳浩〈上記の陳浩とは同名異人か〉）、淳熙間武夷詹光祖月崖書堂刊資治通鑑綱目（呉生）、宝祐五年湖州刊資治通鑑紀事本末（徐珙、徐拱）。本版の宋修の刻工はかくの如く多数の書の刊刻に携わり、上は孝宗朝の淳熙頃より降っては理宗朝の宝祐年間に及んでいる。しかし最も多いのは寧宗朝期の刊刻本である。本版の補刻は字様印面から察せられる如く、一回ではなく幾次か重ねられており、恐らく孝朝宗の後期から始められ、最も多いのが嘉定頃であったのであろう。

元西湖書院重整書目の「書注疏」は本版らしく、本版の板木は元に入って、他の国子監保管の板木と共に西湖書院に移されて補刻を加えて刷印が重ねられたので、本版の元修の刻工はそれ等諸本の元修刻工と次の如く共通している。越刊八行本周礼疏（何厚、葛辛、金友、胡昶、呉祥、洪福、徐囦、辛文、占譲、鄭埜、范華、文玉、文昌、毛乂）、同礼記正義（何厚、何慶、葛辛、呉祥、洪福、高涼、周鼎、徐囦、占譲、銭裕、鄭埜、范華、繆珍、文玉、茅化、毛文）、同論語注疏（何厚、徐囦、辛文、曹徳新、文昌）、同孟子注疏（徐囦、辛文、占譲、范華、葉禾）、増修互訖礼部韻略（何宗十七、陶春）、資治通鑑目録（汪恵、何宗十七、胡昶、洪福、周鼎、陳仁、沈祥、范堅）、史記集解（汪恵、何益、胡昶、呉祥、高涼、朱曾、蔣蚕、鄭埜、繆珍、李崇、范堅）、所謂眉山七史（汪恵、何厚、何益、何建、何宗十七、何宗十四、何慶、葛辛、金友、呉祥、洪福、高涼、朱曾、周鼎、蔣蚕、辛文、占譲、詹徳潤、曹徳新、陳仁、沈祥、鄭埜、陶春、范堅、范華、繆珍、毛文、楊春、李茂、李崇、葉禾）、両淮江東転運司刊三史（何益、何宗十七、何宗十四、何慶、葛辛、金友、胡昶、呉祥、洪福、高涼、朱曾、周鼎、蔣蚕、辛文、占譲、張亨、陳仁、鄭埜、范華、范堅、繆珍、文玉、毛文、李崇、李公正、葉禾）、嘉定十二年刊資治通鑑綱目（周鼎）、国語・国語補音（何慶、洪福、朱曾、周鼎、蔣蚕、繆珍、文玉）、嘉定刊儀礼経伝通解（何建、何宗十七、何宗十四、胡昶、蔣蚕、辛文、徐仁、繆珍、毛文、楊春、李崇、范堅）、宗初刊説文解字（詹徳潤、曹徳新、沈祥、鄭埜、茅化、楊春、范堅）、贛州刊文選（文玉）、嘉泰四年刊皇朝文鑑（何宗十四、何慶、呉祥、高涼、周鼎、蔣蚕、占譲）。元刊諸本では大徳四年刊大徳重校聖済総録（汪恵、胡昶、高涼、

陳仁、鄭埜、繆珎、楊春）、大徳五年刊儀礼集説（汪恵）、至大重修宣和博古図録（文玉）、泰定元年西湖書院刊文献通考（何慶、周鼎）、後至元六年湖南刊唐丞相陸宣公奏議纂註（李茂）、通鑑釈文弁誤（張亨）、晦庵先生朱文公集（李茂）である。この中で胡昶は宋末咸淳三年刊古尊宿語録の刻工に見えるから、この元代の修補は元前期に行われ、大徳を降らぬ頃であることが判明する。

この本は足利学校の創設者上杉憲実が学校に寄附せる本で、所々朱筆の句点・圏点・朱引が附され、僅かながら振仮名や朱墨両様の訓点が加えられ、少しく眉上に注、行間に校合注の書入が見え、注には室町時代我が国で往々用いられた元黄鎮成の「尚書通考」が引録されている。書入には学校の第七世庠主九華、九世庠主三要の手も入っているようである。

本版には他に、楊守敬が大阪にて購得して後に南皮の張制府に譲り、今北京図書館に架蔵される存十六巻（巻七・八、一九・二〇の欠巻は足利学校本による影鈔本を配して完具、守敬の跋を附し、楊志・中版録69著録）が知られるにすぎず、中版録は同本を「補版絶少」と記している。本版が通行の十行本以下の諸版を訂補すべき点の多いことは七経孟子考文等の指摘する通りである。この足利本は松崎慊堂の校審により弘化四年熊本藩時習館に於て覆刻されて流布し、また漢土では明の覆刊本や民国刊択是居叢書初集所収仿宋本がある。

尚書注疏　二〇巻　旧題漢孔安国伝　唐孔穎達等疏

〔金〕刊（〔平水〕）

（天理図書館蔵）　存巻一八・二〇零巻　二冊。改装。巻一八は後補金砂子散白表紙（三七・七×二二・六糎）、粘葉装、巻二〇は後補紺色表紙、線装。本文料紙は厚手にして我が国の古楮紙に類す。襯紙が挾まる。巻首「尚書注疏巻第十八／周官第二十二（隔六格）周書（隔七格）孔氏伝／（低四格）国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達奉　敕撰正義」、「尚書注疏巻第二十／（低三格）（銜名前に同じ）／文侯之命第三十（隔三格）周書（隔三格）孔氏伝」と題す。左右双辺（二二・一×一四・四糎）有界十三行、行二五乃至二九字、注疏文小字双行、行約三五字。疏文は円を以て囲める陰刻の「疏」の大字を以て区劃。版心白口双黒魚尾「尚兌十八（二十）（丁付）」。上象鼻に大小字数が刻され、巻十八の第三葉にのみ下象象に「□一刀」の刻工名があるが、破損して名が判読できない。巻十八は十四丁、巻廿は首五丁、即ち秦誓第三十二の首五行（首の「秦誓」の疏文の「正義曰杜預云……守道謂」まで）に止って、以下を欠く。「平岡／蔵書／之記」の蔵印あり。巻十八の首護葉紙に旧蔵者の傅増湘が平岡武夫氏にこの本を贈れる左の民国廿七年の手識が記されている。

平岡武夫君久治尚書嘗就余問業自慙頽考廃学／無以益之因取旧校金本書疏属其移録一通余適／蔵有残本一巻君更欲仮観愛翫至不忍去手余以／嗜之篤也遂輟以贈焉世変方殷未知所届双鑑楼／中所儲古刻名鈔殆数万巻安知此後終為吾有／此戔々残巻使得流伝海外且付諸少年好学之人／為我愛護而永存之又寧非幸歟授書之日爰誌／数語於此庶異時知是書流転之緒云／戊

寅正月十八日　傅増湘書於長春室（印）

この本は傅目に「尚書注疏一巻　金刊残本存第十八半葉十三行二十六字注雙行二十五字白口雙闌」と著録された本で、傅増湘は右の手識に云う如く、金版と北監本とを対校し、「校金刊本尚書注疏跋」（傅記巻一所収）を執筆した。増湘の用いた金版は清内閣文庫旧蔵北平図書館蔵存巻六―一〇、一六―二〇の残本（旧京17―21著録）である。その本は台湾には移管されていないが、「国立北平図書館善本書目」に著録されている。増湘は跋中に「余蔵巻第十八残本乃便陽張君庾楼所貽」とこの本を記し、両本が共に同一版の如く録している。しかし旧京書影を以て比較する限りでは、字様行格は類似するが、此は左右双辺、彼は四周双辺、「疏」の標字は此は陰刻、彼は陽刻の差異があって、両版は覆刻或は相似の関係としても同版とは称し得ないようである。金版尚書注疏にはまた瞿氏鉄琴銅剣楼に完本（瞿目・瞿影著録、季滄葦旧蔵）が儲され、現在は北京図書館の蔵（中版録269著録）に帰している。その本も四周双辺、「疏」の標字は陽刻であるが、北平図書館本と同版か否かは、各の同一箇所の書影がないので未見の私には確認できない。以上三種の版は同版か否かは一斑の書影のみを以てしては保証し得ないが、少くとも相互に覆刻かそれに近い関係にある同系版であることは認め得よう。本版は細字密行であるが、その字様は瘦硬にして精刻、金平水刊版式の典型たるものである。瞿本の序後に附された「新彫尚書纂図」中の地図には「平水劉敏仲編」の名が題され、北平本の巻廿末には「長平董溥校正」の名が署されているから、元来は平陽府経籍所の刊刻にかかるようである。

瞿・傅両氏ともこの金版を十行本以下の通行注疏本と比較して、その校異の主なるものを列挙し、その訛脱を訂すべき佳処頗る多く、現行本の釈文の割裂奪佚を糾正し得る点に至っては尤も顕著にして、「山井鼎考文与宋本十有八九合」と称賛している。尚書の注疏合刻の宋版には越刊八行本を始めとし、故宮博物院蔵寧宗頃の建安魏県尉宅刊九行本並に十行本（現存本は覆宋元刊）が数えられるが、増湘が本版を以て「其付梓当在八行本以後十行本以前」と按じたのは従うべきか。ちなみにこの本には避諱がないが、瞿本の巻一初の書影には貞・慎の字が末画を欠いているのが見られる。此は瞿本の底本か或はその版の刊刻の時が南宋孝宗朝以前には溯り得ないことを傍証している。瞿本を現蔵の「北京図書館善本書目」は蒙古刻本と録し、中版録はその根拠を「刻工張一、何川、鄧恩、吉一、楊三等、又刻証類備用本草、因推知此書当是蒙古刻本。瞿氏鉄琴銅剣楼書目定為金版、恐不確」と云っている。「証類備用本草」は蒙古定宗四年（一二四九）張存恵晦明軒刊であるが、此等刻工は金末蒙古初間の人と云うべく、蒙古の太祖の即位は宋開禧二年金の泰和六年（一二〇六）、金の滅亡は宋端平元年金の天興三年（一二三四）である。従って瞿氏本を金版とするか蒙古版と定めるかは刊年上は微妙な所である。年代上は別として版式上の特徴から言えば、明かに金版に属する。この本を含め以上三部は、二部未見にして実際比較し得ない筆者には同版か否かま

たその刊印の前後を断定し難いが、いずれにせよ平水の版たることはほぼ間違なく、本版を旧に従って金版と録しておく。

附釈音尚書註疏　二〇巻　旧題漢孔安国伝　唐孔穎達疏
陸徳明音義　〔元〕刊

十行本十三経注疏の一。詳細は拙著参照。

（静嘉堂文庫蔵）〔至明正徳〕遞修　一二冊。陸志著録。新補香色地水玉表紙（二九×一七糎）、金鑲玉装、白棉紙本、元料紙縦二六・八糎。版心の正徳の補刊年の所を切りとって別紙で補ってあるが、正徳の修は少い。

（京都大学図書館谷村文庫蔵）至明正徳一二年遞修　四冊。新補茶色表紙（二七・八×一七・三糎）、白棉紙本。朱筆の句点圏点や傍線が附され、少しく眉上に朱校記が書入さる。巻末に次の識語が存する。

（巻五、朱）甲午十月晴愍読過　沈巖記

（巻六、朱）十月己卯夜読一過適奉丈龍光自武林至同／校数条巖記

（巻一五、朱）甲午十月十五日是夜月蝕　巖燈下記

（巻廿）尚書自朱蔡訂伝与二孔違反者十不趣七八両句読亦殊不同／此従古本点定仍依孔氏蓋先河後海之義也其間譌字極多未能尽正俟得善本再校十月十八日巖謹録義門師原跋

（天理図書館蔵）至正徳一二年遞修　八冊。後補濃緑色表紙（二五・五×一四・七糎）、白棉紙本。巻六第廿五葉補写。朱点朱引、経文に墨筆訓点が附され、眉上に墨・藍両様の校字が書入さる。「本田家蔵」「漢／委奴／国王」（白文）の蔵印あり。

同版本には小川如舟旧蔵本（現所在不明）、台湾国立中央図書館（二部、一は毛利高標・昌平坂学問所・島田双桂楼旧蔵、適志・繆続記・拙著著録）・香港大学（劉影・拙著著録）・北京図書館（二部、一は瞿目・瞿影著録）・上海図書館・北京大学蔵本・傅目・蔣志著録本等があり、皆明修本である。

新雕石林先生尚書伝　二〇巻　宋葉夢得撰　宋紹興二九年（一一五九）刊（東陽魏十三郎書舗）

巻首に紹興年間の「石林尚書伝序」の自序あり、この序の次に「○東陽魏十三郎書舗○／○紹興己卯仲夏刊行○」の双行木記が刻さる。本文巻首「新雕石林先生尚書伝巻第一」（巻三―五、八―一〇、一六・一七、二〇「尚書伝巻第幾」、巻六・七、一一―一五、一八・一九「石林先生尚書伝巻第幾」）、巻尾「尚書伝巻第幾」（巻七、一一―一五「石林先生尚書伝巻第幾」、巻一八・一九「○巻終」）と題す。単辺（一七・三×一一・七糎）有界十四行、行廿一字、伝文低一格大字単行。版心白口（稀に線黒口）双黒魚尾「書幾（丁付）」。敬儆驚警殷匡恒貞徵溝の字の末画を欠き、巻十二大誥篇中の経文「乃弗肯堂矧肯御名厥父」に構の字を「御名」の字を以て避諱している。巻四首葉の版心に「己卯四月□□日」、巻十巻末版心に「己卯廿九年四月十八日」と印さる。

四庫未著録。著者夢得は蘇州呉県の人、字は少蘊、号は石林。北宋哲宗紹聖四年（一〇九七）の進士、翰林学士となり、

朋党の弊を論じ、蔡京に嫌われて落職、南宋に入って戸部尚書、江東安撫利置大使、金軍防御等を歴任し、軍政・民政上屢々上言したが監司と合わず辞職した。官制・科目に精通し、詩文・詞に長じ、紹興十八年（一一四八）歿。本書は最晩年の著で、自序中に「自世尚経術博士業書者十常三四然第守一説莫能自致其思余竊悲之因参愬数家推原帝王之治論其世察其人以質其所言更相研究折衷其是非頗自紀輯起宣和辛丑春訖紹興丁巳夏凡十存八年為書二十巻十三万餘言授中子模以俟後世君子六月壬申序」と、本書撰述の趣旨と成立経緯を述べている如く、本書は夢得が古注に慊らず、胡安国の春秋胡伝の如く、尚書に対し諸家の説を参照して独自の注解論評を下したもので、春秋についても「石林先生春秋伝」二〇巻、「春秋攷」一六巻、「春秋左伝讞」一〇巻、「公羊伝讞」六巻、「穀梁伝讞」六巻の著がある。本書は宋志に「葉夢得書伝十巻」、「直斎書録解題」巻二に「石林書伝十巻　尚書左丞呉郡葉夢得少蘊撰博極羣書彊記絶人書与春秋之学視諸儒最為精詳」と録されている。しかし南宋夙に十巻と誤記されている所を見れば、当時既に流布頗る尠かったと思われる。元以降諸家目録にその著録を見ず、漢土に於ては夙に伝を絶ち、中世我が国に将来されたこの本が幸に伝存したにすぎず、日本に於ても広く読まれた形跡はない。正に天壌間の孤本である。

本版の字様はやや瘠硬にして右上りの稜角を帯び、版式と共に建安の体式に類する。避緯から見ても刊記の如く紹興末の刊刻にかかることは疑いなく、恐らく閩刻と看做すべきか。ただ刊者の東陽の地名は福建省内にはないが、浙江その他にあり、刊者の本貫であろうか。この本は現在次の二ケ所に分蔵されている。

（清見寺蔵）存首四巻　一冊。重文。素表紙（二三×一四糎）。「慶福院」「清見寺常住」「清見蔵本」の印記。

（大東急記念文庫蔵）存巻五―二〇　五冊。重文。後補茶褐色表紙（二二・二×一四糎）。裏打改装。巻九首一頁欠。「慶福院」「清見寺常住」「江風山／月荘」「福堂」の印記。明治初年清見寺から流出して、稲田福堂等の蔵に渡ったものであろう。

共に始めの方の経文に室町期の朱点朱引墨訓点、他は稀に墨筆の訓点振仮名が書入されている。

書〔集伝〕六巻　宋蔡沈撰　〔元〕刊（麻沙劉氏南澗書堂）

（内閣文庫蔵）一冊。森志著録。後補淡香色表紙（二二・五×一四・五糎）。襖紙を挾んで改装さる。首に、「書序」（附注）及び嘉定己巳三月既望武夷蔡沈序の「書集伝序」を冠し、沈序の後一行を隔てて「麻沙劉氏南／澗書堂新刊」の双辺木記が刻され、次に「文公親帖」・朱子問答語録並に男抗の識語をおき、次に孔安国序・漢書藝文志・孔穎達の説等を集録して注を附せる「書序（隔六格）晦庵先生訂定門人蔡沈集伝」をおく。本文巻首「書巻第一（隔三格）晦庵先生訂定（隔二格）門人蔡沈集伝／（低格）虞書」と題す。毎巻末「書巻第幾」、巻六末のみ「尚書伝六巻終」と。四周双辺（二〇・三×一二・五糎）有界十一行、行廿四字、注文

小字双行。版心細黒口双黒魚尾「書幾（書伝幾、或は書伝幾フ）（丁付）」。上象鼻に稀に大小字数が刻さる。間々朱筆句点圏点を加え、所々欄外に一手に非ざる朱墨両様の室町末近世初間の書入がなされている。「義俊」「願蓮社」「仰誉」「昌平坂／学問所」の印記あり。

丁氏旧蔵本（丁志・盎影著録）は書影を以て比較するに此と同版らしく、ただその本は刊記が削除されているようである。本書には北京図書館蔵宋淳祐十年呂遇龍上饒郡学刊本（中版録132 133著録）、中央図書館蔵宋末元初間刊存書伝問答（零本、拙著著録）が知られ、元版には他に中央図書館蔵本（刊記控削の如し）と故宮博物院楊氏観海堂蔵至正二六年梅隠精舎刊本（以上拙著著録）がある。この両版は序・附録等に出入があるが、本文はほぼ覆刻の関係にあり、恐らく後者が後出であろう。本版等の元版では首においてある小序・朱子問答等は元来宋版に於ては巻末に別冊として附してあったもので、明以後の通行本では嘉定己巳の蔡沈序以外は悉く削除されていたので、久しく佚失したかの如き情態にあった。本版等の元版は所謂麻沙本であるので往々訛謬を免れないが、明後の通行本に比すれば、旧形に近くその誤脱を訂し得る点が多い。

書〔集伝音釈〕 六巻・首・纂図一巻　宋蔡沈集伝　元鄒季友音釈　元至正一一年（一三五一）刊（徳星書堂）（内閣文庫蔵）　五冊。後補茶表紙（二六・五×一七・三糎）。裏打修補が施さる。副葉紙に、上に「雙桂書堂」（双辺）と横書、その下に左右に「纂図輯釈／蔡氏書伝」と大書、中間に「○経伝詳音明本大字○」の小書を挾める印刷封面が貼附してある。首に「書蔡氏伝重刊明本凡例」、その末裏葉に「至正辛卯孟夏／徳星書堂重刊」の双辺木記が刻され、次に「朱子説書綱領」（尾題「先儒説書綱領」）「尚書纂図」（尾題・版心「書図」）、嘉定己巳蔡沈序の「書集伝序／（低五格）鄱陽鄒季友音釈」、次に「書／（低一格）朱子訂定蔡氏集伝（隔三格）鄱陽鄒季友音釈」と題する「書序」を掲げる。本文巻首「書巻第一／（低四格）蔡氏集伝（隔五格）鄱陽鄒季友音釈／（低一格）虞書」と題し、尾題は「書巻第幾」と。巻末に「書序」（版心「書後序」）を附す。四周双辺（二〇・五×一三・三糎）有界十二行、行廿一字、注小字双行。注文は蔡伝の次に「音釈」「伝」（陰刻）「経」（陰刻）の単行大字の墨囲標字を以て音釈を附する。版心小黒口双黒魚尾「書幾（或は書伝巻幾）（丁付）」。

全巻に亙って室町時代の朱点朱引が附され、初の方には一部に経文に朱筆ヲコト点や墨筆の返点送仮名、注文は間々朱点朱引が加えられ、後半には室町期の別筆の藍筆の句点や注文にも朱句点が附され、また後年の黄筆を以て室町期の訓点を抹消した所もある。眉上に纂疏・大全・監本・文集・会選との江戸時代の朱筆校注が書入されている。首の纂図の尾題下に室町頃の筆蹟で「浄長捨入」の墨署があり、「蟹氏／蔵書」「昌平坂／学問所」「享和辛酉」等の印記を有する。

本版本は他に北京図書館蔵七冊（張志・瞿目・瞿影著録）がある。両本とも凡例後に至正十一年徳星書堂重刊の木記を有す

るが、この内閣文庫本には上記の如く雙桂書堂の封面が貼附してある。元来徳星書堂の刊であったのを後に雙桂書堂が求版したのか、それともその逆であるか、他に伝本がないので未詳とする外ない。至正十一年頃双桂書堂の刊刻になる版に張志・瞿目著録北京図書館現蔵「詩集伝名物鈔音釈纂輯」二〇巻（元羅復撰、凡例後木記に「至正辛卯孟夏雙桂書堂重刊」と）や北京図書館蔵元刊広韻五巻（二部、一は森志・楊譜著録、巻末木記に「建安余氏雙桂書堂鼎新鋟梓」と）がある。本版に云う「書蔡氏伝重刊明本」の明本とは瞿目に「此云明本即宋之明州本明州今寧波府也」と云う如く、本版の集伝のテキストは明州刊本に拠ったことを誇称したものである。しかし集伝の第一次版たる淳祐十年刊本は江西省の上饒郡学の刊で、明州刊が実際あったのか否かは不明である。江浙版は優良品、建安版は粗悪品の評判があったので、実際底本にしたわけでもないのに、麻沙本がその書名に京本・監本・明本等の冠称をつけるのが射利の常套手段であるから、深く穿鑿するには及ぶまい。

同〔元〕刊

（宮内庁書陵部蔵）欠巻三・首・纂図　五冊。後補茶色布目表紙（二五・五×一六糎）。所々裏打修補が加えらる。本文巻首「書巻第一／（低四格）蔡氏集伝（隔五格）鄱陽鄒季友音釈」と題し、尾題「書巻幾」と。四周双辺（一八・五×一二・五糎）有界十二行、行廿二字、注小字双行。蔡伝下の「音釈」「経」（陰刻）「伝」（陰刻）の標字は墨囲単行大字。版心細黒口双黒魚尾「書伝（或は書）幾（或は幾フ）（丁付）」。経文に室町期の墨筆訓点（細字）、所々経注文に朱句点、稀に朱引、巻一首丁にのみ別筆の朱訓点が附されている。各冊末に「松斎」の墨署、巻六末に「文尉侍者施入和本尚書替之／松斎」の識語が存し、「水竹埜処」の朱印「洛東四条／上行教寺」の墨印記がある。

同版本に故宮博物院楊氏観海堂蔵本（欠首・巻五・六、小島宝素旧蔵、森志・楊譜・拙著著録）がある。両本とも刊記があったかも知れぬ首目を欠いているので、残念ながら刊年不明である。

同〔元〕刊

（内閣文庫蔵）存尚書纂図一巻　一冊。後補黄色表紙（二五×一五糎）、裏打修補がなさる。本図は恐らく「書集伝音釈」の附録一巻と思われ、唐虞夏商周譜系図より始り、末に「尚書纂図畢」と題する。四周双辺（二〇・五×一二・四糎）。版心細黒口双黒魚尾「書図　（丁付）」。禹貢九州及今州郡之図一丁を欠くようである。「佐伯芙毛利／高標字培松／蔵書画之印」「昌平坂／学問所」の印記。

どの版に属するか不明であるが、前掲至正十一年刊本、次に紹介する旧京2425・旧京3132著録本とは相互に覆刻の関係にある。

鄒季友の音釈は尚書の経文と蔡伝とに下した音義注で、元来単行であった。本書は蔡氏集伝の各段末にこの音釈を合輯し、董鼎の「書集伝輯録纂註」を参照して、且つ纂図一巻その他を

附し、校正を加えた蒼輯本で、元明以後便利なので蔡伝単行本より附音釈本が盛に行われた。附録の纂図には撰者姓名が録されていないが、図中に「合沙先生云云」の説明があり、「経義考」に宋の鄭東卿撰「尚書図」一巻を掲げ「按合沙鄭氏尚書図宋刻不著撰人名図凡七十有七」と、その図名を悉く列挙し、「合沙漁父鄭東卿自号当即其所著書」と。ここからこの纂図を鄭東卿撰とする説があるが、瞿目の「巻首又有纂図六十有八不著何人所纂張氏金吾謂取諸鄭東卿尚書図案東卿図見経義考則有七十有七覈其図名又不同者半明係両本不得以図説有合沙云云謂即鄭本也」という説は従うべきであろう。

本書書集伝音釈の元版には他に北京図書館（巻四―六配元至正五年虞氏明復斎刊本、蔣志著録本か）・上海図書館（存巻二・三・五・六〔残葉〕）蔵の至正一四年日新書堂刊本（十一行廿字）があり、旧京書影は清内閣旧蔵北平図書館現蔵本として次の四種の元版を掲げている。24―27著録建安宗文書堂刊残本（十一行廿一字）、28 29著録残本（十二行廿一字）、30著録残本（十三行廿三字）、31―36著録本（十三行廿三字と十二行廿三字と混合、或は配補本か）。皆建安刊本で、書影からの判断であるが、この四種は元刻ではなく、明初或は明前期の刊刻と見てよいようである。北京図書館蔵至正十四年日新書堂刊本に配補された至正五年虞氏明復斎刊本の完本の現所在は知られていないが、天目続八に六冊本が著録されている。それによれば「前列書経序後有書序考沈子抗進表尚有朱熹問答一巻宋以来刊本俱不載序末有南谿精舎及至正乙酉鐘式明復斎鼎式墨印三書末刻至正乙酉菊節虞氏明復斎刊」と。十三行、廿二字、伝文低一格やや小字単行、音釈小字双行。よってその書は本書の如きやや改編を加えた音釈本ではなく、宋原刻本の原形をほぼ保持した附音釈本たることが推定される。

書〔集伝纂疏〕 六巻　宋蔡沈伝　元陳櫟纂疏　元泰定四年（一三二七）刊（梅溪書院）

首に嘉定己巳三月既望武夷蔡沈序の「書集伝序」あり、その後二行を隔て「泰定丁卯陽月／梅溪書院新刊」の双行木記が刻され、次に一格を低して泰定四年丁卯正月望日後学新安陳櫟謹書の自序、次に「読尚書綱領朱子説外附以他説」、「書蔡氏伝纂疏凡例」、「書〔序〕（隔五格）朱子訂定蔡氏集伝」（次行低九格「後学新安陳櫟纂疏」と題署、末題「書序」）を列し、巻末に「書序（隔二格）蔡氏集伝（隔三格）新安後学陳櫟纂疏」が附さる。本文巻首「書巻第一／（低二格）朱子訂定蔡氏集伝／（低八格）後学新安陳櫟纂疏」と題す。四周双辺（二〇×一二・五糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行、「纂疏」の標識は墨囲。小黒口双黒魚尾、「書疏幾（丁付）」。

泰定四年櫟の自序中に「今謀板行幸遇古邢張子禹命工刊刻以与四方学者共之」とある。字様版式から建安の開板たることは明かである。

（内閣文庫蔵）六冊。森志著録。後補卍つなぎ茶色表紙（二三・八×一五・五糎）、裏打改装本。首冊表紙に「経二／泰定丁卯鐫／書集伝纂疏　巻一」、右下端に「黄雪園審定元本」と題

さる。巻四洪範までは経文に室町初の朱点朱引墨訓点、注文には所々朱引、旅鬆以下は間々朱引が附されている。巻末に文化五年の市橋長昭の寄蔵文廟宋元刻書跋が附綴され、終巻の後表紙見返に、左の長昭の手識が記さる。

余得此書於洛陽敬業坊書肆王久家鏤板／乃係于元英宗泰定四年満清納蘭成徳容若／之所彙刻宋元経解中既収此書而孤行者／不多在焉亦宜愛重云／壬戌嘉平月初吉　黄雪山人記(印)

(印)

「仁正吴長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」、「昌平坂／学問所」「浅草文庫」等の印あり。市橋長昭献納本で、長昭の献納宋元刻本には皆巻末に次の市河米庵（三亥）の筆になる「寄蔵文廟宋元刻書跋」が附されている（以下皆同文につき省略）。

寄蔵

文廟宋元刻書跋

長昭夙従事斯文経十餘年図籍漸多意方今蔵書家不乏於世而其所儲大抵属輓近刻書至宋元槧蓋或罕有焉長昭独積季募求乃今至累数十種此非独在我之為艱而即在西土亦或不易則長昭之苦心可知矣然而物聚必散是理数也其能保無散委於百年之後乎孰若挙而献之於　廟学獲籍聖徳以永其伝則長昭之素願也虔臣宋元槧三十種為献是其一也

文化五年二月　　下総守市橋長昭謹誌／河三亥書

（静嘉堂文庫蔵）　六冊。陸志・陸続跋著録。新補茶色表紙（二四×一五・二糎）、裏打改装本。首目中凡例が綱領の前に綴じられ、巻末の書序（末丁欠）が首の末におかれている。凡例の後に清の王広心（江南華亭の人、字は伊人、号は農山、順治の進士）の「丙午初烝展読一過庭間早桂始開／芬香襲人対此古編殊身喜也王広心識(印)」なる手識が存し、朱筆の句点圏点、朱墨両様の傍線が附され、行間に朱筆校字が書入さる。「汲古閣」「汲古／主人」「汲古／閣」「毛晉」「毛晉／私印」「子晉／書印」「毛氏／子晉」「汲古得／修綆」「繁／花塢」「在処有／神物／護持」「元本」の毛子晉汲古閣の印記を始めとし、「張氏／図籍」「勤襄／公五女」「若衛」「方氏若／衡曾観」「小娘嬛／福地／秘笈」「小／娘／嬛／福／地」「巧士／司馬」「竹／汀」「銭／竹汀」「銭氏／竹汀」「大／昕」等の張蓉鏡夫妻・銭大昕等名家の印章が纍々と鈐されている。

書〔集伝輯録纂註〕　六巻　元董鼎撰　〔元至正一四年（一三五四）〕刊（翠巌精舎）

（静嘉堂文庫蔵）　〔明〕印　六冊。陸志・陸続跋著録。後補金砂子散し艶出緑色表紙（二六×一六・五糎）、金鑲玉装、原料紙は従約二四糎。首に、嘉定己巳三月既望武夷蔡沈序の「書集伝序」、至大戊申十二月己未後学鄱陽董鼎謹序の「書集伝輯録纂註序」、「朱子説書綱領」（次行低九格「後学鄱陽董鼎輯録」と題署）、「書蔡氏伝輯録纂註凡例」、「書蔡氏伝輯録引用諸書」（末四行を空けて「建安後学余安定編校」の題署一行あり）、次に孔安国序（初行「書」、次行低二格「朱子訂定蔡氏集伝」、第三行低八格「後学鄱陽董鼎輯録纂註」と題す）を列し、巻末に「書序」（第二・三行題署前に同じ、末に「書序終」と題す）を附

して、首の「朱子説書綱領」の末に「□□甲午孟夏／翠巖精舍新刊」（冒頭の二字削除空格）の双辺木記が刻されている。本文巻首「書巻第一／（低二格）朱子訂定蔡氏集伝／（低八格）後学鄱陽董鼎輯録纂註／（低一格）虞書」と題する。四周双辺（一九・六×一二・五糎）有界十一行、行廿字、注小字双行、行廿四字。「輯録」「纂註」「某氏曰」等の標識は墨囲。版心小黒口双黒魚尾、「書伝巻幾（或は書幾フ）（丁付）」。裏葉左上欄外に耳格あり、篇名が記さる。

故宮博物院（沈氏研易楼旧蔵、台湾版四部叢刊に影印所収）・中央図書館蔵本（季振宜等遍蔵、季目・拙著著録）は同版で、後者が刊記冒頭の剜去の痕跡が残っている二字を「慶元」と補筆しているのは妄補で、この空格の二字は陸志が推定する如く「至正」と見るのが妥当と思われ、即ち至正十四年甲午であろう。本版は故宮博物院（拙著著録）・北京図書館（二部、一は瞿目・瞿影著録、一は莫録・羅録・涵録著録本か）等蔵の元延祐五年余氏勤有堂刊本を、毎半葉十行を一行増して十一行に変え、字様はほぼ覆刻に近い重刊である。

尚書通考　一〇巻　元黄鎮成撰　元至正七年（一三四七）序刊

（内閣文庫蔵）　四冊。森志著録。後補淡縹色表紙（二二・七×一五・五糎）。裏打修補が加えらる。首に至正丁亥冬十月建安雷機子枢父の序、天暦三年歳名上章敦牂月旅太簇日得壬子後学昭武黄鎮成謹識の「尚書通考敍意」、「尚書通考目録」あり。本文巻首「尚書通考巻之一／（低五格）昭武存斎黄鎮成元鎮父▮編輯／（低二格）諸儒家法伝授之図」と題す。巻二以下次行の撰者名題署がない。左右双辺（一九・二×一二・四糎）有界十二行、行廿四字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「書考幾巻（丁付）」。所々朱引朱線が附され、巻四の第廿九・卅丁欠。「仁正斌長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」「昌平坂／学問所」「浅草文庫」の印記。巻末に市橋長昭の文化五年二月の幕府への寄蔵文廟宋元刻書献書跋が附綴されている。北京図書館蔵本（巻二・三配抄本、瞿目・瞿影著録）は同版。通行の通志堂経解本は瞿目の指摘する如く、雷序を失し、巻一に脱簡がある。

書蔡氏伝旁通　六巻　元陳師凱撰　元至正五年（一三四五）刊（建安・余氏勤有堂）

（内閣文庫蔵）　四冊。森志著録。後補白色表紙（二三×一五・七糎）。裏打あり。首に至治元年歳次辛酉四月六日後学東陬沢陳師凱序の「書蔡氏伝旁通序」、「蔡伝旁通引用書目」、「蔡伝旁通隠字審音」を列する。本文巻首「書蔡氏伝旁通巻之一上」、第二・三行低七格「後学東陬沢陳師凱譔／後学豫章朱万初校正」と題す。巻六下本文末と尾題との間に「至正乙酉歳四月／余氏勤有堂印行」の刊記あり。四周双辺（一九・二×一二・四糎）有界十三行、蔡氏伝文は単行大字、行廿二字、陳注は低一格単行中字、行廿四字。版心小黒口双黒魚尾、「書旁通巻幾（丁付）」。所々朱筆句点圏点、墨筆傍線の書入あり。「仁正斌長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」「昌平坂／学問所」「浅草文庫」の蔵印。巻末に市橋長昭の寄蔵文廟宋元刻書跋が附綴さる。

同版本には他に中央図書館蔵本（毛氏汲古閣・劉氏嘉業堂旧蔵、劉影・拙著著録）や張志著録本がある。

詩　類

毛詩正義　四〇巻　唐孔穎達等奉勅撰　宋紹興九年（一一三九）刊（紹興府）

（武田科学振興財団杏雨書屋蔵）　欠首七巻　一七冊。国宝。

島考著録。巻首「毛詩正義巻第八／（低二）唐国子祭酒曲阜県開国子臣孔　穎達等奉／（低二格）勅撰定／（低三格）鄭譜変風」と題し、次に毎巻低四格を以て目次を列して経文に連る。毎巻尾題下或は後に計幾字と字数が刻さる。巻末に左の校勘経進者列銜あり。

広文館進士臣韋宿書／郷貢進士臣陳元吉書／承奉郎守大理評事臣張致用書／承奉郎守光禄寺丞臣趙安仁書／勘官承奉郎守大理評事臣秦爽／勘官徴事郎守太子右賛善大夫臣胡令問／勘官承奉郎守太子左賛善大夫柱国臣解貞吉／勘官中散大夫国子博士同判国子学柱国臣解損／都勘官朝請大夫守国子司業柱国賜紫金魚袋臣孔維／詳勘官将仕郎守開封府雍丘県主簿臣孫俊／詳勘官許州観察支使登仕郎試大理寺直兼監察御史臣王元貞／詳勘官登仕郎守将作監丞臣尹文化／詳勘官登仕郎守光禄寺丞臣牛韶／詳勘官儒林郎守大理寺丞臣畢道昇／朝請郎守国子学丞臣劉弼再校／奉直郎守太子右賛善大夫臣畢道昇再校／朝請郎守殿中丞賜緋魚袋臣胡令問再校／中散大夫守国子祭酒兼尚書工部侍郎柱国会稽県／開国男食邑三百戸賜紫金魚袋臣孔維都再校

宣徳郎守尚書水部員外郎直史館兼判国子学柱国賜緋魚袋臣李覚都再校

淳化三年壬辰四月　日朝散大夫給事中参知政事柱国賜／紫金魚袋臣李沆等進／正奉大夫給事中参知政事上柱国襄陵郡開／国侯食邑一千戸賜紫金魚袋臣賈黄中／惟忠協謀佐理功臣金紫光禄大夫尚書吏部侍／郎同中書門下平章事上柱国清河郡開国／侯食邑一千戸食実封弐伯戸臣張斎賢／惟忠協謀同徴佐理功臣金紫光禄大夫尚書右僕／射兼中書侍郎同中書門下平章事監修／国史上柱国隴西郡開国侯食邑二千一百戸／食実封陸伯戸臣李昉

次に「紹興九年九月十五日紹興府雕造」の刊記一行が刻され、次に左の校対・管幹雕造官の銜名が印さる。

校対官右迪功郎監潭州南嶽廟韓彰／校対官右迪功郎監潭州南嶽廟穆淮／管幹雕造官右文林郎紹興府観察推官曾掞／管幹雕造官右承直郎紹興府観察判官白彦良

左右双辺（二三・三×一六糎）有界十五行、率ね行廿五字、或は廿六乃至卅字内外。経注の起止を標し、その下一乃至二格を空けて疏文を連ねる。版心白口単黒魚尾「詩幾（丁付）」。下象鼻に刻工名が記されているが、破損が多い。玄弦絃敬警弘殷匡筐竟境胤炅恒貞徴樹姞桓垣完覿の字は率ね末画を欠き、孝宗の慎の字以下には欠筆を見ない。判読し得る刻工は王永、王、阮于、于、顧淵、黄中、時明、時、徐政、徐高、徐茂、徐杲、章楷、章、宋求、宋、孫勉、孫免、孫、張清、張謹、謹、陳哲、哲、陳迎、陳明仲、陳錫、毛諫、毛諒、余集、集、余永、

余俊、余、駱昇、昇、駱宝、婁錦、錦、婁、江、通、山。巻十第二一、巻十六第三二・三三、巻卅二第三五、巻卅七第四・五葉欠丁。「金沢文庫」「香山常住」の墨印、「井々居士／珍賞子／孫永保」「炳郷珍蔵旧／槧古鈔之記」「天壌間孤本」「宋本」「宝詩／籌」(白文)の印記あり。

巻末の列銜は玉海所録の北宋監本校刊の記事と吻合し、本版はその北宋監本に基づいて紹興府が紹興九年に覆刻或は仿模せる南渡後最も早く校刊せる五経正義単疏本である。この本が紹興九年の鏤刻たることを傍証するのはその刻工名である。本版の刻工が雕せる宋版本は、紹興十年臨安府刊西漢文類(陳錫、余集)、紹興十九年刊徐高文集(毛諒)、紹興中明州刊文選(張清、張謹、陳迎、毛諫、毛諒、駱昇)、紹興初刊資治通鑑目録(王永、徐政、張清、張謹)、同史記集解の南宋前期修(阮于、顧淵、徐政、徐高、徐茂、徐杲、章揩、宋求、孫勉、陳哲、陳迎、毛諫、毛諒)、紹興中刊外台秘要方(阮于、時明、徐政、徐高、徐杲、章揩)、同通典(阮宇、時明、徐高、徐杲、張謹)、同白氏六帖事類集(徐高、毛諒)、同劉賓客文集(駱昇)、同思溪版蔵経(徐高、徐杲、陳哲)、紹興乾道間越刊周礼疏(徐茂、陳錫、余永)、同周易注疏(徐茂、陳錫)、同尚書正義(徐茂、陳錫、余永)、孝宗朝刊周官講義(王永)、同論衡(王永、張謹)、同類篇(張清)、同国語(駱昇)、同広韻(陳錫、余永、徐杲、孫勉、阮于、徐茂、毛諒、呉亮、陳明仲)、同両淮江東転運司刊漢書(王永、徐高、徐杲、毛諒)、同後漢書(王永)、孝宗朝刊周易正義の修(徐高)、同眉山七史の修(徐高、陳錫)、淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解(余俊)が挙げられる。

字様朴直にして北宋の遺風を留め、鐫搨の雅古、正しく天壌間の孤本たる宋槧本中の尤物である。金沢文庫から出て山口の香山寺に蔵されていた。香山寺は足利学校の創設者上杉憲実の終焉の処、恐らく憲実が金沢文庫から持ち出したものであろうか。その後の転移については島考に「是書古沢介堂氏従周防古刹所獲、後帰於井上伯爵、有故遂為吾師有」と記され、竹添井々から内藤湖南の入手する所となり、湖南は喜びの餘り、恭仁山荘四宝詩に「白首名場甘伏雌、保残守欠慕経師、収来天壌間孤本、宋槧珍篇単疏詩」と詠じて愛玩措く能わず、「宝詩籌」の印章を新に彫って、この本に鈐した。没後愛蔵の古鈔旧刊本類と共に武田氏杏雨書屋に譲られ、今日に至っている。昭和十一年東方文化学院が玻璃版を以て影印に附した。

附釈音毛詩註疏 二〇巻 漢毛亨伝 鄭玄箋 唐孔穎達等疏 陸徳明釈音 〔宋紹熙嘉定間〕刊(建安・劉叔剛)

(足利学校遺蹟図書館蔵) 三〇冊。重文。後補艶出茶色表紙(二七×一八糎)、裏打改装。改装の際天地が裁断された為に、天地の書入の字が不幸にして少しく剪断されている。後筆の書題簽に「毛詩正義 幾」と。首に「毛詩正義序」及び「詩譜序」(附注疏)あり、正義序の後に「劉氏／文府」(方形)、「叔／剛」(鐘形)、「桂／軒」(鼎形)「弋／経／堂」(方形)の篆文木記の刊記が刻さる。本文巻首「附釈音毛詩註疏巻第一一之一(円囲)／

(隔三格)唐国子祭酒上護軍曲阜県開国子孔穎達奉／勅撰／周南関雎詁訓伝第一(以下小字双行釈音)」と題し、巻二以下は第二・三行の官銜撰者名なく、首題或は某某詁訓伝第幾の次に「(低三格)毛詩某風(隔二格)鄭氏箋(隔二格)孔穎達疏」と題さる。尾題は「附釈音毛詩註疏巻第幾幾之幾」、或は巻一之二の如く、一部は「巻終」と。左右双辺(一九・一×一二・五糎)有界十行、行十八字、注疏文小字双行、行廿三字。注末に○を以て隔てて釈音を附し、正義は首に円囲大字の「疏」の字を標する。版心線黒口双黒魚尾「寺荒幾(丁付)」、裏葉左上欄外に耳格あり、詩名が刻され、上象鼻に稀に字数が印さる。玄炫驚弘殿慇匡筐恒貞楨徵頡樹讓島桓媾購溝講慎敦の字は往々欠筆している。

首冊首に「此書不許出学校閾外憲実(花押)」、また序の首に「上杉安房守藤原憲実寄進」、毎冊末に「上杉安房守藤原憲実寄進(花押)」と墨書され、足利学校設立者上杉憲実の寄進本である。毎冊首に「足利学校公用」、末に「足利学校之公用也」と横書され、「松竹清人」の印が鈐されている。巻一之五第十葉、巻之二第十一葉、巻四之一第十九葉は補写、巻四の補写葉の右欄外に「享保癸卯年冬十月十日夜武夷根遜志補焉」の識語が記されているから、この補写は根本武夷が山井崑崙と共に足利学校蔵書調査の際になしたものである。

本版はその刊記から、後掲の足利学校遺蹟図書館蔵「附釈音春秋左伝註疏」と共に、建安の劉叔剛一経堂の刊刻にかかり、この本は比較的早印に属し、修補がない。正義は元来単行であったが、紹興後期から紹熙にかけ、浙東路茶塩司が注疏合刻を刊行して世の歓迎を博したのに鑑み、経典釈文の釈音を摘出附載してさらに読書子の簡便を計ったものであろう。その欠画が左伝注疏と共に光宗の敦に止って、寧宗の拡郭以下に及ばないこと、その字様は建安体ではあるが、宋後期の麻沙本のそれとは些少違っている点から按ずるに、その雕版は光宗朝の紹熙年間、下っても寧宗朝の嘉定を降るものではなかろう。両浙東茶塩司刊礼記正義の紹熙三年の黄唐の跋に「紹熙辛亥仲冬唐備員司庾遂取毛詩礼記疏義如前三経編彙精加讎正用鋟木」と記してあるが、毛詩正義は果して開版されたのか否か、伝存していない。従って本版は毛詩注疏合刻本の現存最古の版で、「九経三伝沿革例」に挙げられた「建本有音釈注疏」に該当する版であろう。通行の所謂宋版十行本は実は元代に於ける本版の覆刻で、現在盛行する十行本の底本となった元刊本が誤刻の多い明正徳嘉靖の修補後印本であるから、その底本たるこの宋初刻本は往々訛誤を免れないと雖も、前掲の宋刊単疏本毛詩正義と共に、その全巻完具の点に於ても極めて貴重なる価値を有し、この足利学校本以外に他に伝存本がない。足利学校遺蹟図書館後援会から昭和四十九年影印本が刊行された。

この本の巻首の詩譜序には慶長を降らぬ朱筆句点が附され、末に「本云／大荒落歳晩夏小尽日燈下一看絶句訖　藤邑」なる依拠点本の奥書が朱筆で移写されている。加点者の藤邑の履歴は明かでないが、市野迷庵等旧蔵宮内庁書陵部現蔵南宋建安刊三国志の魏書の第四末に「戊辰孟夏十一夜雨中校了邑」、第七末「戊午夏五戊寅晩間校対邑」、第八末「戊午建午中八夜校邑」

の識語がある。迷庵はその本の巻末手跋に「所謂㞑者未考其人顧五山釈氏之徒也」、また迷庵はこの足利本の識語を引いて「此書所謂㞑(㞑)者豈非斯人乎」と按じている。この迷庵手跋は森志にも引載されている。この本の巻一の前半の注疏文には往々朱句点朱ヲコト点（明経点）朱返点が附されているが、餘は間々朱点朱引が加えられているにすぎない。僅かであるが眉上に庠主三要の書入が見られる。注目すべきは全巻に亙って誤脱の字に関して綿密なる校字が書入されていることである。その筆蹟は江戸期にかかるから、恐らくは山井・根本両人の校勘にかかるものと思われ、阮元校勘記の遺漏を補う所が頗る多い。

附釈音毛詩註疏　二〇巻　漢毛亨伝　鄭玄箋　唐孔穎達等疏　唐陸徳明釈音　〔元〕刊〔至明正徳〕遞修　覆宋劉宿剛一経堂刊本

（静嘉堂文庫蔵）　三〇冊。陸志著録。新補丁子色表紙（二八×一七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二六・五糎。巻一之二第五・六、巻三之二第一五―一八、巻一六之二第三・四、巻一八之五第一四・一五葉補写。「馮／玉堂」（白文）「芴／斎」等の印記あり。所謂十行本十三経注流の一。前掲の建安劉叔剛刊本を刊記もそのまま覆刻せる元刊本で、現存本は元印本は発見されず、皆明修本で、この本は版心の補刊年の所を切りとるか、或は墨で塗抹してある。正徳年間南監の修で、元の原刻の葉はかなり漫漶著しいが、正徳修としては比較的修の葉が少い方である。詳細は拙著参照。同版本の所在は国立中央図書館（二部）・故宮博物院蔵楊氏観海堂堂（残本、以上拙著著録）蔵本等がある。

毛詩挙要図　一巻　〔南宋〕刊（〔建安〕）

（静嘉堂文庫蔵）　一冊（「礼記挙要図」一冊と同帙）。陸志著録。後補淡香色表紙（二二・五×一四・三糎）、裏打改装。首葉の右上端に「毛詩挙要図」（木記）、巻末葉（二三丁）の左下端に墨囲陰刻を以て「毛詩図終」と題さる。左右双辺或は双辺（一七・七×一一・四糎）、文は有界十三乃至十四行、行廿五字。版心は殆ど破損しているが、線黒口、双或は三黒魚尾、「寺（或は詩）図　（丁付）」。玄匡筐桓溝の字に欠筆が見られる。

建安刊纂図互注本毛詩の首目中にあった附図が分れた零本である。「季振宜／蔵書印」等の印記があり、季滄葦旧蔵本。

詩〔集伝〕　二〇巻　宋朱熹撰　〔宋嘉定紹定間〕刊

（静嘉堂文庫蔵）　巻一二後半―一七補写　六冊。陸志・陸続跋著録。新補茶表紙（三〇・二×二一糎）、襯紙を挾んで修補改装さる。料紙黄紙。本文巻首「詩巻第一（隔五格）朱熹集伝／（低一格）国風一（下小字双行注）」と題す。左右双辺（一八・八×一三・四糎）有界七行、行十五字、注小字双行。版心白口単黒魚尾、「詩巻第幾（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。玄畜朗殷匡筐恒貞楨禎頼徽樹議桓構覯溝轂慎敦鞹の字の末画を欠き、寧宗の郭は欠筆せぬが、鞹は欠筆する。刻工名をこの本の補写の部分を北平図書館原蔵本を以て補って記せば、周蒿、張元彧、蔡仁、蔡、蔡明、明、蔡友、友、馬良、何彬、王燁、燁、劉

霽、游熙、熙、呉炎、鄭恭、恭、黄埜、埜、賈直、賈端仁、具炎、周。

北平図書館原蔵本（拙著著録）・同原蔵本（旧京38—41著録、存巻一—二、四—七、九—一二、一四—二〇。但し台湾に移管されていない）・丁氏旧蔵南京図書館蔵本（存八巻、丁志盞影著録）・上海図書館蔵本（存巻七・八の残葉）は同版本で、王記著録本（存巻四至八巻一四至一七）とは款行・刻工名が合致する。瞿氏旧蔵北京図書館現蔵宋刊本（存巻一六、瞿目瞿影著録）は八行の別版である。旧京著録本には詩序弁説の書影が見えるが、この本並に北平図書館原蔵完本にはなく、両本共に朱序・詩伝綱領・詩序弁説の首目がないのは或は逸失したのであろうか。

本版の刊年を推定する為に、その刻工が他の如何なる宋刊本の雕板に従事しているかを検討しよう。周蒿、張元彧、蔡仁、馬良、何彬、王燁、遊熙、呉炎、蔡明、黄埜、蔡友、賈端仁と本版の刻工の殆ど全員が参加しているのは、台湾の国立中央研究院歴史語言研究所蔵の周易本義（拙著著録）である。それは本版と字様・版式・行格を等うしているから、ほぼ同じ頃に同じ刊者によって刊行されたことが推定される。それを別にして、先ず寧宗朝嘉定頃の刊本から拾えば、馬良が重校添註音弁唐柳先生文集・嘉定六年淮東倉司刊註東坡先生詩・南宋前期刊韋蘇集の後修に、蔡明が育徳堂外制・臨安府陳宅書籍舗刊碧雲集、鄭恭が晦庵先生文集、蔡仁が南宋前期両淮江東転運司刊後漢書の修に見える。次の理宗朝に入って、蔡仁・馬良が紹定二年平江府刊呉郡志、馬良・何彬・賈端仁が淳祐二年大庾県斎刊心経政経、馬良・王燁・劉霽・呉炎が宝祐五年湖州刊資治通鑑紀事本末の雕刻に従っている。以上を以て見れば、此等刻工は上は寧宗朝の嘉定から下は理宗朝の宝祐年間に至るほぼ四十年間に亙る概ね杭州地区の刻工である。従って本版の刊行は寧宗理宗間と考えられる。朱子の嫡孫たる朱鑑は理宗の端平二年に編した「詩伝遺説」の自序中に「先文公集伝、豫章長沙後山皆有本、而後山校讎最精」と述べている。本版はその豫章・長沙・後山の三種のいずれかに該当するものと思われ、この本の旧蔵者たる陳鱣はその跋に於て本版を後山本に擬定している。いずれにせよ、本版の刊年の下限を端平二年と推定し得るが、欠筆を按ずれば、恐らく嘉定年間であろう。その字様からは江西地区の刊行の如く思われる。

本版は字大にして精楷、楮墨古雅、宋槧中の上乗なるものと評され、特にこの本は撫印鮮麗なので、却って明刊明印本と往々誤解される程である。この本は巻十二の第二一丁以下、巻十三至十七の全巻が影写を以て補われ、「袁又愷／蔵書」「袁印／廷檮」「五硯／主人」の印あり、首冊初に、「道光戊申穐七月曬書日仁和県学附学生員海寧星澮里人呉之瑗厚渠氏識」の手跋二丁（全文陸志掲載）が附綴されている。即ち清の蔵書家袁廷檮（字は又愷、号は綬階、呉県の人、其楼を五研と曰う）の所蔵で、後に蔵書に富める校勘学者の海寧の陳鱣（字は仲魚）の有に転じた。本書の通行八巻本は朱子の旧形を乱し衍文脱訛が甚しく、特に音釈に於て本版が現行本を訂誤し得る佳処枚挙すべ

からざる点は呉之瑗の手跋・陸跋続に列挙されている通りである。この本は四部叢刊三編に影印所収さる。

詩〔集伝〕〔一〇〕巻　宋朱熹撰　元許謙等音釈　元至正一二年（一三五二）刊（〔建安〕宗文精舎）

（足利学校遺蹟図書館蔵）　存首・巻一　一冊。新補香色覆表紙（二四・五×一五・五糎）。白色元表紙の外題に「詩伝綱領一」と。裏打改装本。首に詩図（首葉欠、尾・版心題「詩図」）、「詩伝綱領（隔七格）朱子」（附注）、「詩序／（低二格）朱子辨説」をおく。本文巻首「詩巻第一（隔九格）朱子集伝」、巻末「詩之一」と題す。首の詩図の末とその尾題の間に双辺木記があって、左の刊語が刻されている。

書伝旧有鄒氏音釈詩伝独闕読者／不無遺憾本堂今以許益之詩名物／鈔内音義纂釈為之仍間以何伯善／音釈附焉俾二書経伝俱有音釈仍／各纂図于前以備参考正句読明事／義以便読誦大字刻梓開巻瞭然比／之衆本嘉善収書君子幸垂藻鑑／至正壬辰仲秋宗文精舎謹識

四周双辺（一九・三×一二・四糎）有界十二行、行廿三字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾「詩伝幾　（丁付）」。

詩序末に「足利学校如道寄進」、巻末「如道寄進」の施入識語、巻首「学校／常住／足利／学校」、詩図中途「足／利／学／校」、巻末「野州足利庄／学校常住也」とそれぞれの上眉に横書され、本文首に「野劭足利／学校常住」と墨書、元表紙見返に「永正丁丑秋九月日修復焉／藝陽之之好老人」なる修補識語が存し、巻末に足利学校第九世庠主三要の「敬／復／斎」の家屋形墨印が鈐されている。之好は第五世庠主東井である。全巻に亙り室町末近世初間の朱筆句読点が附され、上眉に「音釈」の抄録と校字注、また行間に間々朱墨の書入が見られる。

本版の同版本は他に所在が知られず、刊語によれば、朱氏集伝に元の許謙（字は益之）の「詩名物鈔」内の釈音を摘記し且つ何伯善の音釈（未詳）を混えた音釈を附したと称している。但し巻一の範囲内では集伝の外に音釈は見られない。次掲の書陵部蔵明前期刊本は本版に比し毎半葉一行を増し十三行とするが、各行の字数と字様はほぼ本版の覆刻で注末に「音釈」と墨囲大字を以て標して音釈が附してある。朱子集伝は元来二十巻であるが、次掲本は十巻に変えている。この本は巻一のみの零巻で目録を欠くので全形はわからぬが、巻一の末が次掲本と同じであるから、恐らく十巻であろう。刊行者の宗文精舎とは元から明の中葉まで書集伝音釈を始め多数の図書を出版した建安の宗文堂或は宗文書院の別名と思われる。この本は首目は綱領を除き印面が比較的美しいが、綱領と巻一はかなり印面が劣る。

詩〔集伝音釈〕　一〇巻　宋朱熹集伝　元許謙音釈　〔明前期〕刊（〔建安〕）

（宮内庁書陵部蔵）　四冊。森志著録。後補茶色表紙（二六×一六糎）、裏打改装本。首目なく、本文巻首「詩巻第一／（低三格）朱子集伝（隔五格）東陽　許謙音釈／（低二格）国風一（下小字双行注）」と題す。

四周双辺（二一・三×一三・五糎）有界十三行、行廿三字、注小字双行。経注文に断句附刻。版心線黒口双黒魚尾「詩幾（丁付）」。巻十一の末二葉が補写にかかり、巻中所々破損の箇所が多く、やや後刷である。

四庫未著録。瞿氏旧蔵北京図書館現蔵の元至正十一年雙桂書堂刊「詩集伝名物鈔音釈纂輯」二〇巻は瞿目によれば、「東陽許謙名物鈔音釈後学廬陵羅復纂輯」と題署されているが、集伝を双行挿注を以て全載し、伝の次に音釈の二字を墨囲を以て標して音釈を附する体式は本版と同じである。その凡例によればその音釈は許謙がその名物鈔八巻の経伝の左に録せる音義から羅復が摘録纂輯したものと云う。傅増湘所蔵「詩集伝音釈十巻」は傅目に「元刊本十行二十二字黒口雙闌有安楽堂蔵書印世沢堂蔵印」と録されているが、後に文求堂に転じ、「文求堂善本書目」に書影二枚を載せて販売されたもので、現所在は詳かでない。その版は詩集伝序・詩図等の首目がついた堂々たる大字本で、建安の刊刻ではなさそうであるが、内容は恐らく本版と同じであろう。

本版は森志に「不記梓行年月、攷字体恐是至正間刊本」と記されて以来、元刊とされているが、前掲本を毎半葉一行を増し、字様はほぼその覆刻で、その字様雕法を按ずるに、元刻に非ずして、明前期の刻になる麻沙本と断ぜざるを得ない。「昌平坂／学問所」「文政乙酉」「浅草文庫」「大学校／図書／之印」等の印記あり。

詩〔童子問〕 二〇巻首二冊　宋輔広撰　元至正四年（一三四四）刊（崇化、余志安勤有堂）

首に至正癸未秋九月甲子後学会稽胡一中謹序の序、淳熙四年丁酉冬十月戊子新安朱熹序の「朱子詩集伝序」、「十五国風地理之図」、「詩伝童子問協韻考異南康胡述伯量伝／（低八格）門人輔広輯録」（附注）、「朱氏詩伝綱領／（低八格）門人輔広学」（附注）、「朱子詩伝童子問師友粋言／（低七格）門人輔広学」、次に二格を低して咸淳七年辛未七月旦日嗣孫之望謹識の跋が直に接し、その後の裏葉に「崇化余志安／刻于勤有堂」の双行刊記、この木記の左傍に「至正甲申上元印」の一行が刻され、次に「詩序／（低八格）門人輔広学」（附注）を列する。本文巻首「詩巻第一／（低五格）朱子集伝／（低九格）門人輔広学／（低一格）国風一（下小字双行注）」と題す。四周双辺（二〇・九×一二・四糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行。注は墨囲陰刻の「童子問」の標識を以て集伝と区分さる。版心小黒口双黒魚尾「詩伝巻幾（丁付）」。裏葉左上欄外に耳格（匡郭なし）があって、章名が記さる。

至正三年の胡一中の序に刊行の経緯を叙して「曩於擕李聞士夫蔵是書如至宝伝是書如秘術殊有負著述之本意今閲建陽書市至余君志安勤有堂昉得是書而鋟諸梓且載文公伝於上而附童子問於下粲然明白作而喜曰昔私於家伝者今公於天下後世矣学者抑何幸焉」と。汲古閣刊本が十巻、文化十二年刊官版が八巻に作るのは、本版が全載合刻している集伝を掲載していないからである。

（尊経閣文庫蔵）　欠巻一七以下　一〇冊。新補淡茶色表紙

（二五×一五糎）、裏打改装本。首序の順が、元来師友粋言の末一行の次に直接する咸淳七年嗣孫之望の跋のみを切りとって冒頭に冠し、次に胡一中序、次に地図・朱序・協韻考異・詩伝綱領・師友粋言をおいて、粋言の末一行の後に之望跋の後にあった勤有堂の刊記をつなぎ貼附してある。以上を以て一冊とし、次に詩序を第二冊としている。経文には室町末の朱筆訓点、注に所々朱句点を附し、特に大全との校字等が書入され、少しく別手墨筆の書入・訓点が加えらる。首尾の見返に「付与　玄碩九易叟（朱印、印文「宗／藝」）」、第二冊即ち詩序末に「十一月十三冬至之日点了」の朱筆識語がある。

（宮内庁書陵部蔵）　欠巻二、首序（除詩序）・巻一補写　一〇冊。第一・三・七冊は後補茶表紙（二四・八×一五・八糎）、他は後補栗皮表紙（二六×一五・八糎）。補写は江戸時代の筆で、朱筆の校字書入があり、胡一中序・師友粋言・之望序・刊記・協韻考異・地図・詩伝綱領の補写を首冊とし、詩序を第二冊とする。左の所有識語が次の冊尾の護葉紙に存する。

（第二冊詩序）文安四年弐月十五日　奉持慶栢
（第四冊巻四・第五冊巻六・第六冊巻十・第一〇冊巻二〇）文安四星中春十五日　奉持慶栢
（第八冊巻十六）文安四星中春十又五日　奉持慶栢
（第九冊巻十八）文安四星中春十五日　奉持慶栢

「林氏／蔵書」「述斎衡／新収記」「昌平坂／学問所」「文化丁丑」「大学／蔵書」「浅草文庫」「書籍／館印」等の蔵印あり。

他に同版本には北平図書館原蔵本（欠巻一三下、旧京45―49・拙著著録）が知られ、森志著録の崇蘭館蔵本（巻首有善慧軒印）は存亡未詳。

詩〔集伝附録纂疏〕　二〇巻首目一冊附〔韓魯斉三家〕詩攷六巻　宋朱熹集伝　元胡一桂附録纂疏　（附）宋王應麟撰　元泰定四年（一三二七）刊（劉氏翠巖精舎）

（静嘉堂文庫蔵）　欠詩攷六巻　八冊。陸志著録。新補茶色表紙（二七×一六・五糎）。金鑲玉装、原料紙縦二三・五糎。首に岩泰定第四祺彊圉単閼歳長至穀旦乙丑後学徙仕郎邵武路総管府経歴致仕盱江揭祐民従年父書于建東陽翠巖劉氏家塾の「朱子詩伝纂集大成序」、「詩伝附録姓氏」、「詩伝纂疏姓氏」「十五国都地理之図」、「語録輯要」、「詩伝綱領」（次・三行に「（低一格）朱子集伝／（低七格）新安後学胡一桂附録纂疏」と題署）、「詩序」（次・三行題署前に同じ）をおき以上で一冊となし、次に淳熙四年丁酉冬十月戊子新安朱熹書の「詩集伝序」、次に「詩篇目録」を列す。「語録輯要」後二行を隔て、「泰定丁卯仲冬／翠巖精舎新刊」の篆文双行木記、目録の後に次の刊語木記が刻されている。

文場取士詩以　朱子集伝為主明経／也新安胡氏編入附録纂疏羽翼朱伝／也増以浚儀王内翰韓魯斉三家詩攷／求無遺也今以詩攷謹鋟諸梓附於集／伝之後合而行之学詩之士潛心披玩／蜚英詳於場屋間者当自此得之岩泰／定丁卯日長至後学建安劉君佐謹識

本文巻首「詩巻第一／（低三格）朱子集伝／（低六格）新安後学胡一桂附録纂疏／（低一格）国風一（下小字双行注）」と題す。四周双辺（一九・八×一

二・七糎）有界十一行、行廿字、注小字双行廿四字。注文は集伝の次に「附録」「纂疏」を大字墨囲陰刻の標識を以て之を区分して附す。版心細黒口双黒魚尾「詩伝幾　（丁付）」。

四庫未収。一桂の著「周易本義附録纂註」とその体例を同じくし、集伝を全載して之を宗とし、その次に朱子文集語録の詩に及ぶものを「附録」とし、集伝を輔翼する諸儒の説を采って「纂疏」とし、間々集伝と異なる説を参考に掲げ、自説を愚謂と区別し、巻後に集伝を羽翼し、朱子が小序を排した所以を明かにせんが為めに、王應麟撰の「韓魯斉三家詩攷」を附刊した。この本には朱点朱引が附され、上欄に少しく朱墨の書入がある。「計印／光炘」「曦伯／所蔵」「冷音／閣」「計光／炘印」「曦／伯」「秀水／計光炘／曦伯氏」（白文）「計曦伯／家珍蔵」「啓淑／信印」等の印記あり、清の秀水の計光炘、字は伯曦旧蔵本。汲古閣・瞿氏旧蔵北京図書館現蔵本（欠詩攷、瞿目瞿影著録）・北平図書館原蔵本（存首八巻、旧京51 52著録、今台湾に移管されず）は同版本である。

（静嘉堂文庫蔵）存〔韓魯斉三家〕詩攷　六巻　一冊。陸志・陸跋著録。後補茶表紙（二四・三×一五・九糎）、襯紙を挾める改装本。首に延祐甲寅秋新安後学胡一桂序の序、次に三家詩伝授図一丁、次に「韓魯斉三家詩攷目録」がある。本文巻首「詩攷巻之一／韓詩」と題す。四周双辺（一九・二×一二・六糎）有界十一行、行廿二字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾「詩攷幾　（丁付）」。詩集伝附録纂疏の巻後に附刊されたもので、版式字様それと同じ。

陸志には巻首に景定五年甲子良月之望古涪文及翁伯学甫序の全文が引載されているが、今この本にはこの序がなく、何に拠って引録せるか不審である。ただ首の一桂序には「一―三」の丁付が附され、次の学系図には「七」の丁付が刻され、従って「四―六」が欠丁らしく、それがこの文及翁の序に該当するのであろうか。應麟の「詩攷」は元後至元六年慶元路儒学刊「玉海」の附刻本が通行しているが、張金吾は本版について、「是本刊附胡氏詩伝疏纂後韓詩韓奕幹正也謂以其議非而正之玉海本闕下一句餘異同処頗多玉海通為一巻此本六巻蓋猶是王氏旧第也」（張志）と。本版には應麟の自序及び後序はない。この六巻は（巻一）韓詩、（巻二）魯詩、（巻三）斉詩、（巻四）逸詩、（巻五）詩異字異義、（巻六）補遺から成る。

詩〔集伝通釈〕　二〇巻首一冊　宋朱熹集伝　元劉瑾通釈　元至正一二年（一三五二）刊（建安、日新書堂）

首に淳熙四年丁酉冬十月戊子新安朱熹書の「詩集伝序」（「次行低十格「後学安成劉瑾通釈」と題署、附注）、「詩伝通釈外綱領」（「引諸儒書」「引用諸儒姓氏」）、「詩序」（次行低八格「後学安成劉瑾通釈」と題署、尾題「詩辨説畢」、附注）、「詩伝綱領」（次・三行低八格「後学安成劉瑾通釈／建安劉氏日新堂校刊」、尾題「詩序畢」と題す、附注）、「詩伝通釈外綱領」を列し一冊となす。巻一末尾題の前に「至正壬辰仲春／日新書堂刻梓」の双行木記が刻さる。本文巻首「詩巻第一／（低五格）朱子集伝／（低十格）後学安成劉瑾通釈／（低一格）国風一（下小字双行注）」と題す。四周双

辺（一九・八×一三糎）有界十二行、行廿一字、伝文低一格中字単行廿二字、通釈低一格小字双行廿二字。「愚按」や引用書名姓氏の標識は墨囲陰刻。版心粗黒口双黒魚尾「詩釈幾フ（或は幾）（丁付）」。

（尊経閣文庫蔵）　一二冊。後補淡香色表紙（二五・五×一五糎）、天地を少し裁断せる裏打改装本。外綱領の末尾を欠き、巻十五の第二丁補写。所々朱点朱引朱圏点、室町期の朱筆ヲコト点や朱墨両様の返点送仮名が附され、間々朱墨両様のゾ式和文注を含む校合注解等の書入が存し、その書入は一手に非ずして、一は江戸時代の筆にかかる。

（静嘉堂文庫蔵）　欠首目　八冊。陸志・陸続跋著録。新補茶色表紙（二六・二×一七糎）、襯紙を挟み、一部裏打補修を加えた改装本。刊記のある巻一末葉を欠く。「星詒／印信」「星／詒」「祥符周／氏琇古／堂図書」「琇古／堂印」等の印記あり、清の周星詒（字は季貺）旧蔵本。巻廿尾題下に「周季貺星詒読丁卯冬末」（印）」の手識、また首冊副葉紙に左の手跋がある。

詩伝通釈二十巻詒丙寅歳購之福州蔵書家生／□□□学蒙昧无識願習諸論于先生長者□□／古義厭薄宋元収蓄諸本憑為所棄此帙前後／無序跋審□紙墨堅緻精好定是元槧元印／因収之以為校勘経文之用然莫知為何年所刻也／□年得張氏蔵書志有元至正刊坿詩伝綱領／本云巻一後有至正壬辰仲春日新堂梓□印□／此本巻一尾先其一葉又逸綱領意嘗与張所記／同為一事也

北京図書館蔵本（巻一六配清抄本、張志・瞿目著録）・上海図書館蔵本（有鈔配）・北京大学蔵本・北平図書館原蔵本（旧京53—55著録、今台湾に移管されず）・繆続記著録本（欠巻二・三、一二—一八）は同版。北京図書館蔵・北平図書館原蔵（旧京56著録、今台湾に移管されず）の「詩伝通釈大成」二〇巻は、旧京の巻一首の書影を以て比較する限りでは、首題を変えた外は本版の覆刻である。「北平図書館善本書目」はただ「元刻本」と記すが、「北京図書館善本書目」は「元至正十二年劉氏日新書堂刻明修本」と録している所を見ると、別版に非ずして、本版に所々修補を施せる外題換本であろうか。

呂氏家塾読詩記　三二巻　宋呂祖謙撰　〔宋孝宗朝〕刊

南宋後期修（〔建安〕）

（宮内庁書陵部蔵）　六冊。森志・島考著録。後補淡香色表紙（二二・五×一五糎）、裏打改装。首に「呂氏家塾読詩記目録」（尾題「読詩記目録」）あり。本文巻首「呂氏家塾読詩記巻第一／（低三格）綱領」と題す。左右双辺（一八・四×一二・二糎）有界十二行、行廿二字、注文低一格単行、小注小字双行。版心白口双黒魚尾「記幾（丁付）」。欠筆は厳格ではなく、玄鉉弦朗敬弘殷慇匡筐桓禎貞楨頡徵懲樹譲桓完構媾覯溝慎の字或は末画を欠き或は欠かず。本文巻一の首二葉巻二の第十二葉は建安刊本の字様で、南宋中期後の修補にかかる。巻二第七葉巻六第六葉欠丁、巻二七の第二・三葉を欠き、代りにここに巻一六の第一八—二二葉が誤綴され、（巻六）第四、（巻八）六・八、（巻一七）七、（巻二一）一・一七、（巻二三）五・七・一〇・一一、（巻二四）一六、（巻二五）二九、（巻三一）第二葉は補写。

本版はその字様から宋末建刊本とされて来ているが、宋中期後の建安体の字様は僅少の修補の葉で、殆どが簡古重厚の初期の建安の字様であって、次掲の本書の江西漕台刊本や浙刊本の巻末にある淳熙九年尤袤跋中に「建寧所刻益又脱遺」という建寧刊刻本に該当する版と思われ、版式欠画からも淳熙九年以前の刻と目して支障ない。この本は後述の如く仁治二年（一二四一）宋より帰朝せる円爾聖一国師が将来せる本であるから、その修印も淳祐元年以前にかかることは明かである。

「普門院」「艮岳院」「恵士／印膺」「仁正芙長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」「昌平坂／学問所」「浅草文庫」「御府／図書」等の印あり。巻末に文化五年二月の市橋長昭の寄蔵文廟宋元刻書跋が附綴さる。この本は「普門院」の蔵印から察せられる如く、円爾弁円が宋より将来せる本で、「普門院経論章疏語録儒書等目録」に「呂氏詩記　五冊」と著録された本であろう。艮岳院も亦東福寺の塔頭である。所々朱点朱引が附されている。

同版本の所蔵を他に聞かぬが、「文求堂善本書目」に「呂氏家塾読詩記三十二巻　十六冊」の本文首葉の書影が掲載され、「宋刊本十三行二十五字注雙行線口左右雙闌有毛晉蔵印遼西郡図書印浙右項徳持希憲蔵書諸印」と。その本の現所在は明かでないが、蔵書印からも王記著録本に該当し、王記によれば前部は十二行廿四字、後部は十三行廿五字の寄せ本で、「前部巻中欠葉配入十三行本文字不接」と。その書影によるに本版と同じ十二行廿二字であるが、双辺線黒口上象鼻に大小字数あり、覆刻の関係にある。この本のこの巻首の葉は上記の如く補刻にかかり、彼の字様はこの本の原刻のそれと同類である。巻首一葉の書影のみでは両版の先後は判定し難い。また北京図書館蔵本（王世貞・汲古閣・銭謙益旧蔵、巻一八・一九欠、巻一五・一六配清覆刻本、天目続巻二著録）は書影で見る限りでは文求堂本と同版である。文求堂本はわからぬが、北京図書館本は巻首に朱序巻末に尤袤跋があるから建寧初刻本である筈がない。江西曹台刊本が即ちその版とも考えられるが、次掲に述べる瞿本を見れば、その擬定は成立し難い。とすればその版はどこかで建寧版を覆刻して次掲の浙刊本同様朱序尤袤跋を附したもので あろうか。本版、文求堂十三行本、北京図書館本、この三種の版の関係についてはさらに後考を期する。

同　〔宋淳熙〕刊（〔浙〕）

（宮内庁書陵部蔵）　九冊。後補茶褐色行成表紙（二〇・八×一四糎）、裏打改装。首に淳熙壬寅九月己卯新安朱熹序の「呂氏家塾読詩記序」あり。本文巻首「呂氏家塾読詩記巻第一／（低三格）綱領」と題す。巻末に淳熙壬寅重陽後一日錫山尤袤書の跋（写刻）が附さる。四周雙辺（一六×一一・六糎）有界十二行、行廿二字、注文低一格単行、小注小字双行。版心白口双黒魚尾「詩記巻幾（記巻幾、或は詩幾、或は記幾）（丁付）」。上下の象鼻に大小字数或は刻工名が刻さる。玄鉉弦絃畜蓄朗弘殷慇匡筐恒禎貞楨頻徵懲樹讓島桓完構媾覯溝講冓慎の字に間々欠画を見る。版心破損が多いが、刻工名は蔣輝、蔣元、蔣、輝、元、李忠刀、李、忠、陳亢、陳、亢、卜一、卜、同、志、潘、

栄、伸、寛、吳、宋、張、王、祥。巻一九の第十四丁欠。

朱子序に「伯恭父之弟子約既以是書授其兄之友丘侯宗卿而宗卿将為版本以伝永久且以書属熹序之」と、また尤袤跋に「今東州士子家宝其書而編帙既多伝写易誤建寧所刻益又脱遺其友丘漕宗卿惜其伝之未広始鋟木於江西漕台」と本書出版の経緯を述べている如く、著者祖謙歿去の翌年たる淳熙九年（一一八二）に時に江南西路転運判官であった丘密（字は宗卿）が江西漕台に於て上木したものである。従来この序跋から本版を以て淳熙九年丘密刊本とされ来っている（島考に尤袤刻とせるは失考）。しかるに朱・尤の序跋を有する別の宋槧本が瞿氏鉄琴銅剣楼に蔵され、今北京図書館の有となっている。同本は左右双辺有界九行十九字白口の大本にして欠筆は慎に止り、瞿目・瞿影に著録され、四部叢刊に影印収入されている。両版は内容体式を同じくするが別版で、その字様刻工名から案ずるに瞿本が淳熙九年江西刻本と思われる。

本版の字様は細楷端正の精刻にして、浙版字様の典型たるもの、恐らく江西丘氏原刻本に基づく浙に於ける翻版であろう。その欠画が慎の字に止り、その刻工の李忠が淳熙刊聖宋文選合集（小楷の字様相似）・孝宗朝刊史記集解・紹熙三年越刊礼記正義・嘉泰四年新安郡斎刊皇朝文鑑、紹興年間明州刊紹興淳熙間修文選の原刻・補刻、越刊尚書正義・同周礼疏・孝宗朝贛州刊文選・所謂眉山七史の修に従事し、陳元が明州刊文選の修に加っていることを考えれば、本版の刊刻は淳熙九年をさ程へだてぬ淳熙年間、降っても寧宗朝初より下るものではない。他に同版本の現存本を聞かない。張志著録の十二行廿二字の残本は本版か或は前掲の建寧版か未詳。本書の宋版には他に蜀の眉山賀春卿刻本ありと伝えるが、現所在未詳で、天目続著録の十四行十九字本は或はその蜀版か。この本は刷面純良の早印にして料紙は我が和紙に類する楮系である。室町初を降らぬ一手に非ざる筆を以て間々経文には朱句点、朱ヲコト点、朱圏点、或は朱墨の返点送仮名、稀に声点や朱墨の振仮名の書入が見られるが、後半は殆ど朱筆句点のみが附されている。古印を削去せる痕があるが、首に「華竹秀／而野」（白文）、巻一・二・一一の首及び巻二〇・三二の尾に「鈞」の印記が存する。桂宮旧蔵本。

毛詩要義　二〇巻毛詩譜序要義一巻　宋魏了翁撰〔宋淳祐一二年（一二五二）〕刊（〔徽州郡斎・魏克愚〕）（天理図書館蔵）三二冊。重文。莫録著録。後補金砂子散し濃藍色表紙（二八×一七・三糎）。襯紙が挾まる。巻初に「毛詩要義目録」及び「毛詩譜序要義」あり。本文巻首「毛詩要義巻第一上周南関雎葛覃」と題す。左右双辺（二〇×一四糎）有界九行、行十八字。眉上に標記あり。版心白口双黒魚尾、「毛詩要义（或は「毛詩义」）幾（或は「巻幾」）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名が印さる。欠画は厳格とは称し得ないが、絃弘匡筐恒禎貞吉桓完覩溝慎惇敦の字に往々欠筆を見、即ち光宗に止って、寧宗以降の拡郭等の字は欠画をしていない。刻工名は、李升、元吉、江才、江元、才二、蔡智、思中、子文、子全、子仁、子七、時享、汝巨（能）、仁甫、丁輝、伯才、范伯

才、范子仁、文茂、游成、游京、有成、友葉、余才、余文、葉正、葉朋、劉文、劉子文、戊、永、范、祐、龍、共、熊、才、晟、余、桂、亨、楚、朱、呉、宣、云、悌、順、孫、巳（能）、安、王、乃、宇、祥、唐、早、劉、方、共、仲、呉、官、張、杞、京、范、游、君、全、正、陳、応、心、悳、明、万、仁、鍾、礼、一、志、輝、友、文、翁等。「棟亭曹／氏蔵書」「長白敷／槎氏菫／斎昌齢／図書印」「合肥孛氏／望雲艸堂／珍蔵金石／図書之章」「小画／禅室」（白文）「程／琦」「程印／伯奮」（白文）「桐郷沈／炳垣手／読書記」の蔵印あり。終冊末に「道光丁未自春徂秋桐郷沈炳垣手読一過」の朱筆識語、第一冊の末護葉紙に莫友芝及び銭天樹の次の手書題跋が記されている。

宋魏鶴山先生於理宗嘉熙元年丁酉／以権工部侍郎忤時相謫靖州取九経／注疏刪繁去蕪為要義百六十三巻宋／史藝文志分載其書当時陳晁両家著／録頗称浩博亦不及載則知此書已不可／多見矣　欽定四庫全書只載周易儀／礼尚是全帙尚書春秋皆非完本近揚／州阮氏復得尚書三巻即　四庫所欠之／巻又礼記卅一巻首欠曲礼上下両巻其／餘四経竟無従咨訪矣壬辰仲春篋／江聳不惜重値購得宋槧毛詩要義／首尾完整触手如新為曹楝亭旧蔵本／首列目録次譜序又次詩要義二十巻其一／二五六十二至十七等巻分上下子目四巻及十八／十九巻分上中下子目其餘均作一巻総子目并／序計三十八巻展読之下古香可掬真希世／之秘笈也其体裁与周易等相同有与／疏本連文而要義取一二則者列其次目／于眉上不復分裂原文隷標目之尤為／簡当伝箋遺辞博奥孔氏因劉炫等／書為正義於地理名物靡不旁搜曲引／以資攷核故其疏較他経為密鶴山復／擷其要領以経及伝箋為綱以正義為目有／条不紊易於記誦洵治経者不可少之書／鶴山所輯尚是当時善本必与今通行／之本大有不同異日再為為細校一過始無遺／憾郡城金氏蔵有宋槧礼記首両巻即／阮氏所欠之帙当訪求之従此易書詩二／礼五経皆成完書真大快事也篋江席／豊履厚而不以他好縈心惟古人秘笈捜訪／不遺餘力是可尚已今擬将付梨棗公諸／同好使数百年古籍晦而復顯其有功於／藝林豈浅鮮哉因為識此　銭天樹（印）

魏鶴山先生毛詩要義三十八巻為／文淵閣著録所未及道光間儀徴相国採進遺／書亦未之見上海郁泰峰氏乃蒐獲曹楝／亭旧弆宋槧于嘉興士家海内更無第／二本遂卓為宜稼堂数十宋槧之冠友芝／同治乙丑五月来滬上珍重仮読心神開曠／百慮尽消断推此游第一快事友芝夙有／詳校毛詩疏于乾嘉諸老所挙中外旧／本異同一〻甄録唯未及要義本他日再／必為滬游必挾以来更乞仮細校一通乃／不虚此眼福也独山莫友芝（印）

本書の成立と出版について、本書と同じく淳祐十二年に上梓された了翁撰「周易集義」の元至元二十五年補刊本に寄せられた方回の跋に「僉書枢密院事魏文靖公鶴山先生了翁華父、前乙酉歳以権工部侍郎、坐言事忤時相、謫靖州、取諸経註疏摘為要義、又取濂洛以来諸大儒易説為周易集義六十四巻、仲子太府卿静斎先生克愚明已、壬子歳以軍器監丞出知徽州、刊要集義、置於紫陽書院、至丙子歳、書院以兵興廃、書版尽毀」（「経義考」巻三三所引）と述べられている。即ち本書は了翁が晩年に時の相に逆ったので靖州に謫され、易・書・詩・周礼・儀礼・礼

記・左伝・論・孟の九経の孔穎達等の注疏の繁を刪り要を挙げ以て循覧に便した「九経要義」の一である。この「九経要義」は宋史藝文志には各経に分載され、全巻二六三巻を計える。了翁の没後男魏克愚が徽州（安徽省歙県）に知たりし時理宗の淳祐十二年（一二五二）郡斎に刻せしめたと云われる。本書は体例頗る簡当を得、四庫総目は「採掇謹厳、別裁精審、可謂翦徐支蔓、独擷英華」と称賛し、また本書は現在全巻完具せざる単疏本を拠用しているので、校勘資料としても重視されている。しかし本書の版木を蔵置せる紫陽書院が刊刻後廿四年の景炎元年元の至元十三年（一二七六）兵火に罹った為か、伝本極めて少く、清末に至るまで元・明両朝の間には重刊されることなく、明正統年間の「文淵閣書目」既に残闕本を著録し、さらに明万暦中の「内閣蔵書目録」は

鶴山九経要義六十八冊不全（中略）見存儀礼七冊、礼記三冊、周易二冊、尚書一冊、春秋二冊、論語二冊、孟子二冊、又前書各段分類、為類目六巻、以便検閲、今止存四冊

又鶴山九経要義二十四冊不全　同前止類目六冊

と録し、夙に完本は失われ、現在周礼・論・孟の三経は全く逸失したようである。現存の刊写本中宋槧本はこの毛詩要義の外には、「周易要義」（全書十巻中、存六巻、欠巻三・四・五・六。涵芬楼旧蔵北京図書館現蔵。涵録著録、四部叢刊続編に影印）、「儀礼要義」（故宮博物院蔵五〇巻、拙著著録。潘氏宝礼堂旧蔵北京図書館現蔵存巻一―五、二五―二八、四一至四三配清鈔本、莫録・潘録・中版録120著録）、「礼記要義」（涵芬楼旧蔵北京図書館現蔵三三巻、欠首二巻、莫録・涵録著録、四部叢刊続篇に影印）が知られるのみである。清光緒十二年江蘇書局刊「五経要義」は易・書・詩・儀礼・礼記を収めるが、宋刊本に比するに訛脱が多い。毛詩要義にはこの本の影鈔本に拠る光緒八年莫祥芝刊本、春秋左氏伝要義には四庫全書本を影印せる四庫全書珍本初集所収本がある。

本書は上述の如く魏克愚が淳祐十二年徽州の郡斎（今安徽省歙県）で刊せしめたというが、現存の宋槧四部に即してその刊年を再検討してみよう。欠筆で見る限りでは光宗の惇敦に止り、寧宗以降は欠いていない。その単名を除く刻工名はこの毛詩の上記の外に易・儀礼・礼記から、安茂、王杞、王桂、汪思中、汪宜、官寧、魏万、季清、金時亨、金時、君小乂、元興、呉宣、時中、子章、鐘季升、女茂、仁寿、仁父、増官寧、孫有成、孫徳顕、張京、仲実、程成、程万、程庚、程礼、程仁寿、唐発、徳顕、游安、余子文、余明、劉恵老、劉老、劉子章が挙げられる。同姓同名の異人がいると思われる劉文・余才・余明・余文を除く以上の刻工が従事した宋刊本には、宝祐二年（一二五四）江南宛陵郡斎刊「致堂読史管見」（王杞、王桂、汪思中、汪宜、鍾季升、季升、元吉、程成）、宝祐五年湖州刊「資治通鑑紀事本末」（鍾季升、仲実）がある。その他王桂は越刊八行本周礼疏・同礼記正義・両淮江東転運司刊漢書・所謂眉山七史の南斉書・蜀広都裴氏刊六家文選の宋中後期の修補、江才は淳祐十年福州刊国朝諸臣奏議・福唐郡刊後漢書・嘉泰四年新安郡斎刊嘉定至宋末修皇朝文鑑、子文は南宋後期刊梅亭先生四

六標準、程成が寧宗朝刊欧陽文忠公集の雕板に従事している。たゞ葉正の名は淳熙八年貴池尤延之刊文選、嘉定九年池州刊晦庵先生朱文公語録、寧宗朝刊晦庵先生文集、嘉定刊儀礼経伝通解の刻工の中に見えるから、同名異人が存する如く思われる。以上の刻工名から察するに、本版が淳祐十二年の刊刻と看做して支障ないことが傍証され得る。

この本は蔵印や手識から知られる如く、清の蔵書家曹寅（字は子清、号は楝亭、奉天の人、紅楼夢のヒーローに擬さる）・胡恵墉（字は箋江、平湖の人、室を小重山館と云う）・郁松年（字は万枝、号は泰峯、上海の人、「宜稼堂叢書」を編刊）等の逓蔵にかゝり、莫友芝が同治四年上海の郁家にこの本を閲して、「上海郁泰峰氏乃蒐獲曹楝亭旧弆宋槧本于嘉興士家、海内更無第二本、遂卓為宜稼堂数十宋槧之冠、友芝同治乙丑来滬上、珍重仮読、心神開曠、百慮尽消断、推此游第一快事」（莫録）と称讃した如く、撫印清麗なる海内の孤本である。

詩緝　三六巻　宋厳粲撰　〔元〕刊（余志安勤有書堂）（宮内庁書陵部蔵）　欠巻一九・二六・二七　一五冊。後補茶色表紙（二四×一五・五糎）、裏打改装本。江戸期の書題簽に「詩緝　共十五冊　幾」と。首に是年十有二月竹溪鬳斎林希逸書の「厳氏詩緝序」、「蒙斎袁先生手帖」、淳祐戊申夏五華谷厳粲序の自序（以上写刻）、「詩緝条例」（次行低六格「朝奉大夫臣厳粲述」と題し、尾題に「厳氏詩緝条例畢」と）、「清濁音図」、その後四行を隔てゝ「余氏栞于家塾」の刊記一行が刻され、次に「十五国風地理図」、「毛詩綱目」（目次）を置き、その末に「勤有書堂刻梓」の刊記一行がある。また終巻尾題後二行を隔て「余志安刊于家塾」なる刊記一行が印されている。本文巻首「詩緝巻之一／（低十格）朝奉大夫臣厳粲　述／周南（隔九格）国風」、巻二以下は「詩緝巻之二（隔十格）厳粲述」、各尾題は「巻幾巻終」（墨囲陰刻）或は「厳氏詩緝巻之幾」と題する。四周双辺（一九・三×一二・四糎）有界十行、行廿四字、注小字双行。版心小黒口双黒魚尾、「詩緝巻幾（或は幾フ）（丁付）」。裏葉左上欄外に耳格（匡郭なし）あって、詩名が記さる。巻中往々破損の葉を混え、巻一八、巻二五の如く少しく巻末の葉を欠く巻がある。建安の刊であるが、麻沙本の普通の字様と些少異り、字は大にして、右上りの書風で、早印に近く印面美しい。巻一の首に「佐伯芙毛利／高標字培松／蔵書画之印」、巻六・一二・二四・二九の首に「弱水三万里」、毎冊「秘閣／図書／之章」「帝室／図書／之章」の印記あり、佐伯藩主毛利高標旧蔵の献納本である。

南宋淳祐八年の粲の自序に「二児初為周南召南受東萊義誦之不能習余為緝諸家説句析其訓章括其旨使之瞭然易見既而友朋訓其子若弟者競伝写之困于筆札胥命鋟之木此書便童習耳」とあれば、本書は初め淳祐年間に上梓されたと思われるが、その宋版は今伝わっていない。本帙と同版本の所在は他に北平図書館原蔵の巻八・九の零本一冊（旧京50・拙著著録）が知られるにすぎない。本帙は全巻に亙って朱点朱引、経文に所々朱筆ヲコト点（明経点）、或は朱墨両様の返点送仮名が附され、尾題下に

は多く「本幾」と旧注本の巻次が朱筆で記入され、また眉上欄脚に「本注」「本」「箋云」として、毛伝鄭箋等の旧注が引録（間々朱の訓点を附す）されている。それ等の書入は室町期の筆蹟である。

新刊直音傍訓纂集東萊毛詩句解　二〇巻　宋李公凱撰

〔宋末元初間〕刊（〔建安〕）

（静嘉堂文庫蔵）六冊。陸志・陸跋著録。新補金砂子散し濃緑色地絹表紙（二五・五×一五・五糎）、金鑲玉装、元料紙縦二二・三糎。首に「毛詩句解綱目」（跨行）あり、この末半丁の後半分は別紙で補われているが、或はこの箇所に刊記があったかもしれぬ。この綱目の目次は十五巻になっているが、本文は二十巻に分ち、分巻の次第は綱目と本文との間に巻五以下には出入が生じている。本文巻首「新刊直音傍訓纂集東萊毛詩句解巻之一／（低七格）宜春　李　公凱　仲容」と題さる。巻四（尾題は巻三）以下「新刊」の二字なく、巻二以降は次行の撰者題署がない。左右双辺（一八・三×一一・八糎）有界十三行、行廿四字、注小字双行。経文に句点・四声点・傍注を附刻し、標識は墨囲白文、注末音注の標字は陰刻。版心線黒口双黒魚尾、「詩幾フ（丁附）」。裏丁左上欄外に耳格あり。筐貞桓の字には末画を欠く所もあるが、欠筆は極めて緩である。巻首に次の朱彝尊（号は竹垞）の手識一葉が附綴さる。

毛詩句解二十巻宜春李公凱仲／容撰宋自淳熙而後説詩者率遵／朱子之伝去序言経仲容独取呂／氏之書檃括以淑後進其亦異乎／剿説雷同者矣是編購之呉興書／估舟中原序失去稽諸袁州府志／竟没而不書無従攷其官閥門／世惜矣竹垞老人書於新楔斎／中時年七十有二（印）（印文「竹垞」）（印）（印文「彝尊私印」）

「朱印／彝尊」（白文）「鋏華珍賞」「呉興陳／経印信」「経／之」「陳経／之印／信」等の蔵印あり。陸跋に「竹垞所蔵後帰吾郷陳抱之者」と。

四庫未著録。黄氏「千頃堂書目」に「公凱宜春人字仲容其書専取呂氏読詩紀而檃括之」と出ている。本書は郷塾初学者用の平易な注釈書で、注は呂祖謙の注を簡約化し、注末に置いた音義は少し反切を混えるが、率ね直音（反切を用いず、他の同音の字を以て表記）を以て示し、経文には難語・人名・地名等に対する平明な訓義の言い変えの一両字を傍記し、且つ断句を附刻し、一読して経意を暁暢し易からしめ、此が「直音傍訓纂集」「句解」と題する所以である。著者の履歴は明かでなく、経義考は同著者の類書として他に「周易句解」十巻、「纂集柯山尚書句解」三巻をあげ、千頃堂書目を承けて元人としている。しかしこの著者には他に後掲の宋末元初間建刊の「附音傍訓論語句解」が伝存しているから、宋末元初間、宋人と看做してよかろう。本版は他に所在が知られていない。瞿氏旧蔵北京図書館現蔵の「直音傍訓毛詩句解」二十巻（瞿目・瞿影著録）は元刊と著録されているが、書影で見る限りでは明初の刊刻のように思われる。

礼　類

周礼　一二巻　漢鄭玄注　〔宋孝宗朝〕刊　蜀大字本

（静嘉堂文庫蔵）　存巻九・一〇　二冊。重文。黄書録・黄識・汪目・陸志・陸続跋著録。新補金砂子散し藍色絹表紙（三二・六×二二・二糎）、襯紙を挾める改装本。巻首「周礼巻第九／秋官司寇第五（隔三格）鄭氏注」と題す。左右双辺（二三・八×一六糎）有界八行、行十六字、注小字双行、行廿一乃至廿二字。版心白口「周礼幾（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に、王厂、王、子言、子林、如程換、換、老厂、悳、張、単、袁、正、眉、楊、泉、南、田、丙、介、付、梁、元、員、丸、劉、生、庚、隆、毛、大、志、呈、昌、友等の刻工名が刻さる。玄殷恒徵讓桓慎の字に欠筆を見る。巻九第四葉補写。巻末に黄丕烈の嘉慶十九年及び翌年の次の手跋二通が附綴さる。

倚樹吟軒楊氏余幼時読書処也其主人延名師／課諸子有伯子才而夭余就読時与仲氏偕時／同筆硯情意殊投合也其家有残宋蜀大／字本周礼秋官二冊蓋書友詭称様本持十金去以取全書久而未至亦遂置之余／稍長喜講求古書従偕時乞得登諸百／宋一廛賦中偕時亦不以余為豪奪也客／歳偕時病歿年纔五十有四従此失一良友／甚可傷也余今春耳目之力漸衰偶有／小恙即畏風悪寒久不至外堂日於楼／下西廂静坐養疴検点羣書偶及此書因／記曩事如此人往風微覩此贈物益増／傷感而此残鱗片甲独見蜀本規模／勝似後来諸宋刻（余所見有纂図互注本／本有余氏万／残岳本有／有点校京／巻堂本）幸叨良友之贈物以人重人又／以物重也甲戌閏二月一日復翁黄丕烈／識時積雪盈庭春寒透骨牕外／又飄〻未止也奈何〻〻

（黄筆）余年来家事日増精神日減校書一事久廃然由博／反約尚喜手校経籍此周礼蜀本残帙向未校出今／烋新収残岳本地春二官手校於嘉靖本上因復校／此秋官以儷之周礼善本六官有半矣豈不幸哉／乙亥冬孟二十有五日　復翁

首尾に蒙古文官印が鈐され、「百宋一廛」（白文）「黄印／丕烈」（白文）「士礼／居蔵」（白文）「復／翁」（白文）「汪印／士鐘」「閬源／真賞」「宋本」の印記あり。

黄氏の「百宋一廛賦注」に周礼一官と録されて以来蜀大字本として名高い。字大なること銭の如く、字様剛梗にして精刻撫墨漆黒の早印、秋官上下の零巻と雖も完本の所在を知らざる人間無二の孤本にして、宋坊刻本の訛誤を訂し得る勝処が多い。欠筆は慎に止って、敦郭惇の字は末画を欠かぬから、恐らく孝宗朝淳熙頃、遅くも光宗紹熙の鐫刻にかかり、寧宗以後に降るものではあるまい。北京図書館蔵礼記注（存巻六―二〇、中版録222著録）・上海図書館蔵春秋経伝集解（存巻九・一〇、中版録221著録）、四部叢刊に影印された孟子趙岐注清内府蔵本は共に本版と字様版式行格を同うし、皆「九経三伝沿革例」に謂う蜀学重刻大字本に該当する蜀版であろう。丕烈から汪士鐘の儲に転じ、その後は陸続跋に曰く「汪氏之書道光末散出、其精品多帰楊至堂河帥、其奇零有帰上海郁氏者、余从上海郁氏得」と。

周礼　一二巻　漢鄭玄注　〔南宋〕刊（〔建安〕）　附音重言巾箱本

（足利学校遺蹟図書館蔵）二冊。重文。森志著録。新補梨地色絹覆表紙（一三・五×一六・四糎）、栗皮色後補表紙（一二×一五・五糎）、所々裏打修補を加え、もと胡蝶装を半折せず一紙の右端を綴じた横長線装本に改装さる。序欠。巻一の首一行は敗損し、各巻首「周礼巻第二／天官冢宰下　周礼　鄭氏注」の如く題さる。尾題「周礼巻第幾」、或は「巻第幾終」。単辺（間々双辺を混ゆ、九×六糎）有界九行、行十七字、注小字双行行十八字内外。釈音重言重意本で、注末に被釈字を円囲（稀に白文）して音義を注し、また円囲白文大字の「重言」を標して重言重意が附さる。版心線黒口双黒魚尾「し（或は礼）幾（丁付）」。左上欄外に耳格があって小題を刻し、上象鼻に間々大小字数が印さる。欠筆は厳ならず、匡恒貞桓慎の字に或は欠画が見られる。各冊首に「万秀（一字首冊欠損）山正宗寺公用／下野州（一字首冊欠損）足利庄／学校之／常住／文安六年己巳／六月晦／洛陽僧／砭愚置之」と横書さる。末に文化十三年の狩谷棭斎・近藤正斎の左の手跋が附綴されている。

宋槧附音重言周礼十二巻其巻数／与隋書経籍志及唐開石経宋／岳珂刻本同（唐書藝文志云鄭玄注十三巻恐非）馬融所注／又為十二巻後来王肅干宝伊説之／注傳玄陳邵之論評皆仿此巻数／（並見隋志按唐志伊説注十巻経典釈文序録干宝注十三巻恐並非）如今行注／疏本永懐堂注本妄意分析終令／旧時之面目不可復見矣是本較／之今行諸本訛謬皆当従而改正／余恐日久為敗朽作筐以護之文／化丙子七月七日湯島狩谷望之

万秀山正宗寺在常州久慈郡増井村夢窗弟子／月山所開基也其寺所蔵有古本数種如左伝／正義単本其一也此周礼意是本係正宗寺／所蔵後転致之野庠者也予所見昌馨有／宋板周礼御庫有元板韓板周礼狩谷氏有／岳珂本狩谷氏将作周礼考文予借之庠主／以使対校之聊登記其本所自来云文化丙子／秋九月御書物奉行近藤守重識／（印）（印）

字様版式から見て、建安坊刻の附釈音重言巾箱本である。避諱は孝宗の慎に止って光宗の惇敦以降に及ばないが、依拠せる監本系の南宋前期刊本の欠画に襲因した為で、寧宗朝以後の刊であろう。旧京60—62著録の北平図書館原蔵本（存巻七—一一、今台湾に移管されず）は同版らしく、瞿氏旧蔵北京図書館現蔵宋刊巾箱本（配影宋抄本、瞿目・瞿影著録）は本版の覆刻と思われる。後掲の国立国会図書館蔵礼記・春秋経伝集解は字様・行格・版式を同うする附釈音重言巾箱本にして、共に同系類の建安坊刊本であろう。

周礼　一二巻　漢鄭玄注　〔南宋〕刊（〔建安〕）附音重言重意互注本

（静嘉堂文庫蔵）存巻七—九　一冊。陸続跋著録。新補栗皮色表紙（二二×一三・三糎）、金鑲玉装、元料紙縦一九・六糎。本文巻首「周礼巻第七／夏官司馬第四（隔六格）周礼（隔三格）鄭氏註」と題す。左右双辺（一三・九×九糎）有界十二行、行廿三字、注小字双行。注末に主として釈文による音注を附し、標字は陰刻、次に「重言」「重意」「互註」が附され、その標識は大字墨囲陰刻、その引用の篇名は小字陰刻。版心線黒口双黒魚尾「周し幾（丁付）」。上象鼻に大小字数が印され、左上欄外に耳格

があり、篇名が標記さる。匡恒慎敦の字が末画を欠く。巻七の第十三・十四葉欠。

陸氏は「所附釈文以白質黒章別之、但採音切而無義訓、与閩刊稍別、字体工整与婺本点校重意重言互注尚書相仿、慎字敦字皆欠末筆、当為寧宗時婺州刊本」と、本版を婺州刊本と推定した。しかし本版の字様は明かに建安体で、陸氏が比較した婺本尚書とは瞿氏旧蔵北京図書館現蔵の「婺本点校重言重意互註尚書」（瞿目・瞿影著録）を指すようであるが、それも建安坊刻の巾箱本たることは明かで、「婺本」の冠称は監本・京本・明本・杭本等と共にそのテキストが婺本に拠ったと自称する底本を示す書肆の称呼にすぎず、その本そのものの発行地と一致することは殆どない。麻沙本に往々見られる射利の常套例である。北京図書館蔵の「婺州市内巷唐宅刊」の刊記を有する周礼注の婺州刊本（中版録8889著録）は字様等は本版と全く異る。本版は欠筆その他から見て光宗寧宗間の建安坊刻本である。他に同版本の所在を見ない。

纂図互註周礼　一二巻附周礼経図一巻　漢鄭玄注　〔南宋末〕刊（〔建安〕）

（静嘉堂文庫蔵）　一二冊。陸志・陸続跋著録。新補金砂子散し藍色絹表紙（二六・五×一六糎）、金鑞玉装、元料紙縦二二糎。首に「周礼経図」（尾題「周礼図説終」）があり、王国経緯涙軌図以下伝授図に至る卅九図を収め、次に「周礼篇目」を掲げて首目一冊を成す。本文巻首「纂図互註周礼巻第一／天官冢宰第一（下に陸徳明音義曰の双注を挿む）周礼　鄭氏註」と題す。巻十一の尾題のみは「互註周礼巻第十一」。左右双辺（一八・四×一一・七糎）有界十二行、行廿一字、注小字双行、行廿五字内外。注末に○を以て隔て釈文による釈音（標字は墨囲せず）をおき、次に重言・重意・互註（標識は大字、（　）にて囲み、稀に墨囲陰刻）が附さる。版心線黒口双黒魚尾「礼幾（丁付）」。左上欄外の耳格に篇名とその巻次丁付を標記。下象鼻に間々朱明王刊、仔夫、仁、成、于、生、堅、仁、斎、林、思の刻工名が刻されている。匡筐恒貞禎桓の字欠筆。「古爽／鳩氏」等の印記あり。

早印で印面美しい本であるが、字様にかなり元刊麻沙本の特徴が見られる宋末の建安坊刻版である。瞿氏旧蔵北京図書館現蔵本（瞿目・瞿影著録）とは相互に覆刻の関係にあり、彼には断句が附され、重言等の標識は墨囲陰刻で、この本は彼の正字が略体になっている所が多い。

周礼疏　五〇巻　漢鄭玄注　唐賈公彦等疏　〔宋紹興乾道間〕刊（両浙東路茶塩司）

（無窮会天淵文庫蔵）　零巻（存巻四七・四八）〔元・明初〕遞修　一冊。新補藍色表紙（三〇・五×二〇糎）。巻四七が巻四八の後に綴じられ、巻四七は第一七―三三（尾）葉、巻四八は首十二葉と第一四・一五・二一葉が存するにすぎない。注疏合刻本の権輿と言われる、両浙東路茶塩司の校刊による、所謂越刊八行本の一。その中でこの周礼疏は単疏本の旧形を比較的多

く留め、体裁の不斉が目立つので、八行本中最初の開板と目され、恐らく紹興後期の刊、遅くも乾道前期と推定される。この本は原刻と宋修の葉は僅かで、元修が多く、明初と思われる修も加わった後印本にして、原刻・宋修の板にも殆ど部分的修が入っている。本版には故宮博物院（元明遞修、拙著著録）・北京図書館（宋元遞修、中版録70著録）・北京大学図書館（存二七巻、宋牧中・李木斎旧蔵）蔵本がある。詳細は拙著参照。

附釈音周礼註疏　四二巻　漢鄭玄注　唐賈公彦疏　唐陸徳明釈文　〔元〕刊

首に賈公彦の周礼正義序あり。本文巻首「附釈音周礼註疏巻第一」、第二・三・四行低一格半「朝散大夫行太学博士弘文館学士臣賈公彦等奉／勅撰／国士博士兼太子中允贈斉州刺史呉県開国男臣陸德明釈文」と題す。巻二以下は撰者題署は次行低五格「鄭氏註（隔二格乃至三格）賈公彦疏」と。左右双辺（一部四周双辺、一九・一×一二・六糎）有界十行、行十七字、註疏文小字双行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「礼兎幾（或は幾フ）（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に安卿、以清、以、王英玉、英玉、王栄、栄、応祥、君善、君錫、君美、古月、国祐、子明、寿甫、住郎、住、郎、智夫、仲高、天易、天錫、徳元、徳遠、徳山、伯寿、文仲、文一、文、和甫、茂の刻工名あり。左上欄外の耳格には篇目が記さる。巻三三の末葉の版心の中縫に「泰定四年」の年紀が刻され、下象鼻の刻工名は王英玉。この年紀を補刻年と解する説もあるが、この葉は原刻で刻工も原刻工であるから、論語註疏の版心の泰定四年の年紀と共にほぼ刊年と目すべきであろう。

十行本注疏合刻本の一。本版の板木は明に入って南監に移され、明初から正徳以後に至るまで修補が幾次にも亙って加えられ重印された。現存本は皆明修本で修のない元印本は発見されていない。明修の版心は白口、小黒口、粗黒口、或は単辺が混じる。字数刻工名がなく粗黒口で耳格を有するのが比較的早い明初の修で、他は耳格・字数がない。最も多いのは正徳以降の修で、正徳六年、正徳十二年、正徳十三年の年紀（大部分が正徳十二年）が印され、刻工名、或は校者名或は版下鈔者名が記されている。ただ補刻年紀がないが、刻工名或は校者名が印されているのは、その刻工名が有年紀のそれと共通する者が多いから、ほぼ正徳年間かその前後の修と思われる。その後も補刻がなされ、修年・刻工名のない正徳以後の修と思われる箇所がかなり多い。明修の校者版下鈔者名は陳景淵謄、羅陳謄、羅棟抄（以上正徳六年）、懐浙胡校、林重校、郷林重校、運司蔡重校。修補刻工名は、一生、栄郎、王進富、王良富、王仲友、王栄、王元保、王才、王二、王四、華福、基郎、弓三、堯三、元善、呉珠、呉盛、呉一、呉八、呉景春、江栄、江達、江毛、江長深、江元富、江四、江貴、江元寿、江盛、黄文、黄世隆、才二、細二、蔡仁、蔡順、三字、士英、施永興、施肥、謝元林、謝元慶、朱鑑、周元進、周甫、周甫元、周士、周士名、周同、周二、周三、尚旦、曾堅、詹蓬暎、張祐、陳徳禄、陳珪、程亨、党員、范朴、范元升、范元福、范元昇、文昭、文旻、熊

山、熊元貴、熊文、余郎、余堅、余成広、余天礼、余富、余天進、余添進、余環、楊旦、楊旺、楊全、楊俊、楊四、葉士大、士大、葉明、葉再友、葉起、葉二、葉伯起、葉妥、葉馬、陸栄、陸基郎、基郎、陸起青、陸四、劉長宝、劉昇、劉立、劉京、劉三（単名は省略）。

（静嘉堂文庫蔵）　明遞修　二二冊。陸志著録。淡褐色地水玉ぼかし文様表紙（二八・八×一七糎）、金鑲玉装、元料紙縦二六・五糎。版心の正徳の年紀の箇所が削除され、原刻の葉は少く、正徳後の修も加っている。

（内閣文庫蔵）　明遞修　二〇冊。新補茶色表紙（二四・五×一六・五糎）。裏打改装。正徳以後の修が入っている。

（東京大学東洋文化研究所蔵）　明遞修　一六冊。後補茶色表紙（二八・三×一八・二糎）。巻一四の第三葉と巻一六の第一三・一四葉は欠葉、巻一〇の第一四葉は補写。正徳後の修も入り、元刻の原刻の葉は無きに近い。経文には江戸初頃の藍色句点と朱訓点が附され、所々朱筆の校字が書入さる。「佐伯毛利／高標字培松／蔵書画之印」「昌平坂／学問所」の印記を有し、佐伯藩主毛利高標旧蔵献納本で、維新後昌平黌から流出したものである。

（東京大学附属図書館蔵）　明遞修　一四冊。後補縹色表紙（二六・六×一五・三糎）、所々裏打。正徳後の修が加り、前掲本と同程度の後刷。巻中補写を混え、所々江戸期の朱点朱引朱墨の訓点及び校注や諸注の抄録書入が存する。「東洲／文庫」「やすむら」「南葵／文庫」の蔵印。小中村清矩旧蔵本。

同版本には他に国立中央図書館（拙著著録）・故宮博物院楊氏観海堂（欠首六巻、拙著著録）・北京図書館・上海図書館蔵本や劉影・傅目（欠巻四―九）著録本等がある。

礼経会元　四巻　宋葉時撰　元至正二六年（一三六六）序刊（江浙儒学・潘元明）

（お茶の水図書館蔵）　四冊。徳富氏成簣堂文庫旧蔵。室町時代の縹色古表紙（二六・八×一七・七糎）。書題簽「周礼会元幾」。料紙はやや厚手の黄紙。首に至正乙巳中秋日栄禄大夫江浙行省右丞兼同知行枢密院事海陵潘元明序、至正二十六年歳丙午正月甲辰後学臨海陳基序の両序、至正二十五年八月吉日六世孫将仕郎江浙等処儒学副提挙葉広居百拝謹の「竹埜先生伝」、次に「礼経会元目録」がある。本文巻初首行「礼経会元第一巻」、次行低一格小字を以て、「宋龍図閣学士光禄大夫贈開府儀同三司南陽郡開国公食邑二千一百戸食実封一百戸謚文康葉時著」と題する。左右双辺（二〇・二×一三・七糎）有界十一行、行廿四字。圏点・傍線附刻。版心小黒口双黒魚尾、「礼経会元第幾巻　（丁付）」。上象鼻には多く大小字数があり、稀に下象鼻に存することもある。「慶福院」「徳富／猪印」「蘇峰／審定」（白文）「天下之公／宝須愛護」「蘇／峯」等の蔵印。

序によれば葉時の裔孫たる江浙儒学副提挙広居が本書の遺藁を献じた機会に、江浙行中書右丞の潘元明が、旧版廃されて已に久しいので、命じて重刊せしめたものである。序に云う旧版（宋刊か）は伝存を聞く所がない。同版本には故宮博物院（三

部、拙著著録）・米国国会図書館蔵本や瞿目瞿影・繆記・羅録著録本がある。静嘉堂文庫・蓬左文庫・故宮博物院（別蔵）・中央図書館蔵本の如き本版の覆刻に近い明刊本（白口）がよくこの元版と間違われている。莫録・丁志・莫跋著録本は本版かそれとも覆刻本か明かでない。この本には巻一には全巻室町期の朱点朱引、稀に墨筆の返点逃仮名、他は所々朱点朱引が附されている。首冊表紙見返に

是書元槧最精而最保存原／板之状態者也須十襲珍重也／明治四十一年八月初二／際于暴涼而瞥見記之／蘇峰道人

の識語があり、また「此書豆州某寺ニ於テ獲焉云々」と本帙入手の経緯を記せる明治四十年八月念一附の蘇峰の巻書一通が添附されている。

儀礼図　一七巻　儀礼旁通図一巻附儀礼一七巻　（図）宋楊復撰　〔元〕刊（謝子祥）

儀礼図は首に「晦庵朱文公乞修三礼奏劉、紹定戊子正月望日秦溪楊復序の自序、次に一格を低して〔大淵献之歳〕長至前五日寧徳陳普謹序の序、「儀礼図目録」をおき、本文巻首「儀礼図第一」と題す。旁通図は本文巻首「儀礼旁通図」、末「旁通図終」と題す。儀礼は首に景徳二年の「中書門下牒」及び「儀礼篇目」を列し、本文巻首「儀礼巻第一」と題さる。左右双辺（約一七・七×一一・八糎）有界十行、行廿字、注小字双行。版心白口（時に線黒口）双黒魚尾「儀（仪）礼幾（幾フ）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。明修は単辺、稀に双辺、版心は粗黒口（概ね校者名刻工名なし）或は白口単黒魚尾、字数なく、上象鼻或は時に中縫に、周何校、閩何校、林重校、蔡重校、李紅謄（抄）の校手や鈔手名が記され、間々正徳六年、正徳十二年、正徳十六年、正徳年の補刊年が刻され、後印本には修補年が記されていないが、正徳十六年後の修補も加っているようである。刻工名は、（原刻）王君粋、君粋、君、漢臣、臣、希孟、希、孟、季和、季、和、子興、子応、子仁、時中、時、中、宗文、宗、昭甫、昭、進秀、進、智文、鄭七才、七才、徳謙、謙、徳、伯玉、玉、范興、文甫、文、叔、貢、中、興、（明修、単名省略）袁連、袁璉、王栄、王才（正徳十二年）、王元保、王進富、郭泗、兼雄、堅利、江達、江栄、江元貴、江四、江富、江元富、江元、江貴、呉仏申、呉一、呉三、呉元清、呉珠、呉春五（正徳六年）、黄文、黄仲、蔡順、再友、子九、施肥、施永興、朱鑑、周同（正徳十二年）、世澄、清四、詹蓬邇、詹蓬頭、詹弟、曾椿、曾堅、仲千、張尾郎、張祐、陳泗、陳徳禄、陳珪、福朱、仏貞（正徳十二年）、文昭（正徳十二年）、熊山、余添環、余文貴、余富（正徳十二年）、余富一、余郎、余成、余成広、成広、楊旺、楊四、楊俊、楊尚旦（正徳十二年）、葉二、葉文祐（正徳六年）、葉甫友、葉馬、葉釆、葉金、陸三、陸四、陸栄、陸栄郎、陸貴青、陸基郎、基郎、陸記青、劉景福（正徳六年）、劉立（正徳六・十二年）。

陳普の序に「大淵献之歳昭武謝子祥刊儀礼本経十七篇及信斎楊氏図」と記す如く、昭武の謝子祥が復の図及び傍図と儀礼経文を併せ刻したもので、明に入ってその板木が南監に移管され

た。「明南雍経籍考」に「十三経註疏刻於閩者独欠儀礼、以楊復図説補之」と記されている如く、所謂十行本註疏合刻本には儀礼を欠くので、本版を以て代用し、南監に於て他の十行本と同様幾次にも亙って修補を加えて刷られた。従って明修の刻工は十行本注疏の明修のそれと共通している。北平図書館原蔵本（欠図、拙著著録）を除いて、伝本は皆明遞修本である。刻工名のない粗黒口の箇所は正徳以前の明前期の修と思われる。刊年について、陳普序は「大淵献之歳」（亥）と云うのみで詳かでないが、普は延祐二年（一三一五）に卒しているから、それ以前である。従来一部の書目で本版を宋版としているが、その非なることは本版の刻工名からも明瞭である。刻工名から検討すれば、王君粋・漢臣・希孟・季和・子応・子興・子仁・時中・智文・鄭七才・徳謙・伯玉・文甫の殆ど全員が興文署刊と言われる胡三省注資治通鑑及び通鑑釈文辨誤、伯玉が宋福唐郡刊前後漢書の大徳修、王君粋・伯玉が至大年間福州三山郡庠刊通志、文甫が至大間江浙行省刊書学正韻、子仁・宗文・文甫が泰定元年西湖書院刊文献通考、子仁が天歴元年刊范文正公集・越刊周礼疏の元修・元末刊春秋胡氏伝、宗文が後至元二年序刊慈溪黄氏日抄・同古今紀要・明洪武刊古史、文甫が後至元六年刊玉海、王君粋・子興・時中、七才が十行本附釈音毛詩註疏にそれぞれその名が見える。本版は刻工から考えても、延祐三年以前の刊として支障はないが、子仁・宗文が元末明初の刊刻、特に宗文が洪武と目される古史にその名が見られるのはその生存期間が長すぎる難点が生ずる。ただ両名は他の書の例から見て、同名異人が存在していた疑いがある。延祐二年以前の亥年とすれば至大四年か大徳三年の刊であろうか。本書には故宮博物院蔵・北平図書館原蔵・南京図書館（盦影著録）蔵本の如き、正徳年間の修が未だ入らぬ明前期修の本版を覆刻せる崇化余志安勤有堂の刊記を有する明前期刊本があり、往々本版或は元刊本と誤認されている。

（静嘉堂文庫蔵）　至明正徳遞修　一八冊。陸志著録。新補丁子色地墨流文様表紙（二八・七×一七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二六・五糎。巻七第四葉、巻一二第十葉補写。版心上象鼻の正徳の修補年の印されてある所が切りとられて別紙で補貼されている。刻工名から見て恐らく正徳十二年までの修であったらしく、次掲の内閣文庫蔵本に比すると、その修の葉がこの本では未だ原刻のままである所がかなり残っている。管見に入った本版の諸本中儀礼経文本の首に中書門下牒のあるのはこの本のみである。

（内閣文庫蔵）　存儀礼図一七巻　明遞修　九冊。森志著録。茶色表紙（二八×一八糎）。原刻は漫漶甚しき後刷本で、正徳後の修刻も加っているようである。江戸期の朱墨両様の校合書入がなされている。「昌平坂／学問所」の印記あり。

本版には他に元印の北平図書館原蔵本（欠楊復図）を始め、中央図書館（三部、一は儀礼図のみ、一は欠楊復図）・香港大学（劉影著録、以上拙著著録）・北京図書館（三部、一は欠正文）・上海図書館・南京図書館（丁志著録）・米国国会図書館・ハーバード大学燕京研究所（存正文）蔵本、王記（晉府等旧

蔵）・羅録・繆記（欠図）・傅目（存正文）・莫編・蔣志著録本等がある。

儀礼〔集説〕 一七巻　元敖継公撰　元大徳五年（一三〇一）序刊

（静嘉堂文庫蔵）　一六冊。陸志・陸続跋著録。新補金砂子散し黒色表紙（三〇・四×二一糎）、襯紙を挾み、原料紙縦二七・二糎。首に大徳辛丑孟秋望日長楽敖継公謹序の「儀礼集説序」、巻末に大徳辛丑仲秋望日長楽敖継公書の自跋が附さる。本文巻首「儀礼巻第一／（低八格）敖継公集説／士冠礼第一」、毎巻尾「儀礼巻第幾」と題し、巻一・二、十一・十二を除く毎巻末に正誤が附さる。左右双辺（二二・二×一六・五糎）有界十二行、行十八字、注文低一格単行大字。版心線黒口単黒魚尾、「儀礼巻幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に王栄、王興、汪恵、恵、汪、共之、共、系（孫）元、元、斉明、明、徐永、徐、永、徐涷?、舒関俚、孫仁、孫、冗（沈）尓、尓、沈、茅文、□□得、文、金、乙、銭、蘇、董、采、高、禹、何、顧、廿の刻工名が刻されている。巻八の第一〇一・一〇二葉補写。「田耕／堂蔵」等の蔵印あり。

本版は大字堂々、この本は早印にして撫墨清麗の趣を有し、同版本には故宮博物院（沈氏研易楼旧蔵、王記著録）・香港大学・中央図書館蔵本（以上拙著著録）、北平図書館原蔵本（旧京71—74著録、台湾に移されていない）や鄞范氏天一閣書目内編・葉志莫編莫跋著録本がある。本版と刻工を同じくする元槧本を挙げれば、大徳四年太医院刊大徳重校聖済総録（汪恵、斉明、茅文）、十行本註疏類（王栄、汪恵、孫仁）、宋刊本の元修には、宋文鑑（王栄、王興、斉明）、資治通鑑目録（汪恵、斉明、徐永）、史記集解（王興、茅文）、所謂眉山七史（王興、汪恵、王栄、斉明、徐永）、両淮江東転運司刊三史（王興、王栄、系元、斉明）、国語（系元、斉明）、説文解字（孫元、斉明）がある。また汪恵が越刊八行本尚書正義の元修、王栄が越刊八行本孟子注疏の元修及び元刊覆宋唐書、斉明が宋刊儀礼経伝通解の元修、徐永が宋刊増修互註礼部韻略の元修、孫仁が元刊大一統志に見える。従って刻工名からも本版が大徳年間の刊たることを傍証し得る。

以上の刻工の殆どは元の西湖書院に移された南宋公使庫本類の板木を同院で修刻した時の刻工で、且つ「西湖書院重整書目」には本書が著録されているから、本版は西湖書院で上梓されたか、少くとも同院に板木が置かれたことは確実である。明代にその板木が南監に移され、明南雍経籍考に「儀礼集説十七巻存者七百八十一面欠者五十九面」と録されている。

礼記　二〇巻　漢鄭玄注　唐陸徳明釈文　〔南宋〕刊（〔建安〕）　附釈音重言巾箱本

（国立国会図書館蔵）　欠巻一五　一九冊。後補縹色表紙（一〇・八×七・二糎）、裏打修補が施され、書外題に「礼記注幾」と。本文巻首「礼記巻第一／曲礼上第一」と題し、第三行低一格を以て陸曰の小字双行注をおき、第四行低二格「礼記（下に

陸曰の小字双行注を挾む）鄭氏注」と題す。巻二以下は「礼記巻第幾／小題第幾（隔六格内外）鄭氏注」と題さる。四周双辺（九・一×六・一糎）有界九行、行十七字、注小字双行、行十八字。注末に釈文による音注（標字は圏を以て囲む）、次に「重言」（標字は大字墨囲陰刻）が附さる。版心線黒口双黒魚尾「已幾（丁付）」。左上欄外に耳格があって篇名が刻さる。匡筐恒垣貞偵徴桓慎惇敦の字は或は末画を欠くが、寧宗の郭椁等は欠筆をしていない。巻三第三裏葉を欠き、間々蠹蝕破損の箇所がある。

字画纖細雕刀精整の建刊小字巾箱本にして、後掲の同館蔵春秋経伝集解の重言巾箱本とは同類で、刊者を同じうするものであろう。他に同版本の伝本はないようである。

纂図互註礼記　二〇巻礼記挙要図一巻　漢鄭玄注　唐陸徳明釈文〔南宋〕刊（〔建安〕）

（静嘉堂文庫蔵）　一六冊。陸志・陸続跋著録。新補金切箔散し黄絹表紙（二三×一五・五糎）、裏打或は襯紙を挾んで改装、原料紙縦二二・三糎。首に「礼記篇目」（跨行）、次に「礼記挙要図」があって首目一冊をなす。但し図の第五・六丁の二葉は補写、この補写は同系本によらず別系本によって写されている。本文巻首「纂図互註礼記第一／曲礼上第一（下に「○陸徳明音義曰」の小字双行注）／（低三格）礼記（下に「陸曰」の小字双行注）（注下隔二格）鄭氏註」（巻二以下は第三行「（低六格）礼記（隔五格）鄭氏註」と題す。篇名前に在り、次に礼記鄭氏注と題するのは唐石経の旧式を遺している。左右双辺（一七・八×一一・七糎）有界十一行、行廿一字、注文小字双行、行廿五字内外。鄭注の次に陸氏釈文を置き、標字は圏を以て囲み、鄭注なき場合は「陸曰」を以て之を別ち、釈文下に「重言」「重意」「互註」を墨囲陰刻の標識を以て掲げる。版心線黒口双黒魚尾「記幾（丁付）」。左上欄外に耳格あり篇名巻数丁付が記されている。玄狼殷匡筐恒禎貞偵徴樹譲頊桓完溝慎敦の字に往々避諱が見られるが、寧宗以降の郭椁廓等は欠筆をしていない。何故か前半釈文の標字を全て切り取って補写してある。「当湖小重山館／胡氏箋江珍蔵」「箋／江」「胡印／恵孚」「胡恵／墉」「曹氏／仲邕」「蒼／莨子」「文／和」「泰霞／斎書」「子□」「劉□」「志□」の印あり。清道光頃の蔵書家胡恵墉（字は箋江）等旧蔵本。

字画明晰雕鐫精善にして早印清美、麻沙本中の上なるものにして、テキストの内容も他の坊刻本に比して遙かに勝る。欠筆より見ても、光宗朝以後南宋中期の刊刻であろう。本版は他に同版本の所在が知られていない。ただ涵芬楼旧蔵北京図書館現蔵本（四部叢刊に影印）は毎半葉一行を増して十二行に作り、字様は相似し、重言重意に僅少の出入はあるが、同系本である。本版に基づく後出本であろう。

（静嘉堂文庫蔵）　存礼記挙要図一巻。前掲の毛詩挙要図と合綴一冊となる。首一葉欠。末の礼記伝授之図が首に綴じられている。

礼記釈文　四巻　唐陸徳明撰　〔宋淳熙四年（一一七七）〕刊嘉泰・開熙・嘉定・紹定・淳祐遞修（撫州公使庫）

（東京大学東洋文化研究所蔵）四冊。傳目著録。新補青色絹表紙（三四・二×二二・五糎）、襯紙を挾める改装本。巻首「礼記釈文／（低一格）唐国子博士兼太子中允贈斉州刺史呉県開国男陸德明撰」と題し、巻尾「礼記釈文」の題下に小字双行を以て経幾字注幾字と字数が記さる。四周双辺（二〇・三×一四・五糎）有界十行、行十六字内外、注小字双行、行約廿二―廿五字。版心白口双黒魚尾「記音（丁付、通し）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名、中縫に間々壬戌刊、開禧乙丑換、壬申□、甲申、辛卯刊、壬寅刊、戊申刊（白文も混ゆ）、淳祐□□の修補年が刻さる。補刻の字様は原刻に比し、細め右上りとなる。玄敬警殷匡恒胤酬恒貞禎桓慎の字に間々修とも欠筆が見られ、修刻に於ては敦の字時に欠画している。版心は殆ど破損が多く、識読し得る刻工名は（原刻）周忠、定、孔、（壬戌）呉仲、元、（開禧乙丑）高安国、厳思敬、思明、施贇、（壬申）朱生刊、伯言、卓、明、（戊申）周鼎、（淳祐）□楝、（補年未詳）思賢、呉仁重、喩、胥。所々字が上から墨でなぞられ、首五葉、第六一丁裏一行を残し以下第六八丁まで、第一一七丁裏、第一一九丁より以下第一二三丁の巻末まで、以上が影鈔を以て補われている。巻末に太歳重光作噩正月辛未晦元忠錫福堂書の曹元忠の手書題跋二丁半が附綴さる。「龍龕／精舎」「雙鑑／楼」「雙鑑楼／攷蔵宋本」「傳沅叔蔵書記」等の蔵印あり。傳増湘旧蔵本。

本版はその版式字様と刻工名から撫州（今の江西省臨川県）公使庫の刊刻たることは明かである。撫州公使庫刊礼記は楊氏海源閣旧蔵北京図書館現蔵本（楊録・中版録137著録）と国立中央図書館蔵本（有欠、蔣志・逧目・拙著著録）とが現存し、海源閣本は初印にして補版なく、巻末に淳熙四年撫州公使庫刻書人銜名七行が刻されていると云う。本版はその礼記に附されたもので、他に瞿氏旧蔵北京図書館現蔵本（瞿目・瞿影・王記著録）が知られるにすぎない。この本の版心に見られる補刻年の干支はその刻工名等から考えて、嘉泰二年壬戌、開禧元年乙丑、嘉定五年壬申、同十七年甲申、紹定四年辛卯、淳祐二年壬寅、同八年戊申と推定される。壬戌の呉仲は撫州刊左伝・公羊の原刻と紹熙四年の修や淳熙九年江西漕台刊呂氏家塾読詩記及び紹熙元年刊坡門酬唱、開禧の高安国は撫州刊礼記・左伝・公羊・易の原刻と紹熙四年の修並に呂氏家塾読詩記、思明は同左伝の嘉定六年の修、壬申の伯言は礼記の原刻と嘉定五年の修、厳思敬・施贇は同易、補年未詳の思賢は礼記の紹定四年及び淳祐二年の修に従事しているからである。本版は瞿目に校異の一端が列挙された如く今行経典釈文の訛誤を訂し得る佳所が極めて多い。撫州公使庫刊経書は、黄震日抄の咸淳九年修撫州六経跋によれば、当時六経三伝が既に開版されていたが、咸淳に至って論・孟・孝経を添刻して十二経となしたと云う。しかし今その多くは伝わらず、礼記のほかに涵芬楼旧蔵北京図書館現蔵の周易注（涵録著録、四部叢刊影印）及び春秋公羊経伝解詁（涵録・中版録138139著録）、故宮博物院・北京図書館分蔵春秋経伝集解（天目続三・故宮書影・拙著著録）が存するにすぎない。

礼記正義　七〇巻　唐孔穎達等奉勅撰〔紹興乾道間〕刊

（身延山久遠寺蔵）　存巻六三―七〇　二冊。重文。後補淡茶褐色表紙（二七・二×一八・五糎）、裏打改装本。書題簽に室町期の筆を以て「礼記正義（自六十三至六十六）（至七十巻）」と。本文巻首「礼記正義巻第六十三／（低三格）唐国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔　穎達　等奉／（低三格）勅撰」と題す。左右双辺（二三×一五・六糎）有界十五行、行廿六字、疏文は経注文の起止ほぼ二字を録せる標記下に二格をあけて単行大字を以て列記さる。版心白口単黒魚尾「礼幾　（丁付）」。下象鼻に刻工名があるが、版心とその左右の箇所が殆ど破損しているので、識読し得る名は屠友。玄弦敬殷匡竟譲の字に間々欠筆を見る。巻末巻第七十の尾題後二行を空けて次の列銜が署されている。

秘閣写　御書臣王文懿臣孟　佑　書／将仕郎守沢州陽城県主簿臣劉　文蔚　校／将仕郎守開封府陽武県主簿臣董　拙　校／将仕郎守鄆州司法参軍臣随　億　校／文林郎守光州固始県令臣軒轅　節　校／文林郎守坊州軍事判官臣王　用和　校／承奉郎守殿中丞臣胡　迪　校／将仕郎守蒙州司戸参軍臣袁　柄　再校／文林郎守福州福清県令臣歩　藻　再校／文林郎守戎州僰道県令臣李　坦　再校／将仕郎守大理評事臣孫　奭　再校／登仕郎守大理寺丞臣田　嘏　再校／承奉郎守大理寺丞武騎尉臣王　曉　再校／徴事郎守殿中丞臣紀　自成　再校／朝奉郎守国子博士崇文院検討兼秘閣校理上／騎都尉賜緋魚袋臣杜　鎬／推誠同德佐理功臣銀青光禄大夫行尚書吏／部侍郎兼秘書監修国史判国子監上柱国隴／西郡開国侯食邑一千二百戸臣李　至

淳化五年五月　日

朝散大夫右諫議大夫叅知政事柱国東平県／開国男食邑三百戸賜紫金魚袋臣呂　端　等進／正奉大夫給事中叅知政事上柱国天水県開／国男食邑三百戸賜紫金魚袋臣趙　昌言／朝請大夫給事中叅知政事上柱国武功県開／国男食邑三百戸賜紫金魚袋臣蘇　易簡／推忠協謀佐理功臣光禄大夫吏部尚書同中書／門下平章事上柱国東平郡開国公食邑二千三百戸食実封六百戸臣呂　蒙正

巻六五の末と巻六六の首に「金沢文庫」、各冊首に「身延文庫」の墨印が鈐さる。第一冊の後表紙にある「八十一世／七十四歳日布（花押）」の墨署は、昭和三年この本の修補表装が成った時の署名である。

本書が始めて開板されたのは、既述の如く他の五経正義と同じく、宋の太宗の命により、玉海には「端拱元年三月司業孔維等奉勅校勘孔穎達五経正義百八十巻、詔国子監鏤板行之」「礼記則胡迪等五人校勘、紀自成等七人再校、李至等詳定、淳化五年五月以献」と掲載されている。この記事は本版巻末の列銜と比較するに、「五人校勘」が本版では「六人」が数えられる外は、符を一にする。この本がこの列銜と、欠筆が譲に止って神宗以降に及ばず、南宋の慎敦の廟諱は皆諱まない所から、北宋版と誤解されたが、他の現存単疏本と同様、南宋初紹興年間詔を下して、地方機関に北宋監本に拠る再版を促した時になされた覆刻版である。現存本は七十巻中僅か八巻の零本であるから全体を軽率に断定し難く、また残念ながら版心が破損している

ので刻工名が不明で、判読し得る屠友は他の宋槧本には同名の刻工を発見し得ないので、欠筆・刻工名の上からは本版の刊年を正確に推定し得ない。本版の字様は他の単疏本五経と同様欧柳の間にあって、重厚敦朴の北宋の遺風をとどめているから紹興年間、遅くも乾道前期中の鏈版であろう。巻中間々字様に些少の差異不斉が見られるが、此は印面から見て修刻ではなく、底本にあった補修をそのまま覆刻した結果であろう。北宋版正義は淳化の上梓後その版に訛舛ありとして、至道二年咸平元年等に刊正が加えられ、その後板木の摩滅による修補も重ねられたと思われる。この本は零本ながら、礼記単疏本としては東洋文庫蔵平安鈔本の巻五残巻と共に、天壌間の孤宝として著名である。印記からもと金沢文庫の儲有であったことが知れるが、何時いかなる経緯で身延山に流出したかは不明である。恐らく室町時代であったと推測される。本版と阮元本との異同については安井小太郎撰「身延本礼記正義残巻校勘記」二巻（昭和六年刊）に詳か、影印本に「東方文化叢書第二」（昭和五年東方文化学院刊）、それによる縮印の四部叢刊続編所収本がある。

礼記正義　七〇巻　漢鄭玄注　唐孔穎達疏　宋紹熙三年（一一九二）刊（両浙東路茶塩司）〔宋〕修

（足利学校遺蹟図書館蔵）　三五冊。巻三三―四〇室町期補写。国宝。森志著録。後補茶色表紙（二六×一八・五糎）。裏打修補が施さる。首に孔穎達の「礼記正義序」あり。本文巻首「礼記正義巻第一／(低二格)国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達等奉／(低三格)勅撰」と題す。左右双辺（二一・三×一五・九糎）有界八行、行十六―十九字内外、注小字双行、行廿二字内外不等。版心白口単黒魚尾、「礼記義幾（丁付）」。下象鼻に刻工名、補刻の上象鼻には大小字数が刻さる。巻末に左の紹熙三年刊語跋及び刊刻関係官の列銜がある。

六経疏義自京監蜀本皆省正文及注／又篇章散乱覧者病焉本司旧刊易書／周礼正経注疏萃見一書便於披繹它／経独闕紹熙辛亥仲冬唐備員司庾遂／取毛詩礼記疏義如前三経編彙精加／讎正用鋟諸木庶広前人之所未備乃／若春秋一経顧力未暇姑以貽同志云／壬子秋八月三山黄唐謹識

次に二行を隔てて

進士傅伯庸／進士陳克己／應賢良方正直言極諫科荘冶／修職郎紹興府会稽県主簿高似孫／修職郎監紹興府三江銭清曹娥塩場管押袋塩李日厳／迪功郎充紹興府府学教授陳自強／文林郎前台州州学教授張沢／従事郎両浙東路安撫司幹辦公事留駿／校正官／(隔行一)宣教郎両浙東路提挙常平司幹辦公事李深／通直郎両浙東路提挙茶塩司幹辦公事王汾／朝請郎提挙両浙東路常平茶塩公事黄唐

欠筆は玄眩縣弦鉉敬驚警弘殷匡筐鏡竟胤酬恒貞徵偵禎禎樹讓項勗桓完構購溝搆慎惇敦等の光宗まで及んでいる。修刻は全て宋代で、補版の葉は比較的少い。その刻工名は、（原刻）王恭、王佐、王允、王宗、王茂、王椿、王祐、王祐、王寿、翁祥、翁祐、応俊、魏奇、葛昌、葛異、許詠、許富、許貴、許才、姜

仲、金昇、金彦、阮祐、厳信、呉志、呉宗、呉宝、高政、高彦、施俊、施珖、朱周、周珖、周泉、周彦、徐仁、徐宥、徐進、徐通、蔣伸、蔣信、宋瑜、宋琳、宋春、張枢、張暉、趙通、陳又、陳文、陳顕、陳真、丁拱、鄭彬、鄭復、陶彦、童志、馬春、馬松、馬祐、馬昇、方伯祐、方堅、包端、濮宣、毛俊、毛端、余政、楊昌、李用、李良、李憲、李光祖、李師正、李信、李涓、李仁、李倚、李俊、李忠、陸訓、劉昭、俊、春、宣、彬、宗。（補刻）王渙、王禧、求裕、許忠、賈祚、顧永、顧澄、高文、高異、朱渙、朱春、邵亨、蔣栄、章東、徐珣、徐珙、孫春、張昇、張謙、張栄、沈珍、馬祖、毛祖、余敬、楊潤、李成。巻五五の第八丁の下象鼻に「慶元己未歳雕換」と刻され、刻工名は印されていない。この葉は刊後七年の慶元五年に改刻されたことを示しているが、此はこの葉の板木のみが何かの事故で破損したか或は誤刻を訂正したので、全巻にわたる板木の摩滅損傷上の修補がこの頃既に始ったわけではあるまい。

毎冊首に「足利／学校／之公／用也」或は「足利学校公用」、首冊首に「此書不許出／学校閫外／憲実（花押）」と横書され、毎冊尾に「上杉憲実寄進（花押）」と墨書され、「松竹清人」の朱印が捺されている。巻三三―四〇の四冊、巻四七の末葉は室町の補写、巻二六の末葉裏は欠。この四冊の補写について近藤正斎は当時まだ存していた古表紙や見返或は扉にあった識語から次の如く報じている。この記事は冒頭に「〔蔵書目録〕ニ」と言っている如く、寛政九年九月新楽定編録の「足利学校蔵書目録」の解説文のほぼ全文を引載して雙注の自説を附し、且つ表紙とその見返を図示したものである。

礼記正義　七十巻　全三十五冊

〔蔵書目録〕ニ第一巻ノ表紙ウラニ（序ハ孔頴達ノ序ノミニシテ他ノ叙ナシ紙ハ明本ノ故紙ニ似テ薄シ表紙ハ即チ和紙ナリ表紙又中ノ第一枚ニ長キ朱印アリ）郊特牲内則玉藻此三編欠本経自レ八至レ九正義自三十三一至三四十一ト誌ス上杉憲実ノ手書也松竹清風ノ篆印ヲ押ス四本不足ノマヽニテ寄附アリシ也補本四冊ハ抄本也（按ニ七十巻ノ内三十三ノ四、〔三〕六十五ノ六、三十七ノ八、三十九ノ四十右四冊欠本ナリ憲実寄進ノ時ハ三十一冊ニテ僧一華補写シテ足本トナリシナリ）其首ニ紫府豊後僧一華学士於二武州勝沼一以二印本一令二書写一寄進一度校合畢ト誌シアリ補本ハ附釈音ニテ世ニ南宋刻ト云モノナリ一華ハ豊後ノ万寿寺ノ僧ニテ文明永禄間ノ人ナリ当時コノ正義本世ニナキ故ニ附釈音本ニテ補ヒシト見ユ（以下略）

と。この古表紙はその後、或は明治の改装の時に失われたものであろう。

巻末の黄唐の跋文によって本版が紹熙三年の両浙東路茶塩司の刊にかかることのみならず、前掲の周易注疏・尚書正義や周礼疏がその前に、また論語註疏解経・孟子註疏解経がその後に、その版式款行刻工名が本版と共通しているから、同じく両浙東路茶塩司から校刊されたことが判明する。この跋文には毛詩注疏もこの時刊された如く記しているが、伝存本を見ない。また左伝正義校刊の希望を述べているが、此は果さなかった。しかし代りに慶元六年紹興府から同版式を以て刊刻された（北京図書館蔵）。本版が紹熙年間の上梓たることはその刻工名からも次の如く立証される。本版の原刻の刻工中、包端・李憲が

同じ茶塩司刊の尚書正義の原刻に、王恭・王寿・徐仁・馬松・方堅・毛端・李忠・劉昭がその宋修に、李忠・劉昭（この両名には時代の異る同名異人あり）が同じ周礼疏の原刻、王恭・方堅がその宋修に従事している。此等刻工がいかなる他の宋刊本の雕板に関与したかは既に尚書正義の条で明かにしたから、ここには省略して、他の原刻の刻工が従事せる宋刊本を左に列挙しよう。以下その刻工が当該本の修補のそれである場合は、×を冠する。

寧宗朝越刊八行本論語註疏解経（王祐、許詠、宋瑜、毛俊、李用）、同孟子註疏解経（王祐、許詠、許貴、周泉、宋瑜、丁拱、毛俊、楊昌、李信）、紹興二一年序刊臨川先生文集（×金昇、×金彦）、陳文（同名異人がいると思われる）が紹興間太平聖恵方・同外台秘要方・乾道二年泉南郡庠刊孔氏六帖・淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解・嘉定刊育徳堂外制。紹興間明州刊紹興二八年以後遞修文選（×王允、×王椿、×呉宝、×高彦、×施俊、×周彦、×徐宥、×宋琳、×陳文、×陳真、×楊昌、×李良、×李涓）、紹興刊宋遞修爾雅疏（王恭、楊昌）、紹興刊白氏六帖事類集（施俊）、同別種白氏六帖事類集（宋琳）、同別種白氏六帖事類集（周彦）、紹興刊宋遞修資治通鑑目録（×周彦）、同通典（×周彦、×陳文、×余政、×李師正）、乾道九年刊淮海集（趙通）、淳熙二年厳州郡庠刊通鑑紀事本末（金昇）、同九年江西漕台刊呂氏家塾読詩記（呉志）、孝宗朝刊論衡（周彦、趙通、楊昌）、同元氏長慶集（周彦）、同周官講義（周彦、趙通）、同聖宋文選合集（周珎、周彦、趙通、楊昌、余政）、同北山小集（高彦）、同東坡先生奏議（呉志）、同爾雅（魏奇）、同豫章黄先生文集（×周彦、陳文）、同鄂州刊資治通鑑（徐進）、同所謂眉山七史宋遞修（王恭、×王椿、×王寿、×魏奇、×阮祐、×呉志、×呉宗、×施珎、×周彦、×蔣信、×宋琳、×楊昌、×余政、×李良、×李師正）、同両淮江東転運司刊宋遞修三史（王寿、王恭、王祐、王茂、呉宗、陳真、楊昌、李用）、同贛州刊文選（王恭、高彦、周彦、陳頭、陳真）、淳熙紹熙間眉山刊蘇文定公文集（馬昇）、紹熙二年刊唐人絶句（李用）、嘉泰四年刊皇朝文鑑（徐進、楊昌）、同東萊呂太史文集（呉志、李信）、嘉定六年刊註東坡先生詩（李信）、寧宗朝刊増修互註礼部韻略（王恭、宋春）、同欧陽文忠公集（李信）、同古史（王恭、王寿、呉志、余政）、同晦菴先生文集（王恭、王寿、呉志、馬春、余政）、同晦菴先生朱文公語録（呉志）、同玉篇・広韻（王恭、魏奇、呉志、李倚）、同歴代故事（呉志）、同武経七書（王恭、阮祐、周彦）、同愧郯録（李涓、李仁）、同歴代故事（呉志）、同中興館閣録（王椿、厳信、陶彦、李用、李信）、宝慶三年刊南華真経注疏（李信）、紹定二年刊呉郡志（余政）

原刻の刻工は上は紹興後期から下は理宗初の紹定年間にわたっている。しかしその大部分は淳熙紹熙から嘉定の間に活躍した杭州地区の刻工で、跋文の通り本版が紹熙の刊刻たることが立証される。

修補の刻工中、高文・徐珣・徐珙・邵亨・章東・蔣栄・朱渙・沈珎・毛祖は前掲の越刊尚書正義の宋修に参加しており、既にその条で考証したから、他の修補刻工が参加した宋刊本のみを挙げれば、越刊周礼疏の修（賈祚、高異）、紹熙二年刊唐

人絶句（顧永）、嘉定六年刊註東坡先生詩（馬祖）、鄂州刊資治通鑑（王禧）、寧宗朝刊玉篇（高異、張栄）、同古史（王渙、求裕、顧澄、孫春、馬祖）、同晦庵先生文集（王渙、高異、孫春、張栄、李成）、同重校添註音辯唐柳先生文集（王禧、朱春）、同愧郯録（王禧、朱春、馬祖）、同増修互註礼部韻略（顧永、顧澄、高異、孫春、馬祖、張栄）、同歴代故事（高異）、同武経七書（高異、孫春）、同桿史（朱春）、同広韻（高異、張栄）、同儀礼経伝通解（李成）、同福唐郡刊前漢書（張栄）、宝祐五年湖州刊資治通鑑紀事本末（求裕、張栄）、南宋初或は前期の刊にかかるが寧宗理宗間の遞修には、所謂眉山七史（王渙、王禧、求裕、賈祚、顧永、顧澄、許忠、高異、孫春、馬祖、張栄、李成）、両淮江東転運司刊漢書（王渙、賈祚、許忠、高異）、同後漢書（王渙、高異、孫春、馬祖）、贛州刊文選（王禧、高異）、爾雅疏（王禧）、通典（顧永、顧澄、高異）、説文解字（許忠）。かくの如く補刻は前掲の尚書正義のそれと全く同じで、ほぼ寧宗理宗朝の間に遞次施されたことが判明する。

この本には所々室町期の墨筆の訓点が施され、また江戸期と思われる朱墨の校字が書入されている。

（東京大学東洋文化研究所蔵）　存巻六三〔宋・元〕遞修一冊。新補藍色絹表紙（二七・八×二〇糎）。襯紙を挾んで改装さる。「元西湖書院重整書目」に「礼記注疏」と録されたのは本版と思われ、その板木は元代に入って、西湖書院に移され、修補を加えて刷られた。この本の元修の刻工に熊道瓊と見える。

（京都大学附属図書館谷村文庫蔵）　存巻六四〔宋・元・明初〕遞修　一冊。新補藍色絹表紙（三二・五×二〇糎）。襯紙を挾んで改装さる。本版の板木は明に入って、南京国子監に移管され、補刻が加えられたが、間もなく廃棄されたか焼失したらしく、「明南雍経籍考」には著録されていない。明修には刻工名はなく、元修の刻工に兪栄、茅文彪、茅化。この本は原刻の葉にも殆ど部分的修が加えられ、修は原刻のほぼ覆刻に近い。以上二部は民国になって北京の廠肆に出た、清の内庫大庫より流出せる零本のようである。

本版は他に潘氏宝礼堂旧蔵北京図蔵館現蔵宋元遞修本（季振宜・孔継涵旧蔵、潘録・中版録71 72著録）、同蔵存二八巻（巻三・四、一一―一八、二四・二五、三七―四二、四五―四八、五五―六〇）宋元遞修本、上海図書館蔵巻五零簡（首十葉）がある。北京大学蔵巻一・二共三三葉は同版か。民国十六年潘氏が家蔵本を用いた影印本が出版されている。

附釈音礼記註疏　六三巻　漢鄭玄注　唐孔穎達等疏　唐陸徳明釈音〔元〕刊〔至明正徳〕遞修

（静嘉堂文庫蔵）　三四冊。陸志著録。新補丁子色表紙（二九×一七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二六・八糎。十行本十三経注疏の一。版心上象鼻の正徳の補刊年の箇所が切りとられ、原刻の葉は印面漫漶甚しく、明修の葉が多い。巻一の第二四、巻二第二、巻三第二七、巻一一第一六、巻一二第三、巻一九第二一、巻二一第一一、巻三〇第七・九、巻三一第一四、巻三七第二

一、巻三八第七、巻五六第一五―一七、巻五七第七、巻五九第六、巻六〇第一七・一八、巻六二第一〇葉は補写。巻五一に「文選／楼」の印記あり。詳細は拙著参照。現存本は悉く明遞修本で、国立中央図書館（二部、一は存首四〇巻）・上海図書館（存巻二五）・北京大学（有欠二部）蔵本等が知られる。

校正詳増音訓礼記句解　一六巻　宋朱申撰　〔元末〕刊
（〔建安〕）

（内閣文庫蔵）　七冊。後補黄色表紙（一九・五×一二・三糎）、裏打改装の巾箱本。巻首「校正詳増音訓礼記句解巻之一／（低八格）魯斉　朱　申　周翰／曲礼上第一（下小字双行注）」と題す。左右双辺（一六×一〇・三糎）有界十一行、行廿三字。句末被釈音の標字は白文。版心細黒口双黒魚尾「巳幾フ（或は巳幾）（丁付）」。裏葉左上欄外に耳格あり、篇名が記さる。「佐伯毛利／高標字培松／蔵書画之印」「秘閣／図書／之印」等の蔵印あり。

四庫未著録。四庫収入の同著者の周礼句解・春秋左伝句解・孝経句解と共に申の句解の一で、郷塾課蒙の注釈書である。これと同版本の所在を他に聞かぬが、国立中央図書館蔵の宋末元初間建安刊朱申撰「音点礼記詳節句解」一六巻（静盦・拙著著録）と比較するに、本版はそれを巾箱本となし、注末に音訓を増益せる後出本たることが判明する。ちなみに傅増湘は本書を永楽大典より采輯せる四庫館原本を「輯本朱申礼記句解跋」と題して次の如く述べている（「蔵園羣書題記」続補遺収）。

此四庫館原本蓋乾隆三十八九年戴東原従永楽大典各韻中采輯而得並依礼記篇目排比成書今以大典目録証之如弓儀居喪各字簽出巻数与目録悉合惜序跋佚去不克依原書編定巻数耳攷朱申所著有周礼句解十二巻四庫拠天一閣蔵本著録有左伝句解三十六巻列於四庫存目孝経句解一巻刻入通志堂経解中以此推之是朱氏於羣経皆有句解今所存者祇此数耳惟左伝孝経二書皆題元人四庫提要言李心伝道命録有淳祐十一年新安朱申序結銜為朝散大夫知江州軍州兼管内勧農営田事余更考宋刊輿地広記巻末亦有淳祐庚戌郡守朱申重脩一行疑著書者当即是人存目及銭氏補志題作元人者誤也至此書既采輯成書而四庫未収存目亦不載頗難索解余曾見杜諤春秋会義一書既経館臣編竣復以精楷繕録正本装潢成帙並標題四庫全書然迄未見録蓋当時仰承上旨急於観成程期厳急衆手雑進以致或編定而不及繕清或繕完而未経進覧巻帙既富罣漏遂多非有権衡去取於其間也此書旧蔵徐梧生監丞家後帰其壻史太史吉甫余曾就其家観之（略以下）

礼〔記纂言〕　三六巻　元呉澄撰　元元統二年（一三三四）跋刊

（静嘉堂文庫蔵）　三二冊。陸志・陸続跋著録。艶出桃色表紙（三〇・五×二一・七糎）、襯紙が挾まる。首に「小戴記篇目／（低七格）臨川呉澄幼清叙次」を置き、その末に低一格を以て自序（末に「右文正公蚤年序次小戴記之正文而書其後如此今載其語于纂言之首庶者有所攷云」の双行小字注記あり）が附さる。本文巻首「礼／（低一格）小戴記（隔九格）臨川呉文正公纂言／（低二格）呉礼第一」、毎巻末「右記（篇名）幾節」と題さる。巻末に四格を

低して門人呉尚の跋あり。左右双辺（二三・九×一七・三糎）有界十行、行廿二字、注低一格単行大字、音注小字双行。版心細黒口双黒魚尾「篇名巻幾　（丁付）」。「汲古／閣」（白文）「虞山毛／氏汲古／閣攷蔵」「毛晉字子／晉一名鳳／苞字子九」（白文）「毛晉／之印」（白文）「字／子晉」「毛」「鳳／苞」「毛晉／私印」（白文）「字／子晉」（白文）「汲古／閣印」（白文）「子晉／氏」（白文）「汲古／主人」「一名／鳳苞」「臣／晉」（白文）「汲古閣／図書記」「子／晉印」（白文）「字／子九」「海虞毛／表奏叔／図書記」「毛／表」「毛表／奏叔」（白文）「毛表／印信」（白文）「虞山毛／表奏叔／家図書」（白文）「東呉毛／表図書」「毛表／私印」（白文）「毛表／之印」（白文）「奏／叔」「毛／表」（白文）「汲古／后人」（白文）「東呉毛／表図書」「毛奏／叔氏」「中呉毛奏叔／収蔵書画印」「毛奏叔／読書記」（白文）「古虞毛／氏奏叔／図書記」「毛／表」「字／奏叔」（白文）の汲古閣の毛晉・表の父子の印記が墨々と列り、ついで「季振宜／蔵書」「御史／之章」（白文）「季印／振宜」「滄／葦」等の印、汲古閣より季振宜に渡り、その後「道光中帰于上海郁氏余从郁氏得之」（陸続跋）と。

巻末の門人呉尚の刊書跋に「尚積年侍臨川先生講下耆聞先生曰吾於礼記纂言凡数易藁蓋亦多所発明（中略）藁成尚数請以録諸梓得命遂与先生之甥周濂集同門諸友暨好義之士相与成之先生手自点校未及畢而先生捐館矣餘篇先生之孫当対問考訂始至順癸酉之春畢於元統甲戌之夏因書之成遂志歳月而所聞師説并記于後云」と。よって本書の成立の経緯と刊年が知られ、且つ四庫全書が「案危素作澄年譜、載至順二年、澄年八十四、留撫州郡学、礼記纂言成、而虞集行状、則称成於至順四年、即澄卒之歳、其言頗不相合」と提出した疑念も氷解される。本版は大字堂々、この本は早印の精品である。上海図書館蔵本（有鈔配）は恐らく同版であろう。

礼記〔集説〕　一六巻　元陳澔撰　元天暦元年（一三二八）刊
（建安・鄭明徳宅）

首に至治壬戌良月既望後学東陬沢陳澔序の「礼記集説序」の自序及び「礼記集説凡例」を冠す。本文巻首「礼記巻第一／（低八格）後学東陬沢陳澔集説／（低二格）曲礼第一（下小字双行注）」と題す。巻一尾題後の裏葉に「天暦戊辰建安／鄭明徳宅新刊」の双行木記あり。四周双辺（二〇・一×一二・四糎）有界十一行、行廿一字、注小字双行。版心細黒口双黒魚尾、「礼記集説幾（或は「礼記幾巻」、或は「礼記幾」）（丁付）」。

瞿氏鉄琴銅剣楼所蔵元刊本（瞿目・瞿影著録、今北京図書館蔵か）はその書影と比較するに本版の覆刻後出本のようである。本版は本書の第一次刻本と思われ、後に分巻を三十巻或は十巻に変えて行われた。

（内閣文庫蔵）　六冊。後補淡香色表紙（二五・五×一四・四糎）。裏打改装本。「昌平坂／学問所」「天保丁酉」「浅草文庫」「大学／蔵書」等の印記あり。経注文に朱筆句点が附され、また巻一の首二丁の経文には朱筆句点や室町期の墨筆の古訓点が詳細に附され、また巻一の前半には別筆で藍筆の句点も書入されているが、餘巻は巻四以外殆ど藍筆の句点で、少しく朱引朱圏点が

見られる。巻三までは藍・朱・墨の三様三手を以て按、字彙、正義云、湛子曰、大全、金華応子曰、疏、字佺、愚按、学佺按、蛟按の藍筆、鄭氏、鄭注、全経云、註疏云、正義云、説文、疏云の朱筆、全経云、疏云、鄭注、唐孔顥達疏云等の墨筆による旧注・新注・字典等の引録と按語を含む字義注や校注の書入が欄外或は押紙になされ、室町末江戸初間の禅林の礼記講学の状況をよく示している。しかし巻四以後は書入は少くなり、藍筆のみである。

（宮内庁書陵部蔵）　四冊。新補淡縹色行成表紙（二五・八×一五糎）、裏打改装本。凡例が序の前におかる。「秘閣／図書／之章」等の印記あり、御書籍来歴志著録。室町時代の朱点朱引、経文には朱筆のヲコト点（明経点）返点送仮名が附され、朱・墨の二手による陸徳明釈文、鄭注、疏、春秋伝、春秋説、国語等が引録され、その多くは鄭注の抄録で、また或本による校注が書入されている。加点された訓点は陳澔注によるものではなく、鄭注本に加えられた明経点を移写したものである。

（足利学校遺蹟図書館蔵）　五冊。新補香色覆表紙（二五・五×一五・八糎）、裏打改装本。巻十二の首十一葉及び巻十四の首葉欠。毎冊首書眉に「下野州足利庄学校常住也」（第四冊欠失、第五冊首五字欠損）と横書され、次の寄進識語が記されている。

（巻二末第一冊末）　延徳二年五月廿二日　能化肥後之産天矣
（巻五末第二冊末）　延徳二年壬午五月廿二日　建仁寺大竜菴一牛蔵主寄之　能化肥後之産天矣
賀州之産洛建仁寺之僧一牛寄之
（巻九末第三冊末・巻一三末第四冊末）　延徳二年壬午五月廿二日　建仁寺大龍菴一牛蔵主寄之　能化肥後之産天矣
（巻一六末第五冊末）　能化天矣御代洛之建仁寺大龍庵一牛蔵主寄置長門之西燕誌之

即ち足利学校第二世庠主天矣の代に来学の僧一牛が寄進したもので、一牛はこのほか「易学啓蒙通釈」の鈔本も寄贈している。この本には全巻（注は巻二まで）朱点朱引が附され、経文には朱筆のヲコト点（明経点）返点送仮名声点（間々墨筆も混ゆ）が附され、往々正義曰等の書入がなされている。この訓点については、巻二末（第一冊の裏表紙の見返）に前記奥書とは別筆を以て、

至徳二年六月十一日以五条大外記家本移点了　〔其カ〕某本之奥書曰／永和元年五月二日以此本候　禁裏御読訖／清原良賢カ
天文廿二年勘之百七十二年也

と記され、永和の年紀の左側の傍記は第七世庠主九華の筆と思われる。経文の点は前掲の書陵部蔵本の訓点とほぼ同系で、清原家鄭注加点本から移点したものである。従ってこの奥書を以て足利衍述氏（「鎌倉室町時代之儒教」一九六頁）以下の説く如く、良賢が礼記について本書を使用し、新注を好んだという証拠と速断することはできない。この本は印面が比較的美しい。

礼書　一五〇巻　宋陳祥道撰　〔宋慶元〕刊元至正七年（一三四七）修（福州路儒学）

首に雍虞集の「重刻礼楽書序」、至正七年龍集丁亥八月三日後学余載謹序の序、その末に福州路儒学の校勘督工人銜名、次

に「進礼書表」、「礼書序／左宣義郎太常博士臣陳祥道上進」の自序、建中靖国元年正月二十七日尚書礼部牒、次に「礼書目録／左宣義郎太常博士臣陳祥道上進」がある。本文巻首「礼書巻第一」、毎巻次行より低二格子目を列して本文に接属する。ただ巻二一、四一、六一、八一、一〇一等は次行に「左宣義郎太常博士陳祥道上進」と署する。左右双辺（約二一・八×一六糎）有界十三行、行廿一乃至廿二字、注小字双行、行廿七字乃至卅字、版心白口双黒魚尾、「礼書幾巻（或は礼書幾フ或は礼幾フ）（丁付）」。間々上象鼻に大小字数、下象鼻には刻工名がある。明修の版心は或は小黒口を混え、字数刻工名のない白口には最も新しい修刻の葉がある。刻工名は、伯起、伯、范順、許宗厚、呉丑、呉、卞玉、卞、玉、文、上、才、成、祐、甲、天、国、厚、石、六、七、目、王、貝、士、元、川、寿、希、徳、山、仲、君、吉、右、后、周、仁、朱、志。補刻が多いので、欠画は極めてまちまちで補修の版でも欠く所もあり、玄弦敬筐懲溝等の字に欠筆が見られ、桓の字には淵聖御名と注する所があり、孝宗の慎字以下は欠筆がないようである。

本版は序によれば元至正年間趙宗吉が後掲の陳賜撰「楽書」と共に福州路儒学に命じて重刻せしめたと云うが、陸志・適志等が指摘する如く、実際は南宋慶元刊の板木を使用した修補である。しかし宋刻の残存部分は僅少で、無きに等しく、殆どが至正の雕刻にかかるから、実質上は至正刊と言ってよい。その板木は明代南監に移され、明南雍経籍考に「礼書一百五十巻好板一四四十八面」と。現存本の殆どは明南監の修補印行本であって、漫漶の所が多い。元修の加わらない南宋慶元刊本は現在発見されていないようである。

（静嘉堂文庫蔵）　至明遞修　一〇冊。陸志著録。後補茶色表紙（二六・五×一八糎）。首目の福州路儒学校勘督工衛名の次に慶元の陳岐と林子冲との両跋があるが、此は「楽書」の跋が混入したもので、また建中靖国牒の次にも楽書序一葉がまぎれている。「厳蔚／豹人」「厳蔚」（白文）「二酉斎蔵書」「五硯／楼」「袁氏／又愷」「廷檮／之印」の印あり。巻一二九の首二丁、巻一三九の第三・四丁、巻一四七の第七・八丁、巻一四八の第七丁欠。陸志には季滄葦等旧蔵の別蔵本を著録するが、静嘉堂文庫には入っていない。

（東京大学東洋文化研究所蔵）　至明初遞修　二〇冊。巻一―七補写。傅目著録。新補藍色絹表紙（二七・八×一八・四糎）。襯紙を挟んで改装。首には補写の目録はあるが、序跋は補写されず、巻中少しく欠丁あり。「雙鑑／楼蔵／書記」（白文）「傅印／増湘」「沅／叔」「雙鑑楼／攷蔵宋本」「書／潜」「傅増湘／読書」「沅叔／金石／文字」「蔵／園」「雙鑑／楼」「雙鑑／楼主／人」（白文）「増湘／私印」（白文）「傅印／増湘」（白文）「雙鑑楼」の印記あり。

（大倉集古館蔵）　至明遞修　三二冊。新補絹表紙（二九・五×一九・五糎）、裏打を施せる金鑲玉改装本。原料紙縦二六糎。首は進礼書表・自序・目録のみで、至正の序跋を欠く。かなり後印で明初修の版面もかなり漫漶となっている所がある。巻一五末二丁、巻二四首二丁、巻二九末二丁、巻三八首二丁、巻四八

首二丁、巻五八第三・四丁、巻六二首二丁、巻六八第三丁、巻七六第二・四丁、巻一〇三末丁、巻一二九第一・二・五丁、巻一三九第三・四丁、巻一四七第七・八丁、巻一四八第七丁は欠葉。首冊前副紙に「道光九年二月十四日／賜南書房翰林程恩沢」の識語あり。「賜書」「氏／程恩／沢蔵」(白文)「竹景／盦」「譚錫慶／学書宋板／書籍印」の蔵印あり。清の程恩沢、清末民初の董康等旧蔵。

(東洋文庫蔵) 存巻八―二四 至明遞修 三冊。後補古丹表紙(二五・八×一九糎)。襯紙を挾める改装本。

(東京大学附属図書館蔵) 存巻六六―七四 至明遞修 二冊。後補金切箔散し艶出臙脂色表紙(二五・九×一九糎)。襯紙を挾める改装本。

本版は他に、中央図書館(二部)・故宮博物院(零本)蔵本・北平図書館原蔵本(残本三部、旧京75―77著録、旧京80著録、以上拙著著録。旧京78 79著録と思われる存二七巻本は台湾に移されていない)・北京図書館・上海図書館・南京図書館(丁志盦影著録)・北京大学蔵本や張志・瞿目・楊録・劉影・莫編著録本等がある。

儀礼経伝通解 三七巻続二九巻 宋朱熹撰 (続)黄幹撰 楊復重訂 宋嘉定一〇年(一二一七)刊(南康道院)(続)嘉定一六年(一二二三)刊(南康)〔宝祐二(一二五四)年(南康・白鹿洞書院)〕・元元統三年(一三三五)・〔明〕遞修

(東京大学東洋文化研究所蔵) 八五冊。傳目著録。新補茶色表紙(二五×一六・五糎)、襯紙が挾まる。首に嘉定癸未孟秋上澣四明張虙識の跋(版心に「跋」と題さる)、次に「儀礼経伝目録」「儀礼集伝集註目録」、次に朱熹の「乞修三礼劄子」、次に低二格を以て嘉定丁丑八月甲子日孤在注血謹記の朱子の男在の後記あり。続は首に「儀礼経伝通解続目録」(第二行に「喪祭二礼元本未有目録／今集為一巻庶易検閲耳」の双辺木記あり)、目録後に元統二年六月日刊補完成の修補年紀と刊校勘督校列銜名が刻され、その巻一六喪服図の首には「儀礼喪服図式目録」、図式の末に嘉定辛巳七月日門□(人)三山楊復謹序の楊復序がある。本文巻首「儀礼経伝通解巻第一／上冠礼第一(距三格)家礼一之上」、朱子未定の巻二四王朝礼一之上以下は「儀礼集伝集注巻第幾」、続は「儀礼経伝通解続巻第幾」と題する。左右双辺(一八・三×一三・五糎)有界七行、行十五字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「仪礼巻幾(或は続 仪某礼幾)(丁付)」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。元修の版心は線黒口或は白口にして単魚尾も混え、明修は粗黒口或は少し白口を混え、元・明修とも正編の版心は「儀礼巻幾」と題する。元修の字様はほぼ原刻の覆刻であるが、原刻と見まがう覆刻とかなり崩れたものとの優劣の差が見られる。刻工は、(宋刻)王文、王圭、王啓、啓、王全、王、翁遂、遂、翁定、定、葛文、弓万、万、弓友、弓、龔友、共友、金有、虞全、虞丙、丙、虞庠、虞辛、辛、虞生、阮才、才、阮明、胡杲、杲、胡圭、胡桂、呉元、元、呉、呉輔、輔、高謙、謙、蔡延、蔡祥、祥、子信、邵徳

昭、肖浩、肖昊、章信、信、錢弼、陳永、陳昌、陳有、有、陳生、生、陳全、陳金、金、陳元、陳新、陳申、申、陳正、正、沈允、馬忠、馬、范宗海、范生、范仁、范淮、范金、范圭、范、彭達、戊?丙、游忠、尤忠、余千、楊明、葉正、藍?万、李成、成、李正、劉立、劉伸、劉申、劉生、劉斌、劉才、劉元、劉永、劉明、劉方?、田、才、昌、采、文、伸、永、元、桂、延、申、吉、(元修)因三秀、于辛、袁仲珍、袁珍、袁仲、袁忠、忠、王栄、王夫、王細孫、王細、王付、應重三秀、應三秀、應子華、何九万、何建、何宗十七、何宗十四、何、季辛一、弓華、建安虞吉父、吉父、均佐、虞成父、成父、虞万全、惠新、惠栄、圭之、胡明之、明之、胡明、胡文宗、文宗、胡興、興、胡昶、胡慶、胡宗、胡、呉仁、呉亘、亘、呉、黄允中、允中、黄允、黄宥、黄、洪阿来、蔡中、蔡秀、斉明、子晟、秀発、徐泳、徐良、徐文、徐立、章文郁、章文一、章演、章明遠、明遠、章霖、霖、章亜明、章、蔣蚕、蔣七、蕭漢杰、新呉蕭杰、蕭漢賢、漢賢、蕭賢、賢、辛文、盛久、孫再、単呂、仲珎、張三、陳日、陳日裕、陳琇、琇、陳慶、陳仁、陳明、陳明二、陳文玉、陳、沈一、沈寿、杜良臣、杜良、滕太初、滕慶、任亮、范寅、寅、范堅、范、潘用、潘佑、謬珍、方景明、彭杰、茅化尨、夸陳秀、毛輝、毛、輝、毛文、兪栄、熊子、熊、友山、余才、才、楊春、楊十三、李興、李盛、盛、李耑、李、劉炤、炤、劉森、劉桂、劉、奚正、芦垚、元、仁、友、秀、中、生、渚、彬、亮、啓、信、興、成、杰、英、達、盛、明、珍、達、祐、昌、蘇、杲、桂、金、柳、仁。この本は明修の葉の版心の下象鼻が往々切り取られ、別紙で襯補され、或は墨で粗黒口に補筆された所が存し、廖賓、廖、載彝、秦淳、孫欽、孫、留成郭等の名が見える。この本より後印の中央図書館蔵本によればこの明修の鈔者刻工は監生秦淳、秦、監生戴彝、戴、監生鄧志昂、監生孫欽、孫、監生留成、監生廖賓、寥、監生廖志、志、監生陳浚、人、郭となっている。欠画は玄朗殷匡筐恒貞頵徵樹讓桓慎惇敦の字に見られるが、寧宗の郭惇等の字は避諱をなしていない。巻五第一五・一六丁、巻七第三二、巻八第三八、巻二一第二七、巻二三第一六、巻三五第二六、巻三六首、統目第一七・一八、統巻一第一一・三六・五〇・五一・五八・一五三、巻二第三五・五九、巻三第三〇、巻六第七一、巻七首、巻一一第三二・三六、巻一四第一六・一七、巻一五第四八、巻一六第一〇七・一四一、巻一九第六一・六八、巻二〇第一三・二三、巻二四第五九・八六、巻二五第一三・三〇五・三一〇、巻二七第一四六、巻二八第一一七、巻二九第二八丁は欠丁。巻二六、統巻五第一〇二・一〇四、巻二九第三四丁は補写。巻中往々誤綴がある。紙背に所々大方形の朱印(恐は官印)が捺され、僅かながら墨筆の校合書入が存する。「任栢川万巻/楼書画之印」(白文)「雙鑑/楼」「雙鑑/楼蔵/書記」(白文)「江安傳/沅叔攷/蔵善本」「沅/叔」「蔵園/秘笈」「増湘/私印」(白文)「龍龕精舎」「沅叔/金石文字」「傳増湘/読書」「長春/園生」「傳沅叔大書記」「沅叔/審定」「雙鑑/楼主/人」(白文)の蔵印あり。

序跋によれば、本書は初め「儀礼集伝集注」と題したが、朱

子が晩年今名に更定し、朱子歿後男在が嘉定十年南康道院（江西省）に於て、家礼・郷礼・学礼・邦国礼共廿三巻は晩年の親定本を以て、巻廿四より卅七に至る王朝礼は未定草創本を旧名を以て刊刻した。続編の喪祭二礼については朱子が門人黄幹にその編を属し、黄幹は嘉定十二年喪礼を完成し、次で祭礼に着手したが成らずして、稿本を門人楊復に授けて世を去り、復がその重修に力めた。嘉定十六年張虙が南康に守として来り、喪礼及び祭礼の稿本を南劍の陳宓に得て、此を続刊して前と併せて完成に至ったものである。

元代にはその板木は「元西湖書院重整書目」に著録されている如く、西湖書院に保管され、修補が加えられた。その修補は続目録の後に存する補刊記の列銜に「元統三年六月日刊補完成後学葉森書／儒司該吏高徳樊道佑／所委監工鎮江路丹徒県儒学教諭楊文龍／江浙等処儒学提挙司吏目阿里仁美／登仕郎江浙等処儒学副提挙陳旅／承事郎江浙等処儒学提挙余謙」とある如く、元統三年江浙等処儒学でなされたものである。明に入ると板木が南監に移され、更に逓修を重ねて印行され、明南雍経籍考に「儀礼経伝通解二十三巻好板三百二十面壊板四百六十面」「儀礼経伝続通解二十九巻」と録されている。同版本は他に中央図書館（拙著著録）・北京図書館（存巻一—五、二二—二七、瞿目瞿影著録。存王朝礼四・五・続祭礼九、涵録著録）・南京図書館（続なし、丁志鳌影著録）蔵本があり、皆明修本である。天目続巻八元版経部に「儀礼経伝通解十二函十二冊」「儀礼経伝続十二函十二冊」が著録されている。今その存佚は詳かでないが、ただその中の正編の巻六—八、二七—二九の六巻二冊の中央図書館蔵零本二冊（静盦著録）はその蔵書印からこの天禄琳琅蔵本の僚本であることが判明し、それを見るにその本は天目続が記す如き「元翻宋槧」に非ず、実は明正徳間杭郡刊本である。

その正徳刊本は正徳六年劉瑞序によれば南京国子監刊、即ち本版が漫漶せるによって、郡の教授等をして讎校付刻せしめたものである。その本には嘉定十六年張虙跋、同年楊復祭礼後序、同年陳宓喪祭二礼後書、楊復喪祭二礼目録後序が附されている。この中で楊復の両跋と陳宓跋は本版続篇の現存完本たるこの本及び中央図書館蔵の二本には共に附されていない。ちなみに中央図書館本は巻二九の後半は欠丁、且つこの本に比し、後の修が加わり、続目録後の元統の列銜がない。この三跋（三跋は乾隆十八年梁万方校刊本にも引載）は内容から案ずれば、元来本版にあったものと思われる。両本とも逸失したか、或は元明逓修の間に削除されたのであろうか。

清の張金吾の「愛日精廬蔵書志」巻四に「儀礼経伝通解続二十九巻影写元刊本」が著録され、「宋黄幹撰巻十六至末則楊復所重修也此本従元元統補刊本影写中多闕文（中略）目録後有元統三年六月日刊補完成一行後列銜名五行」と。この記述の限りでは一応この本と同版のように見える。しかし張志にはまたその本に附されてあった宝祐癸丑冬日南至後学金華王佖端拝敬書、是年〔宝祐二年〕閏月旦日門人迪功郎南康軍軍学教授丁抑端拝敬書、是歳重九日後学崑山謝章拝手謹書の三跋の全文が掲載されている。この三跋は本書現存本のどの本にもなく、ただここに見ら

れるのみである。王佖（号は敬巖）の跋は重刻の事情を

嘉定間嗣子侍郎公在方刻之南康郡学後来勉斎黄公続成喪祭二礼亦併刻焉而書監竟取之以去曾幾何年字画漫漶幾不可読識者病之蓋懼此書之無伝也佖乗軺東江因敬本司発下之券尚存遂即籌度命工重刻爰首諮於堂長饒伯輿甫聰契所懐議以允協且輟餐供餘鏹以助遂嘱其事於教官丁君抑而任其讎校於洞学之善士邦侯傃軒趙公希悅亦佐其費復幹旋本司所有以添給之志意既同始克有成迺就置其板於書院庶幾蔵之名山或免湮墜其経之営之亦甚艱矣然朱子所成三礼止二十餘秩而勉斎所続則又倍之厥後信斎楊君始刪其祭礼之繁複稍為明浄今喪礼則用勉斎所纂祭礼則用信斎所修且使六藝之廃欠者庶乎可備朱子平日之盛心庶乎可伸矣

と述べ、また丁抑の跋に

敬巖王先生詳刑江左簿書獄訟之暇首以是書為急豈非以刑者輔治之法礼者出治之木刑能使人遠罪而已礼有以使民日遷善而不自知三復朱子之言此敬巖所以拳拳而不容已一日貽書嘱抑曰儀礼一書文公平生精力尽在於此雖喪祭二礼成於門弟子之手然皆定於師友平日之講論昔板康廬今帰秘府吾欲掇鋟供之餘補遺書之闕子其為我程督之抑雖晩学奚敢不力於是択郷国之通儒讎校其舛訛命庠術之端士董正其工役始於癸丑之仲春成於甲寅之季夏綱目詳備篇帙整明使一代鉅典復為蔵山之秘宝自非羽翼斯文惠顧後学心考亭之心者念不到此

と。即ち嘉定十・十六年南康学宮刊の本書の板木はその後中央政府の機関に移管されたが、年久しくして漫漶識読し難くなったので、王佖の首唱により、南康軍学教官丁抑が白鹿洞書院の諸士と讎校を加えて、郡や篤志家の捐金を得て宝祐元年癸丑に始って翌二年甲寅に板刻を成就し、その板木を朱子が南康軍守の時再興したゆかりの白鹿洞書院に置いてその伝を願ったというのである。問題は㈠その重刻が文字通りの全巻新刻の再刊であったのか、㈡秘府から旧板を南康にもどして、漫滅の板面のみを改刻せる修補であったのか、ということである。

㈠の新刻とするならば、現存の嘉定刊本というのは、㈠嘉定刊本に非ずして、実は宝祐二年白鹿洞書院刊の板木が元に白鹿洞書院から西湖書院に移された元・明逓修である、しからざれば㈡宝祐の白鹿洞書院新刻の板木と関係なく、嘉定刊の旧板木が秘府から西湖書院・明南監に移り、逓修が加えられたかである。但し元統三年の刊補列銜がどちらにもつく筈はないから、㈠の場合㈠㈡のどちらかでなければならぬ。㈡修刻とするならば、白鹿洞書院に置かれた板木は元に西湖書院に移され、本版は嘉定刊宝祐・元・明逓修となる。白鹿洞書院刊或は修と確認し得る本が存在するならば、この疑点は解消し得ようが、残念ながら伝存していない。とも角宝祐年間南康で本書の重刻乃至は修刻が行われたことは上の三跋によって明かである。白鹿洞書院版は現在発見されないが、清版として乾隆十八年梁氏聚錦堂刊本と共に流布している康熙間禦児呂留良宝誥堂刊本が白鹿洞原本によると言われるのは、同本は首に嘉定十六年の張虙序を「旧序」と題しておき、王佖等三跋はなく、内容は嘉定刊本と同種であるが、ただ扉に「禦児呂氏宝誥堂／重刻白鹿洞原本」

の両行木記があるに基づく。同本の早印本には白鹿洞本の事情をやや知り得る留良の序か跋が元来あったかと思われるが、留良は雍正の時闔門禍に遭い著述が毀壊されているから、現存本には削去されたのかもしれない。

本版は元修の字様もほぼ原刻を覆刻し、また印面には一部漫漶の所があるが、大部分は印面の格差が左程顕著に目立たないので原と修、宋刻と元刻とがなかなか判別し難いが、仔細に検討すれば宋刻と思われる字様にも夫々些少の差異が見られる。しかし此は修なのか版下書の巧拙の差かの識別が困難である。とも角刊年と修年とを刻工名から検討してみよう。正の嘉定十年と続の同十六年とは六年の距りであるから、両者の刻工は殆ど共通している。此等刻工が従事せる他の宋刊本は次の通りである。例によりその刻工が該本の修補の場合は名に×を附する。乾道九年高郵軍学刊紹熙修淮海集（劉明、或は修か）、淳熙間撫州刊礼記（翁定）、同嘉定修春秋経伝集解（王全、翁定、劉永、劉明）、淳熙八年尤延之刊文選（金有、葉定）、淳熙九年江西漕台刊呂氏家塾読詩記（彭達、劉永）、孝宗朝刊聖宋文選合集（劉武）、同単疏本周易正義（李正）、同贛州刊文選（弓友、龔友、阮明、陳新、葉正）、同蘇文定公文集（劉申、李正）、同東坡先生奏議（陳正）、同両淮江東転運司刊史記（王全、楊明）、同鄂州刊資治通鑑（呉輔、劉才）、同所謂眉山七史（李成、李正）、同史記集解（阮明）、紹興刊劉賓客文集（王文、楊明）、同資治通鑑目録（王文、阮明、陳新、楊明）、同史記集解（陳全）、同通典（李正、陳新）、同国語（楊明）、同明州刊文選（陳元）、紹興乾道間越刊周礼疏（王全、楊明）、同尚書正義（王圭）、乾道刊豫章黄先生文集（彭達）、紹熙三年越刊礼記正義（王全、陳新、楊明、李正）、嘉泰四年新安郡斎刊皇朝文鑑（共友）、嘉定六年淮東倉司刊景定三年修註東坡先生詩（阮明）、嘉定九年興国軍学刊春秋経伝集解（胡桂、陳金、陳正、蔡祥）、同春秋左氏音義（范仁、劉元、劉永）、同十二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目（共友、虞丙、高謙）、寧宗朝刊晦庵先生文集（翁定、陳生、陳元、陳正、陳新、余千、葉正、李成、劉永）、同晦庵先生朱文公語録（陳新、葉正）、同武経七書（王文）、同欧陽文忠公集（陳全、陳元）、同周易玩辞（劉生）、同育徳堂外制（劉生）、同東坡先生和陶淵明詩（呉輔）、同福唐郡刊両漢書（葛文）、同臨安府陳宅書籍舗刊碧雲集（范仁、劉生）、宝慶三年刊南華真経注疏（呉元、陳新、劉生）、淳祐十年福州刊国朝諸臣奏議（陳元、葛文）、宝祐五年湖州刊通鑑紀事本末（方得時）。葉正は淳祐九年刊毛詩要義にも見えるが、初出は淳熙年間であるから、年代が距りすぎ、阮明と共に同名異人が存すると見ねばならず、嘉定年間の葉正はそのどちらと看做してもよい。

この様に本版の刻工は孝宗中期から理宗朝の景定年間に亙り、上記の紹興淳熙間刊刻書の修補は主として寧宗理宗朝間になされているから、本版の刻工の活躍期は率ね寧宗朝から理宗朝前期に集中している。従って本版が嘉定十年十六年の刊たることは容易に推測される。孝宗朝後期の刻工にしても宝祐年まで活躍することは殆ど不可能であるから、本版を宝祐二年白鹿洞書院の刊刻とは看做し得ない。また嘉定十・十六年（一二二

三）原刻の刻工が年代の明かな下限たる景定三年（一二六二）にも雕板に従事することはあり得るが、宝祐を修とする方がより自然である。嘉定刊本の外に宝祐白鹿洞書院重刊の推測は成立し得る。しかし張金吾蔵影写原本にもこの本にも元統刊補列銜がついているのであるから、その刊補記の葉はそのどちらかが竄入であることが明かにならざる限り矛盾する。従って現存の資料の上からは全体としては本版を嘉定刊宝祐修と看做すのが穏当な解釈とせざるを得ない。本版の元修の刻工は煩を避けて各書名を列挙することを省くが、西湖書院に板木が移った宋版公使庫諸本の修の刻工名と一致している。

儀礼経伝通解続巻祭礼　一四巻　宋楊復撰　〔元〕刊

（静嘉堂文庫蔵）〔明初〕印　一五冊。陸志・陸続跋著録。後補淡茶色表紙（二四・五×一七・三糎）、金鑲玉装、原料紙縦二三・五糎。首に、紹定辛卯七月望日三山楊復謹序の「儀礼経伝通解続序」、門人鄭逢辰序（中間及末欠丁）、逢辰進祭礼二十帙儀礼図十四帙表（首欠丁）、淳祐六年十一月中書劄附淳祐七年四月十三日贈復文林郎勅、「儀礼経伝通解続巻祭礼目録」（巻一一の祭礼五十四と六十六の中間欠丁）を列して、首目一冊となす。巻一首四丁を欠き、巻首「儀礼経伝通解続巻第幾」（巻二は続以下の字なし）と題す。左右双辺（一八・五×一三・八糎）有界七行、行十五字、注小字双行。版心白口双黒魚尾「祭礼巻幾　日（月…封）幾（丁数）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に、允中、中、袁仲珍、袁仲、仲、袁、漢興、興、吉父、蕭大栄、大栄、肖漢杰、漢杰、肖杰、余才、才、文、王、用、亮、子、賢、啓、琇、于、辛、達、信、生、呉、虞、成、劉、陳、銭、章の刻工名あり。玄弦恒貞譲桓敦の字に間々欠筆が見られる。上記の首目や巻一の首の欠葉の外、巻三は首五丁を残して他は欠逸し、その他各巻にかなりの欠丁がある。「天籟閣」「項墨林／鑑賞章」（白文）「墨林／秘玩」「昌」「南陽／講習堂」の印あり。明の項元汴旧蔵本。

前の南康学宮の嘉定十六年刊の続編は祭礼は黄幹の未定稿を一応楊復が整理修訂せる稿本を梓に附したものであった。本書は幹の門人の楊復が自序に「南康学宮旧有家郷邦国王朝礼及張侯慮続刊喪礼又取祭礼稿本併刊而存之以待後之学者故四方朋友皆有祭礼稿本未有取其書而修定之者顧復何人敢任其責伏自惟念歯髪浸衰曩日幸有所聞不可不及時伝述竊不自揆遂拠稿本参以所聞稍加更定以続成其書」と述べた如く、復が幹の稿本に拠って増補修定を加えたものである。彼が祭礼を十三門十三巻に分ったのに対し、此は八十一門十四巻となし、両者共通する所頗る多いのは勿論であるが、別個の新編と言うべきである。

本版は従来宋淳祐刊本とされているが、その字様版式は前掲の嘉定刊本の元元統三年修のそれと全く同一にして、またその刻工の允中・袁仲珍・袁仲・余才等殆どは同本の元修刻工と共通し、吉父は元興文署刊資治通鑑の刻に参加している。従って本版は嘉定刊本に修補を加えた元の元統三年頃に恐らく同じ江浙等処儒学に於て刊刻されたものであろう。白鹿洞書院版の王応跋に「祭礼則用信斎所修」とある所から、その際この新改編

本が刊刻されたとの推測説もあるが、白鹿洞本を原本とするという呂氏宝誥堂本は祭礼は嘉定本と同じ黄幹稿楊復修の旧本である。本版は続巻第幾と題し、巻一から始って、喪礼と連続する巻次ではないから、喪礼と併せたものに非ずして、祭礼のみの単行の出版たることは明かである。本版は元刻にしては単なる惰性に非ざる欠画が多い所から、宋版の覆刻か或は宋刊元修の疑問が生ずる。しかし刻工名のない葉は少く、上記の如く刻工は皆元人で、一部に僅かながら甚だ漫漶邋遢の版面も存するが、刻工は元である。僅少ながら明修かと疑われる版面が存するにすぎない。従って宋に既に上梓され、此はその覆刻重刊か、或は此が第一次初刻なるかは現在の所判明しない。

本版は他に同版本の伝存を聞かない。ただ旧京81に「儀礼経伝通解集伝集註三十七巻」の巻十九下之□□と録された書影一葉を掲げ、「旧清内閣書見蔵北平図書館」と。但しその本は「国立北平図書館善本書目」に録されず、また現在台湾にも移管されていない。その書影は「祈禳　祭礼五十」の首葉で、実は嘉定刊本の巻十九に非ず、楊復新編の本版の巻十一下の首葉に該当する。両者を比較するに同版に非ずして、相互に覆刻の関係にある。その先後は半葉のみを以てしては断定し難い。もし旧京著録本が後出とすれば、この本は一部やや漫漶の所のある恐らく明印と思われるから、旧京著録本はその後の明修か明刊覆刻となり、もし先出とすれば、本版は覆宋刊か元刊明修となる。しかしこの本はその葉にある貞の字三つを皆欠筆するが書影の方は皆欠筆せず、字様がやや硬く、刻工名はないらしく、後出の如く思えるから、恐らく旧京著録本は本版の後修であろうか。後攷を俟つ。

文公家礼〔集註〕 存巻三・四　題宋朱熹撰　楊復・劉垓孫集注　〔宋末元初間〕刊（〔建安〕）

（東京大学東洋文化研究所蔵）　三冊。新補藍色絹表紙（二七・五×一五・三糎）、金鑲玉装、原料紙縦二四・三糎。本文巻首「文公家礼巻第三／（低五格）門人楊復劉垓孫集註」と題し、巻四の尾題は「巻終」（墨囲陰刻）と。左右双辺（一七・五×一一糎）有界七行、行十四字、注小字双行廿一字、附註は小字二格分を低して改行。句点声点を附刻し、注の「某曰」「附註」等の標識は陰刻。版心細黒口双黒魚尾「礼幾　（丁付）」、所々中縫或は下象鼻に大小字数が記さる。

四庫未著録。文公家礼は朱子の撰として元明以来流布沿用されたが、真撰に非ざる仮託の説が有力であった。しかし近時真撰説が出ている。楊復注も原形のままではないと思われる。本版は宋末元初間の字様であるが、或は寧ろ元刻と看做すべきか。印面麗わしく、「子晉／之印」「子／晉」「毛晉／私印」「汲古／主人」「毛扆／之印」「斧／季」の印記あり、毛氏汲古閣旧蔵。「汲古閣珍蔵秘本書目」に「宋板文公家礼四本一套（与今世行本不同校対便知楊復附註劉垓孫増注）　六両」と録されている。

春　秋　類

春秋経伝集解　三〇巻　晋杜預撰　〔宋紹興〕刊乾道七年・淳熙一三年至宋後期遞修（江陰郡）

（陽明文庫蔵）　巻一・二配日本南北朝刊本　一六冊。厚手覆表紙が附されるが、元表紙は室町期の縹色表紙（二六・四×一六・九糎）、室町期の筆で「左伝　幾之幾」と外題。巻一・二の首冊は日本旧刊本で補われ、宋刊は巻三より存し、巻末に杜預の後序、次に淳熙丙午重陽郡守趙不違書の修刻跋が附さる。本文巻首「春秋経伝集解荘公第三／（低七格）杜氏（隔二格）尽三十二年」、巻末「春秋巻第幾」と題し、尾題下に小字双行の経注字数あり。左右双辺（二〇・七×一三・九糎）有界十行、行十六乃至十九字内外、注小字双行、行廿五廿六字内外。版心白口単黒魚尾「春秋幾　（丁付）」。下象鼻に刻工名があるが、版心は破損が多く、識読し得る名は、顔□、裘益?、裘挙、裘与、金文、恵珉、恵中、恵道、呉佐、項思中、黄康、康、周旻、周旼、徐浩、徐友、徐益、卓允、卓顒、陳栄、陳宗、陳彦、沈源、沈澄、沈忻、沈汴、汴、沈熺?、沈彬、杜俊、湯栄、栄、潘亨、李懋、陸靖、六靖、陸栄、郎春、劉智。その多くは修補の工名である。また中縫に間々「乾道辛卯重換」「直学王錫校正重換」「直学葛熙靖監修」等の修補年紀や校者名が刻されている葉がある。玄弦敬驚警儆弘泓殷匡筐竟恒貞徵懲樹豎讓桓完構覯の字の多くは欠筆をしているが、慎の字は修刻の葉にのみ間々末画を欠くが一定せず、避諱は光宗の惇敦以降には及んでいない。巻九の第十九・廿葉、巻十四の第六、巻廿の第十九、巻卅の第十六葉は室町時代の補写。「陽／明／蔵」「近衛家」の印記あり。

巻末の淳熙十三年の江陰郡（江蘇省）守趙不違の跋の中に本版の鐫刻と修補について

（前略）紹興初江陰被　旨閲?借秘閣正本依其字様大小嘗刊是書更歳浸久点画漫欠中間雖稍葺治旋復磨滅不違到官之明年郡事稍暇迺属僚友与夫里居之彦互相参攷分帙校讎重鋟諸梓自春徂秋始以迄事告斯亦難矣後之人苟知其難不待其□壊而丞修之□□□縦□□炳然常新有補於窮経学古之工亦為政之首務云時歳在淳熙丙午重陽郡守趙不違書

と記している。この跋からは江陰郡で紹興初本書を出版したが、板が磨滅したので、淳熙十三年趙不違が新に鏞梓重刊したかの如く一見うけとれるが、この本について実際検するに、修補は一度ではなく、中に淳熙より前の「乾道辛卯（七年）重換」の修補年紀の葉があり、それより古い刻、即ち原刻と思われる葉も見出され、修補は南宋後期にまで及んでいる。従って本版は、既に度々引用した経史書の刻板を地方官庁に督励せる紹興初の詔に応じて、紹興年間に刊刻され、その板木が漫欠したので中間（恐らく乾道七年）やや修補したが、さらにその漫漶が甚しくなったので、不違が郡守となった翌年の淳熙七年僚友等と分担して校讎を加えて大々的な補刻を行い、不違が跋中に修補を怠らずまめに行えと後人を戒めているのは刊刻の実状を考える上に甚だ興味を抱かしめる所で、その如く後にも逓修を続けて重刷されたものであることが判明する。此はさらに刻工名の側からも次の如く確認し得る。ただ本帙は版心の下象鼻の欠損が甚しい憾みがあるが、上記の刻工中原刻と思われるのは、呉佐、項思中、陳彦、沈忻、李懋、陸靖等で、杜俊は乾道辛卯重換と刻された葉に見えている。また原刻の刻工で修にも携わ

っている者もあるようである。此等刻工が他に従事した宋刊本は次の通りである。該書の修の場合は名に×を附する。最も多数が関係しているのは刊地を同うする乾道三年江陰瀠江郡斎刊宣和奉使高麗図経（裘挙、黄康、徐益、陸栄）で、その他紹興刊通典（李懋・潘亨×）、紹興二一年序刊臨川先生文集（徐益）、孝宗朝両淮江東転運司刊史記（陳彦、呉任）、同漢書（李懋、恵道）、同後漢書（呉佐、陳彦）、乾道二年泉南郡庠刊孔氏六帖（呉佐）、孝宗朝刊眉山七史（潘亨、陳彦×）、同贛州刊文選（湯栄、劉智）、淳熙八年尤延之刊文選（杜俊）、嘉泰元年序刊于湖居士文集（陳栄）、陳彦が南宋前期刊礼記注・孝宗朝刊史記集解・同聖宗文選合集・紹熙三年越刊八行本礼記正義、その外紹興初刊史記集解の南宋前期修、潘亨が孝宗朝刊単疏本周易正義・同論衡・同元氏長慶集に見える。即ち刻工は紹興から降っては寧宗の嘉泰に亘るが、殆どの活動期が孝宗の乾道淳熙間に集中せる抗州地区の刻工である。従って原刻工の下限が紹熙に入っている所を考えれば、本版は紹興廿年代前後頃の上梓にかかり、大部分が淳熙十三年の補刻と目してよい。

本版の原刻の字様は中字、端直整厳にして、北宋刊御注孝経や姓解のそれに類似し、北宋の遺風をとどめている。不違の跋に「閲借秘閣正本依其字様大小」とあれば、秘閣正本とは恐らく北宋監本と思われ、その覆刻ではないが、テキストは北宋監本の系である。本版の伝存は頗る稀れ、他に確認し得るのは、故宮博物院蔵淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解（拙著著録）に配補された巻一七、二五―二八、三〇の六巻のみである。阮元の春秋左伝注疏校勘記の引拠各本目録に「不全宋刻春秋経伝集解三冊分巻与唐石経同（中略）毎半頁十行注文雙行毎行字数不一巻末載経注若干字無附釈音宋刻経注本之最善者書内構字闕筆此避宋高宗諱鍐塘何元錫云板心有直学王某等字亦南渡官名也」と著録された本は同版本と思われるが、その行方は不明である。

この本には室町時代の筆蹟にかかる朱筆の句点・朱引・ヲコト点・返点送仮名音訓合符、やや後の別手の墨筆の句点・送仮名声点・朱濁点が詳細に加点され、且つ眉上には一部朱を混えた音義校注の書入があり、我が国中世期の春秋学・古訓点に対する貴重なる資料を提供している。

春秋経伝集解　三〇巻　晋杜預撰〔宋孝宗朝〕刊

（静嘉堂文庫蔵）宋元至明初逓修　一六冊。陸志・儀顧堂集著録。新補灰色表紙（二六・五×二〇・三糎）、書外題「宋大字本春秋」。裏打改装。首に杜預序あるが、首葉欠。巻末の後序はなく、逸失したのであろう。本文巻首「春秋経伝集解隠第一／（低四格）杜氏（隔二格）尽十一年」と題す。尾題は巻により「春秋巻第幾」と題し、或は題下に小字双行を以て経注字数のある巻もある。左右双辺（二二×一七・二糎）有界八行、毎行多く十六字であるが、或は十五乃至十七字、注小字双行、行十七乃至廿六字、不等。本版は宋代に少くとも二度、元代と明初の修が加えられ、版心は概ね原刻宋修は白口単黒魚尾、元・明修は線黒口双黒魚尾、「春秋幾（或は春幾）（丁付）」。原刻は大小字数なく、下象鼻に刻工名あり、宋・元修は上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり、明修は刻工名なく、或は下象鼻に「重刊」と

印され、間々単辺を混える。版心の下象鼻は破損が多い。原刻は玄弦縣懸敬儆警弘殷匡筐恒貞徵懲樹讓頊桓完瑗媾溝慎の字多く欠筆し、宋修は弦敬弘殷恒貞徵桓覯溝慎の字往々欠画し、共に慎の字は或は末画を欠き或は欠かず一定せず、光宗の惇の字以下は皆避諱しない。元・明修には往々匡筐恒桓の字に欠筆が見られるのは刻手の惰性による。刻工名は（原刻）王栄、王珎、牛実、阮于、呉震、雇淵、黄宇、朱琰、徐正、徐杲、章楷、章樹、張由、陳明、陳明仲、明仲、陳文、丁圭、潘俊、包正、毛諫、毛諒、孟□、余永、余集、李昇、李昱、李碩、林俊、（宋修）王恭、王璡、応拱、夏義、呉益、呉亮、呉椿、高異、周成、徐文、章明、章宥、宋琨、沈定、陳寿、丁之才、余敏、姚臻、呂信、（元修）允徳裕、袁子寧、王元亨、王徳明、応秀、何九万、何益、可引、吉甫、弓華、許彦明、許成、倪平山、平山、雇恭仏、高㬎、高㬎祖、高山甫、江恵、亢文、斉明、子成、施仲、士元、朱大成、朱元、朱長二、周鼎、周東山、徐良、徐、蔣七、召恵昭、召、楚慶一、孫斌、張成、趙良、趙海、趙明、趙、陳琇、陳彦昭、陳子、陳子成、子成、陳彦、沈子、沈子英、鄭埜、鄭、屠明道、屠、匂中、匂端、任子敬、潘茂、茂、繆謙、茅山、匁陳秀、毛文、熊道瓊、余求、楊子明、楊仁、楊十三、楊青之、楊明、楊景仁、景仁、羊子明、葉禾、陸永、良恭、芦㬎、謝、元、智、銭、冑。巻中欠葉或は補写の葉が往々存する。「詩雅／之印」「廷吹／氏」「周氏／蔵書／之印」の印記あり。

この本は原刻の葉は極めて少く、特に前半には僅少で、大部分が元修で、宋修が之に次ぎ、明初の修は数える程度である。原刻の字は大なること銭の如く、版面漫漶ながら筆意渾厚字体方厳にして北宋の遺風をとどめた紹興初期の江浙字様の上なるもの、宋修の字は原刻のほぼ覆刻に近いが筆風纎弱に傾くのを免れず、元修は円潤を帯びて原刻の筆意から離れている。刻工名からその刊年を推定することにしよう。原刻及び宋修の刻工が従事せる他の宋刊本は次の如くで、当該書の修の刻工である場合は×を附する。

紹興九年紹興府刊単疏本毛詩正義（阮于、雇淵、徐杲、章楷、陳明仲、毛諫、毛諒、余永）、紹興四年蘇州刊呉郡図経続記（牛実）、紹興十年臨安府刊西漢文類（包正）、紹興十九年刊徐公文集（毛諒）、紹興間明州刊紹興淳熙間遞修文選（毛諫、毛諒、陳文）、紹興刊景徳伝灯録（王栄、李碩）、同思溪版蔵経（王栄、王珎、徐杲、陳明）、同劉夢得文集（王栄）、同白氏六帖事類集（王珎、丁圭、毛諒）、同太平聖恵方（陳文）、同外台秘要（阮于、徐杲、章楷、陳文、丁圭、李昇、李昱、李碩、林俊）、同通典（阮于、徐杲、包正、陳文、王璡、応拱、夏義、呉益、周成、沈定、陳寿、丁之才、余敏、呂信）、同説文解字（陳寿）、同爾雅疏（王恭）、同国語（陳寿）、紹興初刊南宋前期修史記集解（王珎、牛実、阮于、徐杲、包正、毛諫、毛諒、呉亮、黄寧、章楷、周成、姚臻）、同資治通鑑目録（牛実、張由、王珎、宋琨、沈寿、丁之才）、南宋前期刊龍龕手鑑（張由、徐文）、紹興乾道間越刊周易注疏（王珎、陳明、李碩）、同尚書正義（王珎、陳明、余永、王恭、王璡、

呉益、徐文、宗琚、丁之才、余敏）、同周礼疏（王珎、余永、王恭、高異、宋琚、丁之才）、紹熙三年越刊礼記正義（王恭、陳文、高異）、孝宗朝両淮江東転運司刊史記（陳寿）、同漢書（王珎、徐杲、張由、包正、毛諒、李昇、李碩、林俊、王栄、王恭、高異、沈定、陳寿、余敏）、同後漢書（王栄、李昇、李碩、林俊、宋琚、沈定、陳寿、丁之才）、孝宗朝刊単疏本周易正義（王珎、李昇）、同論衡（王珎、陳明）、同贛州刊文選（王恭、王璡、呉椿、高異）、同北山小集（王栄）、同白氏六帖事類集（林俊）、同元氏長慶集（陳明）、同鄂州刊資治通鑑（陳明）、同周官講義（陳明）、同豫章黄先生文集（陳文）、同所謂眉山七史（王恭、李昇、夏義、呉椿、高異、周成、宋琚、沈定、陳寿、丁之才、余敏、呂信）、乾道二年泉南郡刊孔氏六帖（陳文）、淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解（陳文、徐文）、寧宗朝越刊論語註疏解経（丁之才）、同孟子註疏解経（丁之才）、嘉泰四年刊東萊呂太史文集（宋琚）、同皇朝文鑑（夏義）、嘉定十三年臨安府尹家書籍舗刊歴代名医蒙求（余敏）、紹定二年平江府刊呉郡志（呉椿）、寧宗朝刊増修互註礼部韻略（王恭、王璡、応拱、夏義、高異、宋琚、沈定、陳寿、丁之才、余敏）、同古史（王恭、宋琚、陳寿、丁之才）、同晦庵先生文集（王恭、王璡、応拱、高異、周成、宗琚、陳寿、陳明、丁之才、余敏、呂信）、同晦庵先生朱文公語録（呉椿）、同玉篇（王恭、呉椿、宋琚、陳寿）、同広韻（王恭、呉益、呉椿、宋琚、陳寿、余敏）、同武経七書（王恭）、同歴代故事（呉椿、宋琚）、同愧郯録（呉椿）、同重校添註音辯唐柳先生文集（呉椿）、同育徳堂外制（陳文）

以上を以て見れば、此等刻工は皆杭州地区の刻工で、原刻の刻工の多くは紹興乾道間、宋修の刻工は淳熙嘉定間、嘉定年間に多く集中している。また此等修補の刻工の多くは紹興淳熙間に地方公使庫で刊刻され、後にその板木を国子監に移管して南宋中期に修補を加えた公使庫版—準監本—の修補中に見えている名である。南宋国子監の此等の板木は元になって西湖書院に移されて、また修補が施され、さらに明代に南監に移管されて、その一部は遞修重印が続けられた。本版の元修の刻工を検討するに、

大徳五年刊儀礼集説（斉明、茅文）、泰定元年刊文献通考（袁子寧、王元亨、許成、倪平山、高㬎祖、高㬎、亢文、朱元、朱長二、周鼎、周東山、徐良、趙海、張成、陳子成、沈子英、屠明道、鄭埜、匂中、潘茂、繆謙、平山、楊景仁）、至元至正間刊国朝文類（袁子寧、王徳明、朱元、子成、楊景仁、羊子明）、至正二三年刊鄂国金佗粹編（倪平山、平山、士元）

以上の諸書は西湖書院の刊刻にかかり、「元西湖書院重整書目」著録の宋刊同院元修本をあげれば、

越刊尚書正義（何益、周鼎、鄭埜、毛文、葉禾）、同周礼疏（孫斌、陳琇、陳彦昭、鄭埜、毛文）、同礼記正義（周鼎、孫斌、陳琇、鄭埜、毛文、熊道瓊）、同孟子註疏解経（熊道瓊、葉禾）、嘉定刊儀礼経伝通解（何九万、斉明、徐良、陳琇、毛文、楊十三）、説文解字（弓華、斉明、陳琇、鄭埜、平山、

务陳秀、楊十三)、増修互註礼部韻略(弓華)、南宋前期刊史記集解(何九万、許成、高㬎祖、朱元、楚慶一、張成、鄭埜、务陳秀、熊道瓊、茅文)、両淮江東転運司刊三史(王德明、何益、吉甫、許成、高㬎祖、斉明、子成、周鼎、蔣七、徐良、孫斌、趙明、張成、鄭埜、任子敬、繆謙、平山、务陳秀、毛文、熊道瓊、楊景仁、楊十三、楊青之、楊明、葉禾、陸永)、所謂眉山七史(王元亨、王德明、何九万、何益、弓華、許彦明、許成、高㬎、斉明、士元、朱元、子成、朱長二、周鼎、蔣七、徐良、楚慶一、孫斌、趙良、趙明、張成、陳琇、鄭埜、繆謙、平山、务陳秀、毛文、熊道瓊、楊景仁、楊仁、楊十三、楊明、葉禾、陸永)、南宋初刊資治通鑑目録(何九万、斉明、周鼎、趙良、趙明、陳琇、陳子成、务陳秀、楊十三、陸永)、嘉定刊資治通鑑綱目(許成、倪平山、子成、周鼎、張成、陳彦昭、陳子成、沈子、任子敬、潘茂、繆謙)、南宋初刊国語国語補音(斉明、徐良、熊道瓊、楊十三)、贛州刊文選(平山)、嘉泰四年刊皇朝文鑑(周鼎、蔣七、鄭埜、平山、务陳秀、熊道瓊、陸永)

その他、本版の元修刻工が彫鐫に参加せる元刊本は

大德四年太医院刊大德重校聖済総録(斉明、張成、鄭埜、茅文)、大德刊隋書(王德明)、同五代史記(王德明、弓華)、至大刊至正三年修六書統(許成)、同六書統溯源(趙明、平山)、同書学正韻(弓華)、皇慶元年刊佩韋斎文集(王元亨)、天暦元年刊通鑑前編(芦㬎)、後至元三年刊慈溪黄氏日抄(陳彦)、至元六年慶元路儒学刊玉海(王德明)、至正二三年平江路儒学刊通鑑総類(趙海、景仁、芦㬎)、至正二五年平江路儒学刊戦国策(子成)、興文署刊玉海(吉甫)、盱郡刊孟子(子成)、致堂読史管見(士元)、晦庵先生朱文公集(平山)、岳氏刊春秋経伝集解(子成)、十行本周易兼義・附釈音春秋左伝・公羊・穀梁註疏(余求)

此等元刻工は大德以降元末至正に及び、本版が西湖書院に於ける修補にかかることは明かである。要するにその欠画及び刻工名から察するに、本版は南宋孝宗朝初期に於ける恐らく江浙地区の公使庫版たることが判明する。旧蔵者の陸心源が陸志・儀顧堂集に於て、本版の字の佳処多き点を列挙し、九経三伝沿革例の考異条に之を照して北宋蜀大字本と断じているが、此は字大なること銭の如きを全て蜀本と考えた旧来の通説によったにすぎず、その考証も未だ根拠薄弱と云わざるを得ない。本版の端厳雄渾なる字様は、李鶚の版下書による五代監本を承けた北宋監本の覆刻と思われる南宋前期刊爾雅(故宮博物院蔵、拙著著録)のそれと類似し、また所謂眉山七史の字様も亦同類で、皆八行乃至九行、行十七字内外の大字本で、共に北宋監本のほぼ覆刻と思われ、紹興の詔に応じた紹興乾道間の江浙地区の公使庫の刊刻にかかり、その板木が国子監に移されたので、当時此等も監本或は官本と称されたらしく、本版は岳氏沿革例に所謂監中見行本中の大本に該当するものであろう。南雍経籍考に「春秋左伝集解三十巻好板四百四十面壊板三十六面失四百六十七面有餘晉杜預元凱撰　春秋経伝集解二十巻存者四十三面欠三百四十一面旧板大字」とあるが、本版はその前者であろうか。本版は他に同版本の伝存を聞かざる孤本である。

春秋経伝集解　三〇巻経伝識異一巻　晉杜預撰　宋嘉定九年（一二一六）刊（興国軍学）

首に杜預の「春秋左伝序」、巻末に「春秋経伝集解後序」をおき、また「経伝識異諸已見陸氏釈文及今本与釈文不同者不著」（三丁半）を附し、その後に興国軍の校勘督工銜名及び嘉定丙子年正月望日聞人模謹書の刊書跋がある。本文巻首「春秋経伝集解隱公第一／（低六格）杜氏尽十一年」と題し、巻末後序の次に葉を改めて低二格単行大字を以て「経凡一十九万八千三百四十八言／注凡一十四万六千七百八十八言」と経注字数が記され、次に「経伝識異」が附されている。左右双辺（二一・八×一四・八糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心白口双黒魚尾「左氏幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名が刻さる。原刻は玄弦縣弘匡恒貞楨禎徴豎讓頊桓完瑗構慎、修は玄貞讓桓慎の字は率ね末画を欠く。刻工は（原刻）王純、王、純、胡桂、胡、桂、高儁、高、張政、張、陳正、正、陳金、金、鄧寿、寿、潘金、余份、余、劉全、劉、全、伸、仲、（修）王采、王、采、彦章、彦璋、呉甫、甫、呉彦、呉仁、蔡祥、祥、秀中、占中、占、詹中、張友、張進、余成、成、劉永、劉、永、仪、胡、癸、全。修刻は原刻の覆刻であるが、字様の線がやや細めになっている。

本版は前掲本と同様堂々たる大字であるが、字様は異って些少円柔の気味を帯びる。巻末の列銜に

従事郎興国軍判官沈　景淵／迪功郎興国軍軍学教授聞人　模／朝奉郎通判興国軍兼管内勧農営田事鄭　緝／宣教郎前権発遣興国軍兼管内勧農営田事趙　師夏／奉議郎権発遣興国軍兼管内勧農営田事葉　凱

と。またその次の興国軍軍学教授聞人模の刊書跋に、本版上梓の経緯を述べて

本学五経旧板乃僉枢鄭公仲熊分教之日所／刊実紹興壬申歳也歴時浸久字画漫滅／且欠春秋一経嘉定甲戌夏有孫緝来弍／郡嘗商略及此但為費浩瀚未易遽就越／明年司直趙公師夏易符是邦模因有請慨／然領略即相与捐金出粟模亦擕節廉士／之餘督工鋟木書将成奏院葉公凱下車観／此且惜五経旧板之不称模於是併請于守弍／復得工費更帥主学粮幕掾沈景淵同計置／而更新之廼按監本及参諸路本而校勘／其一二舛誤併攷諸家字説而訂正其偏／旁点画粗得大槩庶或有補於観者云／嘉定丙子正月望日　聞人模謹書

と。即ち興国軍学（湖北省武昌）に於て紹興二十二年鄭仲熊が五経を開板したが、年久しく経て板木の漫漶甚しく、且つ春秋の一経はその板木も失うに至った。模はその修補を謀り、嘉定七年仲熊の孫に当る緝が軍の次官になった機会にその補刊を相談したが、経費浩瀚の為に実施が行き悩み、翌年趙師夏が赴任し来って此を領略し、費を節して修補を行い、工成らんとして葉公凱が来って、五経のうち春秋の欠けているのを惜み、模はさらに守に請うて費用を増し、新に春秋を再刊し、監本諸路本を以て校勘し諸家の字説を参攷して訂正を施したと云う。本版の巻末の識異は当時の諸本との異同三十五条を掲げてあるので、校讐上重要な資料を提供している。次掲の春秋左氏音義は本版と版式字様刻工名を同うしているので、この時同時に附刻

されたものと思われる。ただこの嘉定再刊の春秋以外は興国軍学刊五経は紹興原刻本もその嘉定修本も残念ながら伝存していないようである。

本版が嘉定九年の刊たることはその刻工名からも次の如く裏書きされる。この原刻工が従事せる他の諸本は、胡桂・陳金・陳正が嘉定十・十六年南康学刊儀礼経伝通解、鄧寿が寧宗朝刊欧陽文忠公集、陳正が同晦菴先生文集・淳熙紹熙間刊東坡先生奏議に見える。劉全は乾道二年刊孔氏六帖・淳熙間贛州刊文選に見えるが、淳熙はとも角として乾道のは同名異人かもしれぬ。修補の工は、蔡祥が前記の儀礼経伝通解、余成が前記の欧陽文忠公集、張友が淳熙間撫州公使庫刊礼記・春秋経伝集解の紹熙四年修、呉彦が紹熙刊欧公本末、劉永が淳熙九年江西漕台刊呂氏家塾読詩記、撫州公使庫刊春秋経伝集解の修、嘉定刊儀礼経伝通解、寧宗朝刊晦菴先生文集に見える。淳熙の劉永は或は同名異人の疑がある。以上の所から見れば、修の刻工も原刻のと同世代が多い。従って刻工の在世の年代の上限と原刻の印面が殊更漫滅しているわけでないことを考えれば、修補の行われたのは原刻年からあまり距ったものではなく、嘉定末か理宗前期を降るものではあるまい。

我が南北朝刊春秋経伝集解は本版の精善な覆刻とされている。なお足利学校には本版と行格を同うする八行十七字本宋刊本が蔵されたと伝える。それには嘉定六年臨川郡守江公亮の刊語跋を有していたと云う。即ちその足利本は寛政九年新楽定編の「足利学蔵書目録」に「春秋左氏伝　全十冊　首ニ足利学校正伝院常住ト誌シ末嘉定六年閏月上澣三衢江公亮カ跋アリ」と著録され、また近藤正斎の「右文故事」附録巻四足利学校現存真本には

春秋左氏伝　宋版　全十冊
首ニ足利学校正伝院常住ト誌シ末ニ嘉定六年閏月上幹三衢江公亮謹記ト云フ跋アリ八行十七字按ニ嘉定ハ宋ノ寧宗ノ年号ニシテ此跋ハ刊板ノ時ノ記ナルヘシ毎巻□ノ字ノ印アリ

と録され、以上をうけて森志巻二に「又宋嘉定癸酉刊本　足利学校蔵巻末有嘉定六年閏月上澣三衢江公亮跋、首有足利学校正伝院常住記、求古楼蔵旧鈔本、乃依此本重鈔者」と記されている。此より前、山井・根本の「七経孟子考文補遺」に「足利本者亦足利学所蔵宋板杜預経伝集解本也世有活字本本学所刊是為其元本題曰春秋経伝集解分為三十巻」というのはその本に該当するものと思われる。ただ古活字本を足利学校刊となすは失考。明治後この嘉定六年江公亮所刊本に言及したのは、竹添光鴻が「左氏会箋」に対校宋本四通の一に挙げ、島田翰はその「古文旧書考」巻二に解説している。その本は今足利学校には伝存していないが、その転写と推せられた本が二部存する。一は上に引用の森志に求古楼蔵重鈔者と称された本に該当すると思われる故宮博物院楊氏観海堂蔵の室町末近世初間写本（欠巻一・二、拙著著録）である。二は内閣文庫蔵享禄二年写本（欠巻一八・一九）で、共に巻末に嘉定六年江公亮跋文を有し、書入も共通する所が多い。その外に、足利学校旧蔵の南北朝刊春秋経伝集解が現在慶應義塾大学斯道文庫の蔵となっている。「足利学校正

伝院常住」の墨識語を有し、全巻に亘って足利学校庠主九華・三要等の書入が附され、三要の印記が押印され、巻末に村山月汀の所獲といって山井璞輔が持って来たこの本は嘗て学校にありし旨を記せる第廿二世庠主松齢の嘉永二年の跋が附綴されている。寛政九年後学校から流出し、その後璞輔の友人村山月汀が得、次いで山井の有となった。その後は蔵印から見ると転々として島田重礼双桂楼・島田翰・南葵文庫・安田文庫の遞蔵を経たものである。この本は巻末の後序を散失しているので、室町期の筆蹟で補写され、その次に同筆で嘉定六年の江公亮の跋が附記されている。

以上の現存資料から推察するに、実際足利学校に嘉定六年臨川刊本が存在したのか、それとも往々我が旧刊本を宋・元版と誤認する例が多いから、補写の跋文によって山井・新楽等がこの斯道文庫現蔵旧刊本を宋槧本と誤認したかである。嘉永二年の松齢の跋はこの本を以て山井・新楽著録本と認定し、翰は「古文旧書考」巻三にこの旧刊本について「山君彝作考文、誤引以為宋本、経籍訪古志載以為宋嘉定癸酉刊本、足利学校蔵、実即是本也」と断定している。この旧刊本は現在この嘉定九年興国軍学刊本の覆刻とされているが、島田翰は此を覆江公亮本と断定したのは、足利学校蔵本に公亮跋が附写されている所に基づいたものであろう。翰はさらに北宋闕民字本、その覆刻たる我が正中刊本という架空の本を脳中に捏造し、此等五通の版本は皆根原は北宋闕民字本に出て、同異極めて相い近く、異同相い若くと論じて人を煙にまいた。足利には別に江亮跋嘉定刊本があったのではないか。学校旧蔵旧刊本に公亮跋が何故移写されているのか。我が旧刊本が本版の覆刻とすれば、何故巻末の識異と聞人模跋がないのか。公亮跋刊本、本版、本版の紹興旧版、我が旧刊本、それ等の関係は如何。先ず公亮跋なるものを吟味しよう。

臨川旧有板行五経三伝、比他郡者為精好、歳久浸底磨滅、幾不可読、公亮来守是邦、一見為之慨然、雖承凋弊之餘、独念聖経有此善本、豈可使之至是、故於倥偬不暇給之中、首治斯叀、選庠序生員、重加校讎、撙節用度、銖積寸累、以供其費、蓋閱歳始辨、凡更新七百七十板、為字三十八万五千有奇、剔墁七百三十八板、為字四万九千有奇、総用銭百万有奇、自今更永其伝、俾学者覧観、无亥豕魯魚之謬、殆非小補、嘉定六禩閏月上澣三衢江公亮謹記

即ち臨川（江西省）に於て嘗て五経三伝の開板があったが、その板木が磨滅甚しく読むべからざるに至った。公亮が臨川守として来って、此を惜しみ新に校讎を加えて、大補刻を施したというのである。臨川は即ち撫州府である。上掲の「礼記釈文」に述べた如く世に所謂淳熙年間撫州公使庫刊六経三伝（咸淳に論孟孝を添刻して十二経）は名高く、その中で左伝は故宮博物院蔵本（拙著著録、巻一七、二五―二八、三〇配補江陰郡刊本、巻二九配明刊覆相台岳氏刊本）が唯一の現存本である。それには紹熙四年・嘉泰二年・嘉定六年の遞修が加わり、公亮跋の記す所と合致するが、他の撫州刊経書と共通する十行十六字の版式字様は本興国軍学刊本や旧刊本とは全く異る。旧刊本の底本

がもし実際嘉定六年公亮による臨川刊本とするならば、同じ臨川で同じ年に旧版に修補を施し、一方新に別に上梓を企てる筈はなく、公亮の記事とも矛盾する。それよりも和刻旧刊本そのものの中に公亮跋が元来旧刊本の底本のものに非ざることを立証し得るより端的な証拠を見出し得る。旧刊本・本興国軍学刊本は皆その各尾題には経注字数はないが、後序の次に「経凡一十九万八千三百四十八言／注凡一十四万六千七百八十八言」という経注字数が存する。足利学校旧蔵本の外上記の内閣文庫本・故宮博物院観海堂本の三本とも公亮跋の直前には、「凡三十四万五千八百四十四字」なる字数が写されている。旧刊本等の総計字数は三十四万五千一百三十六言となるから、両者合致しない。故宮博物院蔵撫州公使庫本は巻末尾題下に経注字数が刻され、ただ巻卅は別系本で配補されているので総字数を明かにしないが、その各巻字数は江陰郡刊本や前掲の静嘉堂蔵本のそれと一致し、江陰郡刊本は巻末後序尾題後に「凡三十四万五千八百四十四字（経十九万八千八百八十二字 注十四万六千九百六十二字）」とあるから、撫州公使庫版の後序後の総経注字数も恐らくはそれと同じと認められ、公亮跋文前の字数と一致する。従って公亮跋は撫州公使庫版五経三伝に対する嘉定の補刻に際しての修補跋で、その春秋の巻末に附してあったものである。従って我が旧刊本の底本とは何等関係のないものであることは明かである。足利学校に於てその所蔵の旧刊本に古く我が国に伝来していた撫州刊本乃至はその転写本から参考に偶々この修補跋を移写附綴しておいたのが後学を混迷せしめたものである。狩谷氏求古楼旧蔵楊氏観海堂の鈔本は森志はただ公亮跋のある所から足利学校蔵嘉定癸酉刊本の重鈔と想像したので、実は撫州刊本の写しであろう。ただ内閣文庫本・観海堂本はその書入訓点が共に足利学校旧蔵旧刊本に加えられた訓点書入と類似共通する所が多いから、三本の間に何等かの関係があるかもしれぬ。

かくの如く我が南北朝刊春秋経伝集解は従来この嘉定九年刊興国軍学刊本の覆刻とされ、ただ巻末にある「経伝識異」と聞人模跋とを欠くのは、その底本が偶々それを欠いていた故であろうと解されて来た。しかしその底本は興国軍学刊本であるが、実は嘉定九年版に非ずして、その紹興刊の旧板であったのであるまいか。そうとするならば識異・跋のないのは当然である。ちなみに、京都大学図書館蔵清原宣賢手点春秋経伝集解二〇冊は、首一〇巻を欠き、巻一一―一五（前半）、巻一九（一部）、二二・二三（前半）は宣賢の自筆補写にかかり、他は八行十七字の宋版本と従来されて来たが、実は刊本の部分は宋版に非ずして、我が南北朝の旧刊本である。

（静嘉堂文庫蔵）　存巻一〇、一五―二〇、二三―三〇　一五冊。汪目・陸志著録。新補金砂子散し艶出淡香色表紙（二九×一九・五糎）、襯紙を挾める改装本。巻卅の巻末は後序と経注字数はあるが官銜と模跋を欠くので、陸志が「宋刊建大字本」としたのは失考であるが、字様が欧柳体の遺風から一転して、建安の風を些少帯びているからであろう。中にはかなり欧柳体に近い字もあるが、修刻の字様はより細めにして円みを帯び、建安風にやや近くなっている。次の書陵部蔵本と比較し、同版に

してしかも修補のない早刷本たることが判明する。「毛／晉」「毛氏／子晉」「毛晉／之印」「汲古／主人」「宋本」「汪印／士鐘」「汪士／鐘」「三十五／峯／園主人」の印章あり。毛氏汲古閣・汪士鐘遞蔵本。汪目に「又（左伝集解）大字本　存八之十　十五之二十　二十二之三十巻」とあるのはこの本と思われるが、当時は現存巻の外に巻八・九、巻二二の三巻があったようである。北京図書館蔵存巻二二の零本（中版録212著録）には士鐘の蔵印があるからこの僚巻であろう。本版は甚だ稀覯にしてその現存本は次掲本と共に三部を数えるにすぎない。

（宮内庁書陵部蔵）宋修　巻三・四、二〇・二一、二六―二八配鈔本　一五冊。森志・島考著録。新補茶色表紙（二七・五×一九糎）、裏打が施され、修補の際天地が少しく裁断さる。巻三・四、二〇・二一、二六―二八の七巻は左右双辺の印刷罫紙を用いた近世初の写本で配補。修補が加っているが、原刻の葉は一部に僅にやや磨滅が見られる程度で、全体としてはかなり美しく、修は全面と一部とがあり、修の葉は左程多くはない。欠筆の末画を間々補筆している所がある。「金沢文庫」の墨印がある如く、古く我が国に将来された金沢文庫旧蔵本で、その他「枝／山」（白文）「允／明」「文炳珍蔵／子孫永保」「淡海／鷦鷯／氏之後」「佐伯妻毛利／高標字培松／蔵書画之印」、配鈔の巻三にのみ「状頭一壺酒能更幾回瞑」「建芳芳馨兮廡門」の印記を有し、毛利高翰献納本。

巻九の二一丁表（経十七年）までには、室町期の筆で、朱点朱引朱ヲコト点（明経点）、墨筆の返点送仮名が詳細に加点され、行間欄外に音義・校合注、主として正義による注解の書入が加えられ、以下は墨訓点、巻十以下は欠く所もあるが、やや時代の降った別筆の朱の句点ヲコト点、或は校字が簡単に附されている。此等書入は清家点本に拠る移写と思われる。

春秋左氏音義　五巻　唐陸徳明撰〔宋嘉定〕刊（〔興国軍学〕）

（尊経閣文庫蔵）〔宋〕修　四冊。重文。後補卍繋ぎ唐草文様刷出艶出柴色表紙（二七・七×一九・七糎）、裏打修補が施さる。巻首「春秋左氏音義一／（低二格小字）唐国子博士兼太子中允贈斉州刺史呉県開国男陸徳明撰」と題す。左右双辺（二二×一四・六糎）有界八行、行十七字、注小字双行。版心白口双黒魚尾「秋音幾　（丁付）」、丁付は巻一・二と巻三以下とが各通し番号が附され、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名が刻さる。比較的少いが、宋代の修補の葉が混っている。玄弘泓殷匡筐恒禎貞楨徵譲頊桓完構媾覯遘慎敦の光宗に至る廟諱の字多く末画を欠き、寧宗の郭以降の字は欠かない。刻工は（原刻）王純、純、龔定、龔正、龔正甫、正甫、正、元亨、亨、胡文顕、文顕、呉全、呉富、呉申、江子才、子才、高才、高、黄志□、黄、蕭子元、詹彦才、詹、陳安、陳、安、丁可、范仁、游?亨、余份、余、李仁、劉元、劉初、劉永之、劉、寿、伸、仲、唐、金、張、忠。（修）劉永、中、仁。左氏釈文は元六巻、今巻五・六を合せ五巻に作る。各冊首尾に「金沢文庫」の墨印が鈐さる。

本版は前掲の嘉定九年興国軍学刊春秋経伝集解とその版式行

格字様を等しくし、且つ刻工を共通し、その上同じく「金沢文庫」の印を有し、共に刷りの程度を等しくし、嘗て同文庫に於て僚巻であったことから、興国軍学に於て経伝集解と相い前後して、校刊附刻されたものと思われる。経伝集解に見える原刻の王純・余份、修の劉永以外の刻工について、その関与せる諸本を挙げれば、淳熙間撫州公使庫刊嘉定等修春秋経伝集解（劉元、呉申）、同礼記（劉元）、孝宗朝刊所謂眉山七史（龔正）、同史記集解（呉富）、同類篇（文顕）、紹熙三年越州刊礼記正義（李仁）、慶元刊楽書（呉申、高才）、寧宗朝刊晦庵先生文集（呉申、高才）、同愧郯録（李仁）、同臨安府陳宅書籍舗刊碧雲集（范仁）、嘉定十・十六年南康学刊儀礼経伝通解（范仁、劉元）等である。従って本版が嘉定年間の刊刻にかかることは明白である。修刻も前掲本で述べた如く、その刻工名の多くが原刻のとほぼ世代を同じくし、原刻の刷面の程度から見ても、原刻年からあまり距ったものではない。

本版は他に伝存がなく、天壌間の孤本である。経典釈文の現行本たる通志堂刊本・抱経堂刊本と比するに、宋刊に拠ったと称する前者に近いが、三本互に譌脱を訂し得る所が多い。この本は昭和十九年金沢文庫古典保存会が影印に付したが、巻三以下は未刊に終った。（追記1参照）

春秋経伝集解　三〇巻附春秋名号帰一図二巻首一巻　晉杜預撰　唐陸徳明釈文（名号帰一図）五代馮継先撰　宋淳熙三年（一一七六）刊（閩山阮仲猷種徳堂）

首に「春秋序（直下小字双行注、第二・三行低三格「唐国子博士兼太子中允贈斉州刺史／呉県開国男陸徳明釈文附」と題署、附釈文）」、「後序」（附釈文、尾題「春秋経伝後序」）、次に「春秋諸国地理図」「三皇五帝世系」、周及び各国世次二十四表図あり、次に「春秋名号帰一図巻上下」をおき、次に「春秋始終」「春秋伝授次序」（尾題「春秋図説終」）「諸侯興廃」「春秋総例」があって首一冊をなす。巻末巻卅の尾題後の裏葉全面に次の双辺木記の刊語あり。

謹依　監本写作大字附以釈／文三復校正刊行如履通衢了／亡窒（後修本誤窒）礙処誠可嘉矣兼列図表／于巻首迹夫唐虞三代之本末／源流雖千歳之久豁然如一日／矣其明経之指南歟以是衍伝／願垂　清鑑淳熙柔兆涒灘中夏初吉閩山阮仲猷種徳堂刊

本文巻首「春秋経伝集解隱公第一」（巻五以下巻二九を除き「公」の字なし）、題下及び第二・三行に釈文注を低一格小字双行を以て附し、第四行低八格「杜氏（隔二格）尽十一年」、毎巻末巻二以下巻二九まで「春秋経伝第幾」と題す。左右双辺（一五・一×一〇・四糎）有界十行、行十八字、注小字双行、行廿二字。注末に○を以て隔てて釈文を附し、巻十第四丁以下は音釈の標字は白文に作る。版心白口双黒魚尾「左幾（丁付）」。警弘殷匡筐恒貞徴頊桓構媾覯慎の字に多く欠画が見られ、敦・郭等の光宗以降の廟諱の字には避諱を為していない。

刊語に云う如く、淳熙三年閩山（福建省閩侯県）の種徳堂の刊で、字様は所謂建安体に非ずして、南宋初閩本に間々見られる、所謂瘦金体に類する瘦硬の体で、版下書に些少優劣のむら

がある。阮元校勘記に「淳熙小字本」「此宋時刻刻有譌字俗体大致不失其為善本」と録された本に該当する。本版は刊語に「依監本作大字」とあれば、監本の小字を大字に変えたものである。通常宋監本は大字の如く思われ、小字本の伝存を確認しないが、岳氏「九経三伝沿革例」に「監中大小本凡三」とあれば、監本に巾箱本のあったことが推測される。本版は監本の中本と巾箱小本の中間を狙ったものであろう。刊語三行目の「亡窒」を早印の小汀氏旧蔵本は「窒」に作り、やや後印の書陵部本は「室」に誤り、後の入木と見られる。両本の間に他にも些少の異同や修があるかもしれぬが、未だ精密な比較に及ばず、後の機会に譲ることとする。本版には明の覆刻本がある。

（文化庁蔵）　存巻一五―三〇　一五冊。重文。莫録著録。新補藍色表紙（二一・七×一三糎）。襯紙を挾める改装本。印面清朗なる早印本。後序が巻末にある。間々朱句点朱注の書入が存する。「瑞南」「莫印／繩孫」「子孫／永宝」（白文）「小汀文庫」等の印あり。清の莫友芝・小汀利得旧蔵。莫録には「戊辰春杪蘇肆持售」と。欠巻の有無は記してないから、首の十四巻はその後散失したのであろうか。

（宮内庁書陵部蔵）　一五冊。島考著録。新補茶表紙（二〇・七×一二・七糎）、裏打改装本。巻三第二四丁、巻八第二二、巻一六第一二、巻二二第一四、巻二九第三丁補写、巻一〇の第六裏葉を欠き、巻中少しく下端欠損の葉あり。間々朱句点の書入が存する。巻九首に「純武堂」の印記あり。森志著録の賜廬文庫蔵本とは或はこの本か。

本版は他に瞿目瞿影・繆続記（共に刊語の「窒」を「室」に作る）著録本が知られるが、現所在未詳。

春秋経伝集解　三〇巻　晉杜預撰　唐陸徳明釈文　〔元〕刊（岳氏荊谿家塾）

（静嘉堂文庫蔵）　存巻一六―三〇（巻一九―二二、二七・二八補配明覆元岳氏刊本）　八冊。黄書録・汪目・陸志著録。新補艶出淡香色地金砂子散し表紙（三〇・七×一九糎）。襯紙を入れて改装、天地少しく裁断さる。本文巻首「春秋経伝集解襄公三第十六／（低三格）杜氏（隔六格）尽二十二年」と題す。巻一七・二四・二五・二六の巻末に「相台岳氏刻／梓荊谿家塾」の楕円或は矩形の双辺木記あり。四周双辺（二〇・六×一三糎）有界八行、行十七字、注小字双行。経注文共に断句声点が附刻され、注末に○を隔てて標字を（　）で囲んで陸氏による音義が附さる。版心線黒口双黒魚尾「秋幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻には盛允忠、允忠、忠、盛、朱子成、子成、子明、子、明、王圭、王、圭、葉、堅、陳、拱、凌、迁、方、生、李、昌、范、毛、章、趙の刻工名が刻され、左上欄外に「某幾年」と印せる耳格あり。匡恒懲譲桓慎の字時に末画を欠く。上記の巻一九等六巻の外に巻一六の第二四葉、巻一七の第七葉、巻一八の第四一・四二葉、巻二五の首二葉、巻二九の第三九―四二葉は本版の覆刻たる明刊本で補われている。この明覆刻本は版心に字数・刻工名がない。「沈／士林」「沈士／林氏」（白文）「大／章」「一一一」「滄浪／漁隠」（白文）「冒／欒」「憲／奎」（白文）「秋／

浦」「呉氏／之章」「名／山」(白文)「東□／子孫」(白文)「汪印／士鐘」「閩源／真賞」「平陽汪氏／蔵書印」の印章あり。沈氏は陸志によれば明人と云う。

本版は岳氏が集解三十巻に蜀馮継先撰「春秋名号帰一図」二巻と「年表」一巻を併せ刻したもので、世に所謂相台岳珂本五経・孝経・論語・孟子と共に家刻本の代表として名高い。岳氏校刊本は宋廖瑩中世綵堂本を基礎とし監本を始め諸本と対讐せる校本で、大字にして字画明晰、釈文の音義を附し、断句声点が刻してあるので、教科書として大に歓迎され、明・清に屢々覆刻や仿刻がなされ、左伝は我が国に於ても覆刻された。従来この岳氏は岳飛の孫たる寧宗理宗朝の岳珂と信じられて来た。しかし近時の研究により、この岳氏は岳飛の弟の一族が常州(江蘇省)に移り、南宋より元にかけ蕃衍した望族で、荆谿は常州路義興の旧名であること、その他の資料により、この校刊は岳珂とは関係なく、元の刊たることが明かにされた。本版の刊年を推測する為にその刻工が従事せる諸刊本をあげよう。元の子明は江子明と李子明とが知られ、本版の子明はそのいずれか不明で、また子成と共に同名異人の存在の可能性がある。子成・王圭は所謂眉山七史の元修、子成は盱郡刊覆廖氏世綵堂本孟子・後至元至正間西湖書院刊国朝文類、至正二五年平江路儒学刊戦国策、宋嘉定刊資治通鑑綱目・宋前期両淮江東転運司刊三史・宋前期刊春秋経伝集解の各元修に、子明は後至元三年刊慈溪黄氏日抄・十行本注疏(以上江子明)・興文署刊資治通鑑(李子明)・皇慶元年刊佩韋斎文集・晦庵先生朱文公集・大徳四年信州路儒学刊北史・大徳間崇文書院刊五代史記に、また王圭は宋嘉定刊儀礼経伝通解の元修にその名が見える。本版が元刻たることは実証し得るが、以上の資料のみを以てしては、本版の刊年をさらに限定するには未だ不十分である。

この本は黄丕烈の「百宋一廛賦」に「春秋泰半」と賦され、「残相台岳氏本春秋経伝杜氏集解行字之数与覆本同所存一至六又十五至十八又二十三至二十六又二十九三十凡十六巻得三十巻之泰半也同県袁廷寿寿皆甫亦有残本而未能取之以相補」と注された本に該当するらしい。これによれば当時既に明覆刊本で補配されていたが、原刻本は今よりは巻一—六、巻一五の七巻多かったことが判明する。黄氏から汪士鐘の有に転じ、汪目の宋板書目には「又(左伝集解)岳板 零配覆本 三十巻」とあれば巻冊の存数はまだ黄氏と同じで、その後前半が分散したのであろう。この本には朱墨黄三筆の傍線や欄外に墨筆の書入がなされている。本版の現存本には他に北京図書館蔵本(巻一九・二〇配明刻本、周捐、中版録298 299著録)が知られるにすぎない。

春秋経伝集解 三〇巻 晉杜預撰 唐陸徳明釈文 〔宋〕刊(〔建安〕) 附重言巾箱本

(国立国会図書館蔵) 一五冊。後補縹色表紙(一一×七・二糎)。裏打改装本。巻九・一〇、一九—二四並に巻八第二葉は江戸時代の鈔補。首に杜預の「春秋序」(陸徳明音義による附注)、巻末に「後序」を附す。本文巻首「春秋経伝集解隠第一」と題し、第二から四行にかけ低一格小字双行を以て陸注を掲

げ、第四行の注下に「杜氏（隔四格）尽十一年」（巻二以下は次行或は第三か第四行に低六格を以て題署）、毎巻末「春秋左氏伝巻第幾」と題す。四周双辺（九・一×六・一糎）有界九行、行十七字、注小字双行、行十八字。杜注末に○を以て区劃し、標字を圏で囲んで音義注を列ね、間々その後に「重言」（標識は単行大字墨囲陰刻）が附さる。版心線黒口双黒魚尾「火幾　（丁付）」、某幾年と記せる耳格が左上欄外にあり。弦縣匡筐恒禎桓構慎の字には時に欠筆が見える。巻末別紙を附綴して文化五年の市橋長昭の「寄蔵文廟宋元刻書跋」が記さる。「昌平坂／学問所」の墨印あり。市橋長昭献納本。

前掲の国会図書館蔵礼記と対をなす同時同所の開板たる宋後期の建安刊巾箱本で、小字ながら字画極めて精整、同版本の所在を他に聞かない。巻二までは全巻に、以下は間々経文に江戸初を降らぬ朱筆句点ヲコト点（前半は明経点、後半は紀伝式点〈中原点か〉）返点送仮名声点が附され、眉上に少しく音義訓注の書入が存する。

附釈音春秋左伝註疏　六〇巻　晉杜預注　唐孔穎達等疏
陸徳明釈文〔南宋〕刊（建安・劉叔剛）

（足利学校遺蹟図書館蔵）　二五冊。重文。森志著録。後補艶出茶色表紙（二五×一五・八糎）。天地少し裁断された裏打改装本。首に「春秋正義序／（低一格）」国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達奉／（低一格）勅撰」あり。序の尾題の次に、「桂／軒」（鼎形）「蔵書」（鼎形）「建安劉叔／剛父鋟梓」「敬／斎」（爵形）「高山流水」（琴形）の木記が刻さる。本文巻首「附釈音春秋左伝註疏巻第一」と題し、第二行より第四行にかけ低二格を以て「国子祭酒上護軍曲阜県開国子臣孔穎達等奉／勅撰／国子博士兼太子中允贈斉州刺史呉県開国男臣陸徳明釈文」と題署さる。巻二以下は撰者題は次行に三格乃至四格を低して「杜氏（隔四乃至五格）孔穎達疏」と題署。左右双辺（一九・二×一二・四糎）有界十行、行十七字、注疏文小字双行、行約廿三字。注末に○を以て画して音釈を附し、その次に（疏）の単行大字の標識を以て疏文をおく。版心線黒口双黒魚尾「秋斉幾　（丁付）」、上象鼻に稀に大小字数が印され、左上欄外に「某幾（或は幾年）」と記せる耳格がある。巻二一の第一五―一八、二三丁（末葉）の上象鼻に「文」、巻三五第一二―一四、一九―二二、二五丁の上象鼻に「先」、巻三六第一・二・四丁の上象鼻に「目」と刻されているのは或は刻工名か。欠画は厳格ではなく、玄炫朗珽弘殷匡筐恒貞禎徴勗桓垣完覯講慎敦郭の字には間々欠筆を見る。巻二〇の第八丁表欠丁。巻一首に「此書不許出学校閾外憲実（花押）」、またほぼ毎巻首尾に「足利学校公用」或は「足利学校之公用也」の横書墨書があり、巻一・三・二四・三六・五九の首に「上杉安房守藤原憲実寄進」、各冊末に「上杉安房守藤原憲実寄進（花押）」の学校設立者たる憲実手筆の施入識語が存し、毎巻首に概ね「松竹清人」の印記が鈐さる。

本版は前掲の足利学校旧蔵附釈音毛詩註疏と同様建安の劉叔剛の刊刻になり、所謂十行本十三経注疏合刻本の底本となったもので、次掲本はこの覆刻である。この本は字様がやや偏平で

些少小ぶりの葉を僅かながら混え、それは一見補刻の如く見える。しかしこの本は概して印面に刷りむらが多く、板木が左程磨滅していないのに部分的に邊邊の箇所が生じている所を考え合せれば、些少字様の異る葉と他との間に印面上原刻・修補の差異を識別し難い。従って修のように見えるのは、六〇巻の大部であるから版下書に多少字様の優劣不斉は免れ難いことと刷りむらに基づくもので、後修と看做すべきではないようである。但し巻卅九の第十五・十六、十九―廿二葉（巻末）、巻四十の首三葉は字様がやや異り、また印面も格別美しいから、或は宋末元初間の修に非ざるかの疑念を抱かしめるが、この一本のみでは断定し難い。本版は他に故宮博物院蔵本（存巻三〇以下、十二巻配元刊十行本、拙著著録）とそれと元来僚巻であった潘氏宝礼堂旧蔵北京図書館現蔵本（存首二九巻、潘録・王記著録）が存するのみである。この本は巻一には室町期の朱点朱引朱圏点墨筆訓点、巻二以下には所々朱点朱引墨訓点が附され、間々書入が存し、その一部は庠主三要の筆で、三要手筆の校字書入も見られるが、全巻に亙って別筆の精核なる校字が記入されている。それは上記の毛詩註疏のそれと同様山井・根本両人の七経孟子考文の校勘の際の書入と思われる。

附釈音春秋左伝註疏　六〇巻　晋杜預注　唐孔穎達等疏
陸徳明釈文　〔元〕刊

首に「春秋正義序」（第二・三行低一格「国子祭酒上護軍曲阜縣開国子臣孔穎達　奉／勅撰」と題署）があり、本文巻首「附釈音春秋左伝註疏巻第一」、第二・三・四行低一格「国子祭酒上護軍曲阜縣開国子臣孔穎達等奉／勅撰／国子博士兼太子中允贈斉州刺史呉縣開国男臣陸徳明釈文」と題す。巻二以下は撰者題署を第二行に低三格「杜氏註（隔六格）孔穎達疏」と題する。左右双辺（一八・七×一二・七糎）有界十行、行十七字、注疏文小字双行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「秋流幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名があり、左上欄外の耳格に「某公幾年」と印さる。原刻の「疏」の標識は圏を以て囲まれているが、明修は墨囲白文。刻工名は、安卿、安、以清、以徳、以、徳、英玉、玉、英、王栄、王、栄、君美、君、美、古月、古、月、国祐、国右、国、朱文、朱、寿甫、寿、仁甫、仁、善卿、善、仲高、高、仲、鉄筆、鉄、筆、徳遠、遠、徳成、成、徳甫、徳、甫、文粲、余中、中、応、祥、茂、李、正、亨、粋、希、孟、金。

十行本注疏合刻本の一。前掲の建安劉叔剛刊本の覆刻である。明代板本が南監に移され、明初以降度々補刻修印が重ねられ、南雍経籍考に「春秋左伝附釈音二十六巻存好板二百二十面壊板三百八十八面」と録されている。明修は単辺或は双辺、版心は白口或は粗黒口、上象鼻白口下粗黒口或はその逆等を混淆し、概ね耳格がない。字数のみあって刻工名のないのが明前期の修らしく、上象鼻に「正徳年」「正徳六年」「正徳十二年」「正徳十六年」の年紀のある葉、年紀なく中縫等に「懐陳校」「侯吉劉校」「林重校」の校者名が記されている所もある。この校者名のある修は正徳以後の修にかかり、修補は嘉靖頃まで度々加えられたと思われる。

従って現存伝本は各本皆それぞれ修の箇所が参錯している。最も降った修補のある京大人文科学研究所や香港大学の蔵本によって明修の刻工名を示せば、（正徳年）楊尚旦、余富、仲、（正徳六年）黄富、富、黄友、友、江洪、中縫に李紅謄（抄）の名見ゆ、（正徳十二年）呉三、呉六耳、江達、黄仲、周同、仲千、余富、余、楊尚旦、尚旦、李豪、豪、劉立、入、才、曾、台、（無年紀）栄郎、王毛孫、黄蘭、徳閏、清、劉京、烏、七、（懐陳校、林重校、卿林重校）王仕栄、王栄、王進富、華福、呉一、呉生、呉仏生、呉朱、黄仕進、黄道林、黄永進、永進、江達、江四、江寿、江田、蔡順、施肥、謝元慶、詹弟、詹蓬迺、曾堅、曾椿、陳郎、陳亨、陳徳禄、程亨、范元福、范朴、朴、尤共三、熊山、山、余郎、余堅、余天礼、楊四、楊全、葉雄、雄、葉再友、再友、葉采、采、陸基、陸基郎、陸基青、陸栄、陸四、陸文進、永、福、（侯吉劉校）王元保、王仕栄、王良富、王仲、王仲友、元清、呉朱、呉珠、江四、江盛、江田、江長深、詹蓬頭、曾堅、張尾郎、張郎、陳珪、余旺、余添進、余文貴、余天理、余堅、余天礼、葉馬、葉金、葉再友、陸四、六四。

（静嘉堂文庫蔵）至明正徳遞修　三四冊。陸志著録。新補褐色水玉ぼかし文様表紙（二八・七×一七糎）、金鑲玉装。原料紙縦二六・五糎。首の春秋正義序の次に中書門下牒が一丁補写されている。版心の修補年を切りとって別紙で補われている。版心には某校正等が見えないから、正徳の修に止り、明修の葉はまだ比較的少い。

（京都大学人文科学研究所蔵）欠首一一巻〔明〕遞修　一三冊。後補濃縹色表紙（二六・五×一六・二糎）。正徳後の修が頗る多く、原刻或は明前期修の印面は模糊、筆画は欹斜が甚しい。

同版本に故宮博物院楊氏観海堂蔵本・同院蔵残本（劉叔剛刊本に配補）・中央図書館（四部）・香港大学（三部、劉影著録、以上拙著著録）・北京図書館（瞿目瞿影著録）・上海図書館・南京図書館（丁志盗影著録）・北京大学蔵本や楊録著録本等がある。

音註全文春秋括例始末左伝句読直解　七〇巻　宋林堯叟撰〔元〕刊（〔建安〕）

（静嘉堂文庫蔵）二四冊。巾箱本。後補淡縹色表紙（一九×一三・五糎）、襯紙を挾める改装本。首目欠。本文巻首「音註全文春秋括例始末左伝句読直解巻之幾／（低十格）梅谿　林　堯叟　唐翁」と題し、尾題を「音註全文春秋括例左伝句解巻一四」「音点春秋左伝詳節句解巻之二四」「春秋経伝句解五十八巻終」と作る巻もある。左右双辺と四周単辺（一五・五×一〇・五糎）とが混在し、巻一・二のみは有界十一行、行廿一字、他は巻二二・二七を除き有界十二行、行廿二字、皆注小字双行。「経」「伝」や注文中の音の標字並に括例始末等の注は陰刻。行間に訓義を小字を以て傍刻。版心は挾く線黒口双黒魚尾「左幾（丁付）」、上或は下の象鼻に大小字数、左上欄外の耳格に「某公某年」と記さる。匡筐恒貞徴桓構慎の字に間々欠筆を見る。巻一の首五

丁欠。

本帙は三種の異版による取り合せ本のようである。巻一・二の十一行本は字様雕法良好にして宋末元初間刊と称してよいが、元刊と見るのが穏当であろう。大部分を占める十二行本は宋末刊本の覆刻と思われる元版であるが、往々字様に元末明初風の所が現われている。巻二二・二七は十二行廿三字で、上述の如く首尾題が他と異り、且つ首の第二行の撰者名を題署せず、字様・雕法共に明前期の様態に転じている。「島田翰／読書記」（巻二九・三二・三七の末）「松方／文庫」の印あり、竹添井々旧蔵と伝える。

四庫全書は本書原本を収めないが、明末の王道焜・趙如源同編「左氏杜林合註」五十巻を著録している。著者堯叟の伝は明かならず、本書は杜注に依りそれを平易に音釈箋釈して且つ愚案を加え、十二公の始めには周王及び列国の紀年と列国の君易世嗣位を表示し、注文中にその事件の参照記事を附注する等、読者をして時変の趨勢と事件の始末を知り易からしめたもので、宋末から明にかけて左伝の便易なる注釈書として幾種もの版を重ねて流行した。我が国に於ても室町時代から近世初にかけて大に参照利用され、左伝の旧鈔・旧刊本には本書が抄録書入されていることが多い。国立中央図書館蔵（静盦・拙著著録）・北平図書館原蔵（存巻三五—四四、拙著著録）元刊本はこの十二行本と覆刻の関係にあり、恐らくこの版の方が先出であろう。本書の静嘉堂文庫蔵（陸志・儀顧堂集著録）・国立中央図書館蔵（存巻五五・五六、拙著著録）・北平図書館原蔵（存巻一八、拙著著録）の十三行廿五字本は従来元刻とされて来たが、明前期の刊刻にかかる。瞿氏旧蔵北京図書館蔵元刊明修本（瞿目著録）は比較し得ないので、本版と同版か否かは不明である。

春秋経左氏伝句解　七〇巻　宋林堯叟撰　〔元〕刊（〔建安〕）

（内閣文庫蔵）七冊。後補茶色表紙（二五・三×一五糎）、裏打改装本。首に「春秋左氏伝括例始末句解綱目」あり。本文巻首「春秋経伝句解巻之一／（低三格）魯隠公一（隔八格）林堯叟注（この四字欠く巻もあり）」と題す。左右双辺（一八・九×一二・三糎）有界十四行、行廿四字、注小字双行。「経」「伝」や注文中の標字等は墨囲陰刻。版心小黒口双黒魚尾「左幾（或は幾フ）（丁付）」。桓の字等に間々欠筆が見られる。巻一・二に錯簡がある。北平図書館原蔵本（清季振宜等旧蔵、旧京104—106・拙著著録）は同版。国立中央図書館蔵（一は季目・結一廬書目・劉影・拙著著録、一は配鈔本、拙著著録）の十行廿二字本は従来宋或は元刊とされているが、明前期の刊である。

監本附音春秋公羊註疏　二八巻　漢何休注　唐徐彦疏　陸徳明釈文　〔元〕刊

首に景徳二年中書門下牒、次に「監本附音春秋公羊註疏序」（次行「漢司空掾任城樊何休序」と題署）あり。本文巻首「監本附音春秋公羊註疏隠公巻第一（起元年尽元年）」、次行「春秋公羊経伝解詁

隠公第一」、巻二以下は次行は低四格「何休学」と題す。左右双辺（一九・三×一二・五糎）有界十行、行十七字、注疏文小字双行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「公荒幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり。左上欄外の耳格に「某幾年」と題す。刻工名は安卿、以清、以徳、以、王英玉、英玉、英、玉、王栄、栄、王、応祥、丘文、君錫、君美、古月、古、月、寿甫、仁甫、善慶、善卿、善、禔甫、天易、徳遠、徳、徳甫、伯寿、伯、文粲、茂卿、茂、余中、余、文、高、李、住。桓の字等に欠筆が見られる。

十行注疏合刻本の一。板木は明に南監に移され、補刻重印され、南雍経籍考に「春秋公羊疏三十巻旧志作二十九巻者非存者一百九十七面餘」と。明修の版は白口或は粗黒口、単辺或は双辺が混り、概ね字数・耳格がない。ただ白口にて字数はあるが刻工名なく字様が原刻に近いのが明前期の修であろう。版心に正徳六年・正徳十二年の修年、上象鼻に侯吉劉校、中縫に林重校訖、運司蔡重校、正徳六年のには李紅謄の鈔者名が見える。明修の刻工名は、（無年紀）王邦亮、余富、（正徳六年）呉郎、（正徳十二年）人、曾、（正徳以後か、無年紀、侯吉劉校、林重校、蔡重校）王良富、王進富、呉一、呉珠、江四、江盛、江達、江元寿、江長深、蔡順、謝元慶、詹蓬頭、蓬頭、曾堅、曾椿、張郎、張尾郎、陳珪、余天礼、葉起、葉再友、陸四、陸記青、陸基郎。

（静嘉堂文庫蔵）至明正徳逓修　一二冊。陸志著録。新補茶色水玉ぼかし文様表紙（二八・六×一七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二六・二糎。首の何休序の次に中書門下牒が補写さる。補刊年が剜去され別紙で巧みに補われている。原刻は漫漶の所があるが、明修の葉は頗る少く、正徳以後の修は加っていない。巻十三の第十七・十八葉補写。

（京都大学人文科学研究所蔵）明逓修　一四冊。新補藍色絹表紙（二七・三×一六・九糎）、金鑲玉装、原料紙縦二四・一糎。正徳以後の修が多く加わっている。監本との校合注の書入あり。

（東京大学東洋文化研究所蔵）明逓修　八冊。茶色表紙（二七・九×一八・二糎）。白綿紙本。前掲本と同様正徳後の明修が多い。全巻に亙り、経伝文には江戸時代の朱筆の返点送仮名が附され、所々朱筆校字が書入されている。「佐伯矣毛利／高標字培松／蔵書画之印」「昌平坂／学問所」「大学／蔵書」等の印あり。

本版の他に伝わるもの、中央図書館（三部）・香港大学（劉影著録、以上拙著著録）・北京図書館（二部、一は瞿目・瞿影著録）・上海図書館（二部）・南京図書館（丁志・盆影著録）・北京大学（存巻一・二）蔵本や森志・傅目・蔣志著録本等がある。

監本附音春秋穀梁註疏　二〇巻　晉范甯集解　唐楊士勛疏　陸徳明釈文　〔元〕刊

首に「監本附音春秋穀梁伝註疏序」（第二・三行低一格「国子四門助教楊士勛撰／国子博士兼太子中允贈斉州刺史呉県開国男陸徳明釈文」と題署）あり。本文巻首「監本附音（或は監本）春秋穀梁註疏隠公巻第一起元年尽三年」、次行低三格、「范甯集解（隔三格）」

楊士勛疏」、第三行「春秋穀梁伝隱公第一」と題す。左右双辺（一八・八×一二・八糎）有界十行、行十七字、注疏文小字双行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「谷充（明修は或は穀梁注疏）幾（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名。左上欄外に耳格あり、「某（或は某公）幾年」と記さる。明修の版心には字数なく、線黒口、単辺或は双辺を混える。刻工名は、（原刻）安卿、以徳、以清、清、以、英玉、王栄、応祥、丘文、文、君美、美、敬中、寿甫、住郎、住、仁甫、正卿、正、善卿、善慶、善、仲高、高、禔甫、天易、徳遠、徳、伯寿、伯、寿、茂卿、茂、余中、王、月。明正徳の修には中縫に往々「李紅書」と印され、仲千・豪・□郎の刻工がある。桓の字往々欠筆。

十行本注疏合刻の一。明代南監に板木が移されて修印され、明南雍経籍考に「春秋穀梁疏十二巻好板一百一十四面失八十七面」と見える。

（京都大学人文科学研究所蔵）〔明前期〕修　一〇冊。巻九の末丁が線黒口の修版なる外は原刻。

（静嘉堂文庫蔵）〔至明正徳〕遞修　八冊。陸志著録。新補茶色水玉ぼかし文様表紙（二九×一七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二六・七糎。正徳の補刻年が切りとられ、別紙で巧に襯補されているが、間々「李紅書」と中縫に印された葉がある。しかし明修は少く大部分が原刻の葉である。巻十六にのみ「文選／楼」の印記があり、清阮元の手沢本か。

同版本に故宮博物院（残本・零本）・中央図書館（以上拙著著録）・北京図書館（二部、一は瞿録・瞿影著録）・南京図書館（丁志・盆影著録）・北京大学蔵本・北平図書館原蔵本（二部、一は存十巻、旧京84―86著録）や涵録・黄書録・劉影・傅目著録本等がある。

春秋集伝　存巻三首半葉　撰者未詳〔南宋前期〕刊

（金沢文庫蔵）存半葉。左右双辺（約二一・五×一五・二糎）有界十一行、行二十字。首行「春秋集伝巻第三」、次行低三格「荘公上」と題し、伝は経文より一格を低して単行大字。末行の過半が欠損している。撰人が題されず、僅か半葉の断簡を遺すにすぎないので、その全容を詳になし得ないが、現存の同書名のいずれとも合わない佚書である。宋代には旧来の左伝・公羊・穀梁の三伝の外に胡安国伝等の新な伝が撰され、本書はそれ等の各伝を折衷按配した宋人の撰と思われる。字様等から見て、南宋前期の浙刊本であろう。

春秋諸伝会通　二四巻　元李廉撰　元至正一一年（一三五一）刊（虞氏明復斎）

首に至正九年乙丑七月朔後学廬陵李廉謹書の「春秋諸伝会通序」、「読春秋綱領（隔九格）後学廬陵李廉輯」、「春秋諸伝凡例（隔六格）後学廬陵李廉輯」、杜預序より楼鑰序に至る七種を収めた「春秋諸伝序（隔九格）後学廬陵李廉輯」あり。本文巻首「春秋諸伝会通巻之一（隔四格）廬陵進士李廉輯」と題す。首の自序の次に「至正辛卯臘月／崇川書府重刊」の双辺木記、巻末巻二四の尾題の前に「南谿／精舎」「至正辛卯仲冬／虞氏明復斎」の両木記が刻されている。左右双辺（二〇・三×一三・二糎）有界十二行、行

廿二字、注低一格小字双行。注文中（左氏）（公羊）（穀梁）（胡伝）は大字陰刻、各伝の注・疏類は小字陰刻、自説はそれ等の下に三格を低し（按）の白文標識を以て区別し、経文下に述べ得ない諸家の説は大字陰刻の「附録」と標して列ね、また眉上に年号が標記附刻さる。版心細黒口双黒魚尾、「春秋通幾　（丁付）」。

至正九年の自序に本書刻梓の経過を述べて「〔春秋諸伝会通〕蔵之家塾以備遺忘訓子弟耳非敢与学者道也邇年頗有伝写者弗克禁而豊城揭恭迺取而刻之梓亟欲止之則已成功矣書来求序拒之弗可且念其力之勤而費之重也姑識于巻端与我同志尚加訂正」と。此によれば本書は初め廉の廬陵と同じ江西省の豊城の揭恭によって至正九年に上梓されたことが知られる。本版はその版式から見て建安の刊刻になり、刊記に重刊とある如くその二年後に別に建安の書肆が発行した第二次版であろうか。繆続記著録本は汲古閣旧蔵にして「毎半葉十二行二十三字高六寸五分広四寸四分黒口雙辺書名陰文加綫刻印極精至正九年豊城揭恭刊」と。この記述を信ずれば本版とは行格を些少異にし、書肆の刊記のない別版らしい。但し繆氏の解題には匡郭や行格数には誤記が往々見受けられる。江西の出版は宋元時代はその板木の鏤刻を杭州か建安かに注文する例が多く、至正九年と十一年とは接近しているから、揭恭の出版も実際は建安の書坊に委託され、ついで書坊名を刊記に銘して出された可能性が考えられぬでもない。また巻末刊記の南谿精舎・虞氏明復斎と序後木記の崇川書府とは同一人か別人であるかも詳かでない。後考を俟つ。

（宮内庁書陵部蔵）　一五冊。後補茶色表紙（二三・五×一五・五糎）、第二・四冊のみ縹色表紙。裏打改装。「昌平坂／学問所」、「文政癸未」、「大学校／暴書／之印」等の印あり。所々破損し、前半に少しく朱点朱引の書入がある。

（静嘉堂文庫蔵）　一六冊。汪目・陸志・陸続跋著録。新補金砂子散し艶出淡黄色表紙（二六・三×一六・一糎）、襯紙を狭んで改装。凡例が綱領の前にあり。巻一の第十二葉欠。巻二四巻末葉の本文後の四行分の過半が破損し、尾題は補写、そこにある両刊記の一はなく、下のは一部が僅かに残っている。所々朱筆の句点傍線が書入され、かなり早印に属し印面麗わしい。「堯峰山人読過」「汪印／士鐘」「閬源／真賞」の印記あり。

（龍谷大学図書館蔵）　一二冊。後補茶色表紙（二六×一五・七糎）、裏打改装本。所々破損し、巻一九の首五葉、第一九―二三、巻廿一の第一三・一四、二七―三一葉補写。首は凡例が綱領の前にある。「東禅院」「写字台／之蔵書」の印記あり。

（静嘉堂文庫蔵）　存首一二巻　七冊。後補茶色表紙（二六・八×一七・二糎）、襯紙を挾める改装本。原料紙縦二三・六糎。首は自序・諸伝序・綱領・凡例の順。やや後印。陸氏旧蔵であるが陸志未著録。

（武田科学振興財団杏雨書屋蔵）　存巻一―八、一一―一四六冊。新補藍色表紙（二七・八×一六・七糎）。金鑲玉装、原料紙縦二五・二糎。首は凡例が綱領の前にあり、自序・凡例は補影写。朱点朱引が附され、眉上に書入が存する。「元／本」「炳卿珍蔵旧／斐古鈔之記」の蔵印あり、内藤湖南旧蔵。

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵）存首・巻一・二　一冊。後補茶色覆表紙（二五×一五・一糎）、裏打改装本。凡例が綱領の前にあり。自序の首葉の上半が破損し、第二丁欠。残闕本であるが、早印美麗。

同版本の所在は他に北京図書館（二部）・上海図書館蔵本・瞿目瞿影・蔣志滋録・莫目著録本が知られる。

春秋胡氏伝纂疏　三〇巻　元汪克寛撰　元至正八年（一三四八）刊（建安・劉叔簡日新書堂）

首に、至元再元之四年歳在戊寅春三月一日新安汪沢民序、至正元年辛巳七月十有八日雍虞集序の「春秋胡氏伝附録纂疏序」、至正八年歳在戊子正月人日門人紫陽呉国英再拝書の序、「先儒格言」、「春秋胡氏伝附録纂疏凡例」、その後に低二格を以て至正六年倉龍丙戌二月甲寅後学新安汪克寛謹書于富川任氏書塾の自跋、「春秋胡氏伝附録纂疏引用諸儒姓氏書目」、「春秋胡氏伝序」（次行低九格「後学新安汪克寛附録纂疏」と題し、附注）、進表、次に「胡氏春秋総論」（末に「綱領畢」と題す）を列するが、本によって序の順序に小異が見られる。自跋の後に「建安劉叔簡／栞于日新書堂」の双行木記がある。しかしこの刊記を欠く本も存する。後印か。本文巻首、「春秋胡氏伝纂疏巻第一／（低十格）新安　汪　克寛　学」、巻八以下は「春秋巻之幾（或は巻第幾）／（低二格）胡氏伝（隔四格）新安汪克寛学」と題する。尾題は「春秋巻第幾（或は巻之幾）」と。四周双辺（一九×一二糎）有界十一行、行廿一字、伝文は低一格単行、疏文は小字双行、引用書・姓氏・愚案等の標識は陰刻。版心小黒口双黒魚尾、「春秋　幾　（丁付）」。稀に裏葉左上欄外に耳格あり。

至正六年の自跋に本書撰述の成立について、「愚嘗佩服過庭之訓自幼誦言至治壬戌従先師可堂呉先生受業於浮梁之学宮朝夕玩繹若有得焉顧毎自病謏見寡聞而於類例之始終証拠之本末莫能融貫而旁通之乃元統甲戌教導郡斎講劇之暇因閲諸家伝註采摭精語疏于其下日積月羨会崒成編（中略）至元丁丑嘗求訂定於宗公叔志先生以為足以羽翼乎経伝畀之序引明年値鬱攸之変煨燼漫不復存越三年辛巳搜輯旧聞往正是於邵庵虞先生頗加奬励并題巻端」と述べ、門人の呉国英は至正八年の序に「国英曩従環谷先生受読春秋於郡斎先生手編胡氏伝纂疏（中略）国英宦游四方越十五年始睹同志鈔謄善本而建安劉君叔簡将鋟諸梓以其伝」と刊行の経緯を記している。

（宮内庁書陵部蔵）三二冊。森志著録。後補淡茶色表紙（二三・五×一四・七糎）、襯紙を挾んだ改装本。首目一冊は沢民序・先儒格言・凡例・自跋・引用諸儒姓氏書目・虞集序・胡氏伝序・進表・総論の順に綴じられ、国英序を欠き、刊記がない。姓氏書目の眉上に「崇禎十年／六月初七／日起」（朱筆）、胡序の眉上に「嘉靖十年六／月初三日起」（墨筆）の識語が記され、所々朱筆句点圏点が附され、稀に眉上に墨筆の書入がある。「唐寅／私印」（白文）「啓淑／信印」（白文）「新安／汪氏」「孫／愛」「銭孺／飴読／書記」「昌平坂／学問所」「文化辛未」「大学／蔵書」「御府／図書」「浅草文庫」「書籍／館印」等の印あり。「新安汪氏」の印は著者の克寛か汪沢民（字は叔志）のそれかとも云わ

れるが、明かでない。

（宮内庁書陵部蔵）　三二冊。新補淡茶色表紙（二三・五×一五糎）、裏打改装本。沢民序・姓氏書目・虞集序・先儒格言・凡例・自跋・国英序・胡氏伝序・進表・総論の順に綴じられ、刊記なし。所々朱圏点が附され、吏読らしい書入がある。朝鮮伝来本か。「徳藩／蔵書」「明治二十九年改済／徳山毛利家蔵書」等の印あり。徳山藩毛利家献上本。

（尊経閣文庫）　二五冊。巻一三―一六配鈔本。後補淡緑色絹表紙（二四・五×一五・五糎）、裏打改装本。首は虞集序・凡例・自跋・刊記・先儒格言・国英序・姓氏書目・胡氏伝序・進表・総論の順で、沢民序を欠く。巻一三―一六は写本で補われ、巻四の第二五―二八、巻六の第七、巻一〇の末、巻二六の首葉は補写。所々朱点朱引が附さる。「朴氏／鑾宗」の印、巻末所々に「珎原」「珎原朴氏」の墨署があり、朝鮮伝来本か。印面に所々刷りむらが見られるが、率ね撫印美麗である。

中央図書館（拙著著録）・北京図書館（二部）蔵本・北平図書館（残本二部、旧京113114著録、台湾に移されていない）原蔵本や張志・瞿目瞿影著録本は同版で、莫録・王記・莫編莫跋・蔣志著録本も同版か。

春秋属辞　一五巻　元趙汸撰　元至正二四年（一三六四）刊至明洪武元年（一三六八）修（海寧・商山義塾）

首に前史官金華宋濂謹序の「春秋属辞序」、次に新安趙汸序の「春秋属辞序」並に「春秋属辞目録」、目録後に三格を低して歙諸生趙汸子常私識于東山精舎の自跋あり。また巻末に洪武元年五月朔日諸生程性謹書及び商山諸生汪文拝手謹識の両跋が附さる。本文巻首「春秋属辞巻之一　（隔九格）　新安趙汸学」と題し、巻十五尾題後に「金居敬覆校／学生倪尚誼校対／前郷貢進士池州路儒学学正朱廿校正」と署さる。左右双辺（一六・七×一二・八糎）有界十三行、注低二格単行大字、小注双行、行廿七字。版心線黒口双黒魚尾、「春秋属辞巻幾　（丁付）」、下象鼻に大小字数（稀に上象鼻に）及び刻工名あり、刻工名を欠く葉も僅にある。刻工名は永、月、肖、文、左、水、同等。巻末の汪文跋の後に「海寧趙月卿刊／胡仲永重脩」とあるのも刻工名である。

本書以下趙汸撰の三書の刊刻の顚末について程性及び汪文の両跋は次の如く述べている。

右春秋属辞一十五巻序目跋尾共該／板三百二十三片左氏伝補註十巻共／該板一百片春秋師説三巻附録二巻／共該板六十九片総計板四百九十二／片初商山義塾奉／　命以是書刻梓自庚子迄癸卯計会廪膳賦輸／之餘贍／本鳩工刻板一百一十片皆直／学黄権視工甲辰春県主簿張君奐復／奉命勾考続工而属辞一書告成是年／秋県丞胡君仲徳復奉命併刻師説補／註二書始属性董其事因得備完属辞／訛闕迄歳乙巳学書既廃刊書亦結局／矣紙墨之費則有星谿程君道江君光／大同邑程君仁及子宗先後所助可漸／模印其集伝一十五巻又謀陸続梓行／以備一家之言云新刻書多舛謬讎校／不時故刊補之工亦不一而足因修補／注誤字謹書此以志歳月洪武元年五月朔日諸生程性謹書

海寧商山義塾承／総制官和陽王公命以趙子常／先生春秋集伝

屬辞等書能発／聖経不伝之秘本塾刻梓以／広其伝自庚子迄癸卯会計廪／膳賦輸之餘謄本鳩工甲辰春／県主簿張君栗復奉命勾考出／入而督其竣事於是春秋屬辞／十有五巻与序目俱完可模印／乃若／総制公尊経敬学之意亘与是書俱伝云高山諸生汪文拝手謹識

即ち至正廿年総制官の命によって海寧（安徽省休寧）の商山義塾が刻梓し、廿四年に刻成り、その後舛謬を修補して洪武元年にその工を終えたものである。此等三書は後に弘治六年に欠失の板木を重梓して修補が加えられた。程性の跋に「春秋集伝」の続刊を予告しているが、この時には果さなかったようである。

（静嘉堂文庫蔵）　二冊。陸志・陸続跋著録。淡香色表紙（二五×一六糎）。白綿紙本。汪文跋なし。所々朱筆句点の書入あり。

（大倉集古館蔵）　四冊。新補紫色表紙（二三・五×一六・一糎）。白綿紙本。

（蓬左文庫蔵）　四冊。新補香色表紙（二六・八×一五・七糎）。汪文跋なし。

同版本に故宮博物院（天目続著録）・中央図書館（三部、一は明弘治修、適志・遊目著録）・中央研究院（鄧目著録）・台湾の国防研究院（弘治修）蔵本・北平図書館原蔵本（以上拙著著録）・北京図書館（二部、一は弘治修）・上海図書館蔵本・瞿目・丁志・劉影・羅録・莫跋著録本等がある。

春秋左氏伝補注　一〇巻　元趙汸撰　元至正二五年（一三六五）刊至明洪武元年修（海寧・商山義塾）

首に趙汸自序の「春秋左伝補注」あり。本文巻首「春秋左氏伝補注巻第一（隔四格）新安趙汸学」と題す。但し新安以下五字の題署は各巻共に入木で、巻二以下にこの撰者名なき巻もあり、また巻三は「注」を「註」に作る。左右双辺（一六・六×一二・七糎）有界十二行、行廿四字、注小字双行。版心線黒口双黒魚尾、「春秋左氏伝補注巻幾（丁付）」、上象鼻に大小字数（下にあるもあり）、下象鼻に刻工名がある。少しく白口にして大小字数・刻工名なき葉を混じえ、此は明弘治の補刻であろう。刻工名は永、文、囦、趙、走、水。

本版は上記の程性跋に記された如く、至正廿三年に次の師説と共に屬辞と併せ刻すべき命を受けて翌年完工、洪武元年までに訂正の修補も終了したものである。

（静嘉堂文庫蔵）　一冊。陸志・陸続跋著録。淡香色表紙（二五×一六糎）。白綿紙本。この本恐は明弘治の修補版か。

（蓬左文庫蔵）　一冊。新補香色表紙（二六・八×一五・七糎）。白綿紙本。所々裏打修補あり。この本も或は弘治遞修本か。

同版本に故宮博物院（天目続著録）・中央図書館（適志著録）・中央研究院（鄧目著録）蔵本・北平図書館原蔵本（旧京110—112著録、以上拙著著録）・北京図書館（二部、一は弘治修）・上海図書館蔵本・瞿目・丁志・劉影・繆続記・莫跋・涵録著録本等がある。

春秋師説　三巻并附録二巻　元趙汸撰　元至正二五年（一三六五）刊至明洪武元年修（海寧・商山義塾）

首に歳至正戊子八月幾望門人新安趙汸敬題巻端の自序「春秋師説題辞」及び目次あり、巻末附録は上巻に汸編「黄沢思古吟十章」及び呉氏澂が黄氏の為に作れる「六経辨釈補注易学濫觴春秋指要序」、下巻に汸編黄楚望先生行状を収め、その後に一格を低して無署名の長文の跋が附さる。此は文中の内容からも、また「経籍考」に「金居敬総序」として引載されているので、汸の門人金居敬の撰たることが判明する。本文巻首「春秋師説巻上（隔十格）新安趙汸編」と題す。左右双辺（一六・五×一二・七糎）有界十三行、行廿七字。版心線黒口双黒魚尾「春秋師説巻上（中・下）（丁付）」、下象鼻に大小字数及び月、永、肖の刻工名を刻せる葉あり。

行状に附された居敬跋には、汸がその師黄沢の説を承けて本書を撰述するに至った経緯と汸のこの三書刊刻の始末を詳述し、「皆居敬所校定」と記している。

（静嘉堂文庫蔵）　欠附録下　一冊。陸志・陸続跋著録。淡香色表紙（二五×一六糎）。白綿紙本。附録下の黄楚望先生行状を欠く。巻末に洪武元年の程性の跋あり。

（蓬左文庫蔵）　明弘治六年（一四九三）修（高忠）　一冊。新補香色表紙（二六・七×一五・七糎）。白綿紙本。巻末に汪文・程性の両跋、次に弘治癸丑陽月朔旦後学太平黄倫謹題の「重完春秋属辞諸書題辞」が附されている。それによれば黄倫等は汸の三書の板木が散逸したのを惜みその復旧を謀り、漸くその板木を求め得、邑令高忠の命によって重補を完成したという。

（慶應義塾大学斯道文庫蔵）　明弘治六年修　一冊。新補茶色表紙（二三・七×一四・九糎）。白綿紙本。弘治の黄倫跋が巻首にあり。巻末には洪武の程性跋のみが附さる。「筠蔵書」「愚斎／審定／善本」「愚斎／図書／館蔵」「小汀氏蔵書」の印あり。

同版に故宮博物院（天目続著録）・中央図書館（適志著録）・中央研究院（鄧目著録、以上拙著著録）・北京図書館（二部、一は弘治修）・上海図書館蔵本・瞿目・丁志・劉影・涵録・莫跋著録本等がある。

孝経類

孝経　唐玄宗注　〔北宋天聖明道間〕刊

（宮内庁書陵部蔵）　一冊。森志著録。後補艶出濃褐色表紙（二四×一六・五糎）、表紙中央に朱筆を以て「孝経全」、左上端に墨筆もて「古註孝経」と題署され、料紙は日本の楮紙に類する。裏打改装。巻首に「孝経序／（低四格）御製序并注」を冠し、本文は内題なく、序末に直に接続して四格を低して「開宗明義章第一」と題し、六朝唐旧鈔の古式を遺している。巻末は末文後一行をおいて「御注孝経一巻」と題し、一行を隔てて「孝経音略」題共四行を附する。左右双辺（二〇・八×一五糎）有界十五行、行約廿四字内外、注小字双行約卅三字内外。版心白口「孝経（丁付、一―六）」。象鼻は殆ど破損。炫敬匡竟胤恒通の字欠筆。敬の字は一部欠かざる所がある。巻首に「脩竹蔭」「宮内省／図書印」、前副葉紙に「椒斎」「狩谷／望之」（白文）、後副葉

紙に「狩谷望之／審定宋本」「湯島狩／谷氏求古楼／図書記」の印記あり。

この本を入手した狩谷棭斎は之を北宋仁宗朝の天聖明道間の刊刻と鑑定し、校譌跋文を附して文政九年覆刻して世に弘めた。前記の如く、真宗の恒と真宗の后父の諱通の字を欠筆し、仁宗の貞、英宗の曙等の字は本書にないのでその欠画の有無は知る由もないが、英宗の父の譲は避諱していない。真宗の皇后劉氏の父の諱たる通字の末画を欠くのは、真宗の崩御後遺詔によって天聖元年（一〇二三）皇后が太后として朝に臨むや天下に令して父の諱を避けしめたからである。しかし明道二年（一〇三三）太后が崩じたので、旧に復せしめた。従って棭斎が本版の刊刻を天聖明道間と審定したのは至当である。本版は字劃端荘遒勁にして撫墨また蒼古、僅か現存する北宋槧本中の最古版の一つと云うべく、海内無二の鴻宝として喧伝されている。棭斎没後故木村正辞博士の儲に転じ、博士は明治四十年之を秘閣に献納したのである。

御注孝経の宋元版には他に従来宋刊と信じられた岳氏荆谿家塾刊本（前述の如く実は元刊、北京図書館現蔵、四部叢刊等に影印）が知られるにすぎない。本版と石台本並に岳本との間にはそれぞれ僅かながら異同が見られ、その校異は本版の昭和七年日本書誌学会編刊玻璃版影印本に附された長沢規矩也博士の解説末の校勘記に明かである。

新刊全相成斎孝経直解　元貫雲石（小雲石海涯）撰　元至大元年（一三〇八）序刊

（林家蔵）　一冊。茶褐色表紙（二三・七×一五・八糎）。裏打修補が加えられ、もと包背装の如し。首に旨至大改元孟春既望宣武将軍両淮万□□（戸府）達魯花赤小雲石海涯北庭成斎自叙の自序あり。本文巻首「新刊全相成斎孝経直解」、巻末「北庭成斎直説孝経終」と題す。左右双辺（約一九・五×一二・五糎、序は四周双辺）、うち上方六・七糎を上層となし全葉絵図を掲げ、下欄を経注文となす。図下の経注文は有界十行、行十三字、注小字双行。版心の上象鼻は絵図が続き、下は小黒口双黒魚尾「成孝経（丁付）」。表紙には室町期の筆で左端に「孝経　運林之」、右下端に「持主」の墨書があり、首葉に古朱印が捺されているが、印文未詳。

四庫未著録。この本については之を昭和初名古屋に於て発見入手された故林秀一博士と故長沢規矩也博士共撰の「元刊本成斎孝経直解に関して」（「書誌学」一巻五号）の解題がある。著者は元史によれば、もとウイグル人、父は楚国忠恵公、名は貫只哥、遂に貫を以て氏と為す。本名は小雲石海涯、漢名を貫雲石と云い、酸斎と号す。生れて神彩秀異、膂力人に絶し、長ずるに及んで節を折って読書、姚燧に従って学び、辞を吐けば文と為り、尤も楽府に巧み、初め父の官を襲って両淮万戸府達魯花赤となり、仁宗の時翰林侍読学士知制誥を拝したが、疾と称して辞して江南に還り、薬を銭唐市中に売って姓名を詭り、服色を易えたので、人之を識る者がなかった。泰定元年卒。年卅九。文靖と諡さる。著に文集若干巻・直解孝経一巻あり。今

「貫酸斎詩集」、散曲の「酸甜楽府」（徐再思合撰）が世に行われている。本書は自序によれば、許魯斎の「大学直説」に倣って、平易に解釈して匹夫匹婦も孝悌の道に達して、不孝に陥らざらしめんとすと云う。全相と題する如く、全葉上欄に孝子故事の挿絵を置き、経文は今文により、注は「直解」「直説」と題する如く白話文を用いた口語解釈書である。本書の注文は頗る口語的で、蒙古文を漢文に直訳せる文体の影響が見られ、元典章・通制条例・元代白話碑等と共に元代言語資料として注目されている。本書は銭大昕「補元史藝文志」金門詔「補三史藝文志」倪燦「補遼金元藝文志」盧文弨「補遼金元藝文志」に「小雲石海涯孝経直解一巻」と録されているが、明清諸家の蔵書目には見られず、海内の孤本である。この本は古く我が国に伝来したらしく、室町期の朱筆句点返点送仮名が書入されている。民国廿七年北京来薫閣書店刊の影印本がある。

孝経の元刊俗本には他に故那波利貞氏蔵「新刊全相大字孝経一巻・新刊出相千字文一巻」一冊があったが、不幸焼失したと云われる（長沢規矩也「絵入の宋刊本に就いて」書誌学一巻一号参照）。同本は「全相大字孝経は、同じく全相の孝経にはあれど、彼は唐明皇御製序を首におき、全九葉のみ。白話文ならざれば、内容を兼ぬる此本の如く重要ならざるなり。版式上、此形式を有するものは、明代にもなし、鄭振鐸氏は福建刊本の特徴と云へり（中国文学史第九五六頁）。予亦之に賛す」と（「元刊本成斎孝経直解に関して」書誌学一巻五号）。

群経類

明本排字九経直音　前後集各一巻　不著撰人　元至正一七年（一三五七）刊（建安、日新書堂）

（内閣文庫蔵）二冊。森志著録。後補淡香色表紙（二三・五×一四・八糎）。題簽剝脱の痕のある所に「排字九経直音前(後)集」と題し、下に「青松」（清原国賢の号）の墨署名あり。また表紙の右側に目録外題を記し、その左に「元板至正丁酉刊」と書され、右下方に「国／賢」の朱印が鈐さる。首に扉あり、上に「熊氏博雅堂刊」と横書、下に「明本排字／九経直音」と大書し、その行間に「○陸徳明音義○」と小書さる。本文巻首「明本排字九経直音（隔四格）前集（墨囲白文）／（低二格）孝経」（跨行）と題す。巻末後集末題の前に、「至正／丁酉」（鐘形）、「日新／書堂」「綉／梓」（炉形）の木記がある。左右双辺（一八・三×一一・八糎）有界十五行、行廿二字、注小字双行、標字は墨囲陰刻。各書の末に「補遺」（墨囲陰刻の標識）を附する。版心小黒口単黒魚尾、「直音前（後）（丁付）」。「天師明経儒」「仁正吳長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」「昌平坂／学問所」等の印記、巻末に文化五年の市橋長昭の「寄蔵文廟宋元刻書跋」が附綴さる。室町末の明経博士清原国賢等清原家旧蔵にして、市橋長昭の献納宋元版三十部の一つ。前記の刊記の左傍即ち後集尾題の次に「元至正丁酉我朝後村上帝正平十二年／北朝後光厳帝延文二年距今四百十六年／享和壬戌十月（印）」の市橋長昭の筆と思われる識語が存する。

前集に孝・論・孟・詩・書・易、後集に礼・周礼・春秋を収める。四庫目は「末題歳次丁亥梅隠書堂新刊」本を著録し、丁亥を元初の至元二四年に繋け、「巻首題曰明本者、宋時刊版、多挙其地之首一字、如建本杭本之類、此蓋明州所刊本、即今寧波府也」と。この梅隠書堂刊本は現在その所在が明かでない。ただ首題冠称の明本はその本の刊行地を意味するわけではなく、麻沙坊刻本が監本等と冠した例と同じく、都の官刊本に依拠したと箔をつける射利の誇称と解すべきである。この本が巻中に日新書堂の刊記を有し、扉（もと封面）に「熊氏博雅堂刊」と印されているのは、後に博雅堂に求版重印されたのであろうか、その間の関係は詳かでない。内閣文庫蔵の王元善撰「四書輯釈通攷」（存論語）は「永楽丙戌／博雅書堂新栞」の刊記を有し、序には熊氏博雅書堂と記されている。この本は印面にかなり漫漶の所が見られ、明前期の後印本である。静嘉堂文庫蔵本は陸志に元刊と著録され、陸氏の「十万楼叢書」二篇に翻刻されたが、本版と字様が相似せる別版の十四行本で、明初の刊刻と断ずべきである。本書と内容を殆ど同じうする宋孫奕撰と題する「九経直音」の元刊本には北平図書館原蔵十二巻本（拙著著録）、北京図書館蔵十五巻本が知られるが、本版と同版本の所在は他に聞く所がない。

四　書　類

論語註疏　一〇巻　魏何晏集解　宋邢昺疏　唐陸徳明釈文　〔宋光宗朝〕刊（〔蜀〕）

（宮内庁書陵部蔵）　一〇冊。森志・島考著録。後補黒色行成表紙（二五×一八糎）、裏打改装。首に「論語序」（第二・三行に低二格を以て「翰林侍講学士朝請大夫守国子祭酒上柱国賜紫金魚袋邢昺疏／唐国子博士兼太子中允贈斉州刺史呉県開国男陸徳明釈」と題署）あり。本文巻首「論語註疏巻第一／学而第一何晏集解　邢昺疏」と題し、巻二以下は何晏以下の題署がない。左右双辺（二三・七×一二・六糎）有界八行、行十六字、注・疏・釈文は小字双行で、界を有し、行廿五字内外にして不定。疏・釈の標識は円で囲める単行大字。版心白口単黒魚尾「侖亢幾　（丁付）」。巻一にのみ下象鼻に先・昌の刻工名が見える。欠筆は厳格ではなく、玄弦弘匡恒貞桓慎敦燉の字は多く欠画しているが、敬殿讓溝講は稀に末画を欠く程度で、慎敦の字は欠く欠かざるが相い半ばして一定せず、郭椁の寧宗の諱は欠筆しない。巻中往々部分的な欠損の箇所が存し、巻六の第十四丁は江戸期の補写。巻一・四・七の首及び巻三・六の末に「金沢文庫」の墨印が鈐され、そのほかに「顧氏／定斎／蔵書」「定斎」「檇李／顧然／雝叔」（白文）「辛」「丑」の印記がある。

この本は古く我が国に将来された金沢文庫旧蔵本にして、他に同版本の伝存を見ず、海内無双の宝笈として名高く、民国一八年中華学藝社刊（張元済解題）及び昭和五年渋沢栄一刊の影印本を通じて世に知られている。欠画が光宗に止って寧宗に及ばざる点から、その刊刻は恐らく光宗朝間にあって、寧宗中期を降らず、その字様から按じて蜀刊たることが推測される。論語正義は単疏本の伝存はないが、本版は比較的古体を遺し、附

された経典釈文も刪節が殆どなく、正義・釈文共に十行本以下の通行本の訛脱を訂正し得る佳処のいかに多きかは、島田翰・張元済等が既に指摘せる通りである。論語正義現存本中の最古最善本と称し得る。

論語註疏解経　二〇巻　魏何晏集解　宋邢昺疏　元泰定四年（一三二七）刊

（静嘉堂文庫蔵）　至明正徳遞修　六冊。巻一四―一六補写。陸志著録。新補褐色水玉ぼかし文様表紙（二八・六×一七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二七糎。首に「論語註疏解経序」（第二・三行低一格「翰林侍講学士朝請大夫守国子祭酒上柱国賜紫金魚／袋臣邢昺等奉　勅校定」と題署）あり。本文巻首「論語註疏解経巻第一」、次行「学而第一（隔四）何晏集解（格二）邢昺疏」と題す。左右双辺（一八×一二・四糎）有界十行、行十八字、注疏文小字双行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「吾亢幾フ（或は幾）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり、左上欄外の耳格に篇名を題する。明前期修の版心は黒口或は粗黒口で、上象鼻にあった正徳の補刊年は剜去され別紙で襯補されている。しかし明修の葉は比較的少い。刻工名は以清、以徳、王君錫、君錫、王英玉、英玉、王国祐、国祐、新安王栄、栄、胡古月、古月、江子明、子明、江住郎、住郎、蔡寿甫、寿、寿甫、崔徳甫、徳甫、葉徳遠、徳遠、詹応祥、応祥、程瑞卿、瑞卿、天易、天錫、徳山、徳元、徳成、茂卿、劉和甫、和甫（以上原刻）、文昭（正徳修）。玄弦弘殷匡恒貞徵懲樹讓桓完慎敦等の字は末筆を欠くか或は墨囲乃至括弧が加えられている。巻一本文首葉の下象鼻に「泰定四年程瑞卿」と、また巻三首葉の中縫に「泰定丁卯」、下象鼻に「王英玉」と刻されている。

十行本注疏合刻本の一。版心の泰定四年の年紀から、この十行本注疏の刊年がほぼ推定し得る。同版の伝存本には、中央図書館（二部、拙著著録）・北京図書館蔵本や森志・楊録・旧京（120 121）著録本等がある。

孟子註疏解経　一四巻　漢趙岐注　宋孫奭疏　〔元〕刊

（静嘉堂文庫蔵）　至明遞修　八冊。陸志著録。新補褐色水玉ぼかし文様表紙（二九×一七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二六・七糎。首に「孟子正義序」（第二・三行低一格「朝散大夫尚書兵部郎中充龍図閣待制知通進銀台司兼／門下封駁事兼判国子監上護軍賜紫金魚袋臣孫奭撰」と題署）あり。本文巻首「孟子註疏解経巻第一上」、次行「梁恵王章句上凡七章　孫奭疏」、巻一下以下は次行「梁恵王章句上（隔三）趙氏註（格二）孫奭疏」と題する。左右双辺（一八・三×一二・五糎）有界十行、行十八字、注疏文小字双行、行廿三字。版心白口双黒魚尾、「孟亢幾　（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名、左上欄外に耳格あり、篇名が記さる。明修は粗黒口、或は白口、上象鼻に「侯番劉校」、或は中縫に「卿林重校」と印され、下象鼻に刻工名あり。上象鼻の正徳の補刊年は剜去され、別紙で襯補。原刻の刻工名は、巳善、善、君祐、祐、江元寿、仲明、枝、伯、中、宸、山。明修は「侯番劉校」の下に葉金、范元福、王進富、曾堅、蔡順、劉

生、江富、陳珪、陸文進、江長深、陸栄、「卿林重校」の下に蔡順、陸四、葉金、葉寿、范元福、呉一、謝元慶、正徳修に尚旦、楊尚昇、烏。玄弘殿匡筐胤恒貞樹譲桓完搆慎敦等の宋諱の字に往々欠筆、或は墨囲が見られる。正徳以後の修が加っているが、明修の葉は比較的少い方である。巻一上の首四葉、巻一下第十二、巻二上首、巻一三上の尾、巻十三下第十二葉は補写。

十行注疏合刻本の一。同版本に中央図書館（二部、拙著著録）・北京図書館（二部）・上海図書館・北京大学蔵本等がある。

この十行注疏合刻本は現存本の多くは明正徳年間の修補が加えられているので、正徳十行本とも称され、阮元が宋刊十行本として十三経注疏合刻本の底本となして以来、現在最も広く依用される通行本となっている。十三経中所謂十行本に属するのは三経三伝及び周礼・礼記・論語・孟子の十経で、儀礼は元来なく、孝経は明刻、爾雅は九行本である。この十行本は従来宋閩刊本と信じられて来たが、長沢規矩也博士が「正徳十行本注疏非宋本考」（昭和九年「十行本注疏考」と題し「書誌学」三巻六号に発表、後改訂の上「書誌学論考」所収）に於て、その毛詩・左伝はそれぞれ足利学校遺蹟図書館蔵宋建安劉叔剛刊毛詩・左伝注疏の覆刻なること、他の八経と共にその原刻の刻工が全て元人なることを考証し、十経は宋刻に非ずして元刻本たることを明かにして、此が学界の定説となった。その刊年について博士は論語・周礼の版心の一部に泰定四年の年紀があるが、「年号は補刻の際に加えられたる例多く、従来目睹したる明修本のみにては、大徳頃の刊本を泰定に補修したるものなりや、泰定の刊刻なりやは明瞭ならざるものなり」と断定を控えられた。しかし該論文のみならず他の論考その他に於ても、その論調から見て、ほぼ大徳頃の刊刻と推定しておられたようである。その刊者刊地については、「元刊注疏の全部を通じて国子監刊本なるかも知れず。但し、官刊本なりや、私刻本なりや、明証なし」と未詳とされた。この十行本の字様は宋建安刊本特有の典型的なるものであるから、一般にはその閩刻たることは疑われていない。しかし底本が閩刻たることは疑いなしとしても、覆刻である場合はそれが必しも閩刻とは限らない。元刊十行本注疏の刊年・刊地についてその原刻の刻工名から再検討を加えてみたい。

十経全部の原刻工名は各経毎に既に記したが、ここに改めて一括して列挙すれば、以清、以善、以徳、王英玉、英玉、王栄、王君粋、王君錫、君錫、王国祐、国祐、丘文、君美、君祐、君善、敬中、胡古月、古月、江子明、子明、江住郎、住郎、江元寿、国右、興宗、蔡寿甫、寿甫、崔徳甫、徳甫、子興、時中、朱文、七才、仁甫、善卿、善慶、詹応祥、応祥、智夫、仲高、仲明、陳伯寿、伯寿、禔甫、程瑞卿、瑞卿、鉄筆、天易、天錫、徳成、徳山、徳元、伯善、文仲、文一、文粲、茂卿、埜卿、祐甫、余中、余仲、余安卿、安卿、葉徳遠、徳遠、劉和甫、和甫である。此等刻工が刊刻に従事せる他の刊本は次の如く挙げられる。

大徳四年太医院刊大徳重校聖済総録（朱文）、大徳五年序刊儀礼集説（王栄）、大徳間信州路儒学刊北史（子明、徳甫）、同饒州路儒学刊隋書（〔川金王〕徳元）、同崇文書院刊五代史記（子明）、宋福唐郡庠刊大徳・元統修漢書（仁甫、文仲〈大徳〉、余安卿、君祐〈元統〉）、同後漢書（仲明、文仲〈大徳〉、余安卿、君祐〈元統〉）、至大刊至治二年修福州路刊通志（王英玉、英玉〈至大〉、王君粋〈至大〉、君粋、〔虞〕君裕、〔王〕仁甫、仁甫、伯寿、〔陳〕祐甫、祐甫）、皇慶元年刊佩韋斎文集（応祥）、延祐三年湖州禅幽庵刊景徳伝燈録（古月、朱文）、宋淳祐一〇年福州路刊大徳・至大・元統修国朝諸臣奏議（君裕）、泰定元年西湖書院刊文献通考（子明、仁甫）、天暦二年刊唐書（英玉、王君粋、君粋、王栄、君美、子明、徳成、徳甫、茂卿）、宋嘉定刊元統三年修儀礼経伝通解（興宗）、元刊胡三省注資治通鑑（〔虞〕以徳、以徳、〔江〕君裕、君裕、〔江〕君美、君美、興宗、子興、〔明〕時中、時中、〔鄭〕七才、七才、〔黄〕善卿、善卿、〔凌〕善慶、善慶、〔翁〕禔甫、天錫、〔丘〕文粲、文粲）、元刊晦庵先生朱文公文集（以善、応祥、仲明、徳成、徳甫、徳遠、伯善、茂卿）、元謝子祥刊儀礼図（王君粋、君粋、子興、時中、七才）、元岳氏刊春秋経伝集解（子明）、宋刊元修所謂眉山七史（王栄、朱文、天錫、余中）、宋両淮江東転運司刊元修漢書（王栄）、宋越刊元修孟子注疏解経（王栄）

以上を以て見れば、刻工は大徳から元統に及び、刊年未詳書も元末の至正に降るものではない。従って刊刻の上限は大徳（一二九七―）、下限はほぼ元統・至元（―一三四〇）の間と考えられよう。しかし論語の版心に見える「泰定四年程瑞卿」「泰定丁卯王英玉」、周礼の「泰定四年王英玉」の葉は程瑞卿・王英玉の刻にかかる他の全ての葉と共に原刻の版面であって、修補のものとは断定し得ない。従って上記の刻工の生存活躍期間から考えてもこの十経は泰定（―一三二七）前後の刊刻と推定するのが穏当であろうか。

既述の如く、本版の字様は建安体で、詩・左伝の二経は宋建安劉叔剛刊本の覆刻たることは明かであるが、他の八経についてはその底本となった宋刊本の伝存を見ない。劉氏が二経の外に他の注疏本も上梓したのか、劉氏に非ずともそれに倣った他の八経が宋代に刊刻されたが現存しないのか、それとも元の十三経開板に際し、二経に倣ってその字様版式を統一して新に版下を書いて鋟刻したのか、それを知る資料は何等存しない。この元刊注疏本には厳格ではないが欠筆がかなり見られる。宋版でも宋後期の版、特に建安本は欠画は極めて粗である。元刊麻沙本は覆宋でなくとも匡桓等の字は往々末画を欠くが、此は避諱の意味が失われて一種の略体化したもので、その惰性は明の麻沙本にも尾をひいている。本版の欠筆は単なる惰性や略体化とは見られぬもので、就中論孟の如きは敦の字までかなり欠筆を行い、末画を欠かぬ場合はその字は墨囲或は括弧が加えられている。この様なことは覆刻でない限り、元になって新に版下を書く場合には到底考えられぬことである。従って本版十経も殆どが宋刻閩版の覆刻と想定するのが妥当であろう。

次に本版の刊者刊地であるが、右の刻工名から見る限りでは、閩地区刊と杭州地区刊とが相い半ばしている。本版と共通する刻工の多い胡三省注通鑑は一般に興文署刊とされているが、一説に臨海刊とする王国維の傾聴に価する異説が出ている。臨海は浙江で、興文署の刊刻は杭州地区でなされることが多いらしく、いずれにせよその刊地は福建地区ではあるまい。朱文公文集と唐書は閩刻の可能性が多く、通志は福州路の刊である。本版の刻工は西湖書院刊文献通考を始め、西湖書院に移管された宋刊公使庫本の元修に従事している者が多い。上記の諸本に見る如く、刻工は必ずしも一定地区の刊刻に限定されず、相互に交流し、また渡り歩くこともあろうし、特に大出版の行われる時、西湖書院が大量の宋版の大補刻を行った際には各地の刻工が同地に鳩集されたことも考えられる。閩版の覆刻乃至はその倣似の版であるから福州で開板されたようであるが、必しもそうとは断定できぬ。その板木が明南監に移されたことを考えれば、坊刻版ではなかったと思われる。しかし刊地が福建か杭州か、私刻本か官刊本かについては目下の所長沢博士と同様明証なしとして、後攷を待つ外ない。

中庸説　〔六〕巻　宋張九成撰　〔宋孝宗朝〕刊

（東福寺蔵）　存首三巻　一冊。重文。森志著録。後補薄緑色刷出行成表紙に藍色絹表紙（三〇・二×一九・七糎）を新に添えて金鑲玉装に改装。原料紙縦二六・二糎。序目なく、巻首「中庸説巻第一／（低七格）無垢先生范陽張　九成／（低二格）中庸説」と題す。左右双辺（二〇×一四・二糎）有界十行、行十八字、注低一格単行大字。版心白口双黒魚尾「中幾　（丁付）」。版心の部分は破損が多く、上象鼻に大小字数、下象鼻に鄧信の刻工名が全葉にわたって刻され、慎の字にのみ欠筆が見られる。巻首に「普門院」の印記あり。

四庫未収。宋志に「張九成中庸大学孝経説各一巻、又四書解六十五巻」と録されているが、その後の諸家書目には絶えて著録を見ず、久しく伝を失った孤本である。九成が独特の見解から中庸を注したもので、朱子は本書を仏意を以て儒を解するものと攻撃した。朱子が引用せる文は本書と合致している。巻末に「弐冊之内／宝永三年丙戌八月良辰／龍菖首座代／龍奭修褶焉」なる修補識語があり、当時は二冊の完本であったらしい。森志には「中庸説六巻宋槧本　普門院蔵」と録され、六巻であったらしく、現存の巻三は、「修身則道立…則天下畏之」の章の注までを収める。刻工の鄧信は孝宗朝贛州刊文選・淳熙九年江西漕台刊呂氏家塾読詩記・寧宗朝頃刊前漢六帖にその刻工名が見えるのと本版が孝宗の慎の字の末画を欠くこと、その字様を考えれば、恐らく孝宗朝淳熙中の浙刻であろう。字様端雅撫刻精良にして印面麗わしい。

首の「普門院」の蔵印の示す如く、東福寺開山聖一国師円爾の将来本と思われ、文和の「普門院経論章疏語録儒書等目録」等には「無垢先生中庸説　二冊」と著録されている。巻首上眉・巻二末・巻三末上眉に明治初の東福寺住持実応士匡の手識三条が存する。この本は続古逸叢書及び四部叢刊三編に影印収

入されている。

〔四書集註〕宋朱熹撰　元延祐元年（一三一四）刊（麻沙万巻堂）

（宮内庁書陵部蔵）存孟子七巻　三冊。森志著録。後補香色表紙（二五・五×一六・五糎）、室町期の筆で「孟子　幾」と外題が署さる。一部裏打修補。首に「孟子（隔十一格）朱熹集注序説」あり。本文巻首「孟子巻之一（隔八格）朱熹集註（巻二のみ注に作る）／（低二格）梁恵王章句上凡七章」と題す。序説後の裏葉に「延祐甲寅良月／麻沙万巻堂刊」の双辺木記がある。ただこの刊記の左行六字は補写であるが、此は刷りが極めて薄くかすれているので上から墨でなぞったようである。四周双辺（二〇・二×一二・四糎）有界十二行、行廿四字、注小字双行。版心小黒口双黒魚尾「孟子幾（丁付）」。上象鼻に字数あり。

孟子のみ存するが、恐らく四書の残本であろう。他に同版本の伝存を聞かず、森志には「求古楼（狩谷棭斎）蔵」と著録された本である。室町期の朱点朱引朱筆のヲコト点返点送仮名、また巻一には別筆の墨筆による返点送仮名も附され、巻中所々朱筆の注記書入が存する。

〔四書集注〕大学章句一巻中庸章句一巻論語集注一〇巻孟子集注一四巻　宋朱熹撰　元延祐五年（一三一八）刊（温州路学稽古閣・趙鳳儀）

大学は首に朱熹の「大学章句序」あり、本文巻首「大学（大旧音泰。今読如字）朱熹章句」と題す。中庸は首に朱熹の「中庸章句序」あり、本文首「中庸（下に小字双行注）朱熹章句」と題す。論語は首に「論語（隔五格）朱熹集注序説」、次に「読論語孟子法」あり、本文巻首「論語巻第一（隔三格）朱熹集注」と題す。孟子は首に「孟子序説（隔四格）朱熹集注」あり、本文巻首「孟子巻第一（隔三格）朱熹集注」と題する。論語首の「読論語孟子法」の後に低三格を以て延祐五年趙鳳儀の左の刊書跋が存する。

余官京師時士大夫之仕于／温者以泮宮四書見贈視其／句読明白心甚嘉之暨来為／守則板籍皆煨燼矣思倣旧／重刊以恵後学会建稽古閣成／乃俾学録周習甫詳加校正大／字繕写聚工鋟梓通三百五十／餘板庋列于閣願摹者聴焉／庶家有是書由口誦而躬行／実美教化之一助也岩延祐／戊午長至日古汴趙鳳儀書

左右双辺（二二・七×一六糎）有界七行、行十五字、注小字双行。句点附刻。版心は線黒口双黒花魚尾があって寛、「大学章句（中庸章句、論語註巻幾、孟子註巻幾）（丁付）」。下象鼻時に上象鼻に、張雲谷、徳明、明、徐徳俊、徳俊、徳、俊、徐俊、王朝佐、朝佐、佐、王伯大、伯大、周君沢、君沢、周、潘宗玉、宗玉、宗、玉、潘、邵宗奕、邵、除の刻工名あり。中央図書館蔵本には大学・中庸序の末に「周習甫書校」、論語巻二・四・五・八・十、孟子巻一・六・七の各巻末に「学録周習甫繕写校正」、論語巻三・九の各巻末に「学録周習甫書校」の各一行、また論語巻二・五・九、孟子巻二・三・四・六・七の末に「温州路学／稽古閣書」の単辺双行木記が刻されている。しかし次の内閣文庫・書陵部蔵本にはこの刊記及び周習甫書校の行

がなく、その箇所に微かにその痕跡らしいのが見られるから、何故か剜去された後印と思われる。

跋によれば鳳儀は嘗て温州路（浙江省）学刊刻の四書集註を贈られ、その断句明白なのを嘉していたが、守として赴任した時、その板木が既に焼失していたので、それを再刊して路学の稽古閣俊工の機会に板木を閣に置いて希望者の刷印に応ずるという。大字断句の字画明瞭なる堂々たる版である。その刻工の徳明・王朝佐は後至元六年湖南僉憲赫国宝刊唐丞相陸宣公奏議纂註、徳俊は皇慶元年序刊佩韋斎文集、伯大は元刊六書故、徐俊は宋両淮江東転運司刊三史の元修、徳明はまた至大福州路刊至治二年修通志の高徳明、後至元六年慶元路儒学刊玉海の王徳明のどちらかであろうし、元刊胡注資治通鑑にも徳明の名が見える。従って本版が延祐の刊たることを傍証し得る。本版のテキストは率ね宋刊集注の所謂朱子定本とほぼ一致するが、中庸首章の「蓋人知云々」の朱注の如きは却って通行本と同じく、宋版定本系とも些少異同が存する。近本との主な異同は王国維が蔣志中に摘録している。

（内閣文庫蔵）〔後印〕　一四冊。後補濃栗皮色表紙（三〇×二一糎）。或は襯紙を挾み或は裏打の修補が施さる。論語首の「読論語孟子法」とそれに続く趙鳳儀跋の葉を欠き、巻十二は第廿張に止って以下を欠く。巻中間々汚損の所があり、孟子後半は特に甚しい。さ程後刷という程ではないが、上記の如く次掲本と共に論語・孟子各巻末の稽古閣の木記及び周習甫の校正の一行が削除されている。「弘文学士院」「林氏／蔵書」「昌平坂／学問所」等の印記あり。

（宮内庁書陵部蔵）　存論語一〇巻　〔後印〕　四冊。後補艶出黒無地表紙（三〇×二二・二糎）。題簽に室町期の筆蹟で「魯論朱熹注幾之幾」と墨書さる。裏打改装本。森志に「京師三角氏蔵」と著録された本に該当か。巻一前半には室町期の朱引朱筆返点送仮名を附し、行間眉上に間々仮名抄の書入がなされ、また巻三の一部にも朱引仮名抄の書入が見られる。

本版は他に中央図書館蔵本（有欠、蔣氏密韻楼・張志適園旧蔵、逮目・蔣志・拙著著録）が知られる。

静嘉堂文庫蔵大学一巻大学或問二巻中庸一巻中庸或問二巻論語一〇巻孟子一四巻の四書集注二四冊（汪士鐘・周良金等旧蔵、陸志・陸続跋著録）は元刊覆宋本とされているが、中央図書館（存孟子、拙著著録）や丁氏旧蔵南京図書館現蔵（莫録・丁志・盎影著録）の元常州府学刊覆宋本をさらに明初に覆刻せる版である。

論語〔纂疏〕　一〇巻　宋朱熹集注　趙順孫纂疏　〔宋末〕刊（〔括蒼学官〕）

（東洋文庫蔵）　二〇冊。傳目著録。後補金砂子散し紺色表紙（二八・五×一八・五糎）、襯紙を挾める改装本。首に清源洪天錫序の序（写刻）、「読論孟集註綱領／（低一格）」後学趙順孫纂録」、「読論語孟子法／（低一格）」後学趙順孫纂録」、「論語／（低四格）」朱子集註序説　後学趙順孫纂疏」を冠す。本文巻首「論語巻第一／（低四格）」朱子集註（隔三格）後学趙順孫纂疏／（低二格）学而第一」と題す。左右双

辺（二三・二×一四・二糎）有界九行、行廿一字、朱注低一格単行大字、疏低一格小字双行、行十九字。版心白口双黒魚尾、「幾巻（丁付）」、間々上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名あり、玄匡恒貞徵樹讓姞桓完慎敦廓の字末筆を欠く。刻工名は許怡、顧震、賈真、真、呉興、興、黄宥、黄升、升、蔡成、蔡元道、蔡仁、史祖、史、章水、徐嵩、徐侃、侃、沈祖、沈礼、沈、陳金、丁銓、馬良、藍宗、藍、宗、李斗文、劉文、俊、雇。「汲古／閣」「毛氏／家蔵」（白文）「毛斧季／攷蔵記」「江虞傅／沅叔攷／蔵善本」の印記あり。第一冊末に「癸丑臘月沈勇植敬観」の識語及び「謏周斎顧氏蔵」の附箋がある。毛氏汲古閣・傅増湘等旧蔵本。

順孫の纂疏の現行本は元刊本以降四書完具本で、本版は四書中の論語のみの残巻なのか、論語のみの単行なのか、他に同版本の現存が知られていないので、明かでない。首に天錫の序があること等から単行本の如く考えられる。通志堂本にある応俊序には「俊叨恩守括乃以邦人之志請入梓教授倪君澄王君慶高先後為校讎且涖其役論孟成曾縉雲令王君既済已中庸大学遂併刊於学官云」とあり、また通志堂本の牟子才中庸纂疏序等によると、順孫の郷里たる括蒼（浙江省）の縉雲に於て学庸が先づ刊行され、次いで論孟がその学官で併刊されたことが記されている。順孫は淳祐の進士、宋の滅びんとする端宗の景炎元年に没しているから、その出版はとも角宋後期であろう。

本版は字画明晰、白色の料紙は清浄にして印面精美なる早印本で、旧蔵者傅氏は宋刊となしたが、長沢博士等は宋版を覆せる元槧の上乗と審定して来た。今本版の刻工が刊刻に従事せる刊本を検索すれば次の通りである。刻工を共通すること最も多いのは宝祐五年湖州刊資治通鑑紀事本末（史祖、蔡成、沈祖、馬良、徐侃、徐嵩）である。その他蔡仁・馬良が寧宗理宗間刊周易本義・詩集伝・紹定二年平江府刊呉郡志、馬良は嘉定刊重校添註音辯唐柳先生文集・嘉定六年淮東倉司刊註東坡先生詩・淳祐二年大庾県刊心経政経、南宋初刊韋蘇集の宋修に、沈祖が南宋初刊通典及び越刊周礼疏の宋修、蔡仁が両淮江東転運司刊後漢書の宋修、沈礼が紹興二一年序刊臨川先生文集の宋修、陳金が嘉定刊儀礼経伝通解・嘉定九年刊春秋経伝通解の刻に従事している。徐侃の名は紹興・乾道の漢書（呉興も）・白氏六帖事類集・徐公文集・外台秘要方の刻工中にもあるが、明かに同名異人で、馬良も同名異人がいるようである。此等刻工名を元刊本中に探せば、劉俊が元末明初刊西山先生真文忠公読書記に見出される。しかし本版が元末明初のものとは到底考えられぬから、同名異人である。沈祖・丁銓・馬良は元の西湖書院で行われた宋刊諸本の宋修か元修か判定困難な修補に見られる。しかし以上の刻工名から見る限りでは本版は元刻に非ずして、理宗後期、恐らく宝祐咸淳間の宋刻に属することは明かで、應俊序に云う括蒼学官刊本に該当するものと思われる。

四書纂疏　大学・中庸各一巻論語一〇巻孟子一四巻　宋朱熹集注　趙順孫纂疏　〔元〕刊

（静嘉堂文庫蔵）　二〇冊。論語巻八補写。季目・陸志著録。

後補黒色表紙（二七・三×一八・八糎）、金鑲玉装、原料紙縦二四・七糎。首に後学趙順孫書の「四書纂疏序」、「四書纂疏引用総目」あり。大学は首に「大学章句序／（低七）後学趙順孫纂疏」、「読大学章句綱領／（低七）後学趙順孫纂録」あり、本文巻首「大学（大旧音泰 今読如字）」（注両行各右側に傍線附刻）／（低四）朱子章句／（低八）後学趙順孫纂疏」、巻末「大学巻終」と題す。中庸は首に「中庸章句序／（低八）後学趙順孫纂疏」、「読中庸章句綱領／（低八）後学趙順孫纂録」をおき、本文巻首「中庸／（低四）朱子章句／（低七）後学趙順孫纂疏」、巻末「中庸章句終」と題す。論語は首に「読論孟集註綱領／（低八）後学趙順孫纂録」、「読論語孟子法／（低七）後学趙順孫纂疏」、「論語／（低四）朱子集註序説／（低九）後学趙順孫纂疏」あり、本文巻首「論語巻第一／（低四）朱子集註／（低八）後学趙順孫纂疏」と題す。孟子は首に「孟子／（低四）朱子集註序説／（低八）後学趙順孫纂疏」をおき、本文巻首「孟子巻第一／（低四）朱子集註序説／（低八）後学趙順孫纂疏」あり、本文巻首「孟子巻第一／（低四）朱子集註／（低八）後学趙順孫纂疏」と題す。左右双辺と四周双辺（一九×一二・一糎）が混り、有界十行、行廿字、集注は低一格単行大字、疏は低一格小字双行、行廿三字。傍線附刻。版心線黒口双黒魚尾、「学疏（大学纂疏、中庸纂疏、中庸充、中充、語充幾、孟充幾等）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に所々吉了、吉、了、子和、子、和、子才、才、敏中、忠、小、呉、来、生、真、士、右、三、咢、文、中、公、東、冨の刻工名あり。「季振宜／字詵兮／号滄葦」「季振宜／読書」「季印／振宜」「滄葦」「振宜／之印」「揚州季氏」「麟湖周／氏子々孫々／斉家珍玩」「応召／珍蔵」等の印記、首冊の護葉紙に「季応召宝蔵」の署名あり。季振宜旧蔵、季目に「元板四書纂疏二十二本」と著録さる。

本版の字様は前掲の宋末刊論語纂疏のそれに倣いながら円柔の風を帯び来って元風となっている。宋刊に基づいた重刊であろう。同版本の所蔵を他に聞かない。論語巻八一冊は全巻補写で、巻末に「維大元重至元五年歳在己卯秋夷則／月望後二日李永甫々以補／其闕々聖経完矣」の識語がある。刻工の子才は所謂眉山七史の元修に従事している。元刊胡注通鑑・前至元十八年序刊涓吉成書に陳子和の名が見られるが同一人か否か。本帙には朱句点並に朱墨の各様の傍線圏点等が書入され、首冊の副葉紙にその句読例・点抹例の凡例が詳記され、末に後学劉自誠謹志の識語が存し、「右魯斎先生王文憲公筆也云々」と記されている。しかし魯斎王柏は宋咸淳十年の卒であるから、この本に書入する筈はなく、しかも凡例の筆蹟と劉自誠の識語のそれとは同筆である。魯斎書入の移写と考えてもその真偽は疑わしい。孟子巻八末に魯斎王氏曰云々の三行の書入のある所から想像したものであろうか。また眉上や欄外或は行間に諸氏の説や自説等の墨批語書入が存し、論語巻一・五・六、孟子巻二・四末に「西山」の朱筆署名、論語の巻二末に「西山灯下点」、巻三末に「西山灯下点徹」、巻四末に「養斎校?進?人読耳」の識語が記されている。

附音傍訓晦庵論語句解　二巻　宋李公凱撰〔南宋末〕刊

（〔建安〕）

（宮内庁書陵部蔵）　一冊。後補淡香色表紙（二一・二×一四・二糎）、天地が少し裁断された裏打改装本。巻首「附音傍訓晦庵論語句解巻上／（低六格）宜春李公凱仲容／（低二格）学而第一」と題し、巻下は「附音」が「音点」に作られている。左右双辺（一八・一×一二・三糎）有界十二行、行廿一字、注小字双行、行廿四字内外。経文には声点、右側に義訓が小字で刻され、注末に白文の標字を以て音注が附さる。版心線黒口双黒魚尾「語上（下）（丁付）」。左上欄外に耳格あり、篇名が記さる。匡恒桓慎の字に欠筆あり。所々破損の箇所があり、巻上の末葉が巻下の首葉の次に誤綴されている。「尹瑜／公謹」「坡平／尹氏」（白文）「兼葭堂／蔵書印」「昌平坂／学問所」「浅草文庫」の印記あり。木村兼葭堂旧蔵本。

四庫未収。同著者による前掲の「新刊直音傍訓纂集東萊毛詩句解」と同類の通俗注釈書で、書名の示す如く、「子曰（孔子言効）…学而時習之（重習）…不亦説（豈不悦在心）乎」のように経文の語句に、分かり易い訓解を傍刻し、注文は朱注を取捨して多少補言を加えて平易にしてある。宋末刊の麻沙本である。他に同版本の所伝を見ない。

附音傍訓句解論語　二巻　宋李公凱撰　〔南宋末〕刊（〔建安〕）

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵）　二冊。艶出茶褐色古表紙（一九×一二・八糎）、紅色題簽に「論語句解（乾（坤））」と墨書、その下に「東」の墨印が捺さる。包背装。天地やや裁断され、裏打修補が加えらる。巻首「附音傍訓句解論語巻上／（低八格）宜春李公凱仲容／（低二格）学而第一（凡十六章）」と題す。但し下巻は次行の題署がない。左右双辺（一五・九×一〇糎）有界十二行、注小字双行、行約廿二字内外。経文には句点、行間に小字を以て語意の傍注が附刻され、注文末に音義を附し、該当字は陰刻を以て標記さる。版心小黒口双黒魚尾「吾上（下）（丁付）」。下巻上象鼻に間々字数が刻され、裏葉左上欄外に耳格あり、篇名が印さる。欠画は厳格ではなく、ただ匡恒貞桓慎の字に欠筆が見られ、慎の字は欠かざるもあって一定しない。表紙左下端に「東」の墨印、後副葉紙に「青松」の墨署名、巻首に「小汀文庫」、巻尾に「小汀蔵書」の朱印あり。「東」は明経博士清原家の蔵印、青松は室町末の明経博士清原国賢の号、清原家・京都の福井氏崇蘭館・故小汀利得氏遺蔵本。

前掲本をさらに小型にせる南宋末建安刊巾箱本で、両書を比較するに注文に些少の出入あるが大同小異の同類で、本書の方がやや簡略の後出本と思われる。この本はほぼ全巻の経文に室町期の朱筆のヲコト点（紀伝点）返点送仮名（稀に別筆の墨筆を混ゆ）声点が詳細に附され、間々欄外に朱筆の校字が書入され、我が国への伝来の古きを思わしめる。室町時代経書講説と仮名抄著作の中心であった清原家にとってかかる俗解本は恰好の参考書であったであろう。

台湾の国立中央図書館には本版の覆刻たる元刊麻沙本が蔵され、本版と共に他に所伝を聞かざる孤本である。かかる通俗書は読み捨てられる性質上却ってその伝存は稀れであるが、本書

が引き続き三種も重版されている所を見れば、当時かかる平易な初学者向きの注釈書の麻沙本が盛行し、読書層が広く拡張されつつあった出版盛況の様相が想像される。

〔四書集成〕 不著纂輯人 〔元〕刊（〔建安〕）

論語は首に「論語／（低一格）朱子集註序説　語録　或問　（附）蔡氏集疏趙氏纂疏」あり、本文巻首「論語巻之一／○諸儒集成之書（曇門陰刻）／（低三格小字双行）朱子集註　朱子集義　朱子語録　朱子或問／南軒張子註　黄氏通釈　蔡氏集疏　趙氏纂疏／（低二格）学而第一」と題す。孟子は首に「孟子／（低一格）朱子集註序説　文集　語録　或問　（附）蔡氏集疏　趙氏纂疏」をおき、本文巻首「孟子巻第一／（第二・三行論語に同じ）／（低二格）梁惠王章句上凡七章」と題す。左右双辺（一七・八×一一糎）有界十行、行十八字。集註は低一格中字有界の双行、この三行は経文の約二行に相当、行廿字。疏は低一格小字双行、行廿二字。声点を附刻し、語録・或問・集義・張子註・程氏・通釈・集疏・纂疏・諸氏等の標識は大字陰刻、引用の人名は小字圏で囲み、音釈の標字は圏で囲まる。版心細黒口双黒魚尾「語幾巻（孟幾フ等）（丁付）〈或は陰刻〉」。裏葉左上欄外に耳格あり、篇名が印さる。匡桓等の字に間々欠筆がある。

四庫未収。本版は完本を儲蔵する所なく、次掲本の外には、中央図書館蔵本（存中庸、首尾欠、静盦・拙著著録）・北京図書館蔵本（存論語、瞿目瞿影に宋版と著録）が存するにすぎない。巻首に題署された如く、朱子集義・朱子或問・朱子語録・南軒張氏註（癸巳論語解）・黄氏勉斎幹著通釈（今佚亡）・蔡氏覚軒模著集疏（今存孟子）・趙格庵順孫著纂疏を引載集成して朱注の羽翼となしたものである。編輯者を題していないが、瞿目は本書を宋呉真子撰「四書集成」（亡佚）に擬定し、四書大全の藍本となった倪氏輯釈は皆実は本書より出て、「此本殆即呉氏原書」と推測している。いずれにせよ宋末元初の輯である。同種の北平図書館原蔵元刊本（存論語・孟子の零巻、拙著著録）は十二行十九字の別版で、編者は題していないが巻首には「四書集成論語（孟子）巻之幾」と題する。

（尊経閣文庫蔵） 存論語二〇巻　一二冊。胡麻塩艶出緑色表紙（二一・二×一四・五糎）。首冊には題簽剝脱の痕に「論語五臣疏」と墨書。包背装。裏打修補が施さる。首の朱氏序説欠。所々破損の葉があり、巻四第三五・三六、巻五第二三・二四、巻一九第二四葉以下補写、巻二〇は前半補写を混え、欠丁がある。「金沢学校」の印あり。経文・朱注には室町期の二手の朱句点返点送仮名、疏には朱点朱引が附され、眉上にまた間々押紙を以て朱墨両様の筆を以て正義や諸氏注を引き、或は玉篇等による音注が書入さる。

（内閣文庫蔵） 存孟子一四巻　七冊。後補裏打厚手白色表紙（二三×一三・七糎）、外題に「孟子集成幾」と墨書。裏打改装。「昌平坂／学問所」「文化甲子」「浅草文庫」の印記。室町近世初間の朱点朱引朱圏点朱声点、墨筆の返点送仮名（別手の朱筆も混ゆ）の附されること周密、また江戸期の書入が眉上に少し存する。

四書通　二六巻　元胡炳文撰　〔元〕刊（建安、劉氏南澗書堂）

（内閣文庫蔵）　存論語一〇巻　五冊。森志（「論語集註」と誤記）著録。後補香色表紙（二六×一五・七糎）。書外題「論語通幾之幾」、裏打改装本。首に「論語朱子序」、その末葉裏に「建安劉氏南／澗書堂重刊」の雙行篆書木記が刻され、次に「論語／朱子集註序説／（低九格）後学胡炳文通」（尾題「論語朱子序説」）、「読論語孟子法／（低九格）後学胡炳文通」（尾題「読論語孟子法」、裏葉を欠き、別紙を補配）を列す。本文巻首「論語巻之一／（低三格）朱子集註／（低八格）後学　胡　炳文　通／（低二格）学而第一」と題す。四周双辺（二〇・五×一二・七糎）有界十一行、行十九字、朱注改行低一格単行中字、行廿字、通小字双行。注末に陰刻の「通日」と標して自説が附さる。版心小黒口双黒魚尾「論語通巻幾（丁付）」。毎裏丁左上欄外に耳格あり、篇名が記さる。巻四末に欠丁あり。経文に間々朱筆を以て句点、所々朱引や返点送仮名が附されている。「吉田／氏蔵」（白文）、表紙及び冊尾に「昌平坂／学問所」、尾に「文化丁卯」等の印。吉田意庵旧蔵本と伝える。

本書の完本には、瞿氏鉄琴銅劍楼旧蔵北京図書館現蔵の元天暦二年崇化余志安勤有堂刊本（瞿目・瞿影著録、汲古閣旧蔵）がある。その本は本書の序・跋等から徴しても、本書の第一次刻本と看做し得る。瞿影の書影は首目と大学首のみを掲げて論語の箇所がないので断定はできぬが、それと本版を比較するに、版式行格を等うし、字様亦酷似しているから、恐らくその覆刻であろう。この本と同版本の伝存は他に知られず、本帙は印面美しい至正頃の重刊と思われる。この本の表紙の右下端に「四書通七（―十一）／孟子闕」と墨書されているから、もとは孟子を欠くが、学庸は存したと見える。

四書章図纂釈　大学・大学或問・中庸・中庸或問各一巻・論語一〇巻・孟子一四巻附四書章図檃括総要三巻　首目一巻　元程復心撰　元後至元三年（一三三七）刊（建安、呉氏徳新書堂）

首に「四書章図総目」、至大の江浙等処行中書省咨、皇慶二年七月の礼部呈及び中書省省礼房呈、趙孟頫咨、「四書章図参釈朝貴題贈序文」（程鉅夫・趙孟頫等八名の序）、大徳壬寅中伏新安程復心序の自序、「四書章図纂釈凡例／（低八格）新安林隱程復心子見経進」を冠し、次に「四書章図檃括総要巻之上（跨行）／（低六格）林隱程復心子見経進」三巻あり。本文は、大学は首に「大学章句序／（低八格）新安林隱程復心子見経進」（以下庸・論・孟の序の体式之に同じ、以下省略）あり、本文巻首「大学句問章図纂釈／（低七格）新安林隱程復心子見経進」（以下庸論孟の第二行の題署此と同じ、以下省略）「大学或問」（跨行）と題す。中庸は首に朱序あり、「中庸句問章図纂釈」「中庸或問」（跨行）と題す。論語は首に朱子論語集註序説をおき、巻首「論語集註章図纂釈巻之幾」と題し、孟子は首に孟子集註序説をおき、巻首「孟子集註章図纂釈巻之幾」と題す。首目の朝貴題贈序文後の裏葉に「富沙碧湾呉氏／徳新書堂印行」の双辺木記、総要巻上の末及び大学章句尾題前

に「至元歳次丁丑／菊節徳新堂印」の双辺木記がある。四周双辺（二一×一二・七糎）有界十三行、行廿字、朱注は低一格単行中字行廿三字、釈は低一格小字双行、行廿三字。但し大学或問中庸或問は有界八行、注低一格小字双行、行十七字。版心粗黒口双黒魚尾「大学図（大学問、中句、中庸問、語釈幾、孟釈幾等）（丁付）」。

四庫未収。復心字は子見、婺源の人。朱注に朱子文集・語録及び黄氏・輔氏等諸門人並に先輩の説を隠括折衷し、章を分ち図を作って、要旨を瞭然たらしめ、総要三巻は朱氏理学の綱要を図解説明したものである。至大元年江浙儒学提挙司が本書を行省に呈し、皇慶二年行省が朝に貢進し、復心に徽州路儒学教授が特授された。朱注のテキストは宋版系所謂定稿本に属する。本書は伝存頗る稀少であるが、後の王逢編「四書通義大成」に倪氏重訂輯釈等と共に合輯され、総要は二巻に改編して附刻され、その大成が四庫存目に入っている。「国立北平図書館善本書目」は「四書章図檃括総要四巻元程復心撰　明刻本」を著録、旧京135136著録本は同本と思われ、程復心撰「中庸章図檃括総要」と題するが、本版の総要とは内容が異る。

（内閣文庫蔵）　一二冊。森志著録。後補厚手白色表紙（二七・一×一五・三糎）、裏打され、元料紙縦二五・一糎。首の四書章図総目を欠き、大学序の次葉と省咨・礼部呈・省礼房呈の残欠が総要巻上の巻末に誤綴され、凡例が朝貴題贈序文の前にある。中庸の序の首葉及び本文巻首の葉を欠く。「昌平坂／学問所」「文化丙子」「浅草文庫」の印あり。経文には室町期の朱ヲコト点墨筆の返点送仮名（論語のみは所々墨筆訓点）が書入さる。

（宮内庁書陵部蔵）　存四書章図檃括総要三巻首目一巻　三冊。森志著録。新補香色表紙（二五・五×一七・一糎）、裏打改装本。「皇朝経進」と上に横書し、「新安子見程先生編述／文公四書／章図纂釈（この二行大書）／建安呉氏徳新堂印行」なる封面が今扉となって残っている。印面美しい早印本。総要巻中第二五・二六葉欠丁。室町期の朱点朱引、間々朱筆の返点送仮名圏点が附され、一部墨筆を混えた朱筆の書入注があり、左の朱書の加点識語が記されている。

（巻上末尾題後）天文九年庚子秋七月二十一日乾三叟守棱漫加朱（下に「国／賢」の朱印あり）

（巻下巻末）天文九年庚子秋七月二十二日乾三叟守棱漫加朱（花押）

巻下の朱識後の前にある墨署が朱で抹消されているが、辛うじて「大博士清原朝臣良雄」と判読される。朱識語は巻上の識語下の印章から「図書寮漢籍善本書目」「図書寮典籍解題漢籍篇」共に清原国賢のものとしているが、国賢は天文十三年の誕生であるから、あり得ぬことで筆跡も異る。それは筆蹟から見ても加点書入と共に国賢の祖父にして宣賢の長子たる業賢（後良雄と改名、永禄九年卒）の筆である。各巻末に「国／賢」、巻中・下首に「東」、巻首に「佐伯妻毛利／高標字培松／蔵書画之印」の印あり。

（宮内庁書陵部蔵）　存総要三巻・大学・中庸各一巻　二冊。

後補艶出暗緑色表紙（二四・五×一五糎）、裏打改装本。首目は自序・凡例のみで他は欠失。中庸序首一葉を欠き、中庸第二七丁は補写。総要を上冊、学庸を下冊に分つ。第一冊には朱点朱引、所々朱返点送仮名、第二冊は経文・朱注には朱点朱引朱ヲコト点朱返点送仮名（中庸はヲコト点なし）、纂釈には所々朱点訓点が附され、中庸尾題下に「応永二十歳次癸巳夏五初一在不二北軒下点　文明七季乙未六月朔重写点畢」の朱筆加点奥書がある。本奥書の「不二」は東福寺の塔頭不二庵なるべく、その加点奥書者は不二庵を構えた新注講釈の先駆たる不二道人岐陽方秀であろうか。「平安堀氏／時習斎蔵」「読杜／艸堂」「天下／無雙」「寺田／盛業」「字士孤／号望南」の諸印あり。裏表紙見返に「惺窩先生門人／堀正意字敬夫号杏庵所持本也」や大徳壬寅・応永二十・文明七の年紀につき弘化から溯った年数が記さる。

四書輯釈大成　大学・大学或問・中庸・中庸或問各一巻・論語二〇巻・孟子一四巻　宋朱熹集注　元倪士毅輯釈　元至正二年（一三四二）刊（建安、日新書堂）

首に至元三年丁丑歳春三月八日己酉門人倪子毅謹識の「四書輯釈大成凡例」及び「四書輯釈大成引用姓氏書目」あり。大学は首に「読大学法」及び「大学朱子序／（低八格）後学新安倪士毅輯釈」あり、本文巻首「大学（大旧音泰今読如字）／（低三格）朱子章句／（低九格）後学新安倪士毅輯釈」、巻末「大学章句畢」と題す。大学或問は巻首「大学朱子或問（次行低七格題署大学序に同じ、以下同じ）」と題す。中庸は首に「中庸朱子序（次行題署前に同じ）」をおき、本文巻首「中庸」（第二・三行同前）、末「中庸章句畢」と題し、中庸或問は「中庸朱子或問」（次行同前）と題す。論語は首に「論語朱子集註序説」及び「読論語孟子法（此朱子采二程子説）」をおき、本文巻首「論語巻之一／（低四格）朱子集註／（低七格）後学新安倪士毅輯釈／（低二格）学而第一」（第二・三行巻二以下なし）と題す。孟子は首に「孟子／（低二格）朱子集註序説」をおき、本文巻首「孟子巻之一」（第二・三行論語に同じ）と題す。首の凡例の末に「至正壬午夏五／日新書堂刊行」の双辺木記があり、また中庸朱子或問の尾題後に二格を低して写刻の自跋が附さる。四周双辺（二一・四×一三・三糎）有界十三行、行廿一字、朱注低一格単行大字、行廿三字、疏低一格小字双行、行廿三字。版心小黒口双黒魚尾「大学（大学問、中句、中問、論幾、語幾、孟幾）（丁付）」。

四庫未収。著者は字は仲弘、安徽省休寧の人、陳櫟（字は定宇）に学び、祈門山に隠居し講学教授に専念し、学者道川先生と称す。凡例・自跋によれば、師の櫟の四書発明と胡炳文（雲峯）の四書通とを会萃して宋元程朱派先儒の注説を輯め、至元三年に稿を起し、同五年に成るという。宋元諸儒の注を集成した朱注末疏の煩雑なる中では醇多くして疵少く精簡なりとの評を受け、四書大全が本書を藍本とせることは有名である。大全盛行して本書は隠れ、漢士に於ては殆ど伝を絶つに近く、四庫は、士毅が本書出版後さらに刊削を加えたという重訂四書輯釈を朱公遷約旨・程復心章図・王元善通考と共に合輯せる王逢編

四書輯釈通義大成を存目に著録している。しかし同本は四庫提要の云う如く書賈の改竄にかゝり、士毅の旧には遠い。本書は我が国には夙に伝来し、室町期の四書講読には大に参照利用された。我が文化九年刊官版は本版の精善なる覆刻である。

（尊経閣文庫蔵）　欠論語首三巻、孟子巻一―四、七―一〇一二冊。孟子巻一三第二九丁を欠き、或問の第二丁と論語巻五の第一七丁は補写。「尊経／閣章」「石川県勧／業博物館／図書室印」「学」の印記あり。学庸は経・章句に朱点朱引墨返点送仮名、時に朱筆振仮名が附され、大学或問は後半より中庸或問と共に加点なく、論語は所々朱句点、孟子は朱墨両様の返点送仮名が附され、皆室町末の加点である。

（宮内庁書陵部蔵）　存大学或問・中庸或問各一巻　二冊。後補白茶色表紙（二四・四×一五・六糎）、裏打改装本。蠹蝕が甚しい。「金地院」（相国寺の塔頭）の印あり。

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵）　存論語二〇巻　六冊。新補白群青色表紙（二四・八×一五・四糎）。「尊経／閣章」「前田氏／尊経閣／図書記」の印章あり。近世初を降らぬ朱点朱引墨返点送仮名・声点、一部朱ヲコト点、別筆の墨訓点が経文に附され、注文には朱句点が加えらる。

（宮内庁書陵部蔵）　存孟子一四巻　七冊。森志著録。後補香色表紙（二五・二×一五・八糎）、天地少しく裁断された裏打改装本。「昌平坂／学問所」「享和壬戌」「浅草文庫」等の印記あり。巻末巻十四尾題後に「応永九年春三月七日於南昌梅隠北窓下点之了／雖不□於博識助亦可資於童蒙諒無誚焉」なる朱書加点奥書が記され、朱点朱引朱筆の返点送仮名竪点（注は所々）が詳細に附され、欄外行間に朱筆書入があり、また室町期の墨別筆で纂疏、輔氏曰、正義曰、句解曰等の抄録や訓義等の書入がなされている。

本版は他に北京大学図書館に李木斎旧蔵論語巻一―一四の零巻が蔵さると云う。

楽　類

楽書　二〇〇巻首目二巻　宋陳暘撰　〔宋慶元六年（一二〇〇）序〕刊元至正七年（一三四七）（福州路儒学）〔明〕逓修

首に慶元庚申楊万里序の「三山陳山先生楽書序」、陳暘上進の「進楽書表」及び「楽書序」、建中靖国元年尚書礼部牒文、吏部奏劄子及び准行詔旨、次に「楽書目録」（目録題の次行低五格「迪功郎建昌軍南豊県主簿林宇冲校勘」と題署）あり。巻末に慶元己未重陽三山陳岐謹跋及び門生迪功郎建昌軍主簿林宇冲謹書の二跋を附す。また至正丁亥秋七月辛丑福州路儒学教授郡人林光大謹序の「礼楽書後序」を有する本もある。本文巻首「楽書巻第一」、次行低二格「礼記訓義」と題し、毎巻大題後子目を列して本文に接続する。左右双辺（二一・一×一五・八糎内外不定）有界十三行、行廿一字、注小字双行。版心白口双黒魚尾、「楽幾（巻幾、楽書幾フ）（丁付）」。上象鼻に間々大小字数、下象鼻に刻工名がある葉もあるが、ない方が多く、明修には線黒口或は粗黒口を混える。刻工名は伯、志、士、文定、文、

定、智輝、玉、君玉、君輔、子長、孟寿、孟、仁瑞、張広祖、天、大、用（以上皆元修）。巻一四二第三丁の弓思四は明修の刻工であろう。修補の箇所にも覆刻の関係で光宗の敦の字まで間々欠筆が存する。

本書は兄の陳祥道撰「礼書」と共に、宋の慶元年間陳岐が盱江（江西省建昌）に守たりし時、門人林宇冲に校勘せしめて上梓された。それを元に至って「礼書」と共に趙宗吉が至正七年福州路儒学に命じて重刻せしめたもので、厳密には前の宋の板木を使用した修補であるが、現存本には宋原刻の葉は殆ど無いと言ってよい程僅少であるから、実質は至正七年刊と言ってよい。北平図書館原蔵存三十一巻の残本（拙著著録）のみは後修の入らない宋刻で、刻工名から察しても、序跋に云う如く、慶元年間の刊と認められる。板木は明代南監に移され、明南雍経籍考に「楽書二百巻（好板一千八十面）」と録されている。現存本は殆ど明修本である。元修の刻工君玉は宋刊国朝諸臣奏議の大徳四年修、宋福唐郡刊前後漢書の大徳修、南宋前期刊史記集解の元修、大徳間信州路儒学刊北史、至大間福州路刊通志、皇慶元年序刊佩韋斎文集、後至元六年湖南刊唐丞相陸宣公奏議纂註（陳君玉）に、君輔は宋福唐郡刊後漢書の大徳修、張広祖は泰定元年西湖書院刊文献通考、所謂眉山七史の元修に従事している。

（陽明文庫蔵）　附元刊楽書正誤一巻　四五冊。後補淡緑色地空押花卉鼎剣等文様蠟牋表紙（二五・二×一八・四糎）、外題「陳氏楽書」（豫楽院筆）。陳岐・林宇冲両跋が首の目録の前にあり。巻末後序なし。巻中間々破損、巻一三四―一三七補写、また他にも所々補写の葉あり。

（尊経閣文庫蔵）　欠巻五二　一二冊。後補白色表紙（二五・二×一七・五糎）、一部裏打。首目は楊万里序・進楽書表並に目録（後半欠）あるのみで、他は欠。巻中破損・落丁が頗る多い。

（内閣文庫蔵）　一八冊。森志著録。後補香色表紙（二七・八×一七・八糎）。巻末跋欠。少しく欠丁や補写がある。「林氏伝家図書」「昌平坂／学問所」「浅草文庫」等の印章あり。

（内閣文庫蔵）　一二冊。後補淡海老茶色亀甲繋ぎ文様表紙（二七・三×一八・二糎）。首の牒文劄子詔旨、巻末の陳岐・林宇冲の両跋を欠き、礼楽書後序（末葉欠）あり。巻中欠葉がある。

（静嘉堂文庫蔵）　一四冊。陸志著録。新補茶表紙（三〇・四×一九・七糎）、一部裏打修補さる。巻末の林光大の後序は補写。巻中少しく補写あり。「建安楊氏／家蔵書」等の印記あり、陸志に「蓋明正統中大学士楊栄蔵書也」と。

（国立国会図書館蔵）　四八冊。後補茶表紙（二七×一八・七糎）、襯紙を挾める改装本。巻末の跋後序なし。所々少しく欠丁あり、巻二首の巻末欠丁。「明倫堂図書」（白文）等の蔵印あり。尾張藩校明倫館旧蔵か。

（天理図書館蔵）　二四冊。傅目著録。後補香色表紙（二四・八×一八糎）襯紙を挾める改装本。巻末両跋はないが、後序あり。首目及び首三巻補写、他に巻中往々補写を混え、所々破損の葉がある。「澹／生堂」（白文）「小瑯嬛清秘／張氏収蔵」「張印／蓉鏡」（白文）「芙／川」「姚氏／畹真」「雙鑑楼」「沅叔／金石／文字」の蔵印、明祁承㸁・清張蓉鏡夫妻・張金吾・傅増湘旧蔵。

同版本は上記の北平図書館原蔵宋原刻零本の外に中央図書館・北平図書館（存八四巻旧京141—144著録、存六六巻旧京139 140著録、以上拙著著録。存五五巻及び完本旧京145—147著録の二部は台湾に移管されず）・北京図書館（二部）・南京図書館（丁志・盎影著録）・北京大学図書館蔵本や張志・瞿目・適志・劉影・楊録・莫編著録本がある。

楽書正誤　一巻　宋楼鑰撰　〔元〕刊

（陽明文庫蔵）　一冊。前掲の陽明文庫蔵「楽書」に附さる。首に「楽書目録正誤」あり。巻末に嘉泰二季季夏中澣四明楼鑰書の自跋及び十月既望奉議郎知南豊県陳芾謹書の刊書跋が附さる。本文巻首「楽書正誤」（跨行）と題す。四周単辺（間々左右双辺を混ゆ、二二×一五・九糎）有界八行、行の字数不等、六段の表に作る。版心白口、魚尾なく、「楽書正誤　（丁付）」、版心上端に間々大小字数、下端に、呉睡、吾六、蔡彦挙、周受、張名遠、熊汝敬、羅恕、劉子和、劉景舟、劉子□の刻工名がある。

本書は跋によれば、陳岐が慶元年間建昌で楽書を校刊したが、その校定の不備を楼鑰が正しておいたのを、陳暘の子陳芾が建昌府南豊県の知となった機会に之を寄せ、建昌で刊行して欠を補ったものである。従来本版を巻末跋によって宋嘉泰年間刊本とする。しかしこの本の雕法は明かに元で、本版の刻工の周受・羅恕・蔡彦挙・張名遠は元泰定元年西湖書院刊後至元五年修文献通考、張名遠・熊汝敬は元末明初刊古史、張名遠・劉子和は元末明初刊西山先生真文忠公文章正宗、そのほか張名遠はまた元末明初刊の唐文粋・慈溪黄氏日抄分類・古今紀要、熊汝敬は元大徳信州路儒学刊北史、羅恕が宋刊皇朝文鑑の元修、劉子和・周受・張名遠・呉睡・羅恕・蔡彦挙が所謂眉山七史の元修にその名が見える。従って本版は元刻たること疑いなく、宋嘉泰刊本は発見されていない。本版に構字等に欠筆が見られるのは、宋刊本の覆刻か、或は忠実に襲依したからであろう。この元槧本も他に中央図書館蔵本（拙著著録）が知られるにすぎない。

小学類

爾雅疏　一〇巻　宋邢昺奉勅撰　〔南宋前期〕刊〔宋・元・明初〕遞修

（静嘉堂文庫蔵）　五冊。重文。陸志著録。新補金砂子散し藍色絹表紙（二九・四×一六・八糎）、包背装、襯紙を挾める改装本、元料紙縦二七・三糎。首に「爾雅疏敍／（第一・三行低二格小字）翰林侍講学士朝請大夫守国子祭酒上柱国賜紫金魚袋臣邢昺等奉／勅校定」をおき、末後本文に直に接続する。本文巻首「爾雅疏巻第一／爾雅序」と題し、巻二以下は「爾雅疏巻第幾」と題し、第二・三行に二格を低して叙題と同じ邢昺の銜名が署さる。左右双辺（二〇・五×一四・四糎）有界十五行、行卅字内外。経文・注文（起至を標記）・疏文（釈曰）はそれぐ一格を空けて列記さる。版心白口単黒魚尾「雅疏幾　（丁付）」。原刻の葉は極めて少く、且つ漫漶甚しく版心に刻工があったか否か明かでな

い。宋・元修は上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名のあることが多い。修を含め宋刻の箇所は玄眩弦鉉鮌炫敬警驚弘殷慇匡胤恒楨徵の字に間々欠筆が見られ、慎は殆ど欠画しないが、宋修の版に僅に欠筆をしている所もある。修補は宋元とも一度ならず、幾次にも施されたらしく、概ね原刻のほぼ覆刻であるが、字様は特に元修には優劣の差があり、宋修・元修の識別がつき難く、最も新しい修は元末か恐らくは明初に降ると思われる所が僅かながら混っている。この本は元の致和・至順中の公牘紙の背面を使って刷られ、往々蒙古官印が捺されている。その刻工名は（宋修）王恭、王渙、呉祐、施昌、寿□、章忠、徐栄、張斌、張堅、張明、陳浩、沈文、鄭春、范堅、方中呉、楊昌、李仲、劉廷、蔡、（元修）王正、士中、士元、謝成、徐友山、孫開一、孫、陳邦卿、陶耑、俞声、李祥、李宝、李庚、金、杞、勺、鄭、朱。但し李仲・張明・范堅・徐栄の如きは宋修か元修かの判定が困難で、事実元にもこの刻工がいる。「何氏／蔵書」（白文）「崆峒／化城」（白文）「鶴安／校勘／秘籍」「谿柴／裏」（白文）「溪／柴」「嘉興新豊郷人／唐翰題収蔵印」「海翁／裏」、陸心源半身像の蔵印が鈐され、首冊副紙に左の海翁の手識が記される。

爾雅疏一冊乃的真宋板元致和元年冊紙所印／也考致和為元文宗年号当時去宋未遠其鎧鍛猶有存者可喜也封面為宋白麻帋／此亦希世之物較宋板書更不可得／海翁(印)（「海／翁」）

本書について玉海の引文によれば、「至道二年判監李至請命李沆杜鎬等校定周礼儀礼公羊穀梁伝及別纂孝経論語爾雅正義従之咸平三年三月癸巳命祭酒邢昺代領其事（略）爾雅取孫炎高璉疏約而修之（略）四年九月丁亥以献（略）十月九日命杭州刻板」、また麟台故事に「至景徳二年九月又命侍講学士邢昺両制詳定尚書論語孝経爾雅錯誤文字以杜鎬孫奭被詔詳校疏其謬誤故也」とある。本書は初め北宋真宗の咸平四年上進、杭州で刊刻され、景徳二年にその文字の謬誤が改校された。此が即ち北宋国子監本である。しかしこの監本は残念ながら伝存していない。本版は単疏本の旧式を踏襲し、従来北宋監本或は北宋刊本と伝えられたが、現存単疏本とその字様版式を同じうしているから、紹興の経史刊刻の詔に応じて紹興府等が上梓せる杭州地区の公使庫版である。現伝存本は原刻の葉が僅少なので欠筆・刻工等からその刊年を正確に推定し難い憾みがあるが、他の現存単疏本と同じく紹興・乾道初間の刊刻にかかると思われる。宋刻の大部分を占める宋修の刻工が関与せる他の宋版本は次の通りである。淳熙慶元間刊南軒先生文集（鄭春）、寧宗朝刊増修互註礼部韻略（王恭、陳浩、李仲、張明、徐栄、呉祐）、同古史（王恭、陳浩、李仲、章忠、呉祐、王渙、鄭春）、同晦菴先生文集（王恭、王浣、章忠、呉祐）、同玉篇・広韻（王恭）、同武経七書（王恭、施昌）、同越刊孟子註疏解経（楊昌）、嘉泰四年刊聖朝文翰（楊昌）、嘉泰四年刊皇朝文鑑（張明）、鄂州鵠山書院刊資治通鑑（王渙）、紹興淳熙間の刊になり国子監に板木を移して補刻を加えたと伝える次の諸本の寧宗頃の修、即ち越刊周礼疏（王恭、陳浩、方中呉、李仲、范堅、呉祐、徐栄、鄭春）、同尚書正義（張堅、王恭、陳浩、方中呉、李仲、張明、范堅、呉

祐、沈文、長斌、鄭春)、同礼記正義(王恭、楊昌、范堅、徐栄、王渙)、両淮江東転運司刊漢書(王恭、陳浩、章忠、呉祐、王渙、鄭春)、同後漢書(楊昌、章忠、王渙、鄭春)、通典(張明、張堅)、所謂眉山七史(張堅、王恭、楊昌、陳浩、章忠、李仲、張明、呉祐、沈文、徐栄、王渙、張斌、鄭春)、贛州刊文選(王恭、劉廷、李仲、張明、呉祐、施昌、鄭春)、国語(陳浩、張明)、説文解字(陳浩、呉祐)、劉賓客文集(張明)、劉夢得文集(施昌)、資治通鑑目録(張明、范堅、徐栄)、春秋経伝集解(王恭)、撫州公使庫刊紹熙四年修礼記・春秋経伝集解(陳浩)。陳浩は紹興初刊史記集解・思溪版蔵経、紹興刊外台秘要方、楊昌は孝宗朝刊論衡・聖宋文選合集にも見えるから、この両名はそれぞれ年代上紹興頃と南宋中期とに同名異人が存在した疑いがある。とも角以上の如く本版の宋修の刻工は皆主に寧宗朝嘉定前後から理宗朝初間の杭州地区の刻工である。恐らく本版の板木は杭州の国子監に他の公使庫版と共に移され、補刻が施されたものであろう。

「西湖書院重整書目」著録の「爾雅注疏」は本版を指すらしく、本版の板木が元代に他の宋公使庫版本と共に西湖書院に移されて補修が加えられたことはその刻工名が次の如く傍証している。刻工を共通する宋版元修本は、越刊周礼疏(徐友山、孫開一、李宝、陳邦卿、李祥、王正)、同礼記正義(徐友山、孫開一、陳邦卿)、同論語註疏解経(徐友山、李宝)、同孟子註疏解経(孫開一)、両淮江東転運司刊三史(陳邦卿、徐友山、士中、王正、李祥)、所謂眉山七史(士中、士元、徐友山、孫開一、李宝、陳邦卿、王正)、説文解字(李宝、李祥)、春秋経伝集解(士元、陶崇)、皇朝文鑑(徐友山、陳邦卿、王正)、増修互註礼部韻略(徐友山)、国語(李祥)、史記集解・鄂州刊資治通鑑(陳邦卿)、贛州刊文選・通典(李宝)。此等は殆ど西湖書院で補刻を行った宋刊本である。他に士中が大徳刊九路本晋書・隋書、士元が致堂読史管見・至正廿三年西湖書院刊鄂国金佗粋編、謝成が両漢詔令、王正が泰定元年刊文献通考の刻工名中に見える。本版の板木は明代にはさらに南監に移され、明南雍経籍考に「爾雅註疏十巻存者二十九面郭璞註邢昺疏」と録されている。

明文淵閣・陳鱣・汪士鐘・蔣汝藻・涵芬楼遞蔵北京図書館現蔵本(蔣志・涵録著録)は同版で、洪武二年の公牘紙に刷られ、この本よりは降った刷り、続古逸叢書・四部叢刊中に影印された。阮元が校勘に使用した黄丕烈蔵本(黄書録著録)と袁氏五礜楼蔵本は同版と思われるが、その存佚は明かでない。陸心源はこの本を底本として光緒四年翻刊したが訛謬が多い。

爾雅注疏 一一巻 晉郭璞注 宋邢昺疏 〔元〕刊

(宮内庁書陵部蔵) 五冊。森志著録。後補行成文様刷出丹表紙(二四・五×一六糎)、裏打改装本。首の邢昺序欠。本文巻首「爾雅注疏巻第一/爾雅序(隔八格)郭璞序 邢昺疏」、序後に直接して「爾雅兼義 一巻上 郭璞注」と題す。左右双辺(一七・八×一一・六糎)有界九行、行廿字、注疏文低一格小字双行、行十八乃至廿字。疏文は首に大字墨囲陰刻の「疏」の字を以て標する。版心細黒口双黒魚尾「尓疏幾フ (丁付)」。匡胤恒桓

等の字に欠筆が見られる。巻四の首八葉、巻五第二八葉以下、巻六の首裏葉欠。「明范／履祥」「昌平坂／学問所」「文政戊寅」「浅草文庫」等の印章あり。この本は早印にして印面が美しい。

所謂十行十三経注疏合刻本の一とされるが、この本のみは九行で、旧説も他を宋刊とし、此のみを元刊とする。管見の範囲では元刊元印本はこの本あるのみである。正徳の修補年の入った諸本はその明の補刻本とされている。しかしながら、筆者が調査し或は書影を以て比較せる中央図書館（三部、拙著著録）・静嘉堂文庫（陸志著録）・北京図書館（瞿目著録）・南京図書館（丁志・盎影著録）蔵・北平図書館原蔵（旧京148—151・拙著著録）の諸本は皆本版と一致する版の葉を含まず、その原刻と思われる版面も本版の粗なる覆刻で、その雕法は明かに明前期の様式である。本版の修補本とすれば他の例から見て原刻の部分が僅かでも残っていないとは考えられぬ。従ってそれはこの元刊本に倣って明前期に新に改刻された重刊本と考えざるを得ない。張志著録本は「是本全書俱係元槧絶無明代補刊者蓋元刊之印本也」というから、或は同版の元刊本であろうか。

説文解字　一五巻　漢許慎原撰　宋徐鉉等奉勅校〔南宋初〕刊〔宋・元〕遞修

首に「説文解字標目（隔三格）漢太尉祭酒許慎記／（以下低二格小字）銀青光祿大夫守右散騎常侍上柱国東海県開国子食邑五百戸臣徐鉉等奉／敕校定」あり。本文巻首「説文解字第一上（隔三格）漢太尉祭酒許慎記／（以下低二格小字）銀青光祿大夫守右散騎常侍上柱国東海県開国子食邑五百戸臣徐鉉等奉／敕校定」と題す。但し巻一下、六上下、七下、十二の下は許慎を許氏に作る。巻末に雍熙三年十一月の徐鉉等進表・中書門下牒文並に辛仲甫・呂蒙正・李昉の銜官三行を附する。左右双辺（一八×一二・五糎）有界十行、行大字十八乃至廿字内外不等、注小字双行約卅字内外不同。版心白口単黒魚尾、「説幾（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名があるが、此は殆ど元修の葉である。原刻と思われる葉は殆ど字数・刻工名がないが、此は元来あったか否か明かならず、宋修の刻工名も多く漫漶甚しい。僅かながら、字数・刻工名共にない葉に最も降ると思われる補刻の部分が見られる。主として静嘉堂本・杏雨書屋本によって刻工名を挙げれば、王□、何昇、何沢、許忠、顧達、顧澄、呉祐、呉中、蔡邠、周明、蔣栄、朱祖、詹世栄、陳才、陳寿、陳浩、沈茂、丁松年、范允、方中、方、張□、李□、余敏、劉昭、信（以上宋修）、王桂、汪亮、何浩、弓華、金大明、金文栄、胡勝、呉玉、呉、斉明、史伯恭重刊、徐泳、徐恰祖、徐文、詹徳潤、曹栄、曹徳新、孫元、陳新、陳寧、鄭埜、鄭、范堅、平山、茅化、茅、务陳秀、張富、陳琇、楊春、春、楊十三、李徳瑛、李宝、李祥、良富、施、翁、占、仇、畜、朱、重刊柳、公、文、重刊費、因、董、褚、圭、沈、祥、林、霍、姚、銭（以上元修）。大部分が補刻で特に元修が多い理由もあって、欠画は謹厳ではなく一定せず、元修も含めて間々玄弦鉉敬驚徹泓殷貞桓慎に見られるが、此等の宋諱で欠筆しない場合も極めて多い。原刻或は宋修の箇所は漫滅甚しく、殆ど部分的補刻が加わり、元の修補の

葉が多く、原刻と宋修との識別は極めて困難である。

巻末の太宗の雍熙三年（九八六）の徐鉉の進表に云う如く、徐鉉が許慎の説文解字を新に校定を加えて上進し、ついで同年の中書門下牒に「書成上奏克副朕心宜遺雕鐫用広流布自我朝之重範俾永世以作程其書宜付史館仍令国子館雕為印板依九経書例許人納紙墨価銭収贖兼委徐鉉等検点書写雕造無令差錯致誤後人」と、本書が国子監で刊刻されたのである。しかしこの最初の国子監本は伝存していない。現存の最古版は本版である。本版の現存本は我が国の蔵する次掲の静嘉堂文庫・内藤湖南旧蔵杏雨書屋現蔵本の外に中央図書館（存巻七―一五、拙著著録）・北京図書館（二部、一は汲古閣・楊氏海源閣等遞蔵、楊録・王記・中版録2627著録）・湖南省文物管理委員会（何紹基旧蔵）蔵本が知られている。本版は汲古閣本・朱筠刊本・平津館本・藤花榭刊本等の所拠本で、黄氏百宋一廛賦以来宋刊小字本と称され、旧説は恒貞等の字が欠筆せざるを以て、北宋真宗時の鏤版と考えられていたが、現存本は全て宋元遞修本である。字様渾厚白口単魚尾にして字数・刻工名なき僅かに残る葉が原刻と思われる。しかしそれも北宋にのぼり得るとは認められず、南宋初の刊刻である。刻工名を有する刻は宋或は元の修刻で、慎の字は或は末筆を欠く所もあるが、それが原刻か修か厳密に判定し難い憾みがある。汲古閣旧蔵北京図書館本は静嘉堂本よりは前の刷りらしく、中版録は「巻中刻工約分三期。南宋初葉杭州地区良工何昇、何沢、許忠、顧永、蔡邠、阮于、張昇、周明等為第一期。南宋中葉杭州地区補版工人陳寿、董澄、詹世栄、陳彬、陳晃、金嵩、丁松年、劉昭、夏乂、曹鼎等為第二期。宋元之際和元時補版工人李徳瑛、鄭埜、胡勝、史伯恭、范堅、徐泳、李宝等為第三期。因推知此書刻於南宋初年、迭経宋元両期補版。」と記す。本版の宋の刻工名の見られる他の宋槧本を検索すれば次の通りである。寧宗頃刊古史（呉祐、詹世栄、劉昭、丁松年、何沢、顧達、呉中、陳寿、蔣栄、沈茂、方中、蔡邠、張昇、陳彬、陳晃、金嵩、曹鼎、董澄、陳浩）、同増修互註礼部韻略（丁松年、何沢、顧達、陳寿、沈茂、顧永、張昇、金嵩、董澄、陳浩、余敏）、同晦庵先生文集（呉祐、詹世栄、劉昭、陳寿、張昇、陳彬、陳晃、曹鼎、董澄、余敏）、同玉篇・広韻（劉昭、陳晃、陳寿、何昇、余敏）、同武経七書（劉昭、金嵩、陳晃）、同愧郯録（劉昭、董澄）、同重校添註音辯唐柳先生文集（劉昭、董澄）、嘉定十二年温陵郡斎刊資治通鑑綱目（何沢、周明、呉中）、紹定二年刊呉郡志（蔣栄、陳彬）、南宋前期刊外台秘要方（阮于、陳浩）、南宋初刊通典の修（何昇、何沢、顧永、周明、夏乂、陳彬、陳晃、余敏、阮于〈原刻〉）、南宋前期刊世説新語の修（劉昭、呉中、陳寿、顧永、方中、曹鼎、陳浩、陳彬、蔣栄）、南宋前期刊越刊八行本注疏類の修（呉祐、劉昭、周明、顧達、呉中、蔣栄、沈茂、蔡邠、張昇、金嵩、曹鼎、夏乂、顧永、陳浩、余敏）、南宋初刊資治通鑑目録の修（陳寿、張弁、陳彬）、同史記集解の修（阮于、陳浩）、南宋前期刊漢書の修（詹世栄、劉昭、許忠、周明、顧達、陳寿、蔣栄、方中、張昇、呉祐、余敏、陳浩）、同所謂眉山七史類の修（呉祐、詹世栄、劉昭、丁松年、何沢、許忠、周明、顧達、呉中、陳

寿、蔣栄、沈茂、方中、何昇、顧永、蔡邠、陳彬、陳晃、金嵩、夏乂、曹鼎、董澄、呉祐、陳才、余敏、陳浩）、同贛州刊文選の修（劉昭、陳才、丁松年、何沢、周明、呉中、陳寿、蔣栄、方中、蔡邠、陳晃、金嵩、曹鼎、董澄、呉祐）、同両淮江東転運司刊史記の修（呉中、陳彬、陳寿、丁松年、曹鼎）、同春秋経伝集解の修（阮于〈原刻〉、余敏、夏乂、陳寿）、同国語・国語補音の修（何沢、蔡邠、詹世栄、陳彬、陳寿、蔣栄、陳浩、張昇）、同爾雅疏の修（呉祐、陳晃）。その他陳才は淳熙間撫州公使庫刊春秋経伝集解・乾道二年泉南郡庠刊孔氏六帖・紹興間明州刊文選の修、呉中は淳熙二年厳州刊通鑑紀事本末・南宋前期刊東坡集・寧宗間刊景文宋公集、方中は淳熙慶元間刊南軒先生文集・光宗頃刊欧公本末、周明は南宋前期刊豫章黄先生文集の修、夏乂は嘉泰刊皇朝文鑑の修・淳祐二年刊心経政経、陳彬は嘉熙刊雲厳吟草甲巻忘機集、陳寿は咸淳刊咸淳臨安志、劉昭が嘉泰四年跋刊東萊呂太史文集・寧宗朝刊晦庵先生朱文公語録・同歴代故事、顧永が紹熙二年刊嘉定修唐人絶句、余敏が嘉定十三年臨安府陳尹家刊歴代名医蒙求、陳浩が淳熙間撫州公使庫刊礼記・春秋経伝集解の修に見える。

此等刻工は孝宗朝から理宗初にわたるが、その殆どが嘉定年代を中心とする寧宗朝である。但し阮字は紹興九年刊単疏本毛詩正義にも見え、上記の如く紹興刊の原刻に従事しているから、或は本版の原刻の刻工であるか、或は同名異人が存在する。中版録が以上の刻工を第一・二期に分け、第一期を原刻とするが、右記の如く、その第一期の刻工も原刻ではなく、殆ど修刻である。その第一・二期の分類は右の検討の結果明かな如く、事実上は判別し難く、その宋修は一度ではない。本版は高宗・孝宗朝間の公使庫の刊刻にかゝり、その板木が国子監に移されて修補が加えられ、元になってさらに西湖書院に板木が移された諸本と刻工を共通することが多い所から見て、本版も恐らく杭州地区の南宋初の公使庫版で、その板木が国子監に移され、ほゞ寧宗朝前後にわたって逓修が行われたと看做すべきであろう。本版の板木は元代西湖書院に移され、「元西湖書院重整書目」の「説文解字」は本版を指すものと思われる。本版の元修の刻工が従事せる他の元刊本を列挙することは煩を避けて省くが、西湖書院にその板木が移された他の宋刊諸本の元修の刻工と概ね共通している。

（静嘉堂文庫蔵）八冊。重文。黄書録・汪目・陸志・陸続跋著録。新補丁子色水玉文様表紙（二七・三×一六・七糎）、金鑲玉装、原料紙縦二四・四糎。巻一下第十（尾）、巻三下第八、巻九上第五、巻九下第八（尾）、巻十下首二葉及び第九丁は補写。宋刻の葉は印面漫漶なので殆ど墨で上から字がなぞられ、墨筆の句点声点が附され、少しく朱墨の校合書入が加えられている。巻末に次の阮元及び銭侗の手識あり。

嘉慶二年夏五月阮元用此校汲古閣本／于杭州学署「阮元私印」（白文）毛晋所刻印据此本凡有舛異／皆毛扆妄改「阮」「元」（白文）

乙丑閏卯月銭侗拝観「呉城」「敦夏」

「青浦／王昶字／日徳甫」（白文）「一字述／蕉別号／蘭泉」「大理／寺卿」「経訓／堂王氏／之印」「士／鐘」（白文）「汪印／士鐘」

(白文)「宋本」「閩／源父」「閩原／審定」「平陽汪氏／蔵書印」「汪印／振勲」「振」「勲」(白文)「汪印／文琛」「楳／泉」「蔡印／廷楨」「金匱蔡氏酔／経軒攷蔵章」「廷／相」(白文)「伯卿／甫」「済陽／蔡氏」「卓如／真賞」「翰墨／縁」(白文)「修没軒」「孫峯／審定」の印記あり。王昶・黄丕烈・汪士鐘等遞蔵本。本帙は百宋一廛賦に著録されてより夙に宇内に喧伝され、続古逸叢書及び四部叢刊本はこの本の影印である。

(武田科学振興財団杏雨書屋蔵)　存巻二・五・六、一三―一五　四冊。新補暗緑色表紙(二五・八×一七糎)、金鑲玉装、原料紙縦二一・二糎。巻六下末葉、巻一三下の第四―八葉、巻一五下の第四裏―八葉は欠丁。この本は前掲静嘉堂本の巻六上の首葉は全葉宋修に一部元修が加っているが、此は下端に原刻が残り、宋修が入っているが、未だ元修が加っていない。このようにこの本は宋元修補の葉のうち原刻の所が静嘉堂本よりは僅かながら多く、それよりは前の刷印に属する。「香山寺常住」(山口の古刹、大内家の菩提寺)の墨印が捺され、我が国に古く将来された伝来本。「宋本」「内藤／虎印」「湖南」「炳卿／鑒蔵」(白文)の印記あり、内藤湖南旧蔵本。

新雕入篆説文正字　一巻　宋闕名者編　〔北宋〕刊

(お茶の水図書館蔵)　一冊。森志著録。梨色地緞子表紙(二四・一×一三・五糎)の覆表紙が附され、古表紙は白色厚手紙、「篆説文　全」と墨書さる。序目なく、巻首「新雕入篆説文正字一巻」(跨行)と題され、尾題亦同じ。左右双辺(一六×一一糎)有界十一行、注小字双行、行廿四字。大字は小字四字分に相当。版心白口単黒魚尾「正字　(丁付)」。弦絃驚殷に欠筆を見るが必しも一定せず、第九葉表一行の「瑣瑣」は上の字は末画は欠くが、下の字は欠かない。第八丁は欠葉。

四庫未収。宋重修の説文解字について、その部首の一より亥に至る篆文の下に許慎或は徐鉉の訓解及び反説を双行に記したもので、後来の説文部首読本に類せる書賈者流の編になるものであろう。たゞそれが別行単行本か説文解字の巻首に附された附刻本かについては両説に分れる。書陵部蔵通典・文中子、尊経閣蔵重広会史、国立国会図書館蔵姓解の北宋刊本と同様、経首に「経／筵」、巻末に「高麗国十四葉辛巳歳／蔵書大宋建中靖国／元年大遼乾統元年」の高麗国の印が鈐さる。但し高麗云々の印はかすれて明瞭を欠く。印章の高麗十四葉は高麗の粛宗の六年(一一〇一)、北宋徽宗の建中靖国元年であるから、本版はそれ以前の刊刻にかかることは明かである。朝鮮伝来本で、料紙に汚染のあるのは朝鮮固有の防虫剤川芎の粉末によるものと伝える。間々破損の箇所があるが、字劃明晰、雕鐫精緻にして、古芸鬱隷、僅々十一張の童蒙課業の小冊子ながら天壌間の孤本として、説文校勘上の好資料である。

この本が朝鮮から何時いかなる経路で伝来したかは明かでないが、「養安院蔵書」「牧安」(形)の印章があり、古くより曲直瀬家懐仙楼の儲有であった。「小島氏／図書記」「篁邨島／田氏家／蔵図書」「雙桂楼／所蔵記」「島田翰／読書記」「菅／原正／義」(白文)「蘇峰／珍蔵」「徳富文庫」「蘇峰／清賞」(白文)「徳富／

猪一郎／之章」「須愛謨／蘚峰／嘱」の印記の示す如く、曲直瀬家より流出して島田翰・徳富蘇峰の遞蔵を経たものである。小島宝素が曲直瀬家から借録して返却に際し作製した書簽の蓋に「北宋本説文正字（白文）懐僊楼蔵（朱文）」と題して彫られ、また底に高麗云々の印文が朱で刻され、次に左の跋文が雕刻されている。

右此書巻末一印文字隠然殆不可辨／照北宋本杜氏通典所捺始得可読焉／案朝鮮史略辛巳為粛宗六年也巻／首経筵印又見北宋本御注孝経及文中子／是亦高麗国印也天保壬寅仲秋借録／已畢造匣以還併題質（印）（印）

また巻末及び裏表紙見返に左の島田翰の手識が存する。

（巻末）明治己亥初春獲之於琳琅閣／島田洸

高麗覆宋本之存于今日者秘府有杜氏通／典文中子中説帝国図書館蔵姓解木村正／辞収御注孝経而予蔵是書及荀子而其捺／高麗云々図章者天壌間独存通典姓解荀／子与是書而已後之獲是書者其宝之明治己亥／春二月島田翰記於小石川老柯山房二十一歳

この外に、明治卅二年一月十二日附の書店の琳琅閣より島田家宛の四拾円也北宋説文箱入一冊の領収書が附されている。

玉篇　三〇巻　宋陳彭年等奉勅重修〔宋寧宗朝〕刊

首に「大広益会玉篇一部并序凡三十巻」と題し、玉篇序・進玉篇啓を収め、次に「玉篇上十巻凡一百三十七部」と題し、上中下各十巻の総目をおき、その後に直に本文巻一首が接続して、「玉篇巻第一凡八部」と題し、毎巻次に一格を低して目次を列して本文に接続し、上・中・下各巻末に「新加偏傍正俗不同例」「類隔更音和切」を附し、また巻卅巻後に「分毫字様凡二百四十八字」及び「四声五音九弄反紐図并序　沙門神洪撰」を附載する。左右双辺（二一×一四・八糎）有界十行、注小字双行、行廿七字内外。版心白口単黒魚尾「篇上（中・下）（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻には、王恭、王宝、王玩、何昇、何澄、何、魏奇、金滋、厳智、呉志、呉椿、呉益、高異、朱玩、徐佐、秦暉、秦顕、宋琨、曹栄、張栄、張謙、趙中、沈思恭、沈思忠、陳寿、陳晃、方志、方堅、方、余敏、李倍、李倚、陸選、劉昭の刻工名がある。本版には少しく後修の入った本があり、修には刻工名のない葉が多いが、間々陳観仁、実甫、友山、勝之、王汝明、翁、公、嘗の名が印される。玄眩泫炫弦玹痃舷翌茲貶韐幟蚿

恒框鏡晃蜈恒絙咽胆禎貞徴の字に避諱が見られ、修は朗敬趣筐誆洭胵勖の一部が未筆を欠き、共に欠画は仁宗に止っている。

梁の顧野王原撰、唐の上元元年孫強増字の玉篇を勅命により陳彭年が呉鋭・邱雍等と増修刊定を加えて真宗の大中祥符六年進呈したことは、同年九月二十八日の牒文に「近方了畢遂装写浄本進呈其進呈本今欲雕印領行」とあるので明かで、また玉海には「六年九月学士陳彭年校理呉鋭直集賢院丘雍上準詔新校定玉篇三十巻崇文目曰重修請鏤板詔両制詳定改更之字天禧四年七月癸亥板成賜雍金紫」と録されている。この様に本書は真宗の天禧四

年（一〇二〇）官刻されたことは明かであるが、その本は伝存していない。本版は大広益会玉篇の現存最古の宋槧本で、その刊年をその刻工名から推定しよう。本版と字様行格版式を等うするのは、後掲の宮内庁書陵部等蔵広韻で、その刻工は王宝、王恭、王玩、何昇、何澄、魏奇、金滋、呉志、呉椿、呉益、高異、朱玩、徐佐、秦暉、秦顕、宋琚、曹栄、張栄、趙中、陳寿、陳晃、沈思恭、沈思忠、余敏、李倍、李倚、陸選、劉昭であるから、本版の刻工中三名を除く全員と共通している。以て両版が同時頃同所の刊刻にかかることは明かである。またその広韻は後掲の静嘉堂文庫蔵孝宗朝初刊広韻の精善なる覆刻であるから、玉篇も同様に本版に先立って、今伝存しないが紹興末乾道初間の刊本が存在し、それを覆刻したものと推測される。

他に刻工を共通する宋刊諸本を挙げれば次の通りである。淳熙九年刊呂氏家塾読詩記・孝宗朝刊東坡先生奏議（呉志）・同聖宋文選全集（方至、方堅）は早いが、多くは降って紹熙三年越刊礼記正義（×王恭、魏奇、呉志、高異、張栄、張謙、李倚、方堅、劉昭、×はその修の刻工、以下同じ）、紹熙刊爾雅（魏奇、厳智）、嘉泰四年刊東萊呂太史文集（呉志、宋琚、趙中）、同皇朝文鑑（金滋、沈思忠、方至）、嘉定十三年刊歴代名医蒙求（余敏）、嘉定刊中興館閣録（厳智）、寧宗朝頃刊の増修互註礼部韻略（王恭、高異、宋琚、張栄、陳寿、沈思忠、余敏、方至）、歴代故事（王玩、呉椿、呉志、高異、朱玩、宋琚、趙中、方至、陸選、劉昭）、武経七書（王恭、高異、陳晃、陸選、劉昭）、愧郯録（金滋、呉椿、劉昭）、古史（王恭、何澄、呉志、朱玩、宋琚、陳晃、陳寿、方堅、劉昭）、晦庵先生朱文公語録（呉椿、呉志、劉昭）、晦庵先生文集（王恭、何澄、呉志、高異、宋琚、張栄、陳晃、陳寿、沈思恭、余敏、李倍、陸選、劉昭）、重校添註音辨唐柳先生文集（金滋、呈椿、劉昭）、越刊論語・孟子注疏解経（陳思忠）、程史（劉昭）、紹定二年刊呉郡志（呉椿）。張栄は福唐郡刊漢書・宝祐五年湖州刊通鑑紀事本末にも見えるが、同名異人の疑いがある。その外に紹興淳熙間の刊本に対する寧宗理宗間の補刻に従事しているのは、越刊尚書正義（王玩、王宝、金滋、呉益、秦顕、宋琚、張謙、方至、方堅、余敏、李倍、陸選、劉仁）、同周礼疏（王玩、王恭、王宝、金滋、高異、秦顕、宋琚、張謙、方至、方堅、陸選、劉昭）、両淮江東転運司刊史記（陳寿）、同漢書（王玩、王恭、何澄、高異、陳晃、陳寿、余敏、劉昭）、同後漢書（高異、朱玩、宋琚、李倍）、所謂眉山七史（王玩、王恭、何昇、何澄、魏奇、金滋、厳智、呉椿、呉志、高異、朱玩、秦顕、宋琚、張栄、陳晃、陳寿、沈思忠、沈思恭、余敏、李倍、方至、方堅、劉昭）、贛州刊文選（王恭、厳智、呉椿、高異、陳寿、劉昭）、爾雅疏（王恭）、春秋経伝集解（王恭、呉椿、呉益、高異、宋琚、陳寿、余敏）、通典（何昇、厳智、呉益、高異、朱玩、陳晃、陳寿、余敏、方至）、晋書（何澄）、資治通鑑目録（曹栄、宋琚、陳晃、陳寿）、説文解字（何昇、陳寿、陳晃、余敏、劉昭）、国語（陳寿）、淳熙二年刊通鑑紀事本末（方堅）。此等の多くは国子監にその板木を移して補刻が加えられたと伝える杭州地区の公使庫本である。以上を見るにその刻工は孝宗の淳熙から理宗初

の紹定にわたっているが、その殆どが寧宗朝に集中し、しかも全員が国子監が行ったと伝える補刻に従事している。従って本版は後掲の孝宗朝刊の覆刻たる広韻と同じく、その刻工中早きは淳熙中であるから、寧宗朝の嘉定後期を降らぬ頃の浙江地区の公使庫の刊刻にかゝることは明瞭である。或は国子監そのものの刊刻か、少くともその板木は国子監にあったものであろう。本版の体式は首目に本文巻首が改丁せずに直接連続する等の旧式を保持する等、北監本に基づき倣ったものと思われる。

本版の補刻の刻工が見える本は、実甫・勝之が広韻の修のそれと共通し、友山は、元大徳信州路儒学刊北史及び元至大福州路三山郡刊通志に呉友山、所謂眉山七史の元修に徐友山と両名があり、この友山はそのどちらか不明であるが、友山は他に至大間江浙行省刊書学正韻、宋刊の礼記正義・増修互註礼部韻略・儀礼経伝通解・史記集解の元修、王汝明が所謂眉山七史の元修に見える。本版の修刻の字様はほゞ原刻に倣っているがやゝ軟弱となり、その刻工名からも元修たることが認められ、間々誤刻を犯している。元西湖書院重整書目に「玉篇広韻」とあるのは、本版を指すらしく、元代板木が西湖書院に移管されて修補が加えられたものであろう。

本版は伝存極めて稀覯、次掲本以外その現存を聞かず、清康熙間張士俊沢存堂刊本の底本は本版系に属し、朱彝尊が張本に序して之を上元本と称したのは失考なることは既に四庫提要の指摘する通りである。しかし提要は彝尊が首目から大中祥符の牒文を刪去して上元本と譫称したと非難したが、本版にもその牒文はなく、元来無かったのか、或は偶々佚逸したかは速断を許さぬが、その作偽に非ざることは明かで、楊志は「竹坨誤以大中祥符本為上元本可也謂為張氏刪牒作偽不可也」とその寃を雪いでいる。

（金沢文庫蔵）　存零簡四葉半。篇下第六四―六六丁（巻二八の末から巻二九の首）、第八〇丁裏・八一丁表（巻末附録「分毫字様」）の零葉四張を厚手台紙に貼って折帖に改装され、他の半葉は従来書名不明として「宋版残欠葉」中に他の諸断簡と共に合綴されている。此は巻末附録の「四声五音九弄反紐図」の羅文反様の図半葉である。書陵部本の下第六五丁は元修であるが、此は原刻で、比較するに、「尼」の字の注中「科尼木節也」を修刻は「科尼切節也」に誤る等の如く、元修はその他この一葉の中のみでも訛繆誤刻の多いことが判明する。類篇等を引く朱墨の書入が眉上行間に加えられている。残珪断璧ながら極めて貴重と言わねばならぬ。

（宮内庁書陵部蔵）〔二元〕修　三冊。楊志著録。後補藍色地銀糸花卉文様緞子表紙（二七・三×一八・五糎）、裏打改装本。各冊見返に巻内所収の部首目録を記せる葉を貼附す。下冊首一葉（目次）を欠き、附録の五音之図等の図一葉が下冊の首に誤綴さる。各冊末に「日翹（花押）」の朱筆署名が存し、「森／氏」「森氏開万／冊府之記」「高木寿頴／蔵書之記」等の蔵印、巻末に左の明治十三年の森立之の手識がある。

此本間有元時補刻字画自／鮮明可一目而知矣今与広韻／一対雙璧正成最可貴／重也／庚辰冬日　天真道人（印）（印）

（真福寺蔵）　存巻一六―二〇　〔元〕修　一冊。重文。森志著録。後補茶色布目覆表紙（二七・四×一八・三糎）、元表紙は白色、外題に「玉篇残欠／第六十六合」（室町頃筆）と題署さる。裏打改装本。巻一六の初葉を欠き、第四五丁より存する。前表紙見返に「文政四年辛巳九月日令／修理畢／寺社奉行所（印）」の識語あり。「尾張国大須／宝生院経蔵／図書寺社官／府点検之印」「寺社／官府再点／検印」の印章が鈐さる。

大広益会玉篇　三〇巻　宋陳彭年等奉勅重修　〔宋末元初間〕刊（〔建安〕）

（内閣文庫蔵）　存巻六―一五、二四―三〇　三冊。後補淡香色表紙（二三・三×一四・九糎）、裏打改装本。毎巻首「大広益会玉篇巻第幾凡幾部」と題し、次に一格半を低して目次を列して本文に接続する。巻十・廿四末に「新加偏旁正俗不同例」を附し、巻三十巻後に「分毫字様」及び「四声五音九弄反紐図并序沙門神珙撰」（首表半葉に止って、裏葉以下を佚す）あり。四周双辺（一八・五×一二・一糎）有界十一行、注小字双行、行約廿七字不等。版心線黒口単黒魚尾「玉幾　（丁付）」。僅に筐勖匪恇匡貞隕の字末筆を欠く。所々破損の箇所があり、巻七首、巻九首、巻一一末、巻二四首表及び末葉を欠き、巻二一―二三の零葉数丁が巻一五の後に附綴されている。

字画端整印面美麗にして元麻沙本に勝るが、字様は宋の建安体がやゝ元様の円肥の風を帯び来る過程の様式を示している。他に同版本のあるを聞かない。「昌平坂／学問所」「文政□□」等の印あり。

大広益会玉篇　三〇巻　宋陳彭年等奉勅重修　元泰定二年（一三二五）刊（円沙書院）

（尊経閣文庫蔵）　五冊。後補淡黄色絹表紙（二七×一七糎）、裏打改装本。首に「大広益会玉篇一部并序　凡三十巻」と題する大中祥符六年牒文、「大広益玉篇序」、「進玉篇啓」、「玉篇広韻指南」、「大広益玉篇総目」あり。指南後に「泰定乙丑良月／円沙書院新栞」の双辺木記が刻されている。本文巻首「大広益会玉篇巻第一凡八部」と題し、巻末尾題の前に「新加偏傍正俗不同例」「類隔更音和切」五行が附さる。四周双辺（二一×一三糎）有界十二行、注小字双行、行廿八字。版心細黒口双黒魚尾「玉幾　（丁付）」。首冊首葉眉上に「妙覚寺常住目奥」の朱書横書あり。

美麗なる早印本で、同版本の所在を他に聞かない。我が南北朝の旧刊本は刊記もその通りの覆刻である。本書の以下の元槧建安坊刻諸本は陳彭年重修本に基づくが、宋本に比して注中の刪略や毎部文字の次第に錯乱が多い。首の「玉篇広韻指南」後に「龍集乙卯菊節／円沙書院新栞」の双辺木記を有する書陵部・中央図書館（拙著著録）・北平図書館蔵本は、刊記の乙卯を元延祐二年に繫けて、従来延祐二年刊とされている。しかし本版と比較するに明かに本版をほゞ覆刻せる後出にかゝり、ほゞ本版の覆刻たる次掲の至正二六年南山書院刊本に比べてもさらに字様鐫法に明風が著しく、同様に本版の粗なる覆刻たる楊

氏観海堂蔵の明永楽一四年与畊書堂刊本・明宣徳六年清江書堂刊本（共に楊譜三・拙著著録）に酷似している。従ってその乙卯は明の洪武八年か宣徳十年に繫けるべきで、版面から按ずるに恐らく宣徳十年刊と推定する方が妥当であろう。

同　元至正二六年（一三六六）刊（南山書院）

首に大中祥符六年牒、「大広益玉篇序」「進玉篇啓」「大広益玉篇総目」「玉篇広韻指南」、指南後に「至正丙午良月／南山書院新栞」の双辺木記があり、本文巻首の体式及び巻末尾題の前に「新加偏傍正俗不同例」等を附すること前掲本に同じ。四周双辺（二〇・七×一二・七糎）有界十二行、注小字双行、行廿八字。版心細黒口双黒魚尾「玉篇巻幾（丁付）」。

前掲泰定二年円沙書院刊本の覆刻。我が国の慶長九年の鉄山宗鈍の跋を有する慶長刊本は本版の刊記もそのまゝの覆刻で、しかもこの慶長覆刻本をさらに元和寛永初間に原刊記とも覆刻せる刊本もあり、此が江戸時代の版種の多い本書和刻本の祖本となった。

（静嘉堂文庫蔵）　二冊。後補栗皮色表紙（二四・五×二〇糎）、裏打改装本。朱点朱引が附され、印面美しい早印本。「島田翰珍蔵」の墨書、「松方／文庫」等の印あり。

（東洋文庫蔵）　五冊。後補香色表紙（二五×一七・七糎）。版心を切りとって、版心の方に裏打の紙をつき出して改装さる。刊記の「南山書」の三字は補写。「石鼓軒／書画記」「雲邨文庫」等の蔵印あり。和田雲邨旧蔵。

同版本は他に故宮博物院楊氏観海堂蔵本（欠首目、楊志・拙著著録）がある。

同　元至正一六年（一三五六）刊（翠巖精舎）

（武田科学振興財団杏雨書屋蔵）　五冊。首に大中祥符牒文、「大広益会玉篇序」、「大広益玉篇総目」、「新編正誤足註玉篇広韻指南」一巻あり。本文巻首題署前掲本に同じ。巻十等の如く巻末に「類隔更音和切」を附する巻あり、また巻三〇末尾題前に「新加偏旁正俗不同例」が附さる。首の総目末に「至正丙申孟夏／翠巖精舎新刊」、巻一尾題の前に「至正丙申孟夏／翠巖精舎新栞」の双辺木記が存する。左右双辺（一九・一×一一・九糎）有界十三行、注小字双行、行廿七字。版心小黒口双黒魚尾「玉幾（或は幾フ）（丁付）」。巻一九の第二一葉は新補写。所々破損の葉があり、巻一八は他巻に比し、行格は同じであるが、紙質撫印墨色がやや異り、雕鐫粗笨に流れる。後修か、或はこの巻のみ明刻本の配補か。「炳卿珍蔵旧／槧古鈔之記」の印あり、内藤湖南旧蔵本。

同版本には他に故宮博物院楊氏観海堂蔵本（狩谷棭斎旧蔵、森志・楊志・楊譜三14・拙著著録）が知られるにすぎない。故宮博物院楊氏観海堂（水野忠央新宮城旧蔵、楊志・楊譜三16・拙著著録）・北京図書館（建徳周氏旧蔵、巻一一至二三配明前期刊本、四部叢刊に影印）蔵の建安鄭氏宗文堂刊本は本版の覆刻で、元末刊と云うよりは寧ろ明初刊刻と看做すべきであろう。

大広益会玉篇　三〇巻　宋陳彭年等奉勅重修　〔元〕刊

覆宋

（天理図書館蔵）　五冊。後補菊花文様薄葡萄色臘箋表紙（一八・八×一一・八糎）。裏打修補が加えらる。巻首「大広益会玉篇一部并序　凡三十巻」と題し、大中祥符六年牒文、大広益玉篇序、進玉篇啓、「大広益会玉篇総目」あり。本文巻初「大広益会玉篇巻第一凡八部」と題す。左右双辺（一五・五×九・五糎）有界十一行、注文小字双行、行三十字。版心線黒口双黒魚尾「玉幾（丁付）」。左欄外上端に耳格あり、「幾巻（已）幾」と刻さる。巻末に「新加編正俗不同例」「対隔更音和切」を附す。所々欠丁補写がある。

本書の宋元版の殆どが大判であるが、此は巾箱本ほど小型ではないが中本で、小字であるが精刻である。恒澱伝楨筐慎等の字の一部に欠筆が見られ、字様は宋後期の建安書坊の体であるが、やや崩れが見られ、恐らく元代の建安書肆による宋版の覆刻であろう。前掲建安坊刻諸本に比し、その収録字数注文がさらに簡略となり、字の排列の順も異っている。同版本の所在を他に聞かない。

同　〔元〕刊（〔建安〕）

（内閣文庫蔵）　欠巻一〇―一二、一九―二四　三冊。後補香色表紙（二二・八×一四・七糎）、裏打改装本、元料紙縦二一・五糎。首目前掲本に同じ。本文巻首「大広益会玉篇巻第一凡八部」と題し、毎巻必しも改丁せず、前巻の末行に直接し、巻二・三、五・六、八・九、一四・一五、一八、二六、二七、二九・三〇は「玉篇巻第幾凡幾部」と題する。左右双辺（四周双辺を混ゆ、一五・六×一一・一糎）有界十二行、注小字双行、行約卅字。版心線黒口双黒魚尾、「玉幾（丁付）」、裏葉左上欄外に耳格あり、「玉篇幾已幾」と記さる。巻九末葉欠。首に大中祥符牒の首半葉が重複しているが、此は十一行十九字の別版の半葉が附綴されたものである。

内容は前掲本と同種、字様も相似しているが字劃遙かに劣る後出の建安坊肆本である。他に同版本の所在を知らない。「昌平坂／学問所」「文化戊寅」「浅草文庫」の印あり。

六書統　二〇巻　元楊桓撰　元至大元年（一三〇八）序刊（江浙行省）〔後至元〕三年（一三三七）修（江浙等処儒学提挙余謙）

首に至大改元歳在著雍涒灘良月朔翰林直学奉直大夫知制誥同修国史三山倪堅序の「六書統序」、将仕佐郎国士博士門生劉泰序の「六書統序」、次に桓の自序及び「六書統目録」あり。巻二〇の尾題後一行をおいて「三年八月江浙等処儒学提挙余謙補修」の一行あり。本文巻首「六書統巻第一／（低格）」奉直大夫国子司業楊桓攷集」と題す。左右双辺（二一・七×一六糎）有界八行、行十四字、篆文は行九乃至十一字不等、注小字双行、行廿三字。版心線黒口叔黒魚尾、「統形（即ち小題）（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に、彦明、章安、茅元吉、王寧、王、寧、三木、木、許成、徐愛山、趙秀、朱大存、茅、張、

中、寿、余、立、文、仲、子、明、侃、丑、伍、于、胡、章、蔣、茂、恵、栄、森、屠、尸、朱、太、銭の刻工名あり。上象鼻に「原本欠」と印され、匡郭版心のみが印刷された白紙の葉、また所々上半成は下半の印刷がきれている所がある。

劉泰及び倪堅の序によれば、至大元年楊桓の子守義が父の著書を上聞したので、江浙行省に特命して、刊板印書以て其の伝を広めさせたと云う。巻末の余謙の補修年は年号が漫滅して単に「三年」のみが残り、それを張志・瞿目は元統とする。陸志は文献通考の余謙の修補年が至正五年とあるので至正と推したのは失考で、通考のは後至元五年である。また涵録は「元統祇有二年。且所失第二字。尚有微痕。確非統正二字。而為大字之残筆。按倪序撰於至大改元戊申之歳。序称楊子守義奉朝檄往江浙刊父書。倘既刊成。版印頻数。一二年後。宜有修補。是固可断為至大三也。」と言っている。しかしこの微痕は字の下端の「八」で、史記の余謙等の補刊官銜は元統三年五月であるから、至元三年とすべきであろうか。本書の板木は明に入って南監に移管され、明南雍経籍考に「六書統二十巻脱者三十六面存者七百六十七面」と録され、さらに補修を加えて重印された。

（東洋文庫蔵）　二〇冊。新補淡香色表紙（三〇×二〇糎）、金鑲玉装。巻七首二葉、巻一三首二葉、巻一七首葉欠。版面漫漶の所と比較的美しい所が混り、明印であろうが、未だ明修が入っていない。「聞濤／閣印」等の蔵印あり。

（静嘉堂文庫蔵）　一二冊。陸志・陸続跋著録。後補茶色表紙（二八・六×一八・六糎）、襯紙を挾んで改装。明印であろうが、明修が入っていないようである。

同版の現存本に中央図書館（二部、一は適志・逮目著録）・中央研究院（張志・鄧目著録、以上拙著著録）・北京図書館（二部、一は瞿目瞿影著録、一は蔣志涵録著録本か）・南京図書館（丁志盆影著録）蔵本や汪目著録本がある。

六書統溯原　一三巻　元楊桓撰〔元至大〕刊（〔江浙行省〕）〔後至元三年〕修（〔江浙等処儒学提挙余謙〕）

（静嘉堂文庫蔵）〔明〕逮修　一二冊。前掲六書統と僚巻をなし、装訂蔵印を同じうし、後補茶色表紙（二八・六×一八・六糎）、襯紙を挾める改装本。巻末に自跋があるが、首葉のみを存して、第二葉目は版心に「原本欠」と記され、匡郭のみが印刷されている。本文巻首「六書統溯原巻第一／（低一格）奉直大夫国子司業楊桓攷集」と題す。左右叔辺（二二・七×一六・三糎）有界八行、注小字双行、行廿三字、篆文一字小字約四字に相当。版心線黒口双黒魚尾、「（小題）（丁付）」、上象鼻に大小字数、下象鼻に、天台□（昌カ）景祥、翁隠之、翁、之、徐文徳、徐友益、楊石山、方景明、可敬、何信、信、滕卿、滕、青之、趙明、趙秀、平山、古賢、林茂、盛、方、成、楊、弓、芦、徐、益、文、子、秀、何、張、宝、元、東、卿、林、木、公、朱、呉、孫、実、叔、山、茅の刻工名あり。前の六書統と同様所々版心に「原本欠」と刻され、匡郭のみが印刷された葉が存する。

前掲六書統と版式を同うし、刻工も共通しているから、後掲の同著者の「書学正韻」と共に、同時頃同所で刊刻されたもの

と思われる。本版の板木も六書統と同じく明には南監に移管されて、修印されたものである。同時に刊刻されたと思われる六書統・書学正韻を含めた刻工からその刊年をさらに検討してみよう。此等刻工が従事せる他の元刊本は、至大福州路刊通志（友山、仁甫）、泰定元年西湖書院刊至元余謙修文献通考（許成、趙秀、青之、平山、古賢、元吉、茂之、仁甫、文甫）、至元六年慶元路儒学刊至正十一年修玉海（彦明、文甫）、至元西湖書院刊至正修国朝文類（彦明、古賢）、至正二三年西湖書院刊鄂国令佗粋編（平山、君甫）、至正嘉興路儒学刊呂氏春秋（林茂）、至正末刊春秋或問（青之）、四書辨疑（方景明）、十行本注疏合刻本（仁甫）、胡注資治通鑑（文甫、君甫）、儀礼（文甫）、晦庵先生朱文公集（平山）、西山先生真文忠公文章正宗（友山）が挙げられる。宋刊本の元修には、越刊礼記正義（弓華、友山）、儀礼経伝通解（方景明、弓華、友山）、紹興刊春秋経伝集解（許成、趙明、平山、弓華）、説文解字（平山、弓華）、増修互註礼部韻略（弓華、友山）、史記集解（許成、友山、君甫）、両淮江東転運司刊三史（許成、趙秀、朱大存、青之、趙明、平山、古賢、林茂、弓華、茂之）、福唐郡刊漢書（仁甫）、所謂眉山七史（彦明、許成、趙季、朱大存、青之、趙明、平山、古賢、林茂、弓華、友山、君甫）、嘉定刊資治通鑑（許成、青之、平山、古賢）、資治通鑑目録（方景明、趙明、弓華）、資治通鑑綱目（趙秀、青之）、国語（趙秀）、贛州刊文選（平山）、皇朝文鑑（徐愛山、青之、平山、古賢）がある。此等の殆どは浙刊本であり、本版が至大の江浙行省刊で至元の修たることが立証される。

同版の伝本には中央図書館（二部、一は適志著録）・中央研究院（張志・鄧目著録、以上拙著著録）・北京図書館（二部、一は瞿目著録、一は蔣志涵録著録本か）蔵本や汪目著録本がある。

説文字原　一巻　元周伯琦撰　〔明前期〕刊　覆元至正十五年刊本

（静嘉堂文庫蔵）　一冊。陸志・陸続跋著録。淡茶色表紙（二八・五×一七・五糎）。首に至元九季歳在己丑仲春鄱陽周伯琦伯温父叙の自序、次に伯琦録の篆文楷書両様の「叙贅」次に「説文字原目録」あり。本文巻首「説文字源（隔三格）鄱陽周伯琦編注」と題す。尾題の下に「男宗義同門人謝以信校正」と刻さる。左右双辺（二五×一四糎）有界五行、行十字、注小字双行廿字、大字は約小六字に相当。版心線黒口単黒魚尾「説文字源（丁付）」。

次掲本の宇文公諒の序によれば、都水庸田使庸里公溥脩の首唱により、平江郡守高徳基等が次掲の「六書正譌」と共に刊行したと云う。本版は次掲本と共に故宮博物院蔵本（明修、拙著著録）と極めて精善なる覆刻の関係にあり、どちらが至正十五年の平江郡原刻本なのか判定が困難である。たゞ故宮本の補刻の部分も本版では修ではないが同様に相互に覆刻の関係にあり、また鐫刻の具合等から察して、恐らく故宮本が原刻本で、本版は至正十五年刊明初修の覆刻と思われる。この本は所々漫漶の印面を混え、刷りむらが見られ、補筆が加えられている。

北京図書館蔵本は目録に「元至正十五年高徳基等刻公文紙印本」と録されているが、原刻か覆刻かどちらであろうか。

六書正譌　五巻　元周伯琦撰　〔明前期〕刊　覆元至正十五年刊本

首に至正十五年龍集乙未三月既望奉直大夫国子監丞京兆宇文公諒叙の序、都水庸田使通議公閔里不花字の序、次に至正十一年歳在辛卯秋九月既望翰林直学士太中大夫知制誥同脩国史兼経筵官鄱陽周伯琦伯温敍の自序あり。巻末に至正十二季歳在壬辰九月承徳郎中書礼部員外郎臨川呉当述の「後敍」が附さる。左右双辺（二三・六×一四・二糎）有界五行、注小字双行、行廿字、大字は約小六字に当る。版心線黒口単黒魚尾「六書正譌巻幾（丁付）」。

前掲本と同様故宮博物院蔵本（明修、拙著著録）・瞿目瞿影著録本と精善なる覆刻の関係にあり、本版の方がその覆刻と思われる。本版は巻五尾題下に説文字原と同様「男宗義同門人謝以信校正」の一行が刻され、その字様は後の埋木による修らしく、特に「以信校正」の四字は前七字よりさらに後の補入の如く見える。故宮博物院蔵本にはこの一行はない。しかし故宮本の説文字原の方には巻末尾題下にこの一行が埋木で入っている。至正十五年平江郡刊刻の板本に後に男宗義等によってさらに校正修補が加えられ、本版はその修版を覆刻したものであろう。本版には内閣文庫本の如く後に補刻を加え、竇子偁重編と題した改修本がある。

（静嘉堂文庫蔵）三冊。陸志・陸続跋著録。淡茶色表紙（二八・六×一七・五糎）。

（内閣文庫蔵）明竇子偁重編　明後修　五冊。後補淡香色地宝尽し文様蠟牋表紙（二六×一七糎）。襯紙を挾んで改装。首の宇文公諒序なし。本文巻首の葉は全葉改刻の補刻で、巻首大題下の撰者題署が「合肥竇子偁重編」と変更されている。修の葉がかなり多く、その修は原刻の覆刻に近いものとしかざるものとが混淆している。巻五末尾題の所が破損。「読書／擊剣」「佐伯矣毛利／高標字培松／蔵書画之印」「昌平坂／学問所」「浅草文庫」等の印記あり。佐伯藩毛利家献納本。

同版本に北平図書館原蔵（旧京158159著録）・台湾中央研究院（鄧目著録、以上拙著著録）・南京図書館（丁志・盎影著録）蔵本・劉影著録本がある。上海図書館・北京大学蔵本・蔣志・繆続記著録本は原刻本に属するか、或は本版と同種か未見の為め確認し得ない。

漢隷分韻　七巻　不著撰人　〔元〕刊

（静嘉堂文庫蔵）二冊。陸志・陸跋著録。後補淡茶色表紙（二四・五×一五・四糎）、裏打改装本。首に「漢隷釈序（洪丞相隷釈序・洪侍講跋語・洪丞相跋水経説から成る）あり。本文巻首「漢隷分韻巻之一」、次行低三格「天下碑録」と題す。巻一は天下碑録、巻二は凡例、巻三以下は韻によって編次し、巻一の尾題は「集漢隷釈」、巻二首題は「集漢隷分韻」に、巻三以下の大題は「漢隷分韻平声上巻三」の如く作る。四周双辺（二

一×一三・三糎）有界八行、行十四字、小字双行、巻二以下は有界六行、行十字、注小字双行、行廿字、版心細黒口双黒魚尾、「隷（或は隷匀）幾（丁付）」。巻四の一九・二〇、五の二五・二六、六の二三―三一、七の二〇―二二葉は補写。「呉郡／趙宦光／経籍」「王／孫」（白文）「翰墨香」（白文）「吾見斎」「内楽／邨農」「拝経／楼呉／氏蔵書記」等の蔵印あり。明の趙宦光（字は凡夫）、清の呂葆中（字は无党）・周春（号は松靄）・呉騫（字は槎客、号は免牀、書庫を拝経楼と称す）等旧蔵本。巻末別紙附綴に呉騫の左の手識あり。

右隷韻七巻蓋宋刻而元時翻／雕者頃周松靄大令以見遺楮／墨既精古香可愛閲其図記知／為明趙寒山故物書側題識尚／其手□想見陸卿子翠袖摩挲／時覚鹿門之高風去人未遠松／靄嘗有跋刻小学餘論予別作／古風一章見拝経楼続稾嘉慶／戊辰中夏呉騫誌（印）（「免／牀」）（印）（「涓／雪」）

同版本に中央図書館・北平図書館原蔵本（存巻五―七、以上拙著著録）・北京図書館（二部、一は瞿目・瞿影著録）・南京図書館（存三巻、丁志盍影著録）・北京大学蔵本や王記著録本があり、上海図書館蔵本も恐らく同版か。

広韻　五巻　宋陳彭年等奉勅重修　〔北宋末〕刊

（真福寺蔵）　存巻三　一冊。重文。裏打改装本。後補茶色布目表紙（二七・五×一六・九糎）、外題に「韻書残欠」、表紙右下端に「第六十七合下」と墨書さる。首二葉を欠き第三丁より存し、末は第三二丁表に止ってその裏丁を佚する。巻中不幸にして間々破損の箇所あり、特に下端に多い。左右双辺（二三・五×一四・八糎）有界十三行、注文小字双行、行卅二乃至卅七字不等、大字は小四字に相当。版心白口単黒魚尾、「韻上声（丁付）」。下象鼻に間々屠、亨、徐、孫、安、洪、王の刻工名が刻さる。玄泫弦鉉姮朗珽敬驚慤警璥檄擎弘殷筐炅の字は概ね末画を欠き、貞徴は欠かず、樹は概ね欠かず一定せず、神宗・哲宗・徽宗の廟諱の字は本巻に見出せぬが、欽宗以下の廟諱は全て避けない。

字様は端整にして後掲の真福寺蔵礼部韻略等と相い通じ、撫刻精秀、墨色蒼古、恐らくは北宋末の刊刻にかゝる。重修広韻は真宗の景徳四年（一〇〇七）の牒文に「宜令崇文院雕印送国子監依九経書例施行」とあるが、その官版は伝存せず、この本が海内二なき現存最古の刊本である。「尾張国大須／宝生院経蔵／図書寺社官／府点検之印」「寺社／官府再点／検印」の印章、前見返に「文政四辛巳九月日令／修理畢／寺社奉行（墨印）」の修補識語あり。

広韻　五巻　宋陳彭年等奉勅重修　〔宋孝宗朝初〕刊

（静嘉堂文庫蔵）　五冊。重文。後補香色古表紙（二五・六×一八糎）、襯紙を挾んで改装さる。金砂子散し書題簽に「広韻上平　一」の如く題署。首に景徳四年牒、大中祥符元年牒、陸法言切韻序、郭知玄拾遺序、「陳州司法孫愐広韻序」あり。本文巻首「広韻上平声巻第一」と題し、毎巻次行以下に二格を低して目次を列して本文に接続する。毎巻尾題後に「新添類隔今

更音和切」を附し、また巻末に「雙声疊韻法」を附載する。左右双辺（二一・二×一四・九糎）有界十行、注文小字叔行、行廿七字。版心白口単黒魚尾、「韻上平（下平・上声・去声・入声）（丁付）」。下象鼻に、王珎　許明、阮于　顧忠、忠、呉亮、朱琰、徐杲、徐顔、徐茂、徐昇、徐高、徐政、孫勉、陳錫、錫、陳明仲、陳仲、陳詢、詢、丁珪、包正、毛諒、余永、余竑、姚臻、梁済の刻工名が刻される。玄㕓眩泫炫弦絃朗敬鞏檠驚警儆弘泓殷礙匡筐勁桱竟境鏡獷胤炅恒禎貞楨湞偵頡徽樹勗姞構溝睿の字は殆ど末筆を欠く。

本版の刻工が従事せる他の宋槧本を拾えば、紹興九年紹興府刊毛詩正義（陳錫、余永、徐杲、孫勉、徐茂、徐高、阮宇、毛諒、徐政）、紹興十年臨安府刊西漢文類（陳錫、包正）、紹興十九年刊徐公文集（毛諒）、紹興間明州刊文選（毛諒）、紹興間刊外台秘要方（徐杲、徐顔、丁珪、阮于、徐昇、徐高、徐政）、同通典（徐杲、包正、阮于、徐高）、同白氏六帖事類集（徐顔、王珎、丁珪、除昇）、同資治通鑑目録（徐政、王珎）、紹興初刊孝宗朝修史記集解（呉亮、姚臻、徐杲、王珎、包正、孫勉、阮于、徐茂、徐昇、徐高、毛諒、顧忠、徐政）、紹興淳熙間刊同思溪版蔵経（徐顔、王珎、徐昇、徐高）、同越刊周易疏（陳錫、王珎、徐茂、顧忠、許明、梁済）、同周礼疏（陳錫、余永、徐顔、王珎、徐茂、許明、梁済）、同尚書正義（陳錫、余永、徐顔、王珎、徐茂）、孝宗朝刊周易正義（王珎、徐高）、同春秋経伝集解（陳錫、姚臻、徐杲、王珎、包正、朱琰、阮于、毛諒、呉亮、陳明仲）、同所謂眉山七史（王珎、陳錫、徐高、陳仲）、同論衡（徐顔、王珎、梁済）、同両淮江東転運司刊漢書（余竑、徐杲、徐顔、包正、徐茂、徐高、毛諒、陳詢）、紹熙頃刊広韻（余竑、徐顔）、同臨安府陳宅書籍舗刊碧雲集（徐杲）がある。陳仲は寧宗頃刊古史に見えるが、本版の陳仲は陳明仲の略らしく、古史の陳仲とは同名異人の疑がある。以上の如く本版の刻工は高宗の紹興から光宗の紹熙にわたる杭州地区の刻工で、殆どが紹興淳熙年間に集中している。

本版は従来北宋刊とされて来たが、その刻工は皆南宋前期の人、その欠筆が構睿に止って、慎の字を欠かないこと、またその字様版式が北宋の面影をとどめた南宋初浙刊本の典型たることを按ずれば、本版は北宋監本の重刊を地方機関に促した紹興の詔に応ぜる、孝宗初の乾道年間を降らぬ杭州地区の公使庫の刊刻にかゝることは疑いない。同版本は他に傅増湘旧蔵北京図書館現蔵存巻一・三・四の残本（傅目・中版録1516著録）が知られるにすぎない。古く或は北宋本と云われ沢存堂五種・古逸叢書に覆刻されて普及した次掲の宋刊十行本は本版の覆刻である。この本には「黄叔／子」「翠霽軒」「文華／私印」「炎城霞気」「易東／後人」「八雲軒」「脇坂氏／淡路守」「藤／亨」「安／元」「島田翰／読書記」「松方／文庫」等の蔵印あり、巻二末（墨筆）巻五末（朱筆）に「強圉氏文房」なる室町時代の署名がある。恐く朝鮮を経て古く我が国に将来された脇坂安元・竹添井井等の旧儲である。

同　〔宋寧宗朝〕刊　覆宋孝宗初刊本

前掲の孝宗朝初刊本の精善な覆刻にかゝり、首目巻末附載巻首題式全て前掲本に同じ。左右双辺（二一・三×一四・七糎）有界十行、注小字双行、行二七字。版心白口単黒魚尾「韻上平（―入声）（丁付）」。上象鼻に大小字数、下象鼻に王玩、王恭、王宝、何昇、何澄、魏奇、金滋、呉椿、呉志、呉益、高異、朱玩、朱、秦暉、秦顥、宋琚、曹栄、趙中、張栄、陳晃、陳寿、沈思忠、沈思恭、思恭、方至、方堅、余敏、李倍、李倚、陸選、劉昭の刻工名あり。玄眩眩泫炫弦絃詫舷蚿慈眩玹衒趨痃駭玹玆舷鉉袨朗敬檠檄鷲儆警儆懲瞰璥弘紘恤窈泓靰弘殷慇澱匡筐勖髭洭輊眶駸邸蛭框恇洭菎誆竟鏡獍璟擬胤醐炅恒禎貞楨湞偵郎隕頡遉徼癥鄒桓には概ね欠筆が見られ、構溝脊慎は一部末画を欠くが一定しない。本版には部分的或は全面に修補の入った葉を少しく混えた後印本がある。修の版心は字数、刻工名がないことが多いが、間々実甫、勝之、匋の名が刻さる。巻中墨釘の所が往々存する。

本版は前掲の南宋前期刊本が知られていなかったので、或は北宋本と審定され、清康熙年間張氏沢存堂が覆刻し、また光緒年間古逸叢書に覆刻収入され流布している。しかし両本とも原本に校改が加えられ、原本の訛脱を訂している所もあるが、却って誤れるもあるから注意を要する。前掲の書陵部蔵寧宗朝刊玉篇の条で詳記した如く、本版の刻工は原・修共に全てその玉篇のそれと共通し、且つ字様・行格・版式も等うしているから、共に同時同所の刊刻にかゝることは明かである。その刻工を共通する他の宋刊諸本は玉篇の条に於て既記の通りであるからこゝには省略する。要するにその刻工の殆どが最も活躍した時期が集中しているのは寧宗朝期で、しかも全員がその頃国子監が行ったと伝える補刻に従事している。従って本版の刻工のうち早いのは淳熙中であるから、寧宗朝の嘉定後期を降らぬ頃前掲の孝宗朝初の版本に基づいた浙江地方の公使庫の刊刻にかゝることは明かで、或は国子監の刊刻か、少くともその板木は国子監にあったと想像される。後掲の建安坊刻本が官本、監本、明本、杭本等と云うのは本版を指すものである。

本版はその後宋末元の間に初め龍谷大学蔵本の如く部分的な修がなされ、ついで内閣文庫蔵本の如く全葉の修が施された。元西湖書院重整書目に「玉篇広韻」とあるは恐くは本版を指すらしく、本版の修は前掲の玉篇と同じく西湖書院に於て施されたものであろう。その後明に板木が南監に移されたらしく、明南雍経籍考に「広韻五巻好板一百三十九面壊板三十三面」とあるのは或は本版か。

（国立国会図書館蔵）　五冊。新補濃藍色絹表紙（二六・四×一八糎）、裏打改装、原料紙縦二三糎。所々親字に墨筆振仮名が附さる。印面が美しく、比較的早印に属する。「泉涌寺別院／雲龍院常住」「梶原家蔵」「故梶原芳埜納本」の蔵印あり。

（静嘉堂文庫蔵）　五冊。陸志・陸続跋著録。後補灰褐色表紙（三三×二一糎）、裏打改装、原料紙縦二五・七糎。版心の下象鼻は破損が多い。

（宮内庁書陵部蔵）　五冊。新補濃青色地卍繋文様裂表紙（二五・五×一八糎）、裏打改装、原料紙縦二四糎。巻末の雙声畳韻

法等の附録を欠く。巻中所々、特に版心の周囲に破損が多い。所々室町期の朱点、時に墨筆の連続符返点振仮名の書入がある。「弘前医官渋／江氏蔵書記」「森氏開万／冊府之記」「高木寿穎／蔵書之記」等の蔵印あり、巻末に左の森立之及び高木寿穎の手跋が附綴さる。

右宋板広韻五巻与清張士俊所重刊本全同／而間字体有小異同士俊序所云精加校讐梓／之者也然宋板之誤字改而不可者亦有之比校而／後可自知矣此本之出在狩谷望之桉斎歿後渋江／全善簫斎得而蔵之簫斎捐舎後遂入我架中／此書楓山庫中亦未収之真天下之珎宝也／己卯春日　七十三翁　枳園森立之

(印)(印)(印)

謹按玉篇広韻是学者必用／之書猶車之両輪不可存一而欠／一也今二書倶得宋版真是一雙璧／玉可謂小人無罪懐璧是罪則非／我家所能蔵者因以献焉／　明治十五年一月　高木寿穎

(印)(印)

よって狩谷桉斎・渋江抽斎・森枳園・高木寿穎遞蔵本にして、寿穎より秘府に献納されたことが知られる。

(龍谷大学図書館蔵)〔宋・元〕修　五冊。後補丹表紙(二五×一七・五糎)、裏打改装本。部分的な修の加った葉を混える。巻三第四、巻四第二一・四四、巻五第四葉は補写。「写字台／之蔵書」の印あり。

(内閣文庫蔵)〔宋・元〕修　五冊。後補浅葱色表紙(二五×一七・三糎)、天地が少しく裁断された裏打改装本。首目、巻末の雙声畳韻法、巻一の首七葉を欠く。巻一の第十六葉補写。僅かながら元修の葉が混る。「昌平坂／学問所」「文化丁卯」「大学校／図書／之印」「浅草文庫」の蔵印あり。

同版本は他に上海図書館蔵本二部が知られ、一は楊守敬旧蔵楊志著録、古逸叢書の底本らしく、一は明印と云う。ハーバート大学燕京研究所蔵明修本は或は同版か。

鉅宋広韻　五巻　宋陳彭年等奉勅重修〔宋乾道五年(一一六九)〕刊(建寧府黄三八郎書舗)

(内閣文庫蔵)　五冊。重文。森志著録。後補香色表紙(二二・七×一六糎)、裏打改装本。表紙外題に「宋版広韻皇祐元年刻本第一冊」と墨書。首に景徳四年・大中祥符元年牒を略すが、陸法言切韻序、郭知玄拾遺序、「陳州司法孫愐唐韻序」あり、その末二行をあけて「己丑建寧府黄三八郎書舗印行」の刊記が刻さる。本文巻首「鉅宋広韻上平声巻第一」と題し、毎巻次に一格を低して目次をおいて本文に接続する。毎巻尾題後に「新添類隔今更音和切」を附し、巻五尾題後に「声畳韻法」を附し、末に「鉅宋広韻巻第五終」(跨行)の末題を重ねる。左右双辺(二〇×一四・五糎)有界十二行、注小字双行、行約卅四字。版心白口(一部線黒口を混える)双黒魚尾、「貞平幾(貞幾、貞去声幾等、稀に白文)(丁付)」。概ね上象鼻、往々中縫・下象鼻に大小字数あり。玄敬檠徼瞰弘泓窈殷溺匡筐眶邸蛭框恇勖胤貞楨偵禎郎陧構の字は概ね末筆を欠くが　避諱は厳格ではない。

異同はあるがほゞ前掲官本に基づく坊肆本で、字画明晰にして字様は南宋前期建安体の典型なるもの、欠筆から按じても、

刊記の己丑は乾道五年己丑に繫けるのが至当である。同版本は上海図書館蔵本が知られるにすぎない。「蒹葭堂／秘不許／出閫外」「蒹葭堂／蔵書印」「蒹葭／蔵書」「昌平坂／学問所」「文化甲子」「浅草文庫」等の蔵印あり、木村蒹葭堂旧蔵本。（追記2）

同 〔南宋〕刊（麻沙劉仕隆宅） 覆乾道五年建寧府黄三八郎書舗刊本

（福井氏崇蘭館旧蔵現所在未詳） 五冊。後補縹色古表紙（二五・五×一七糎）、裏打改装本。首目巻末附載本文巻首体式題署前掲本に同じ。孫愐序後に「○広韻日前数家雖已雕印○／○非惟字体不真抑亦音切○／○訛謬本宅今将監本校正○／○的為精当収書賢士請認○／○麻沙鎮南劉仕隆宅真本○」の木記が刻ざる。左右双辺（二〇・八×一四・五糎）有界十二行 注小字双行、行卅四字。版心白口双黒魚尾「広員幾 （丁付）」。欠筆があるが、精細に調査する餘裕がなかった。

崇蘭館旧蔵本で、昭和四十五年東京古典会の入札会に出品され、その際概略を調べたが精査するに至らなかった。現所蔵者未詳。前掲本の南宋中期の覆刻にかゝり、撫刻精善印面美しき早印本で 此も他に同版本の存在を聞かない。第二冊以下の各巻末に「天文廿季辛亥拾月吉日求得之沙門賢聖之」の感得識語がある。

明本正誤足註広韻 五巻 宋陳彭年等奉勅重修 〔元〕刊

（内閣文庫蔵） 五冊。後補濃縹色表紙（二二・八×一六・三糎）、裏打改装本。首に景徳四年牒文、大中祥府元年牒文、陸法言切韻序、郭知玄拾遺序、「陳州司馬法孫愐唐韻序」あり。本文巻首「明本正誤足註広韻巻之一（隔三格）上平声（墨囲陰刻）」と題し、毎巻次に半格を低して目次を列して本文に接続する。毎巻末に「新添類隔今更音和」を附す。四周双辺（二〇・三×一四糎）有界十四行、注小字双行、行卅字。版心線黒口双黒魚尾「韻幾（丁付）」。

重修本によるが、反切を注首におく。書名の明本は明州本即ち杭州地区の京本によって正誤せる善本の意味で、足註は後記の如く建安麻沙本が注を省略してあるのに対し節略していない意味を示した冠称である。杭州刊本に倣った恐らく建安坊刻本ながら字画明晰にして、なお宋版の遺風を留めている。巻一末裏葉を欠き、巻五末は尾題に止っているが、裏葉以下を逸失せるか。所々破損の箇所がある。「仁正斐長昭／黄雪書屋鑒／蔵図書之印」「昌平校／学問所」（朱印）「浅草文庫」の印あり。巻末に長昭の寄蔵文廟宋元刻書の跋文二丁が附綴さる。本版の伝存は他に知られていない。

大宋重修広韻 五巻 宋陳彭年等奉勅重修 〔元〕刊

（内閣文庫蔵） 欠巻一 四冊。森志著録。後補香色表紙（二三×一四・七糎）、裏打改装本。所々破損の箇所あり、巻二首及び尾裏、巻三首表葉を欠き、巻五は巻中欠丁多く、巻末を欠く。本文巻首「大宋重修広韻去声巻第四」（巻五は「広韻入声巻第五」）と題し、毎巻次に一格半を低して目次をおいて本文

に接続す。毎巻末に新添類隔今更音和切が附されいる如し。四周双辺（一八・四×一二糎）有界十一行、注小字双行、行廿四字。版心線黒口双黒魚尾「韻（匀）幾　（丁付）」。

ほゞ重修本に同じであるが、収録の字がやゝ省略されて少い。巻三・四巻末に「紀陽南斗寄附之」の室町期の施入墨書あり、巻中所々に室町期の筆で朱圏点が附され、眉上に僅かながら朱墨の書入が見られる。「昌平坂／学問所」「文化戊寅」「浅草文庫」等の印あり。本版は他に伝本のない建安刊本である。

広韻　五巻　元元統三年（一三三五）刊（日新書堂）
覆至順元年敏徳書堂刊本
（米沢市立図書館蔵）　五冊。後補丹色地空押行成表紙（二三・六×一五・七糎）、裏打改装本。首に「陳州司法（法は馬の誤）孫愐唐韻序」あり。本文巻首「唐韻上平声巻第一」と題し、毎巻次行以下一格を低して目次を列ねて本文に接続する。首の孫序の末に「元統乙亥中秋／日新書堂刻梓」の双辺木記が刻され、毎巻末尾題の前に「新添類隔今更音和切」を附す。四周双辺（一八・三×一一・七糎）有界十三行、注小字双行、行廿七乃至卅字内外不等。版心細黒口双黒魚尾「匀幾フ　（丁付）」。「釈」「中／姜」「麻谷蔵書」の印記あり。

元明刊麻沙本広韻は陳彭年重修本に比し、収録字数が少く注文も簡略で、重修本から刪略したのか、重修に至る前の孫愐切韻系の別本に基づくかについては両説がある。四庫全書は後説をとり原本広韻と称する。この本は印面美しく比較的早印に属する。同版本には北京図書館蔵本が知られる。（追記3）

本書の元明の建安坊刻本は玉篇と同じく、字様行格の上から十二行本と十三行本との二系に分れる。各内容上小異出入あるが、字様版式は各系内で相互にほぼ覆刻の関係にある。十三行本系は本版より先出に故宮博物院楊氏観海堂蔵至順元年（一三三〇）敏徳堂刊至順二年印本（森志・楊志・楊続譜・拙著著録）があり、同蔵元余氏勤徳書堂刊本（浅野梅堂旧蔵、楊志・楊譜・拙著著録）・北京図書館蔵至正十六年翠巖精舎刊本（封面「新刊足註明本広韻」、中版録325 326著録。劉影著録本同版）も相互に覆刻の関係にある。

本版や至正十六年翠巖精舎刊本の覆刻で、孫愐序の後に「太歳壬子仲春棗巖精舎新刊」なる刊記を有する慶應義塾大学斯道文庫・蓬左文庫・足利学校遺蹟図書館（存巻三―五）蔵本がある。此は字様鐫法が明風を帯び来り、その壬子は洪武五年に繋ぐべきであろう。ただ蓬左文庫蔵本には封面が貼附され、それには上に「棗巖精舎」「校正無誤」と二行に横書し、下中央に「新刊足註／明本広韻」と大書、その左右に「○五音四声切韻図譜詳明○」「○太歳戊申仲夏綉梓印行○」と小書されている。建安の有名な書肆翠巖精舎と紛わしい店名で　しかも明本と麻沙本と違って京本に拠り、足本と注が省略に非ざることを偽示している。封面の戊申は元では至大八年であるが、それほど古く溯り得る筈はなく、明では洪武元年か宣徳三年に当る。

同　元至正二六年（一三六六）刊（南山書院）　覆泰定二

年円沙書院刊本

首に「陳州司馬孫愐唐韻序」、序後に「至正丙午菊節／南山書院刊行」の双辺両行木記がある。本文毎巻首「広韻某声巻第一」と題し、毎巻次行より一格を低して目次をおき、本文に接続す。双辺（二一×一二・八糎）有界十二行、注文小字双行、行卅字内外。版心細黒口双黒魚尾、「韻（匀・広匀）巻幾（幾）（丁付）」。毎巻末尾題の前に「新添類隔今更音和切」が附さる。

本版は中央図書館蔵元刊本（存巻四・五）と共に、元泰定二年（一三二五）円沙書院刊本ともほぼ覆刻の関係にある。泰定二年刊本は森志に「金槧本　求古楼蔵」と著録された本であるが、楊守敬の入手する所となり、「古逸叢書」に覆刻収入され（楊譜三著録）、後李木斎の蔵に転じ、今北京大学図書館の有となっている（王記著録）。その泰定二年円沙書院刊本の粗なる覆刻で、孫序後に「龍集乙卯菊節／円沙書院刊行」の木記を有する天理図書館蔵本等がある。この乙卯を従来延祐二年（一三一五）に擬定しているが、その字様は到底泰定二年より前には溯り得ず、且つ至正二六年南山書院版の字様よりもさらに明風の特色が顕著となっているから明かに明初の刊刻にかかると見るべく、乙卯は洪武八年乙卯に繫ぐのが妥当と思われる。

（尊経閣文庫蔵）　五冊。後補代赭色表紙（二三・八×一五・一糎）。裏打。各冊末に「宗／玩」、首に「洒竹文庫」の印あり、大徳寺の釈江月宗玩・大野洒竹旧蔵。印面が美しい。

（天理図書館蔵）　五冊。後補渋引茶褐色表紙（二五・五×一六・二糎）、裏打改装本。やや後印。少しく室町期の朱筆勾点や欄外に書入が存する。

（龍谷大学図書館蔵）　五冊。後補茶褐色表紙（二四・七×一五・二糎）。裏打。所々破損、特に第一冊の版心の周辺が甚しく、破損の箇所は補写されている。「写字台／之蔵書」の印。やや後印に属する。

（内閣文庫蔵）　五冊。巻三―五配明前期刊本。森志著録。後補濃縹色表紙（二四・四×一四・五糎）。裏打。巻二の一六丁裏と二〇丁以下は補写。巻三・四は双辺有界十二行の明前期刊本、巻五は左右双辺有界十三行注文約卅字の明前期刊本を以て補配さる。「周／信」（巻一・二のみ）「昌平坂／学問所」の印。巻末に「寛政戊午」の朱印。巻一・二は義堂周信の手沢本か。

本版は他に故宮博物院楊氏観海堂（楊志三・楊譜三27・拙著著録）・北京図書館・ハーバード大学燕京研究所蔵本がある。

広韻　五巻　〔宋末元初間〕刊

（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵）　巻三・五補配明前期刊本　五冊。後補香色表紙（二二・八×一四・六糎）、匡郭内で切りとり、裏打改装さる。全巻往々破損の箇所があり、巻二末葉裏を欠くが、尾題のみは補紙に貼附されている。首に孫愐序があるが、首半葉を欠き、序末の裏葉は別紙で補わる。本文巻首「広韻上平〔声巻第一〕（声以下四字破損、巻二以下の題により補）」と題し、毎巻次行より二格を低して目次をおいて本文に接続する。巻末に「新添類隔更音和切」を附する。左右双辺（一六・六×一〇・九）有界十二行、注小字双行卅一字内外。

版心線黒口双黒魚尾「匀幾　(丁付)」、中縫、稀に上象鼻に間々大小字数あり、裏葉左上欄外に耳格あり、「広韻（或は匀）幾已幾」と印さる。玹眩駩玆胘朗匡蜌筐郅框鬖劻涯輩睚恇菎駻貞隕楨禎郟湞偵赬の字概ね末画を欠くが、欠筆はさ程厳格ではない。補配の明刊本は四周双辺（二〇・五×一二・七糎）有界十行、版心線黒口双黒魚尾「韻幾　(丁付)」。

本版は前掲諸本に比し、収録字と注文がさらに節略さる。字様は麻沙本風と共通する所もあるが　端直の気味が勝ち一風異っている。巻四は巻一・二に比し、字様やや劣り些少硬直の感を与える。同版本の所在を他に見ない。室町近世初間の書入が少しく存し、「崇山沙門釈玄琳静峯」の墨書、「三井家鑒蔵」等の蔵印あり。

同　〔元〕刊　覆宋

前掲本の覆刻で、首に孫愐序あり、巻首題署体式前掲本に同じ。左右双辺（一六・四×一一糎、往々単辺を混え、序は双辺）有界十二行、注小字双行、行卅一字内外。版心線黒口双黒魚尾「匀幾フ　(丁付)」。中縫に間々字数あり、裏葉左欄外に耳格、「広韻（匀）幾已（フ）幾」と記さる。玹眩駩玆胘匡筐筐炅等に欠筆を見る。巻四・五は字様が少し崩れ、粗笨となる。此は底本のせいか。故長沢規矩也博士は日光の天海蔵本に対し、「宋諱の欠筆は玹（中略）炅等、宋の初に止まり、且、玄・胤を欠かないので、宋末元初刊本というよりは、宋初刊本に拠った金刊本と断じてよいのではあるまいか。」（日光山「天海蔵」主要古書解題）と審定された。この本の底本となった前掲本は当時未だ知られず、此は字様が建安体と些少異って方直なため、苦慮の上での判断であった。しかし金版特有の直硬の痕、金体とも異り、金版とするには難点が多く、やはり前掲本と共に建安刊本と看做すのが穏当と思う。

（現所在未詳）　五冊。新補淡香色表紙（二五・四×一四・八糎）、金鑞玉装、原料紙縦二一・二糎。比較的早印で印面が美しい。所々朱墨の書入がある。昭和五十一年の古典会入札に出品されたが、何処に落在せるか明かでない。

（日光山輪王寺天海蔵蔵）　五冊。粘葉装。毎冊首眉上に「慶源寺」の朱筆、第二冊副紙に「樹上房上ル」の墨署が存する。以上二本は時間の関係上残念ながら精査に及ぶことができなかった。

本版も他に同版本の所在を確認し得ない。

集韻　一〇巻　宋丁度等奉勅撰　田世卿校　宋淳熙一四年（一一八七）刊（金州軍州学）

（宮内庁書陵部蔵）　欠巻一　九冊。森志・楊志・楊譜著録。後補淡香色表紙（三五×二五・五糎）。裏打改装本。毎巻本文巻首「集韻巻之幾／（低半格小字）翰林学士兼侍読学士朝請大夫尚書左司郎中知制誥判秘閣兼判太常礼院群牧使柱国済陽郡開国侯食邑一千一百戸賜紫金魚袋臣丁度等奉／（低一格）敕脩定」と題し、第三行以下二格を低して目次を列して本文に接続す。巻末に宝元二年の上表文、宝元二年九月十一日の進呈鏤版施行の牒文（末に

校勘趙師民・孫錫、刊脩王洙・宋祁・賈昌朝・鄭戩、詳定李淑・丁度の列銜）、慶暦三年八月十七日彫印成進呈国子監施行の牒文（末に賈昌朝・晏殊・章得象の列銜）、次に葉を改めて、武功大夫高州刺史充金州駐劄御前諸軍都統制田世卿謹跋の跋文あり。左右双辺（二八・三×二〇糎）有界十行、注小字双行、行卅一字内外。大字は小字三、四字に相当。版心白口単黒魚尾「集韻某声幾　（丁付）」。玄鉉眩眩泫炫弦絃眩炫衒懸荌拙舷玧刻蚿妶狡駭蓄儲幡蹠鱠鄒稽嬸禧敬擎檠鷩儆擏擏鼙鼙璥敵憼鬢弘宏窊瓠訛殷慇澱鞂礙轗匡筐勖誆恇郢蝘洭狸蓲輊睚頤框闔胵踵恒椻垣鮞暟砸の字は殆ど欠筆し、慎は欠くもあり欠かざるもあって一定しない。

本書は巻末の上表・牒文の示す如く真宗の景祐元年の勅により丁度等が脩定し、宝元二年上進、慶暦三年雕印が成ったのであるが　この慶暦の北宋監本は残念ながら伝存しない。本版校刊の経緯について巻末の田世卿の跋に

世卿旧聞集韻収字最為該博捜訪／積年竟未能得皆云此版久已磨／滅不復有也世卿前年蒙／恩将屯安康偶得蜀本字多舛誤／間亦脱漏嘗従暇日委官校正凡／点画錯謬者五百三十一字其間湮晦漫不可省者二百一十五字／正文注解脱漏者三十三字継得／中原平時旧本重校修解者一百／五十五字旧本□（雖カ）善而書字点画／亦有謬誤復以説文爾雅等書是／正改定凡五百一十五字因令鋟／版以広其伝自淳熙乙巳九月至／丁未五月僅能畢工亦庶幾不作／無益害有益之義也

と記されているので明かである。即ち世卿が高州の金州軍（陝西省安康県）に駐劄した時、蜀本を底本としその舛脱を正し、北宋刊本と爾雅説文等の書を以て重校正し、淳熙十二年に工を起し十四年に竣工したと云う。本版は大判にして版式寛広、字大なること銭の如く、撫刻精良、紙質堅緻にて白色清瑩　蜀本を得てと称する如く、その字様は蜀の体に類し、恐くその覆刻か倣似であろう。集韻は世卿が孝宗朝たる当時既にその入手し難きを慨いた如く玉篇・広韻に比して盛行しなかったので、宋版の伝本は極めて稀れ、他に北京図書館蔵本（天目続著録、汲古閣等の影宋本や曹楝亭刊本の底本の系か）が知られるにすぎず、本版とは別版である。本帙の料紙は我が国の古紙に似て、唐紙としては類少い独特の紙質で、或は楮麻の交漉であろうか。刊行地の安康金州は陝西省の南端で蜀に近く、当時金と対峙せる最前線であった。雕板も同地か或は蜀でなされたか否かは別として、北方の陝西地区に於て刊行された宋版本の存在は聞くことなく、珍中の珍と云うべきである。

毎冊首尾に「金沢文庫」の墨印、首に「蟠桃院」（妙心寺塔頭）、「佐伯吳毛利／高標字倍松／蔵書画之印」の印記あり、金沢文庫より流出後転々し、我が国への将来伝承の古い秘笈である。

礼部韻略　五巻　宋丁度奉勅重脩　孫諤増補　〔北宋末〕刊

（真福寺蔵）　欠巻四　三冊。重文。後補茶色布目表紙（二七・五×一六・八糎）　裏打改装本。序跋なし。本文巻首「礼部韻略

平声上第一」と題し、毎巻題後三格を低して目次をおいて本文に接続す。巻末に「元祐庚午礼部続降韻略条制」(元祐五年七月初十日酉時淮都省送下、五丁、第二丁欠、版心「礼部新」「条制」「新制」)、「貢院条制名諱」景祐四年六月の中書門下牒(丁度等劄子〈臣等今詳定附韻条制〉、程試格式を含む)を附し、末に五名の列銜が記さる。左右双辺(二二×一四・四糎)有界十一行、行廿一字内外不定、注小字双行、行廿九字内外不等。韻目の標字を陰刻とし、両音の字は円を以て囲む。版心白口単黒魚尾、「平声上(下)(上声、入声)(丁付)」、下象鼻に浩吉、洪、安、許、朱、徐、鍊、誠、張、玘、陳華、胡、明の刻工名あり。欠画は厳格にして、玄眩眩泫弦絃蚿誸妶彋駭舷伭眩縣黶頍朗俍寊㟁碌狼浪閬寊悢誏朗烺祼篔埌朓窱瑿脡侹頲齥齪蜓鋋鯁摯檠鷩儆警檄弘泓輒苰宖輒殷慇澱礙蔇匡筐邸眶恇劻涯鬢胤醨炅顃顈顈恒俍禎貞楨郎嫋偵徵癥湞賨搷陾旗曙樹澍頊の末筆を欠き、哲宗の煦には「御貼呼句名黄切」と注され、徽宗以下の字は欠画を見ない。

挙人場屋用に広韻の収字注文を簡略にせる韻略が景徳四年勅編された。本書巻末の中書門下牒の示す如くその後その重修を丁度等に命じて、景祐四年附韻条制を添えて上進された本を国子監に送って印造頒行せしめたのが礼部韻略である。しかし収字が頗る狭いとの議が起り、玉海に「元祐五年太学博士孫諤等言韻有一字一義而両音有合用而私相伝為当避者有合押而礼部韻或不収者七月九日附入韻略」とある如く、孫諤の陳請によって添収増補したのが本書である。玉海引用の記事は本書巻末の「元祐庚午礼部続降韻略条制」冒頭の記す所と合致している。その後韻略への添入には紹興十一年黄啓宗、同十四年楊朴等の増修の陳請があった。勅修の韻略・礼部韻略は四庫全書に「当時官本已不可見」と云う如く漢土にはその後散失して、たゞ四庫全書に著録された「附釈文互註礼部韻略」の如き後の附注増補改編の坊刻本が伝存しているにすぎない。

本版はこの本の影鈔本を入手せる楊守敬が「宋元祐五年官刊本」(楊志巻一)と鑑定して以来、北宋元祐の刊刻にして天壌間無双の孤本として尊重されている。字様方直鐫刻精整撫墨蒼古にして字様版式に北宋刊姓解等と相通ずる面目を伝える。しかし近時南宋初の刊に非ざるやの一説が出ている。刻工の洪吉は紹興初刊思溪版大蔵経、中央研究院蔵紹興初刊史記集解の刻工名中に見える。元祐五年と南宋の建炎紹興元年間とは隔ること四十年であるから、元祐の刻工が北宋末南宋初間紹興初の雕鐫に従事することは強ち不可能とは看做し得ない。上記の如く紹興十一年には黄啓宗等の増添があるから、その後には元祐増修本を重刊する必要はない。従って一歩譲って本版が南宋刊としても、刻工名欠筆の点等から考えても、南宋ごく初の精善なる覆刻版である。元祐五年刊官本そのものとするには些少疑念も出ようが、北宋末刊と審定して支障ないと思うが、後考を俟つことゝする。

草書礼部韻宝　五巻　宋高宗書　〔元〕刊　覆宋

(静嘉堂文庫蔵)　五冊。後補茶色表紙(二四×一五・八糎)、

裏打改装本。外題に「宋版／草書韻宝　幾」と墨書。巻首「草書礼部韻宝上平声」と題し、毎巻次行以下低一格を以て目次を列して本文に接続する。巻末に序あり、末に承議郎権発遣湖州軍州兼管内勤農事借紫臣陳汶謹識及び宣義郎簽書昭慶軍節度判官庁公事臣趙与懃監刊と署さる。左右双辺（一七・二×一三糎）有界五行、大字の行草書下に小字の楷書を注し、各行大字各五字。版心線黒口双黒魚尾「上平　（丁付）」。首冊扉に、上に「与畊書堂」と横書し、その下に「高宗御筆／草書韻宝」と書せる双辺木記の封面が補写され、「此一葉据烏石旧蔵宋邨本補」の小書注記がある。「山本」「向黄邨／珍蔵印」「島田翰／読書記」（白文）「松方／文庫」の印記あり。

四庫未収。礼部韻略収録の字を、注文を省いて高宗が書せる行草体の書に楷字を注せるのを模刻せるもので、陳汶の序に「臣仰惟高宗皇帝釈去万幾游戯翰墨朝夕不倦聖心冲澹不累於物合於道矣宜其超妙入神不可摹擬御書礼部韻略真草兼備凡二万二千一百九十六字臣与懃得而秘蔵之臣汶刊置墨妙亭以為万世之宝」と。千頃堂書目に「宋高宗御書礼部韻宝六冊刊於湖州」と著録された湖州刊本は陳汶刊刻本であろう。しかし宋槧本は今伝わらぬが、本版はその系統の覆刻と思われ、元刊本は次掲本の他に中央図書館蔵元前至元二五年刊本（欠巻二・四、拙著著録）がある。共に覆宋の元建安坊刻で、それ〴〵ほゞ覆刻の関係にある。

浅野梅堂自筆の「漱芳閣略目」に「宋鋟　草書韻宝　烏石先生蔵　五冊」と著録され、また梅堂の「漱芳閣書画記」には左のその題跋が収められている。

宋板高宗御書草書礼部韻五冊高八寸一分横五寸一分裝面五行毎行大字草書五字楷釈五字

標背面有高宗御書草書韻宝大字二行及与耕書堂字巻尾有承議郎湖軍軍事陳汶跋并布衣臣丁景孟校正重刊小楷一行四庫提要并阮氏未収書目等諸書並不収此書蓋佚於彼土已旧矣此本烏石山人所蔵其題籤及標紙上処々漫書者皆山人手筆也延亨年間邦人越克敏翻刻此本序中盛称為宋刻鮮明者要之宋刻無論如其鮮明者過夸耳此本紙黠略類元版而其序中云以元版比校且乎翻刻本末併刻其至元戊子中元建安布衣鄭宝跋識是則元板自有別本也据此本称重刊既併元版三刻今皆散佚僅存此一本豈可不宝愛哉帙裏面有上山田寛者明和丁亥十月識語曰是書也宋高宗親自書者嚮烏石先生得之秘蔵而翻于玆都蓋其元本也先生遂授之亀谷近者落乎我手矣実為余家趙璧云亀谷者山人之弟子住赤阪郷以臨池鳴于一時者也

この跋の記事によればその本はこの本とは同版か或は本帙がその本そのものらしくもあるが、些少齟齬する所がある。本版には巻尾に丁景孟校正重刊の小楷一行や至元戊子跋がない。中央図書館蔵本には「建安布衣臣鄭宝校正」の一行、至元戊子中元の建安小斎の刊語がある。梅堂は本書を三部有し、その一を残して他は散佚したというから、この題跋は記憶によって三部の序跋刊記を併録してその記述には混乱曖昧が生じているようである。この本の封面は補写で、「据烏石旧蔵宋槧本補」の注記があるから、烏石山人・上山田・梅堂逓蔵本はこの本に非ずして次掲本や中央図書館蔵本並に本版とも違った別種の版であ

ったと一応考えられる。とも角本書の伝存本は尠いが、元代建安坊肆に於ては幾種かの版が出されていたことが想像される。

草書礼部韻略　五巻　宋高宗書〔元〕刊（建安）

（大東急記念文庫蔵）　五冊。新補茶褐色表紙（二二×一四・五糎）、裏打改装本。元料紙縦約廿糎。陳汶謹識及び趙与懃監刊の序が巻首にあり。本文巻首「草書礼部韻略　上平（墨囲白文）」（上・去・入声は「草書礼部韻略上（去・入）声」）と題し、毎巻一格を低して目次をおいて本文に接する。上平の目次の末に書肆名を削去したらしい「建安　堂刊」の双辺木記が印さる。入声の尾題のみ「韻略入声終」と題す。左右双辺（一六・三×一〇・八糎）有界五行、行大字五字、下に小字の楷書注を附す。版心細黒口単黒魚尾「上平　（丁付）」。

第五冊に若干の破損があり、巻中室町末近世初間の朱点朱引、朱筆（稀に墨筆）の音の振仮名や訓の書入がある。「江風山／月荘」「福堂」の印あり、稲田福堂旧蔵本。

増修互註礼部韻略　五巻　宋毛晃増注　毛居正校勘重増

元至正四年（一三四四）刊（〔建安〕余氏勤徳堂）

（お茶の水図書館蔵）　五冊。天地を少し裁断せる裏打改装本。香色表紙（二五・三×一六・三糎）。首に紹興三十二年十二月日衢州免解進士臣毛晃上表の「擬進増修互註礼部韻略表」あり。本文巻首「増修互註礼部韻略巻第一　上平声（墨囲陰刻）」、第二行低二格半「衢州免解進士毛晃　増註」、第三行低四格半「男進士　居正　校勘重増」と題し、毎巻次に目次があって本文に接続する。巻一末尾題の前に「至正甲申仲夏／余氏勤徳堂栞」の両行双辺木記が存する。左右双辺（二一・三×一三・八糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字。「増入」「今圏」「晃曰」等の標識は白文。版心小黒口双黒魚尾「毛与幾フ　（丁付）」。毎葉裏左欄外上端に耳格（無郭）あり、「幾韻目」と記さる。巻五の第五一・五二葉補写。「椛斎」「弘前医官渋／江氏蔵書記」「松／鳳」「島田／重礼」（白文）「島田翰／読書記」（白文）「島田翰字彦禎精力所聚」「壬子所訓母氏所／誨井々夫子所教」「徳富／猪一郎／之章」「蘇峯文庫」「蘇峰／清賞」「徳富／猪印」（白文）「蘇／峯」等の印記、各冊首に「同幻子（花押）」の古墨署あり。狩谷椛斎・渋江抽斎・島田翰・徳富氏成簣堂文庫等遞蔵本。

比較的早印に属し、印面が美しい。巻一・二及び巻三の首には室町期の朱点朱引の書入があり、（巻一末）「加朱一枚了一鷗叟」、（巻二末）「一鷗子加朱了」の朱筆識語が記され、また次の島田翰・徳富蘇峰の手識がある。

（巻三末）是書往歳予所獲巻首捺先君子図章者記不忘／其原也癸卯二月島田翰識二十五歳

（首冊表紙）是書狩谷椛斎旧儲也頭首捺印可／以徴証也（明治四十四年）

十一月天長節曝書之際　蘇峰記

同版本の他に知られるのは、故宮博物院楊氏観海堂蔵本（欠巻二・五、楊譜三・拙著著録）である。以下の本書の建安刊本やその覆刻たる我が旧刊本は細部には小出入があるにせよ、皆本版を含め相互にほゞ覆刻の関係にある。従って一見全てが同

版の如く見え、特に刊記が求版等の理由により、或は故意に削除された無刊記本がある。従来諸家目録は、単に行格を等うしている点から実物比較をせずに、刊年を著録するものが多いから注意を要する。

同　元至正一五年（一三五五）刊（陳氏餘慶書堂）

首目及び巻首題式は前掲本に同じ。巻一尾題の前に「至正乙未妃僊／餘慶書堂新刊」なる双辺木記がある。巻首に封面が貼附され、上に「陳氏餘慶堂」と横書、下に左右に「毛氏増修／礼部韻註」と大書し、その行間に「謹依古杭官本」の小書が挾まる。左右双辺（二一・六×一三・九糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字。注の「増入」「重増」「今圏」等の標識は白文。版心小黒口双黒魚尾「毛勻幾フ　（丁付）」。本版には刊記を剜削せる後印本がある。

（静嘉堂文庫蔵）　一〇冊。後補卍繋文様刷出黄色表紙（二四・一×一五・九糎）、天地を少し裁断せる裏打改装本。序の末葉並に巻五首末葉等を欠く。「彤函／翠蘊」「浅野源氏／五万巻楼／図書之記」「霊均堂」「漱芳閣」（白文）「漱芳／閣清賞」「銭長祚／珍賞印」「漱芳閣／新収記」「楳堂閣蔵」「島田翰／読書記」「松方／文庫」の蔵印あり、狩谷棭斎・浅野梅堂（長祚）漱芳閣・島田翰・松方正義遞蔵本。巻末に左の梅堂の手跋（「漱芳閣書画記」所収）が附綴さる。

元版増修互註礼部韻略五巻狩谷卿雲蔵本巻一／後木記両行曰至正乙未妃僊餘慶書堂新刊巻首／大字夾行毛氏増修礼部韻註中条有謹依古杭官／本文字其額旁行題陳氏餘慶堂按張金吾愛日精／廬蔵書志著録此書曰巻一後有至正辛丑妃僊興慶／書堂新刊木記至正乙未為其十五年辛丑為二／十一年張所見蓋係再刊本但餘慶堂作興慶堂豈／陳氏外別有一人堂号差一字者邪或餘訛作興邪／今不可考又此本首載毛晃上表闕末一葉拠蔵書／志則紹興三十二年表夫張氏身在西土而於此刻／珍重乃尓況海洋万里古刻存于今日者月置日微／幾成断種夏后之璞闕鞏之甲不比其珍貴也天保／甲辰秋八月十三日蟫癡道人識于峽府官署月虹／楼嵗連日秋霖時雨東南二郷皆成巨浸豊年未卜／今日喜晴聊書記耳／印（「蟬国／王章」、白文）印（「蔣蟬／長祚」）印（「胤卿／氏」、白文）

同版本は他に故宮博物院楊氏観海堂（日本旧刊本に巻一・四のみが配補、拙著著録）・上海図書館蔵本が知られる。梅堂が右の手跋で指摘せる張志著録の至正二一年興慶書堂刊本については、瞿志にも「此元至正二十一年翻刻宝祐四年蜀中刻本第一巻末当有至正辛丑妃僊興慶書堂新刊墨図記以鈔補欠葉遺之」とある。刊記は補写であるから、同本が真に興慶書堂刊本か否かは保証し難い。仮にそうとしても、瞿影掲載は巻五の首葉なので、静嘉堂本はその葉を欠き、故宮博物院本の巻五は明版の補配なので、次掲の書陵部蔵本を以て比較するに、覆刻の関係にはあるが別版である。興慶書堂刊の刊記を有する本の現所在は確認できないので、瞿氏本が果して興慶書堂刊なるか、興慶書堂刊本と本版との関係については後考を期する。

（宮内庁書陵部蔵）〔明〕印　無刊記　五冊。後補縹色表紙

（二四・五×一六・三糎）、天地少しく裁断さる。故宮博物院蔵本（昭仁殿原蔵、天目続・拙著著録）と同様、前掲本の封面なく、巻一末の餘慶書堂の刊記のあった箇所に板木から刊記を剜削せる痕跡が残っている。「玉巖」「小島氏／図書記」の印あり、小島宝素旧蔵本。

同　元至正一五年（一三五五）刊（日新書堂）

首目巻首題署体式款行前掲諸本に同じ。左右双辺（二〇・八×一三・八糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字。注文の「増入」「今圏」「晃曰」「居正謹案」等の標識は白文。版心細黒口双黒魚尾「毛韵（匀）幾フ（丁数）」。毎裏葉左欄外上端耳格（無郭）あり。巻一尾題の前に「至正乙未仲夏／日新書堂重刊」の両行双辺木記がある。本版には内閣文庫蔵本の如く、日新書堂の原刊記はありながら、「博文書堂」の封面を有する後印本がある。博文書堂が求版印行したのであろうか。

（宮内庁書陵部蔵）　五冊。後補茶色表紙（二六・八×一六・五糎）、裏打改装本。印面は比較的美しい。「高平／隆長」「喜」（円形）「佐伯矣毛利／高標字培松／蔵書画之印」の蔵印あり。

（天理図書館蔵）　五冊。後補朽葉色表紙（二七・四×一六・八糎）、裏打改装本。間々眉上に室町期の書入がある。「西荘文庫」「桂窓」の蔵印、小津桂窓旧蔵。

（内閣文庫蔵）　後印（博文書堂）　五冊。森志著録。後補淡香色表紙（二五・二×一五・七糎）、天地を裁断せる裏打改装本。封面が貼附され、上の額に「博文書堂」と横書、「毛氏増修／礼部韻註」と大書し、その行間に「謹依古杭官本」の小字を挾む。第一―四冊の裏表紙見返に「文明六年三月廿一日快典生年冊三」の墨書がある。「昌平坂／学問所」「寛政戊午」「浅草文庫」等の印あり。同版本には他に故宮博物院楊氏観海堂蔵（森志・楊志・拙著著録）・北平図書館原蔵本（旧京164―166著録、台湾に移管されず）がある。

同　〔元至正二六年（一三六六）〕刊（秀岩書堂）

（天理図書館蔵）　一〇冊。後補銀切箔散紺表紙（二四・八×一六・五糎）、襯紙を挾める改装本。首目・首題の体式行格前掲諸本に同じ。左右双辺（二一・二×一三・九糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字。版心小黒口三黒魚尾「毛匀幾フ（丁付）」。所々左欄外上に耳格あり。巻一末尾題前に「太歳丙午仲夏／秀岩書堂重刊」の両行双辺木記がある。前掲本と覆刻の関係にあるが、彫板が粗雑で明刻の特徴が出ている。しかし刊記の丙午は至正丙午二六年に繋けてよかろう。巻中所々補写を混える。「曼珠／図書／之印」（鍾形）「愚斎／図書／館蔵」等の印記あり、京都の曼珠院旧蔵。同版本に故宮博物院楊氏観海堂蔵本（楊譜三・拙著著録）が知られる。四庫提要は本書の解題末に「末題丙辰仲夏秀巌山堂重刊、蓋理宗宝祐四年蜀中所刻、視近本特為精善云」と。現在それに該当する本は伝わらず、恐らくは本版の刊記を誤記し、且つ審定を誤ったのであろう。

同　〔元末〕刊（〔建安〕）

（静嘉堂文庫蔵）　五冊。陸志著録。後補焦茶色表紙（二七・二×一七・二糎）、裏打改装本。首目毎巻首題署体式前掲諸本に同じ。左右双辺（二一・八×一三・七糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字、大字小四字に相当。「元祐新制」「晃曰」「増入」「重増」等の標識は墨囲陰刻。版心細黒口双黒魚尾、「毛匀幾フ（丁付）」。左上欄外に耳格（無郭）あり、韻目が記さる。巻一巻末の尾題の前の、恐らく刊記があったと思われる三行分が切りとられて別紙で補われている。

所々破損しているが早印で美しい。陸志が宋刊とせるは失考、また陸志は謝在杭（肇淛）旧蔵と録している。故宮博物院や中央図書館（静盦著録、以上拙著著録）蔵の無刊記一本と同版である。両本ともこの本と同様に刊記があったかもしれぬ巻一の巻末の所が切りとられている。

同　〔元末〕刊（〔建安〕）

（国立国会図書館蔵）　欠巻三・四　巻二・五補配日本旧刊本三冊。後補淡香色表紙（二四・五×一五・八糎）、裏打改装本。元刊本としては巻一のみの零本、序目なく、巻一末欠。巻首体式前掲諸本に同じ。左右双辺（二一・二×一三・五糎）有界十一行、注小字双行、行廿八字。版心細黒口「毛韻幾フ（丁付）」。至正一五年日新書堂刊本に最も近い覆刻の関係にある。

五十先生釈疑韻宝　五巻　宋欧陽徳隆・易有開撰　後人改編　〔元〕刊（〔建安〕）

（宮内庁書陵部蔵）　五冊。新補朽葉色表紙（二三・八×一五・五糎）、裏打改装、原料紙縦二二糎。書題簽に江戸時代の筆で「押韻釈疑」と。首に紹定庚寅中元日辰陽冷官袁文熺謹序の序あり。本文巻首「五十先生釈疑韻宝（隔四格）上平声（墨囲陰刻）」と題し、毎巻次行以下目次を列ねて本文に接する。四周双辺（左右双辺も混ゆ、二〇・二×一二・九糎）有界十一行、注文小字双行、行卅五字内外、注文の「補韻」（大字単行）、「或作」「文」「説文」の如き引用書等その他の標識は白文。版心細黒口双黒魚尾「匀（員）幾（丁付）」。

文熺序に「廬陵欧陽徳隆余同升夢得貢士研精声律卓為儒宋与其友易君有開輯為一書名曰押韻釈疑」と。「押韻釈疑」の現存最古本は瞿目瞿影著録（欠去声、北京図書館現蔵か）・中央図書館蔵（欠序目・去声、拙著著録）の嘉熙三年序刊本（中央図書館本は元貞二年・大徳三年遞修）である。同本には首に荘端孫・余天任・袁文熺序、序後に条例十一則等がある。また四庫全書は景定甲子郭守正増修の「増修校正押韻釈疑」を著録し、「孰為徳隆原註孰為守正之所加不復分別」と言っている。従来本版について四庫本に比して徳隆の原姿を伝えるものと考えられていた。しかし本帙を宋嘉熙刊本と比するに、内容頗る異って繁簡異同出入が極めて多く、寧ろ別本と称すべく、元代は宋の場屋に必須であった避諱の詳例は不必要になっているので、本書元来の目的たる場屋用の趣旨が薄れている。既に書名を変え、たゞ首に文熺序のみを冠して、徳隆撰に託した書肆の竄乱本と看做すべきであろう。

同版本の所蔵は他に知られていない。前半所々に朱点朱引の書入があり、所々破損の箇所が存する。「佐伯芙毛利／高標字倍松／蔵書画之印」の蔵印あり。

新彫改併五音集韻　一五巻　金韓道昭撰　元前至元二六年（一二八九）刊（琴台張仁）

（東洋文庫蔵）　一五冊。後補濃緑色表紙（二六・五×一七・五糎）、裏打改装本。元料紙縦二五糎。首目の第次と題署は次の如し。首に「己丑新彫改併五音集韻序」と題し、序末「旨崇慶元年歳在壬申姑洗朔日老先生姪男韓道昇謹誌」と署し、次に「真定府松水昌黎郡韓孝彦次男韓道昭改併重編／　男韓徳恩　姪韓徳恵　婿王徳珪　同詳定／琴台張仁開板」、次に「己丑新彫五音集韻序」と題し、末に「歳次。己丑長至日重刊」と署し、次にある箸の郭知玄序・孫愐序を欠き、次に「新彫改併五音集韻総目録」あり、尾に「至元己丑新彫改併五音集韻総目録終」と題し、次に「入冊検韻術曰」がある。本文首行低三格「新彫改併五音集韻上平声巻第一」、次行低三格「滹陽　松水　昌黎郡韓道昭改併重編」と題し、毎巻次に目次を列して本文に接する。各巻の首・尾題は不同で、巻一と異るもの「改併五音集韻」（巻二尾・三首、四尾・六首尾・七首・八首尾・九首・十首・十五首）「己丑新彫改併五音集韻」（巻一尾・五首・十二尾）、「至元新雕改併五音集韻」（巻五尾・十二首）、「大元新雕改併五音集韻」（巻七尾・十一首）、「大朝新雕改併五音集韻」（巻九尾・十尾・十一尾・巻十四首）、「大安新彫改併五音集韻」（巻十三首尾・十四尾）、「崇慶重編改併五音集韻巻終」（巻十五尾）。巻一尾題の次に「昌黎韓道昭門人友人同校正」の張道忠以下廿名四行の列名、また巻十五末にも「昌黎韓道昭門人」の中山派水史道敏以下の列名五行がある。左右双辺（二一・五×一四・四糎）有界十三行、注小字双行、行卅五字内外不等。版心白口（或は小黒口も交ゆ）双黒魚尾、「韻幾（或は匂幾フ）（丁付）」。上象鼻に所々大小字数あり。

本版は金崇慶刊本（故宮博物院蔵・北平図書館原蔵零本、拙著著録）の重刊で、行款・字様共にそれに倣い、改修はあるが、ほゞ覆刻に近く、巻一の首題を三格低しているのは、崇慶版が「崇慶新彫改併……」と題しているのに倣って「崇慶」を「己丑」と改めるべきのが空格になったので、諸巻大題冠称の「大安」「崇慶」等の文字は原本の字を訂正し尽さずして残ったものである。この本は巻末に「新集背篇列部之字補添印行」及び「己丑重編雑部」を附するが、此は同著者の「改併五音類聚四声篇」（元前至元二六年張仁刊）の首目におかるべきものが、こゝに誤り附されたのである。「漱芳／閣／清賞」の蔵印あり、浅野梅堂（長祚）旧蔵本。同版本には、やはり梅堂旧蔵の故宮博物院楊氏観海堂蔵本（狩谷棭斎旧蔵、浅野梅堂手跋を附綴、楊譜著録）・中央図書館蔵本・北平図書館原蔵本（有欠、旧京177—181著録、以上拙著著録）・上海図書館蔵本（明修）がある。

文場備用排字礼部韻註　五巻　元元統三年（一三三五）刊（建安、呂氏会文書堂）

（内閣文庫蔵）　三冊。後補香色表紙（二三・五×一五糎）、裏打改装本。首に「聖朝頒降貢挙三試程式（跨行）／（低一格）考試程式（跨行）」（末に廻避諱字例あり、末は英宗皇帝、今上皇帝に止る）、次に「文場備用礼部韻註分毫点画正誤字様」（跨行）あり、その末即ち末題の前に四行の双辺木記が存して曰く「聖朝科試挙子所将一礼韻耳然唯張礼部敬夫定／本最善今復以諸韻参校毎一韻為増数字凡増／三千餘字釈焉而詳択焉而精敬用梓行為文場／寸晷之助云元統乙亥建安呂氏会文書堂謹誌」と。本文巻首「文場備用排字礼部韻註上平声第一」（跨行）と題し、毎巻次に低一格を以て目次を列して本文に接する。但し巻一の尾題及び巻二以下の首尾題は「善本排字通併礼部韻略」、ただ巻三の尾題は「文場備用排字通併礼部韻註上声第三」に作る。巻末の巻五尾題の前に「元統乙亥孟冬／呂氏会文堂刊」の双辺木記が刻さる。四周双辺（少しく左右双辺を混え、二〇・九×一二・九糎）有界十三行、注小字双行、行約卅五字、大字約小四字に相当。版心小黒口双黒魚尾、「韻幾（丁付）」。

四庫未収。礼部韻略の末流に属する科挙受験用韻書である。刊語に云う如く、張礼部敬夫なる人の編著を増補したものであるが、その履歴は明かでない。本版は他に所伝なく、中央図書館蔵元至正十二年徐氏一山書堂刊本（王記・拙著著録）は本版の覆刻で、巻初の刊語、巻末の刊記もたゞ刊年月と刊行者名を変えたにすぎない。「昌平坂／学問所」「文化乙亥」「浅草文庫」等の印章あり。

古今韻会挙要　三〇巻　元黄公紹原撰　熊忠挙要　〔元〕

刊

首に壬辰十月望日廬陵劉辰翁の序及び丁酉日長至武易熊忠の序あり。熊序の後（裏葉）に「寀昨承　先師架閣黄公在軒先生委／刊古今韻会挙要凡三十巻古今字画／音義瞭然在目誠千百年間未睹之／秘也今繡諸梓三復讎校並無譌誤愿与／天下士大夫共之但是編係私著之文／与書肆所刊見成文籍不同竊恐嗜利／之徒改換名目節略翻刊纎毫争差致／誤学者已経　所属陳告乞行禁約外／収書君子伏幸／藻鑑　後　学　陳　寀　謹白」の双辺木記がある。次に元統乙亥（三年）冬翰林侍講学士前中奉大夫江浙等処行中書参知政事李尤魯狲序の「序韻会挙要書考」及び翰林国史臣余謙拝手稽首謹書の序がある。次に「古今韻会挙要凡例」（跨行、題の第二・三行に「昭武　黄公紹直翁編輯／昭武熊忠子仲挙要」と題署）、次に「礼部韻略七音三十六母通攷」（跨行）を附する。本文巻首「古今韻会挙要巻之一／（低一格）平声上」と題する。左右双辺（一九・四×一二・八糎）有界八行、注小字双行、行廿二字、大字は小字の約四字に当り、「毛氏韻増」「案」「或作」「古作」等の標識は陰刻、引用書名は圏で囲む。版心細黒口双黒魚尾、「韻（匀）幾巻（フ）（丁付）」。

首の壬辰の劉辰翁の序は、辰翁は元至元三一年の没であるから、至元二九年、熊忠序の丁酉は恐は大徳元年であろう。李尤魯狲及び余謙の序によれば、至順二年文宗帝御奎章閣は本書の葛元鼎書写本を得、余謙に命じて校正補削せしめ明年上進した。後余謙が江浙等処提学として赴任し来り、魯狲にその鋟板

を謀ったと云う。余謙は江浙等処在職中多くの本の刊行或は補刻を行っている。この元統三年（後至元元年）江浙等処刊本と確認し得る本は未だ発見されず、実際上梓されたか否かも詳かでない。書肆が妄に刊刻することを禁ずる旨を陳告せる黄氏門人陳寀の木記を有する本版が元統三年江浙等処刊本そのものか、或は後に陳寀が翻刻せる坊刻本なのか明かでない。恐は後者と思われるが、後考を期したい。比較的印面の美しい伝本は管見に入った所では、内閣文庫・静嘉堂文庫・上海図書館蔵本で、他は後印にかゝり、気づいた所では、巻一本文巻首の葉が精善な覆刻の修補となっている。たゞ小題後の冒頭の「案」の条中の「凡字為未」の「凡」を「兄」に誤刻している。本書は明代にも盛行したので、版種の異る伝本が比較的多い。本版を陳寀の木記も共にやゝ粗雑ながら覆刻せる明前期の版があり、中央図書館（三部）・中央研究院（鄧目著録、以上拙著著録）・静嘉堂文庫（陸志陸続跋著録）蔵本の如く、この覆元版が往々元版と誤認されている。その明版は巻首大題の下に㊀（至癸）の一字が刻され、十篇に分っている。なお香港大学馮平山図書館蔵本（劉影著録）を拙著にこの覆元版と同版と記したのは誤記、陳寀の木記も有し明前期刊ではあるが、覆元版よりは後出の別種の十行本である。こゝに訂正しておく。また朝鮮旧刊本、我が応永五年の旧刊本も本版の覆刻の系統に属し、両版とも眉上或は欄外に校異が標記され、我が旧刊本の方がその数が多いが、韓本には校異を標記せずに、校異の通りに本文が作られている所がある。

（内閣文庫蔵）　二〇冊。後補卍繋刷出文様艶出縹色表紙（二二・五×一四・三糎）、裏打改装本。李尤魯狲・余謙の両序なし。巻卅末丁欠。比較的早印に属し、印面が美しい。所々朱点朱引が附され、少しく眉上に書入が存する。「香炘刊」「劉／氏」（形盧）「羅／山」「江」「雲」「渭」「樹」「林氏伝家図書」「林氏／蔵書」「昌平坂／学問所」等の蔵印あり、林羅山以下林家手沢本。

（静嘉堂文庫蔵）　一六冊。後補栗皮古表紙（二四・一×一六・二糎）、裏打改装本。李尤魯狲・余謙の両序なし、比較的印面が美しい。「色川／三中／蔵書」等の印章あり。

（宮内庁書陵部蔵）〔元〕修　二〇冊。後補淡茶色表紙（二四×二〇糎）、裏打され、元料紙縦二二・五糎。次掲本同様上記の如く巻一首葉が修刻。

（大東急記念文庫蔵）　欠序目　〔元〕修〔明〕印　一五冊。後補古栗皮表紙（二四・五×一五・八糎）、包背装、裏打さる。室町末の補写の葉をかなり混え、往々漫漶甚しい印面がある。巻末副葉紙に次の識語が記さる。

右韻会雖破損之旧本也愚意年来所望之／間令買得之成裏打於毎紙而落帳五十九／枚以善本書加之猶滅字等悉補之仍為全／部矣／文禄五年丙申中呂五日　南都笠坊　宗信（花押）

（同上蔵）　存巻二五―三〇　〔元〕修　二冊。朝鮮旧刊本十二冊中に補配されている。後印ではあるが、前掲本よりは刷りがよい。

この後修本は他に故宮博物院楊氏観海堂・中央図書館（以上拙著著録）・北京図書館蔵本がある。汪目・張志・瞿目・楊録・

繆記・適志・莫編著録本が元刊原刻本かその修本か、或は覆元明刊本なるかは精査を要する。

書学正韻　三六巻　元楊桓撰〔元至大〕刊（〔江浙行省〕）〔後至元〕二年修（江浙等処儒学提挙余謙）

首に「書学正韻目録」を冠し、巻末に「二年八月江浙等処儒学提挙余兼補修」の一行あり。本文巻首「書学正韻巻第一／（低格一）奉直大夫国子司業楊桓攷集」と題し、毎巻次に目次を列して本文に接続する。左右双辺（二二・三×一五・六糎）有界八行、注小字双行、行廿三字、大字は小の約四字に相当。版心線黒口双黒魚尾、「上平幾（丁付）」、上象鼻に大小字数（稀に下象鼻にも）、下象鼻に、茅元吉、元吉、吉、王寧、王、徐仲文、仲文、徐友益、友益、徐予慶、徐子思、徐文徳、翁隠之、翁、之、方景明、弓華、葉道官、盛元、盛、何信、楊石山、茂之、友山、仁甫、陳良甫、陳敬之、素庵、文甫、君宝、亭山、仲、蔣、子、侃、文、王、栄、丑、木、胡、立、可、斉、元、阮、敬、益、山、芦、張、唐、徐、乙、秀、滕、方、茂、章、泳、東、仁、春、袁、陳、任、亭、恵、用、寅、咬、君、良、李の刻工名あり。

前掲の同著者の「六書統」「六書統溯原」と版式を同うし、刻工名の多くを共通にしているので、同時同所の刊と推定される。板木は明に入って南監に移され、明南雍経籍考に「書学正韻二十巻脱者四十五面有餘存者一千五百十四面」と。

（静嘉堂文庫蔵）〔明〕修　三六冊。陸志・陸続跋著録。後補茶色表紙（二六・一×一九・二糎）。襯紙を挾める改装本。（内閣文庫蔵）〔明〕修　一〇冊。後補香色表紙（二七・三×一九・五糎）。原刻は漫漶甚しい。

同版本に、中央図書館（二部、一は零本、拙著著録）・米国国会図書館蔵本や王記著録本がある。

追　記

(1)　天目巻一には毛氏汲古閣・徐乾学旧蔵の本版が「春秋左氏音義二函八冊」と著録され、その本には巻末に前掲本の巻末にあった経伝識異、興国軍の結銜並に聞人模の嘉定丙子の刊書跋が附されている。以て本版が嘉定九年興国軍学刊本の附録たることがいよいよ確証される。

(2)　本版刊記の「己丑」を乾道五年に繋けて間違いないことは同じ黄三八郎の刊せる宋槧「韓非子」（清嘉慶二三年呉氏景刊、その弘化二年朝川善庵覆刻、四部叢刊景印影宋鈔本あり）の刊記に「乾道改元中元日黄三八郎印」と記されている所からも立証され、本版の字様は同本のそれと相似している。本稿校正中に、上海図書館本が上海古籍出版社から影印出版された。同本は巻四が元建刊十二行中本を以て補配され、幕末明治の蔵書家向山黄村の旧物で、旧蔵者の識語によれば、光緒年間来日の顧澐が黄村から梁天監小銅仏と交換して入手したと云う。

(3)　（天理図書館蔵）五冊。後補改装表紙（二七・三×一六・五糎）。